TRAL REVIEW

中央公論

十月號

[illegible]十二年第十一號　第三百[illegible]九號

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

最新刊

英國カアライル著
高橋五郎譯

衣服哲學

徹底的眞生活の福音

文豪カアライルが思索的論文中の隨一に推さるゝサーター・レザータスの全譯である。論旨飽まで斬新にして警拔、或は勞働神聖と自由競爭の二大主義を鼓吹してデモクラシーの爲めに虹の如き氣焰を吐き、或は青年男女の相思を語つては、人情の曲折を盡して失戀の煩悶者に萬斛の清凉劑を浴びせ、最後には大悟徹底せる哲學的安心立命の眞樂境を說く等、眞に萬人必讀、古今の絕稱たるに負かず、譯筆の的確明晰に就ては世に定評あり、挿註の懇切亦錦上更に花を添ふるもの歟。

四六判……極美本・全一冊
紙數約七百頁
正價 壹圓八拾錢
送料―內地十二錢 其他十四錢

三版

獨逸、イエナ大學名譽教授
ヘッケル博士著
文學士 栗原古城譯

宇宙の謎

◉「少しく心ある人にしてヘッケルの名を知らざる人は無かるべし……評筆快暢にして凝滯なし」―萬朝報評

◉「同教授一代の研究を壓搾したる精髓たるのみならず、實に歐州の科學界、哲學界を震撼せしめたる名著なり」―東京朝日評

四六判總洋布製極美本
全一冊
六百七十頁
正價 壹圓七十錢
送料 內地十二錢 其他十四錢

東京本郷西片町 玄黄社 電話小石川一三九番 振替東京七九九五番

トルストイ叢書

第八編

杜翁が結婚觀、性慾觀を披瀝せる其代表作也

クロイツェル・ソナタ

「クロイツェル・ソナタ」は、トルストイが晩年の作。その兩性觀結婚觀を披瀝して、痛刻なる解剖を邪惡なる現代生活の上に加へたる雄篇である。嫉妬の故に妻を殺したる殺人者が、燈影暗き夜汽車の一室に語る犯罪の顛末は、語々凄愴、讀む者をして覺えず卷を掩はしむるものあり、しかもその中に、トルストイが晩年に於て體達せる神に生くるの信仰を寓し、闇光を孕んで、光竟に闇を破るの趣を爲してゐる。そのエピロオグと共にトルストイの全著作中最も重要なるものである。附錄「吹雪」は、その初期の作であつて、清新の氣潑溂の力を漲らせる好短篇である。

■總洋布最上製■定價七十五錢■送料八錢

(1) 我が宗教　生田長江譯

(2) イワン・イリイッチの死　(附)主人と下男・高架索の捕虜　福士幸二郎譯

(3) 幼年・少年　江馬修譯

(4) ハヂ・ムラート　相馬御風譯

(5) 闇の力　(附)生ける屍　中村吉藏譯

(6) コサック　廣津和郎譯

(7) 青年　江馬修譯

(9) 結婚の幸福（近刊）　谷崎精二譯

東京牛込矢來中の丸　振替東京一七一四二番

新潮社

電話番町八〇九番
電話番町八九九番

信用なき店舖及び卑猥なる賣品の廣告揭載は謝絕す

縮刷獨歩叢書

國木田獨歩作

新刊出來發賣中

第五編 濤聲

獨歩作中、主として晩年の作を集めたるもの、「戀を戀する人」「鎌倉夫人」「號外」等、いづれも當時の文壇を震撼せる名作である。獨歩の作、晩年に及ぶに從つて益々簡勁、益々尖銳、此集の諸篇に至つては、時に凄氣筆端に迸るを見る。短篇作家として日本文壇の第一者（然り、今に於いても尙ほ！）たる獨歩の本領を見んとする人は本集を見よ。

目次

□鎌倉夫人□神の子□少女□帽子□あの時分□死□波の音□號外□歸去來□別天地□戀を戀する人□園遊會

第一編 武藏野及渚（四版）

第二編 獨歩集（三版）

第三編 獨歩書簡（三版）

第四編 運命（再版）

各編增版出來

▼布表紙木版手摺
▼天金特製極美本
▼一冊五十五錢宛
▼送料一冊六錢宛

東京牛込矢來中の丸 新潮社 振替東京一七四二番
電話番町八〇九番
電話番町八九九番

約募集●

第一巻 吾輩は猫である

第二巻 短篇小說集

第三巻 虞美人艸。坑夫

第四巻 三四郞。それから。門

第五巻 彼岸過迄。行人

第六巻 心。道草

第七巻 明暗

第八巻 文學論。文學評論

第九巻 論文及小品集

第十巻 俳句。漢詩及前期の文章

第十一巻 日記及感想

第十二巻 書簡

申込期限 十月三十一日

體裁

各冊菊版約八百頁裝幀は漱石先生意匠
總布製表紙は本版朱摺伊上凡骨氏
用紙白麓印刷東京築地活版所

略規

一、非賣品 豫約者にのみ頒つものとす選擇豫約の求めに應ぜず。

一、拂込 每月拂 金參圓
一時拂 金參拾參圓五十錢

送本料 一冊市內四錢内地十二錢樺太朝鮮臺灣十錢外國六十二錢

一、申込 金參圓を添へ申込む事。
此申込金は最終の會費に當つ。

一、配本 大正六年十二月一日より向一箇年間每月一冊宛全十二冊。

(內容見本及規定 申込次第進呈)

申込所

東京市神田南神保町
岩波書店 電話本五四二〇番(振替東京二六二四〇)

東京日本橋通四丁目
春陽堂 電話本五一一番(振替東京一六一七)

東京日本橋通一丁目
大倉書店 電話本四一一四番(振替東京二三八)

其他全國各書店

東京市神田南神保町 電話本局 振替東京
岩波書店內
五四二〇番
三八一五一番

漱石全集刊行會

法學博士 高田早苗
文學博士 芳賀矢一
兩氏閲

遠藤高之亟著

最新研究 雄辯と文章

寸鐵人を刺し一言心感を魅すれば言論の力之非ずして何ぞ。

公衆に對して發言し能はざるものは唖者の類也。章に依りて感想を表明し能はざるものは一種の盲者也。言論文章の進歩を以て文明の象徴と爲すと豈偶然ならんや。著は積年斯道の研鑽に努めたる者。今や心血を傾注して此の書を成す。句の説く所や頗る懇切を極め該博なる理論は眞摯なる經驗と相俟ち。言々凡て至誠の結晶なり、寔に近來の名著と讃すべく雄辯と文章との技に至りては悉く收めて本書に存す、敢て江湖の諸士に薦む。

四六版總クロース ! 百七十頁 頁數美本 定價一圓廿 送料 錢

南條文雄・前田慧雲・村上專精 共著

慰安と修養

人格の完成と人生の慰安を求むる人に本書を薦む

四六版 製箱入 頗美本 定價七十 送料八 錢

轟々軒 松本幹一著

適筆 不問語

百科全書とは大坂朝日紙の評也 所謂趣味の

社會上に於ける總ての起原を知らんとする人は先本書に就かれよ

四六版 頁餘、美 定價一圓 送料十 錢

南勝太郎 博士著

食物の研究百話

人の生命は其食にあり食物の研究は人生の最大急務!

四六版布 箱入頗美 三百五十 定價九十 送料八

河野天瑞・南前自鐵・廣中棒題・閑宇 著

膽力養成 前野式靜座法

靈界の秘書現れて身心鍛錬の術始めて實地應用せらる

四六版總 製箱入美 三百五十 定價一 送料八錢

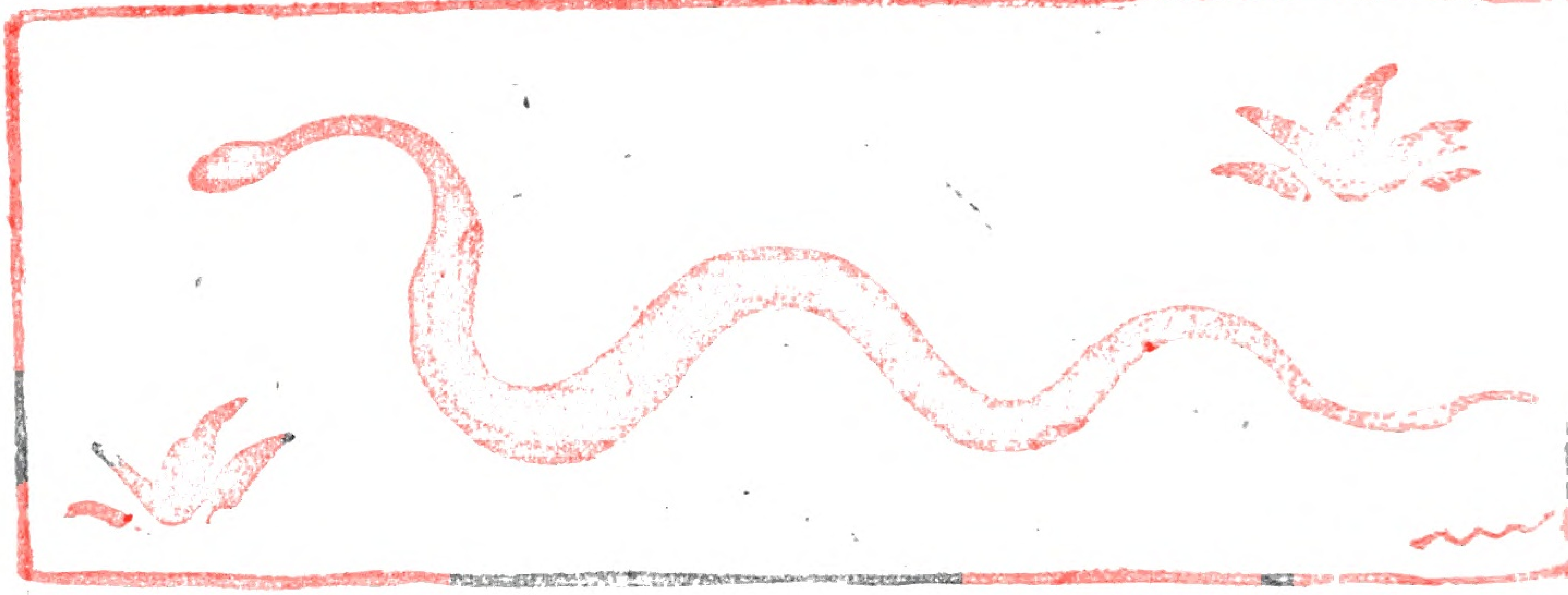
發所 所
神田區淡路町一ノ一
振替東京九〇七九番
泰山房

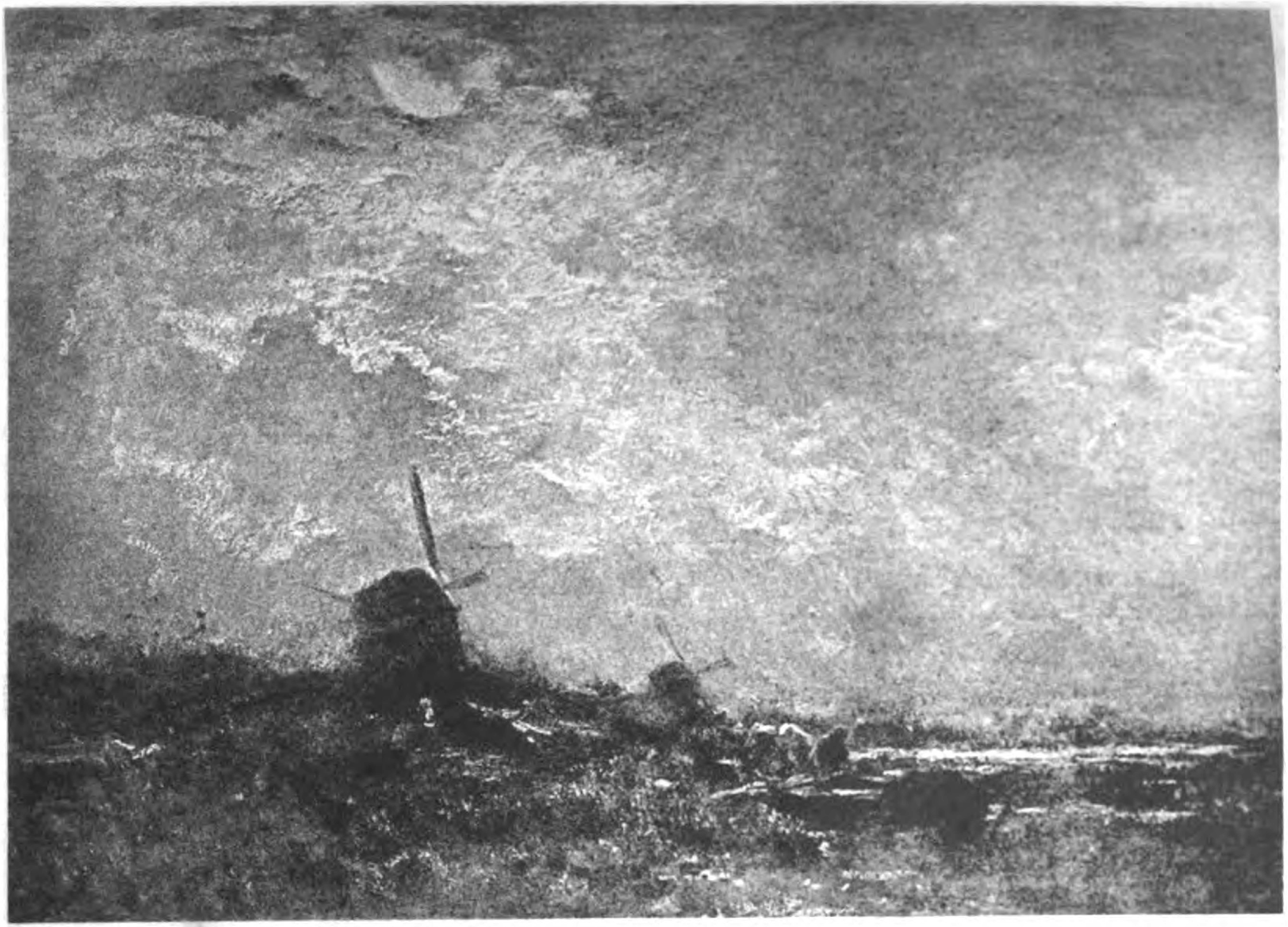
此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



中央公論第三十二年十月號目次





GAMES MARIS

MOONLIGHT LANDSCAPE

●近世に於ける藝術批評家として大哲人としての「ウォルタア・ペエタア」の一大傑作を見よ!!!

●東洋大學教授 文學士 田部重治先生譯

新裝を飾して愈々

第三版出づ

ペーター文藝復興

●天下の哲學家、藝術家、文學家たらんと欲する人は須く本書を學ぶべし。本書は現代に於ける人類解放者の最優なるものと稱せらるゝ哲人「ペエタア」の傑作「ルネサンス」を最も忠實に譯したるものにして原作者の獨創的なる藝術觀を親ふを得べし。

定價一圓卅錢
送料十二錢
菊判上製布製泰西名畫入

學習院教授 南日恒太郎先生著

益好評 第四版

英詩藻鹽草

四六判最美本
定價一圓
送料八錢

●英學界の泰斗南日先生が英米諸大家の作詩中初學の入り易きものを選び每篇之を國詩に譯し作者の傳を添へ評註を加へたり收むる所三十有餘篇英詩研究最善の指導者と云ふべし。

▲北星堂の通信販賣は最も親切で正直ですから是非御註文願升

●每月月報進呈二錢切手封入あれ

發行所 東京神田錦町三ノ十七 北星堂書店 振替東京一六〇二四

加藤一夫氏譯篇

■定價壹圓拾錢 稅八錢■

最新刊

トルストイ 一日一想

本書はトルストイの著書の殆んど凡てより彼の思想の眞髓と思はるゝ節を抄録したるものにして其の全內容は宗敎、信仰、哲學、藝術、倫理、男女問題、性慾問題、社會問題、文明批評等人生の凡ゆる問題の提供と解決と暗示とを抱含するものにしてトルストイの著書を直接に讀破する閑暇なき者、トルストイの全體を知らんとする者のために便利なる冊子たるを失はざるべし卷末に附せる索引は自己の要求する問題に就いてトルストイが如何の考案をとげたるかを知らんとする時に容易に見出し得べき利便を備へたりトルストイを研究せんとする者及一般に修養に志す者の座右に備ふべき書なり

我等何を為すべき乎

四六版六百頁　定價壹圓八拾錢特價壹圓三拾錢　送料拾貳錢

此書程世界人心を根柢より振憾した者は尠い。此書を讀んで自己の生活を革命し勇猛なる人道の戰士たらんとを欲しない者はない。そして自分の拙い譯も亦日本に對する一つの使命を果しつゝあるとは譯者たる自分の深き喜びと感謝である。今日までに自分は多くの讀者から此書の刺戟に奮起して新しい生活の過程に登ったと云ふとをきいた。此書の再版は更に多くの人に讀まれんとを祈る（加藤一夫）

發行所　東京市麴町區平河町五丁目　振替口座東京二〇一九一四番　洛陽堂　（電話番町　四二五八）

中央公論



第卅二年第十一號
十月號
第三百四十九號

政治思想の渾沌時代

大山郁夫

超然内閣對政黨内閣の論爭は、何れの側が勝つたともなく、近來に於て全く其聲を潛めた樣である。又之を政界の實情に就いて見ても、官僚内閣と呼ばるゝ寺内々閣は、縱し其閣僚中に一人の政黨員を包含して居ないにしても、その對議會の關係に於ては必ずしも超然主義の上に立つて居るのではなく、寧ろ政友會國民黨の支持に依つて第三十九議會の關門を兎も角無事に通過し來つたのであつて、今後と雖も是等の政黨と絶縁して立行く筈もなく、又立行くとも思つては居ない。翻つて政黨の方面を見ても、「多年政黨内閣を主張」する言ひ前はいつに變る所はないが、飽く迄此主張を貫徹しやうと言ふ意氣は

なく、帝國の世界戰爭に參加せる事實は、彼等に暫く「隱忍」して官僚の足下に匍匐する口實を與へ、「議會の多數に基礎を有せざる內閣を是認せず」との聲言は、彼等をして自ら進んで其多數を提げて敢て閥族內閣の基礎となり、而して後その存立を是認し擁護すると言つた樣な冠履轉倒の笑劇を演ぜしめて居るのである。此間に在つて獨り憲政會のみが唯一の非政府黨として內閣不信認の態度を持續して居るのは、聊か多とするに足るの觀があるけれども、それは畢竟同會が主義に忠實なるがためであると謂はんよりも、寧ろ時運の然らしむる所と見るのが至當である。事實上同會は、今春政府が揮り翳した「大權干犯論」の武器の前に辟易して、其政黨內閣主義を旗幟鮮明に表示する機會を失つたと言ふ、まだ新しい記錄を持つて居るのである。

要するに今日は政治思想の渾沌時代である。由來官僚には官僚の政治哲學あり、政黨には政黨の政治哲學あり、而して此兩者は去る四月の總選擧の前後に際し、それ〴〵極めて雄辯に絕唱せられたけれども、愈々事の實際に當つて見れば、官僚はその自ら望む如き擧國一致內閣の遂に實現し難く、政黨の分野の輙く踰越すべからざるを體驗したのみならず、對議會の政爭場裏に於てその與黨の擁護を受くるの甘味を泌々快喫したのである。政黨も亦同樣に、その年來主張する政黨內閣主義を貫徹するために一切の歷史的社會的障碍を排除するの煩を避け、陰に官僚政府と握手しながら、陽に不離不卽の態度を示し、時として恫喝的聲言をなして纔に外面の體裁を繕ふの勞少くして功多きを擇ぶに至つた。是に於て兩者は各々その固有の政治哲學に多少の制限若くは修飾を加へ――無論斯かる政治哲學は元來確信の上に建てられたのではなく、便宜の上に置かれたる輕浮淺薄なる種類のものであるから、時宜に應じて之

を制限變更する位のことは何でもないことでもあるから——斯くて官僚は政黨の支持に倚頼することの必ずしも不合理にあらざることを辯解し、政黨は場合に依つて官僚を擁護することの寧ろ當を得たるものなることを揚言するが如き奇觀を呈して居るのである。世に政論家を標榜して立てる者は、斯かる際に於てこそ、高處より大局を達觀して渦中に沒頭せる朝野政治家の言行を監視し、之に嚴正批判の眼を向けて、妄説を打破し、迷論を匡正し、正々堂々と其所信を披瀝して、少くとも政治思想界に何等かの暗示を寄與しなければならない筈であるが、見渡す限りこの使命を自覺せる識者の極めて寥々たるは、寔に心細い事の極みである。我等の知る所を以てすれば、一般民衆より常に一着歩を進めたる見識を持たなければならない筈の政論家の如きも、多くはその洞察力に於て毫末も世論を抽んでたる所なく、選擧季節の如き政治的活動の最高調期を除いては、確固不動の信念らしきものを提示することすら憚つて官僚思想を否認することが迂愚に見える時には、何等かの理窟を附けて之を辯護——少くとも之を寛容し、政黨を攻撃することが不得策に見える時には、百方辭柄を設けて其存在の根據を是認するが如き曖昧なる態度に出でゝ居る。官僚是か、政黨非か。但しは其反對が眞實であるか。若しくは兩者共に非なりとせば、之に代るべきものは何であるか。素より是等のことは可なりの難問題に相違ないから、一刀兩斷的に解決すべきものではなく、又疾風迅雷的に論定すべきものではないが、それにしても我等は其解決の端緒位は持つて居ても好い時分ではないか。然るに我國民は單に之を持つて居ないのみならず、之を持たうとすら要求しないのである。斯の如く觀じ來れば、現代の日本の——殊に昨今の政治思想の渾沌狀態は、一面は事實上の政權の中心の曖昧不明より導かれたものであると同時に、一面は國民の不

熱心より導かれたものであると謂はねばならぬ。げにそれは熱心より生じた渾沌狀態ではなくして、冷淡より來れる渾沌狀態である。

國民の政治に對するこの冷淡が、最近に於ける經濟界の動搖と時を同じうして出で來つたことは、注意して觀察すべきことである。無論經濟界の動搖と言つても、かの商工業及び金融上の恐慌を指したものではない。これは戰後にはいづれ襲來する運命を免れないものであるが、現在に於て旣にその徵候を示して居る譯ではない。又近時頻々として各所の工場に於て生起する同盟罷工を指したものでもない。此事が政治上に及ぼす影響は、我國に於ては普通選擧制を有する國々に於けるが如く直接なものではない。然らば何が最近に於ける經濟界の動搖であるかと謂へば、それは時局の結果として暴富者の頻出したことである。

言ふまでもなく時局の恩惠に浴して成金となつた者の數は、國民の全人口に比すれば極めて少き率を示すに過ぎぬけれども、而も彼等の成功は日々の新聞紙に爭つて記載せられて、其顯著なる度合は歐洲の野に於ける一戰一勝一敗の反復の報導の比ではない。而してそれがため此事實が一種の射倖心を唆ることに依つて、單に國民の經濟思想を不健全にしたのみならず、同時に一般風敎の上に惡影響を及ぼし、延いて政治思想を墮落せしめたことは、極めて明白なるものがある。國家の力は物質に負ふこと多きに拘らず、一國に於ける精神力の緊張が物質力の豐富に伴はざる時は、個人の榮ゆる間に國家が滅び行くことは、希臘羅馬の悲劇的沒落を始め古今其例に乏しからざる所である。蓋し國民精神の經濟化(Verwirtsohaftlichung)は、極端なる物質中心の個人主義を產み出だし、其果ては國家思想の頹廢と

なるものであるからである。

此點より見れば、我國に於ける現下の成金跋扈及び民衆の物質崇拜の現象は、我國民の政治思想の健全なる發達に大なる障害を提供せねば已まぬものである。姑らく最近の事例を一瞥すれば、八月末に政府が出だしたる物價調節令の如き政治上の主義より觀て贊否の批評を下し得る餘地多きものに對しても、一般の世評はそれが國家生活の本然の要求より出でたるものなるか否かを吟味せずして、直に其規定の實行可能なりや否や、若しくは其實施後の効果如何の問題を云爲し、甚しきに至つては、單に此省令に依つて影響を蒙るべき商人の立場よりのみ之が當否を問はんとするが如き態度を示すものあるは、淺薄なる唯物主義若しくは惡しき意味に於ける個人主義の發露であると謂はねばならぬ。政府者に於ても之を說明するに當つては、單に特定商品の買占め及び賣惜みの國民經濟の上に及ぼす惡影響のみを算へて、それが統一國家の倫理生活に對して如何なる交渉を有するかを闡明する所がないのは、彼等の政治思想上の習癖が如何に唯物的功利主義に傾いて居るかを語るものではないか。且つ又此調節令の條項に於ても、所謂『暴利を得るの手段』としての買占め及び賣惜みの認定に關し行政官の判斷の範圍を宏濶にして、國民に其實施の不公平を豫想して少からざる鬼胎の念を懷かしむる危險を存して居ることは、官僚政府に有りさうなことではあるが、その儘に默過して置くべき瑣事ではない。今日に於ては最早誰しも眞面目にマンチエスター學派の自由放任主義に傾倒するものはあるまいが、それにしても斯の如き重大なる法令に對しては、確乎たる國家觀の上より徹底的に其當否を批判すべきものである。然らざれば法令の粗製濫造、乃至、階級的立法の頻發は、何時までも息むことがないであらう。

右と同樣の事は、將に制定せられんとする船舶管理令や、近時盛に提案せらるる戰時利得税に就いても謂ひ得られるのである。是等の法令に對しては、政府者は主として國家の歳入の立場より之を辯護するのみで、個人對社會の相互的關係より國家倫理的に之を主張することを忘れるがために、民間の論客は或は成金の國民經濟上に於ける効用を述べて之に特別の負擔を課することの不可を唱へ、或は政府が一方に於て商工業の振作に務めながら、他方に於て其成功者を誅求することの不道理を訴ふるが如き現象を見るのである。殊に或る新聞紙の如きは、斯の如き國家政策に對しては、宛然として資本家階級の代辯者の如き口吻を弄するを常として居る。由來資本家階級は、産業上の自由放任主義の發祥地であり、且その飼育場であるとは、近代諸國家に於ける共通の現象であるが、我國に於てもそれが樣々の變裝をなして頻りに表面に現はれて來て居ることは、事實上資本家階級の强大なる支配の下に置かれたる多くの新聞紙の論調を見れば、直に點頭かれるのである。

茲に又今一つ見逃してならないことは、政府が右の如き諸法令の理由を說明するに當つては、常に外國に於ける實例を援用して之を辯護する習慣を有することである。由來一般の憲政論に對して外國模倣を最も痛烈に攻擊し、自國本來の歷史に立脚する必要を高調するものは、實に官僚政府である。然るに此同じ官僚政府が自家に都合の好い時には、外國の前例を擧げて餘す所なく、之に依つて以て其政策の正當なることを證明せんとするは、甚だしき自家撞着と謂はねばならぬ。而かも斯の如き矛盾が白晝公然頻々行はれて怪まれざるは何のためであるか。是れ蓋し政府が日頃商工業者若しくは金融業者を過度

に重要視し、之に接觸することを維れ務めて居るが故に、一朝是等の金權者の利益を多少の程度に於て削減する政策を取る必要に瀕する時は、他の辭柄なきに苦しむ結果として海外諸國に於ける實例の楯の陰に隱れて、そが時勢の必要上當然の處置であることを説示するを常とするがためではあるまいか。苟くも自國の國民生活上の緊切なる必要に順應する政策を公表するに當つて、正面より堂々と其理由を詳述することを避け、外國の前例を此上もなき援護物と頼むは、誠に腑甲斐なき陋習と謂はねばならぬ。口癖の様に世界に冠絶する國柄を誇る我國が、其立法例に於ても只管歐米諸國の蹤を追ふことを維れ務むるのみであつて、未だ曾て重要なる點に於て模範を彼に與へたことのないのは、其由つて來る所亦遠きものがあるのである。

政府が大小百般の事業を遂行する上に於て、將又、公債募集の如き財政的必要を充たす上に於て、所謂金權者流の協同を仰がざるべからざる機會に絶えず際會するは素よりのことであるが、同時に政府は又其國家的經論策を完全に實行する上に於て、始終一般民衆の道徳的擁護を受けざるべからざる必要を感ずるものである。此意味に於て立憲國の政治は、徹頭徹尾全般國民の目的を意識せる協同事業であらねばならぬ。夫の五個條の誓文中の「上下心を一にして、盛に經綸を行ふべし」とあるは、畢竟此事を指示せるものと見るべきである。然るに政府が國家生活の物質的方面を見るに急にして、其精神的方面を過度に輕視するの極、金權者流の歡心を贏ち得んがために、只管之に接近せんことを務め、他の階級の利益を犠牲にして迄も此階級の利益を押進め、國民の最大多數を構成する勞働者のために、單に消極的保護の任を有するに過ぎざる不徹底なる濟民局の如きものを案出してお茶を濁すに止まり、適々物

選擧權擴張

水堅

價調節の如き社會政策を行ふにしても、唯微溫的條項を設けて外面的體裁を繕ふに過ぎざるは、多數國民に對する親切の足らざるためか、金權者流の反抗を憚るためか、若しくは彼等と氣脈を通ずることに鋭敏なる政黨の虛喝を示すべき氣勢を慮るためか、いづれにしても國家道德觀の上より言へば、公民國家の義を棄りて、階級國家の色調を濃厚ならしむるものたるを失はない。

此點に關しては、政黨と雖も亦同一の罪過を犯して居る。近年なべての政黨は、小悧巧にも國利民福を先にして黨利を後にすることを反復揚言することを覺えたが、彼等の國家觀より見たる國利民福は極めて怪しいものであらねばならぬ。彼等は年來齊しく選擧權擴張の必要を絶叫して居るが、實際の努力熱心が之に伴はぬために、それは何時までも徒らに高聲なる空騷ぎに止まり、その實現の希望は永久に済遠である。之に反して彼等は資本家に媚びることは決して口には出さぬけれども、事實に於ては極めて敏捷に之を實行して居るのである。彼等は米國の鐵材輸出禁止の報に接すれば、逸早く共對應策を講ぜんとして居ることを宣言する。又支那の關税引上問題に逢着すれば、直に大阪あたりの紡績業者のために奔走すること、響の物に應ずる如くである。素より是等のことは、一面に於ては政府を威嚇する手段としても用ひられるが、同時に資本階級の歡心を繋いでその莫大なる黨費支辨の財源を獲得する資料にも供せられるのであらう。之に反して近時頻々として續出する同盟罷工の如き社會的重要の事件に對しては、彼等は比較的冷淡の態度を示して居る。官僚の徒動もすれば、勞働者は舊幕時代よりの傳習を遵奉し、その雇主に對しては宜しく主公に對する從者の如き分を固守すべきものであるとの樣な舊式な說法をなす時には、政黨にして眞に民衆の友ならば、斯の如き抑壓を主とする暴言に對して反抗の聲

を擧ぐべき筈なるに、事實上毫もその事なきは、彼等の國利民福の解釋も亦時代遲れのものたるを免れざることを證明するものである。資本勞働の衝突程忌むべきものはなく、その兩者の調和程望ましきものはないけれども、斯の如き調和は係爭者の一方のみを抑壓することに依つて實現せらるべき筈のものでなく、又强ひて之を試むることは許すべからざる不公正である。勞働者をして舊來の傳習を守らしめんと欲せば、資本家をして亦之を守らしめよ。併し乍ら資本家が既に賃銀制度を採用して、勞働に對する報酬を需給の原則に依つて定めて居る時に當つて、獨り勞働者をして主公に對する從者の禮を盡くして資本家を待たしむることは、片手落の仕打であり、依怙の沙汰である。苟くも今日に於て勞働問題を解決せんと欲する者にして、豫め斯の如き前提の上に立つならば、到底正當なる結論に達することが出來ぬことは、言ふまでもない。一方に於て資本家が家内生産の原理を棄て工場生産の原理に準據して經濟の方針を立つることを看過しながら、他方に於て勞働者をしてどこまでも家内生産の傳習を固執せしめんとするは、單に經濟眼より見て不合理不道德であるのみならず、同時に政治眼より見ても、夫の「舊來の陋習を破り、天地の公道に基くべし」と宣示せる明治聖帝の大誓に現はれたる維新の國是に悖るものである。若し夫れ近時の勞働上の紛議は、勞働者側の地位の自覺に基けるものにあらずして、戰時經濟狀態の變調より生じたる資本家の暴利に均霑せんとする彼等の單純なる願望に根ざせるものであると論ずる者あるは、樹の動くを見て風の出でたることを察すること能はざる近眼者流の見解を代表せるものたるに過ぎないのである。

近時の政治思想の渾沌狀態は、政治家及び政論家の國家の構成に關する徹底的理解の缺乏に負ふことも少くないのである。彼等は國家の單一相に着眼して居るが、其複雜相を無視して居る。言ふまでもなく國家は單一體であるから、從つて國家は國家としての存立上、その固有の單獨利害關係を有して居る。夫の國防問題の如き、外交問題の如き、又は文化問題の如きは、即ち皆此種類に屬するものである。併し乍ら斯の如きものは國家より見れば單獨利害關係であると同時に、國民の各個より見れば共同利害關係である。國家の單獨利害關係が同時に國民の共同利害關係である所に、國家が複合的單一體である特質が最も明瞭に表示せられて居るのである。

既に國家が複合的單一體である以上は、國家を構成する各分子がそれ〲獨立の生存を有し、從つて獨立の權利を有するものであるが、同時に斯の如き各分子の獨立の生存及び獨立の權利は、全體としての國家の生存及び權利に依つて支配せられ統一せらるべきものである。更に具體的に言へば、國家を構成する各個人、各階級、及び其他の各社會的群團、並に各地方の如きは、それ〲獨立の生存及び獨立の權利を有すると同時に、是等のもの〻獨立の生存及び獨立の權利は、全體としての國家の生存及び權利に依つて綜合せられ、統一せられて、國民の共同目的に向けられねばならぬ。然るに自由主義者は、國家の各部の獨立の生存及び權利を見るに急にして、全體としての國家のそれを無視する傾向がある。所謂樹を見て林を望まざるものである。之に反して國權論者は、全體としての國家の生存及び權利を見るに專らにして、その各個の構成分子のそれを閑却するの弊に陷つて居る。所謂林を望んで樹を見ざるものである。正當なる國家觀は、此兩者を共に否認するのである。

此意味に於て我等は、國家内の或る階級の特殊利益を全然無視するが如き國家政策を否認せざるを得ない。殊に國民の全數より見れば比較的に僅少なる特權階級——即ち政權閥、軍權閥、金權閥等の特殊利益を以て國民の共同利益と見做す考へ方に對しては、如何なる根據よりするも極力反抗せざるを得ない。此點に關しては、政府及び政黨が共に際限もなく誤謬を反復して居るのである。

又世界的時代精神に對する無理解若しくは誤解も亦、近時の我國の政治思想の渾沌たる無中心状態を惹起するに與つて大に力がある。國家内に輿論が存在する如く、世界に時代精神が存在するものであることは、政治學者間に於て既に殆んど定論となつて居る所のものである。歐羅巴諸國に於ける第十二世紀の十字軍の遠征、第十五世紀の後半及び第十六世紀の前半の古學復興及び宗教改革、第十七世紀の專制政治及び中央集權、第十八世紀の啓蒙運動及び自由思想の普及、第十九世紀の產業革命及び帝國主義の流行の如きは、時代精神の最も顯著なる發露である。而して此時代精神なるものは、交通機關の發達と共に其流布する範圍が益す擴大し、今日に於ては全然世界的となつたことも亦、掩ふべからざる事實である。

最近に於ける時代精神は、言ふまでもなく政治の民衆化である。夫の現今の世界戰爭は、民主々義對專制主義の對陣であると言ふ宣言は、一概に僞善的聲明として排すべからざるものである。而して戰爭の進行に連れて專制主義の一角が既に崩れて、民主々義の地步が益す鞏固を來したことも亦、否むべからざる事實である。露國及び獨逸に於ける戰亂中の國内的政變は、最も明瞭に之を證明して居るものと

見るべきである。

或は戰爭繼續中に於て、各交戰國の政府が益々アリストクラチックに趣く觀を呈しつゝあるを見て、デモクラチック・ムーヴメントに對する反動が襲來したものと速斷するは、飛んでもない誤解である。民衆の信認を十分に贏ち得たる政府が、益々鞏固となり、益々大膽に國家の政務を專斷し得るに至るはデモクラシーの當然の歸結である。專門的任務を帶ぶる政府がアリストクラチック(智識上及び技能上)となることは、國家そのものがデモクラチックとなることゝ、理論上決して相容れないものではなく、事實上各國の形勢は寧ろ此方面に進みつゝあるのである。

各個人が社會の輿論に逆行して安全であり得ない如く、各國家は世界の時代精神を無視して立行くものではない。一國の傳統は國民が祖先より繼承したる貴重なる遺産であるが、之が正用と誤用とは、國運の進歩發展の上に至大なる影響を有するものである。短言すれば、國民生活上の傳統は、之をして國家の前途の發展の基礎たらしむべきものであつて、決して之をして其阻害物たらしむべきものではない。我國の一部の政治家及び政論家が、國民的傳統の政治生活上に於て有する地位に就いて誤解を懷いて居るのは、輿國的日本の立場より見て、十分十二分の批難に値することである。

國家の構成に關する正當なる解釋、及び時代精神に對する的確なる觀察に依つて、我國に於ける現下の政治思想の混亂を匡救し、國民の公民的精神を振作し、その世界に於ける日本の地位及び使命に對する自覺を促すことは、學者思想家の當然負擔すべき刻下の急務である。(六—九—二〇)

戰爭と海外文學

厨川白村

一

埃まみれの群書のなかに隱れて、閑人の閑事業と人の云ふ文藝の研鑽に沒頭する讀書生でさへ、ふと目をあげて世界の騷亂をながめると、さすがに色々な感想が胸に浮ぶと共に、卷を蔽うて撫然たらざるを得ないものがある。

去年の末に突如として現はれた獨逸の講和提議の如きは誰も之を眞面目には受取らなかつたが、其頃米國にゐた私などは、それでもまた恁んな事が近き將來の平和の曙光ともならうかと望んだのはほんの空頼み、英吉利の宰相ロイド・ジョオヂが新任早々議會での烈しい一喝に葬られて夫れ切りになつた。最近にもまた羅馬法王の提議は固より何の効をも奏しない。恁うして漠々たる戰雲はいつまでもいつまでも歐洲の天地を暗くして、鳩を使ひの女神『平和』の姿はまだ人間の目のとどかない彼方(かなた)に在る。戰亂の巷を遠く離れた東海のはてに獨り漁夫の利を貪ぼれる市井の銅臭兒のみが、此慘劇の長く續けよかしと祈れるほかは、惡魔にあらずんば恁かる屍山血河の慘狀を見てほほ笑む者はあるまい。

歷史の頁のここかしこにぼと〳〵と血の痕を印して來た戰爭といふ物あつてこそ人類は進步したのだと唱へる奇怪至極の論は、現代の文明を理解せずして唯だ遠い過去の時代をのみ見る人の謬見に過ぎない。世紀末よりこのかた、精神主義、民本主義、新理想主義の方面に進まうとしてゐた歐洲の思想と文明とは、現下の大亂の爲めに一時全く其進運を阻止せられたるのみか、更に幾十年幾百年の昔に立ち歸り、退步し逆轉し

つつ、我を忘れて蠻人の蠻劇を演じてゐるではないか。今度の戰爭は眞に歐羅巴の自殺である。學術商工業の破壞は云ふ迄もないとして、先づ之を政治上に見ても、英吉利の自由黨内閣が多年の努力によつて貴族國の因襲を打破して進まうとした民本主義個人自由主義の政策も、この大亂の一時的必要に迫られては、擧國一致の名のもとに、遂に聯立内閣の成立となり、徵兵制度の實行とまでなつて、折角時代思潮の大勢に乘じて眞面目な發達をしてゐた英國の新政治はめちやめちやに崩れて了つた。むかし南亞戰爭の折には激烈なる非戰論を唱へたる「無冠の王ジョオヂ」が今や「鐵血宰相」の假面(?)をかぶるに至つては、英國の議院政治も、遂に思潮の進運と逆行せざるを得ざるに至つた。由來自由の國を以て誇りとせる米國ですら、實戰以來その政府の態度は甚しく專制獨裁(オオトクラシイ)の色を帶ぶるの非難を免れないではないか。民本主義と戰爭とは到底調和の道なきものである以上、悉くの如きは免るべからざる當然の結果であらう。思想と文化の發達のため戰爭の忌むべき所以はこの點に在るのだ。

二

今度の戰亂は西洋の文學藝術に何ものを齎らしたかと問ふ人がある。私は之に對して勿論今のところでは絕無(ナッシング)だと答へるに躊躇しない。戰爭が既に現代文明の大勢に逆行し政治産業學術の進運を妨げてゐる以上、夫れが獨り藝苑にのみ幸ひする理由がどこにあらう。如何にも過去の歷史には戰爭が文藝の上に直接間接の好影響を與へ、殊に戰勝國々運の隆昌に醸成せられたる藝術上の大作が出た事も屢々であつた。しかし夫れは國際關係が今の如くに複雜ならずまた個人思想が今の如くに發達しなかつた昔の話である。世界人類の幸福といふ點から見れば勿論のこと、單に民族發展の上から見ても戰勝が國利民福をはかる最上の手段でなくなつた今の時代に於て、文藝が獨り之によつて雄篇大作を得る事は殆ど期待しがたい事である。今度の戰爭あつて以來歐洲の文壇は實に冬枯れの野よりも淋しい。くだらない際物ばかりは山ほど出ても、戰爭文學

として不朽の價値ありと目すべき大作は一として現はれてゐない。白耳義のマアテルリンクが戰亂に關する感想を書いた『嵐の破片』の如きも、之を往年の『貧者寶』の作者の筆としては甚しく物足りないではないか。ダヌンチオが文筆を棄てて飛行機の舵をとり天空から愛國の詩篇を撒きちらしたとて、夫れが何程の事であらう。彼の祖國と世界文明の爲めには『死の勝利』や『快樂兒』の一頁にだも値ひする貢献にはならないではないか。佛蘭西の新詩人ペギイは戰死し、ロマン・ロランの如きは今甚しい迫害を受けてゐると聞いた。戰爭中も例によつて皮肉冷罵を逞しうし、敵國の味方であるとまで云はれた英吉利のバアナアド・ショオでさへ、世の中が恁うなつては徒らに「物を茶化す惡魔」の名を博するばかり、最も滑稽なのは獨逸の前外相ヤゴウは英國を罵る時に、ショオの作『運命の人』の中の文句を屢々引用してゐる。自國を罵る好い文句を敵國の外相に敎へてやつたとて、夫れは別に文人の手柄でもあるまい。ショウは疾に戰爭劇として『キクトリア十字勳章佩用者オフラハアチイ』の一曲を愛蘭劇のアベィ座の爲めに書きおろしたが、之は興行發賣を禁止せられて遂に世に行はれず。またかれが最近の作である『オオガスタスその微力を致す』の如き、英國の募兵事業を諷した純粹の際物であるが、例の辛辣な皮肉もなく甚だ不評判で、戰爭の際物芝居では到底バリイの新作ほどに持囃されないのである。また英國の詩人は皆聲を揃へて戰爭を歌ひ、去年征途に上ぼつて希臘で客死した少壯詩人ルパアト・ブルックの遺篇のごときは殊に持囃されてはゐるが、今更らあれ程のものを珍重しなければならぬ迄に英文學は元來貧弱なものでは無いのである。唯だ僅かに注目すべき作品は、國破れて山河ありと云ふ白耳義の慘狀を材としたもの、たとへば露西亞のアンドレエフの『白耳義の悲み』、英國の新詩人アルフレッド・ノイエスの戲曲『ラダ』の類に過ぎないであらう。いつも花やかな佛蘭西の藝苑が昨年一ケ年の間に産した眞の藝術的價値ある作物と云へば、ポオル・クロオデルが戰爭詩集一卷と、ルネ、ベン

ジャマンの戰爭小說『ガスパアル』の二つあるのみだとは、何と云ふ心細い事だらう。

更にまた偶然の運命とは云ひながら、時も時、文星の隕つること昨年ほどに多かつた年は珍らしい位であつた。日本の文壇が漱石柳村の二先輩を失つた年に、西洋ではヘンリ・ジエエムスが死んだ。誰が目にも世界的の文豪と見られた西班牙のエチェガレイや波蘭のシェンキヰッツも、相前後して世を去つた。米國では、つい此間私があちらへ行く途中に布哇で會つた時まで人なみ以上に壯健に見えてゐたジャック・ロンドンが突如として逝き、また巧みに俗語を驅使して小兒を歌ふので人氣作者の隨一であつた詩人リレイも死んだ。殊に最も悲しむ可きは歐洲で最大の詩人と目されてゐた白耳義のエルハアレンが長逝した事だ。獨逸兵の鐵蹄に蹂躪せられたるおのが祖國の爲めに叫むで、「血まみれの白耳義」の歌を殘し、去年の暮ちかく佛蘭西のルウアンでふとした鐵道事故のために變死したのは、恰かも大詩人の死が祖國の悲運を象徵するかの樣にも見れば見られるではないか。佛蘭西では最も大膽なる新思想家であつたレミ・ドゥ・グゥルモンが戰時の日記『嵐の間に』一卷を最後の作として世を去り、また今年になつてオクタアヴ・ミルボオが死んだ爲めに、前世紀後半からの自然主義は遂に其最後の代表者を失つて西歐の文壇から全く影を沒するに至つた。

三

獨逸の事は知らないが、今日の英國は勿論佛國でも露國でも政治と文藝とは日本に於けるよりも遙かに密接の關係がある。兩者が共に人間の眞面目なる思想活動であり文化活動であるならば之は固より當然な現象で、日本のやうに政治外交と文壇との距離の遠いことは、そこに何等かの不眞面目な分子が附纏つてゐるからではなからうか。兩者の直接關係としては、――間接の交渉は勿論あることだが――唯だ或る種の爲政者が文壇の新思潮に抑壓や反對を試みやうとする位のもの。文壇の人々からもまた直接に政治外交に關する言議を聞くことと極めて稀なのである。之は文學とジアナ

りズムとが今日の如く接近したる時代に於て、寧ろ不可解とすべき現象ではなからうか。文章は經國の大業と云ふ昔の言葉を無意味にしてゐるのは、あながち無學にして無理解なるわが日本の政治家をのみ咎める可きではないと思ふ。

平生から政治外交に興味を有つ文人の多い英佛では、今や此文明の一大危機に際しては尙ほ更らのこと文壇は殆んど武裝したるが如き觀がある。たとひ其産物の藝術的價値は大ならざるにもせよ、國運の危機に當つてそが人心に及ぼす影響と力とは決して侮る可からざる者がある。佛蘭西のロマン・ロランが戰爭の初めに發表した獨逸に對する開書の如き今では少しも珍しくない。翰林院(アカデミイ)に列してゐる老大家までが殆んど皆擧つて戰爭熱政治熱にうかされてゐる事は眞に偉觀とすべきである。殊にいつも政界と文壇との緣の深い英吉利では、ウェルスの豫言小說、ベロックの戰爭史、チェスタトンの時局論などは、之を他の滔々たる際物と同一視す可からざる者がある。作家としてはながらく文壇一方の重鎭であつたホオル・ケエンの如き、今や旣に純然たる政論家として重きをなしてゐるではないか。純藝術の立場から見れば開戰以來冬枯れの野のやうにさびれた西歐の文壇にも、此現象のみは特に私どもの注目に値ひするのである。

ことに英佛露の間に於ては之等文人の筆を通うして國際間の理解が增進せられ、双方國民の意志が完全に疏通せられてゐる事は非常なものである。私は先頃英國のエドマンド・ゴスが『兩世界評論(ルヴュ・ド・ドウ・モンド)』の誌上に於て獨逸のクルトゥルを排して英佛系統の新文明の勝利を高調し、英佛二國の「精神的協商」を說ける一文を讀むに及むで、轉た此感を深くした。私は昔から人の云ふペンは劍よりも力强いと云ふ古い言葉に、飽くまで十分の意義あらしめたいと思ふのである。

四、

トロイの戰がホオマアの大詩篇の題目であり、また「われは武器と英雄とを歌ふ」の句が羅馬の大敍事詩の卷頭を飾れるとを想へば、戰爭が古代文學に於て常に

最も重要な題目であつた事は今更言ふ迄もなからう。戀愛を除けば、古代人の生活に取つて戰爭ほど重大な意義あるものはなかつた。勇者强者が戰塵の巷に馳驅して功名を樹てる事は、いまだ原始時代を去ること遠からざる過去に於ては彼等が詩歌的生涯を飾る唯一最大の事業であつたからだ。

文化の程度が進むに從つて人間生活に於ける戰爭の意義は古代ほどに重大でなくなつた。勿論戰爭を題目とした詩歌小說の類はいつの代にも絕えたことの無いのは勿論だが、近代に至るほど夫れが益々少くなつたのは事實だらうと思ふ。試みに近代歐洲での最も大なる戰爭であつた普佛戰爭に就て見ても、文學の上には肝腎の佛蘭西でモウパッサンの作品のほか、まづゾラの『沒落』に描かれたものを以て、十九世紀最大の戰爭小說と見なければならぬ位だ。文藝進化の歷史の上に古代の叙事詩時代が過ぎ去つたと共に、戰爭文學の時代も亦た既に過去のものとなつたのである。

しかし一口に戰爭に關係した文學と云つても戰爭の外的現象そのものを描いた物の場合と、戰爭が人間の內部生活に與へる影響を對象としたものとは、おのづから趣を異にしてゐる。そして近代の如く文學が單なる外面的の叙述描寫よりは、寧ろ深く人間の內部生活を洞察し心理を解剖し思潮の推移に密接してゐる時代に於ては、勿論後者の種類に屬するものが重要な位置を占めるのである。しかし斯くの如き作品はいま戰爭の眞最中唯だ外部の動搖と騷擾とに心をかき亂されてゐる際に到底望むことの出來ないもので、夫れには先づ落ち着いた冷靜な觀照的態度とも云ふ可きものが何よりも必要なのである。ところがすべての觀照には常に時間的にか或は空間的に或る距離を隔てる事が何よりも必要なので、斯くの如きは今現に前古未曾有の大擾亂の渦中に身を投じてゐる歐洲人に取つては到底不可能の事である。恐らくは戰後十年二十年或は世紀のなかばを閱して後に、今度の戰爭ははじめて優秀なる文藝の作品に影を投ずる事だらうと思ふ。

五

すべての文藝上の製作には何等かの意味に於て餘裕を必要條件とする。じつと心を鎮めて過去を靜觀するとか、身を第三者の位置に置いて冷靜に洞察するとか、或はまた自巳の經驗そのものをも客觀化して見るとか、すべてさう云ふ態度は皆この餘裕あつてはじめて出來ることとである。歐洲全體の人心が今度の大戰に於けるほど動搖し興奮し熱狂し激昂して些の餘裕をとどめない事は近代の史上殆んど前例なき所である。人は動もすれば現代の歐洲文壇に大なる天才がない爲めに戰爭文學の傑出した物が出ないのだらうと速斷するが、夫れは大なる誤解である。たとへば英吉利のトマス・ハアディの如き、今より約一百年前の那破翁戰爭を題目としては彼の大作の一つたる戯曲體の叙事詩『主權者(ダイナスツ)』を書いたが、さて今度の歐洲戰亂に就て彼の公にしたる作品と云へば、到底この大天才をして英文學の史上に重きをなさしむるものは一もないのである。百年前の大戰を描けば一世を驚かす程の大作を仕上げる天才ですら、眼前大戰の渦中に身を置いてゐては筆のつけやうが無いのである。昔デ・クインゼは火災を見て詩的感興を得ると云つたが、所謂對岸の火災ならばいざ知らず、まさか自分の家が燒け落ちやうとする際には詩作も何もあつた物ではなからう。いま歐洲の文壇にいかほどの天才ありとも此火事場騷ぎの眞最中に大作を出せよと望むのは、望む者の無理であらう。ただ今後少くとも十年二十年或は一世紀位の間は、歐洲の人心は必ずや此大戰亂と其影響とを中軸として回轉する事だらうと思ふ。さう云ふ時になつて人心に觀照靜觀の餘裕を生ずるとき、こゝにはじめて世界戰爭の一大悲劇は藝術として取扱はれるに至るであらう。那破翁戰爭も約半世紀を經て杜翁の傑作『戰爭と平和』に描かれ、一世紀を隔てハァディの『主權者(ダイナスツ)』の題目となつたのだ。杜翁がクリミア戰爭の時に從軍して書いた『セバストポオル』位の物ならば、今度の歐洲戰爭中にも之に匹敵する程の作は出てゐるのである。

殊に戰後に興味を以て期待せらるべき者は露西亞の文學である。前世紀の後半からながらく悲愁の暗雲に

とざされて鬱積してゐた新思想、また夙にトゥルゲネフやドストエフスキイ等の作品にあらはれて露西亞人の内部生命に深くも潛流浸潤してゐた一大思潮は今度はからずも世界戰亂といふ外部からの衝動をうけて、突如大革命となつて爆發した。恰かも爛熟し切つて僅に枝にとまつてゐた果物が、ふとしたはづみに地上に墜ちて崩れはてた樣に、すべての古きものを破壞し盡したのである。俗惡なる利害の打算を外にしていつも豐かな感情生活の美を享樂せる露國民族が、此大騷ぎの鎭まつた後に、フレッシュな潑溂たる新生活新精神の勃興に乘じ、天才の筆を通うして如何なる作品を吾々に示すかは、最も深き興味を以て見らるべき問題であらう。今日までのところ既に露國文壇にも今度の戰亂を材とした作品は出てゐるやうだ。たとへば日露戰爭の時にも『赤き笑』を公にしたアンドレエフには、今度も『白耳義の悲哀』などの新作がある。しかし眞にすぐれた作物は、露國に於ても矢張り戰後少くとも半世紀の間に生れる事だらうと思はれる。

またかの獰惡なる獨逸兵の鐵蹄に蹂躙られて殆んど亡國の悲運に遭つた白耳義は、エルハァレンやマアテルリンクの如き近世の大天才を生んだ國である。若し協商側の勝利によつて戰後に此國が獨立を回復するならば、そこに如何なる新しき文學を生ずるであらうかは、これまた十分吾人の深き興味をそゝるに足る問題ではないか。

六

今度の歐洲戰亂にも、月並な愛國の歌や、戰爭の慘劇の一部分を材とした樣なものは澤山に出てゐるが、戰爭の全局に目を注いで、そが一代民衆の生活に及ぼせる影響を觀察して筆を執つた者は甚だ尠い。此間にあつて英國現存の最大作家を以て目せらるるハァバアト・ジョオヂ・ウェルスの新作は、確かに出色の文字として吾人の注目に値ひするもので、最近英米兩國に於て著るしく讀書界の耳目を聳動してゐる者は先づ此人の作品であらう。

ウェルスの近時の作品は以前のやうに濃厚なソシア

リズムの色彩を帶びてゐない。自分の社會觀の宣傳者と云ふよりは、寧ろ現代の社會生活に對して眞摯なる傍觀者の態度を執つて、僞らざる精細の描寫を試みようとする風がある。殊にこの作者の特色たる科學的知識を土臺にして一種の豫言小說の如きものを書く段になると、殆んど現代の歐洲に於ける他の作家の追隨を許さない特殊の技倆を有つてゐる。たとへば空中戰爭の如き、また英國社會狀態の變遷の如き、今まで彼の小說にあらはれた現象が、此頃は既に着々として實際界にあらはれてゐる。もと科學的知識を經とし想像を緯として出來上がつたその小說中の豫言が、不思議にも歷々として事實に當つてゐるのは、誰しも皆驚嘆を禁じ得ない點である。

健筆縱橫の多作家であるウェルスは、開戰以來既に數種の論文小說の類を公にしたが、最近に最も世の注意を惹いたのは「ブリトリング氏の洞觀」「戰爭と未來」「見えざる王、神」などの數卷である。最初の物の如きは、昨年出版以來英米の知識階級で最も廣く讀まれた小說である。

「ブリトリング氏の洞觀」は著者が、思想家であり文筆の士である主人公ブリトリングの口を藉りて、現下の大戰が英人の生活に與へた影響に就ての感想を書いたもので、別に複雜な筋といふ程のものがあるでは無い。主人公は英國の田舍にゐて、息子は出征して戰死して了ふ。一種の理想主義者である主人公は極めて趣味の廣い男で、政治宗敎社會敎育等の問題は勿論、園藝から自働車の事にまで趣味を有つと云ふ風の人。時勢を達觀し、獨逸氣質を批評し、英國政府の施設を非難し、米國の態度を論じて、極めて大膽な忌憚なき、又往々にして皮肉な觀察を下すのである。たとへば開戰の當初英國政府の募兵の措置緩慢にして、軍器の不足、將校の無能のために益々時局を危地に陷らしめた有樣を敘して激烈なる攻擊を加へた。固より之等はすべて著者自らの經驗や觀察を巧妙な對話と背景描寫の中に配したもので、堅苦しい議論の肩の凝る樣なものでは無い。

しかし此小說中で最も世の注意を惹いたのは宗教上の問題であつた。ブリトリングの息子が戰死した後間もなく、以前其家庭にゐた獨逸人の靑年も矢張り敵軍で戰死した。ブリトリングは自分の愛兒を失つた事と共に、彼方の獨逸の方でも其靑年の兩親が矢張り悲嘆に暮れてゐるだらうと云ふ事に、强くも心を動かされる。恁う云ふ事が動機となつて、思索の結果やがて色々と宗教信仰の問題に這入る。神の愛は恁かる事を決して無意味にされるわけは無い。之は何等か人類の爲めに幸ひする結果となつて現はれるに相違ないと考へる。そこで政治上に各々國を樹てゝ互に相爭ひ相鬩ぐ事の用なき事にも想ひ及ぶのである。恁くして主人公は遂に新しき神を發見し、新しい信仰に到達して「宗敎は最初にして又最後のもの。人が神を發見し神によつて發見せらるゝ迄は、彼の爲す所は毫も緒に就かず、また何等の目的に向ふ者にもあらず」と云ふ確信に達するのである。

そこでブリトリングがまだ未解決のまゝで描いてゐた此問題に關して、ウェルス氏自らは次の著述『見えざる王、神』の一篇に未來の新信仰を論じてゐるのである。其發見したる神とは卽ち世界を統治せる目に見えざる王で、今までの樣な偶像(アイドル)や獨斷(ドグマ)の破壞せられたるあとから現はれる眞の神であつて、著者が『戰爭と未來』のうちに「人類が覺醒すべき時は來た。やがては人類といふ一團の外には、世界には何等の國別ちも無くなるであらう。帝王もなく將帥もなく、唯だそこに人類の一つの神あるのみとなるだらう』と言つたのは卽ちこの意味だ。戰亂のため荒れに荒れたる廢墟からは、やがて新しき神――「有限な努力的な必要な神」の出現を見る事であらう。一切の歷史的因襲を離れた新しき基督敎はやがてこゝから生れるだらうと云ふのがウェルス氏の豫言だ。そして此の復活(リナツセント)の宗敎(レリジヨン)は決して自分の獨創の說ではなく、現代の精神を其儘に叙述した迄のものだと著者は斷言し、夫れがまた友人であつた故ヰリアム・ジムェスの所說に負ふ所多きことをも明言してゐる。なほ少しくウェルス自らの言を引用

するど、

『この新信仰ど在來の一切の基督教との最も根本的な相異は、一つの有限の神を拜するの點にある。：：此神は全知全能の者ではない、天地の創造者でもない。基督教で「父」となつてゐる猶太人の傳來的な神とは同一の者ではない。この神は救の神であり、一つの靈であり、人であり、はつきりした知られ得べき一つの人格である。愛を加へ靈感を與へ愛し得べき人格であつて、一切の人間の靈のうちに存在し、また存在せん事を努むる人格である』（『見えざる王、神』第一章第二節）

七

ウェルスのこれらの新著は、いま太西洋の兩岸で英語國民の間に非常な注意を喚起して、毀譽褒貶の聲が甚だ喧しい。現にプラグマティズムでは故ジェムスの後繼者を以て目せられてゐるコラムビヤ大學のデューエイ教授の如き、雜誌『七藝術』の近刊號に之に對する峻嚴なる批評を公にした。由來ウェルスの思想にはプラグマティズムの傾向が著しいだけにデューエイ教授の此批評は特に世間の注目を惹く事だらうと思ふ。

閑話休題、私はウェルスの斯かる豫言が果して今までの樣に的中するかどうかは知らないが、とにかく戰後の歐洲に於て宗教信仰精神生活の新しい現象が現はれて、それがやがて思想界に一新時期を劃する事の遠からざるを思ふ者である。

今度の戰亂は之を思想上より見れば、前世紀の中葉よりこのかた極めて偏頗な急激な進歩をして來た自然主義物質主義の行きつまつたる當然の歸結に他ならない。物質主義の一つの變態とも云ふべき軍國主義の如き、到底現代に於て其目的を達する事の出來ない事は今度の戰亂が最もよく之を明示したのである。その本家本元たる獨逸が既に當初の目的を達し得ないのみならず、之に對抗してゐる協商側も遂に多く得る所なくして終るのであらう。双方ともやり出した事は今さら後へも引けずと云ふので戰爭だけはとにかく繼續してはゐるものゝ、結局は疲弊困憊の結果歐羅巴の自殺的

行爲たるのほかは無いのである。此大擾亂によつて軍國主義萬能の迷妄より覺めたる戰後の歐洲には、必ずや其反動として平和主義が起り、物質主義に對して精神主義理想主義が盛となり、利己主義個人主義に對して愛他主義共存主義の思想が重きをなすに至るだらうと思ふ。物質萬能の思想に誤られたる一代の人心を覺醒すべく、天は遂に此大斧鉞を下して最後の荒療治を試みたのだとも見られるだらう。

人間の生活には靈と肉との完全なる合一調和がなければならぬ。之を國家の上より見、民族の上より見るも、靈にのみ傾くものは遂に印度の如くに自ら滅び、肉にのみ傾くものは今の歐洲列國の如くに大なる禍を招くの他はないのである。物質萬能の誤れるは心靈萬能の危きと同じく、破壞と滅亡とは共にその窮極の運命たるを免れないのだ。眞の大なる文明は偉大なる物質文明の基礎の上に建てられたる精神文明であらねばならぬ。歐洲の列國が過去半世紀の間殆んど其全力を傾け盡して建設したる物質文明の上に更に新しき精神文明を建つるの日ありとすれば、それは恐らくはこの度の大戰の後にあるだらうと思ふ。幾千萬の人命と幾百億の財を犧牲としたる此慘劇も、思想史上に斯くの如き一大進轉の機運を生ずるを得てこそ、はじめて世界文明の爲めに重大なる意義を有する事となるのである。

いつの世にも一般思想界の先驅者である文學や藝術の上には、戰前はやくも既に前世紀末からして、自然主義物質主義は亡びて、之に代はるべき精神主義理想主義が現はれてゐたのである。かの新ロマンティシズムと呼ばれたる者の如きは即ち此方向に流れてゐた一つの思潮に名づけられたる名稱であつた。醒むる事の遲い一般の民衆はこの前古未曾有の大悲劇に驚かされてはじめて、さきに既に藝苑の天才が行かうとしてゐた道を踏むで進む事であらう。戰後新思想の曉の色は戰前はやくも既に藝苑のうへに現はれてゐた事を思はねばならぬ。

近頃リンカァン・コルコオドと云ふ新詩人が、『戰亂の幻影』と題した作を公にして俄に世の注意を惹いた。ちやうどホヰットマンのやうな詩形を用ひたる、この頃の米國あたりで流行する自由詩の體である。今まで長い間物質上の繫縛を離れ得なかつた心靈の解放を歌つたもので、今度の大戰亂こそ實に世の因襲を破壞し去つて、人をして其本來の面目に歸らしむると共に、精神生活の歷史に重大なる一轉機を生ずるものである事を歌つてゐる。

見よ、戰の時。
生命は新奇の流れを走る。
世界は覺醒せられ、靜默は劈かれ、平和は破滅し
顚覆せり。
整然たりし因襲は今や破壞せられ、幻惑は四散し、
突如として眞意は明かにせられぬ。
人々は自然と死と苦痛とに面して、本來の面目は
明かにせられたり。かなた遠くかすかに眞は現は
れぬ。
空に舞へる夢よ、遠きかなたの聖なる思ひよ。

濛々たる戰雲のかなたに新文明の曙光を認めたる彼は更に云ふ、

さながら、死の間際に、苦痛と悲哀のうちに、ま
た鋭き問罪の折に、荒々しくも覆面の劈かるる時、
人は生の眞と僞とを見、靈と愛と、其眞意義を見
る如くに、
今や戰に臨みて諸國の民は覺醒しぬ。
苦痛、悲哀、逆境、いたましき損害のうちより、
人の最善なる努力が生ずると同じく、
世界のこの最大苦難のうちよりこそ、最高の夢想
は來れるなれ。

戰爭は實に人間が有する一切の破壞力を使用して演出する大悲劇である。虛僞と迷妄とによつて建設せられたる凡べての物を一掃する最後の手段として、また、めざむること遲き一般の俗衆を警醒する非常の手段として、この鐵火の洗禮は蓋し避く可からざる物であつたらう。唯だ思潮の流れのみはおのづから其往か

んと欲する所に往くのである。戰前はやくも既に藝苑や思想界に兆してゐた新理想主義や精神主義の爲めに、新たなる道を開くべく、その障碍を取り除き新思想の跳躍に一の機會を與へたるものは即ちこのたびの世界戰亂である。(丁)

政府の物價政策を論ず

法學博士 堀江歸一

物價政策の要點

往古の經濟政策に於ては、各國何れも國家の權力を以て物價、賃銀、金利等の決定に干渉し、依て以て當事者間に於ける利害關係に公正を保たしめたりとしたる場合少なからざりき。然も一度び經濟上に自由放任を尊重し、自然自由を承認する學說の行はれて以來、人に經濟的自由を與ふるを以て、最も其の活動を刺戟し、又社會に於ける各種の利害を調和するを得るの信念漸く盛と爲り、斯くて物價、賃銀、金利等の決定は多く當事者間の合意に基き、敢て他の干渉を許さゞるに至れり。固より金利に對しては高利制限法あり、賃銀に對しては近時最低賃銀國定制度の行はるゝあり、物價に就ても亦時に保護關稅に依て外國貨物の輸入を遮斷し、內國市場の代價を高率に維持することあると共に、海運業に對する保護又は直接の奬勵法に依て、外國貨物の輸入を便にし、以て內國市場の代價を低落せしむることなきに非ずと雖も、是等は全體に於て、時に見る除外例に屬し、物價、賃銀、金利の如きは、當事者間に於て行はるゝ自由の取引に據るを原則とするの常なり。

斯の如く近代の國家が代價の決定に就て、自由放任の政策を可なりとするは、畢竟經濟上に於ける自然調節の作用あることに基くものに外ならず。即ち各種の貨物には其生産費に依て、律せらるゝ正常代價なるものあり。若しも市價が或る事情の爲めに、此正常代價を超過せんか、當業者は正常利潤よりも大なる利潤を收むるを得べきを以て、從來事業に從ひたる者は資本を調達して、盛に事業を擴張す可く、一般企業家亦新に事業に從はんとす可く、斯くて物資其ものゝ供給增加に依て市價を正常代價に達するまで低落せしむる一方に、市價が正常代價以下に低落したる場合には、事業家は資本を事業より回收して、其規模を縮少し、物資の生産高を減縮するを以て、供給の減少に依て、市價を正常代價に達するまで騰貴せしむ可く、此間に市價騰貴の際には外國より貨物の輸入を促し、市價低落の際には、外國に對して內國貨物の輸出を盛ならしめて、以て前記の作用を助長するに至る可し。從來諸國が物價政策を講ずるに當り、專ら物價の趨勢を自然の成行に一任したるは、要するに自然的調節の作用に信賴したることを以て、重なる原因とす可く、又此方針は大體に於て經濟社會の常調を維持するに効果の少なからざるものとするを得たり。

然るに今回の如き大戰爭の突發し、而して其繼續意外の長期に亘るや、平時物價の上に行はる可き自然的調節は全く其跡を絶つに至れり。蓋し今日の物價騰貴たる、要するに國際的にして、又一般的なるが、其然る所以は戰爭の結果に之を歸せざる可からず。即ち國際間に戰爭の起るや、交戰國に於ては多數の勞働者は徵募せられ、兵員として戰場に赴くが故に直に生産勞働者殊に熟練勞働者の供給に不足を來し、婦人小兒の數を使傭するも、容易に其缺を補ふに難き爲めに産物の供給を減縮し、他の交戰國に於ける同樣の事情は運輸の困難も相加はりて、國際間に於ける物資の流動を不自由にし、以て物價の平準を保つの作用は全然打破せられざるを得ず。而して戰時財政の進行と共に、公債の發行せらるゝに隨ひ、又は中央銀行に於ける兌換

制度停止の結果として、通貨の膨脹を來し、他の一方に於て政府が軍需品として、盛に物資を需要せんか、相重なりて、物價の騰貴を來すに至る可し。

中立國又は我國の如き戰亂の中心點と隔絶することの遠き交戰國に於ては、影響の及ぶ徑路に異なる所あるが如しと雖も、其物價の騰貴を生ず可き一事に就ては、疑を容る可からず。中立國に就ては兎に角、我國に就て之を見るに、歐洲開戰以來物價の著しく騰貴して已まざるは第一歐洲敵國より供給を仰ぎたる物資の輸入杜絶し、他に之を補ふものなく、內地市場に於て供給に缺乏を來したること、第二歐洲聯合諸國の產物亦原產國市場に於て供給の不足したる一方に、原產國自ら輸出を制限し、爲めに我國市場に於て充分に其供給に與るを得ざること、第三交戰諸國は、我國の物資を軍需品として需要し、中立諸國亦交戰國の供給の杜絶したる缺を補ふ爲め、將た又內地經濟社會の好景氣に乘じて、我國の物資を需要し、我國の生產事業亦相當に其規模を擴張したりと雖も、需要の增加する勢に及ぶ可くも非ず、外國輸入品の供給減少し、國產品に對する需要增加するに於ては、其物價の騰貴を誘致すること敢て怪むに足らず。而して第四斯る事情の下に、我國の貿易は大正四年以來輸出超過の狀態と爲り、傭船料運賃等の收入之に加はりて、我國の外國に就て回收す可き債權を增加せしめたるが故に、自ら正貨の吸收を促して、兌換券の增發を招き、通貨膨脹の爲めに物價を騰貴せしめ、外國品の輸入あるも、其數量の大ならざるは勿論、第五運賃保險料の高率なる爲めに、毫も物價の調節に資するものあるを得ざりき。

物價騰貴の諸原因

物價騰貴の原因にして既に上述の如く(一)敵國物資の輸入杜絶、(二)聯合國物資の內地市場に於ける供給缺乏、(三)軍需品として、一般商品として、我國物資に對する需要の增加、(四)通貨の膨脹、(五)運賃保險料の騰貴等に存する以上は、自然的調節に依て、近き將來に代價の復舊を見るが如き、到底之を望む能はず、而して騰貴の原因の人爲的事情に存するものとす

れば、同じく人工的作用に依て、之を除却すること亦困難なりとせず。唯物價の人爲的騰貴に對して、人爲的調節を求めんとする場合には**人爲的騰貴の經濟生活上に有害なることを立證せざる可からず**。我國に於ける近時の物價騰貴は果して經濟生活上に有害にして、人爲的調節を必要とするものなりや、否や、是れ物價政策を案ずるに當つて、其先決問題を以て見る可き所なり。

始め物價の騰貴するや、其原因の那邊に存したるを問はず、社會一般の人氣を刺戟し、好景氣を齎すの一助たりしや、疑を挾む能はざるものあり。卽ち染料藥品、鐵類の輸入減少し、是等物資を所藏したる者が偶然の利益を收め、次いで船舶の需要の大なるに及んで、運賃の騰貴を招き、海運業並に附屬諸事業の利益を增加し、更に通貨の膨脹に依て、一般物價の騰貴を來して、世間に好景氣の利益の及ぶ所を廣くしたるが如き、著明の事實なりと雖も、同時に物價騰貴の社會に災禍を及ぼしたるもの少なしとせず。中流以下の階級殊に定額の所得に依て衣食する者の生活は物價騰貴の爲めに攪亂せられ、今や生活難の餘弊甚だしきものあり。**一方に勞働者の如き商工業繁昌の爲めに有利なる地位に居れりと稱せらるれども、其必ずしも然らざ**るは近時に至り全國到る所に同盟罷業の簇生しつゝあるを以て、其一端を卜す可く、斯くの如きは要するに(一)商工業の內全然時局の齎せる好景氣と關係なく、物價大に騰貴しながら、賃銀の增進之に及ばず(二)諸種の事業中一時戰爭景氣の利益を受けたりと雖も、其後軍需品の註文杜絕し、頓挫したる爲めに、遂に事業の規模を縮小し、職工從業者を解傭したるの結果にして、物價騰貴の狀態は今日の儘にして、一旦經濟社會の反動時代に臨まんか、勞働者社會に及ぼす可き影響の慘憺たるは、論を俟たざるのみならず、物價騰貴の爲めに、一旦增進したる生產費は必ずしも近き將來に於て舊に復さず、好景氣時代に放漫と爲れる事業の經營法も、奢侈を極むる個人の生活も容易に緊縮するに至らずして、反動時代に於ける蹉跌を大ならしむるの

危險あるや、知る可きのみ。況や物價騰貴は商工業の好景氣を誘致する他の一面に於て、人の貯蓄を妨げて、其浪費を促し、戰後最も必要とする資金充實の要求に背馳するの弊あるに於てをや。

物價は騰貴し、自然的調節に依て、其低落を期す能はず、而して其騰貴の爲めに弊害の大なるものありとすれば、物價政策は自ら二個の方嚮に出づることゝ爲る可し。第一は物價を人爲的に騰貴せしめたる諸原因を除却すること、第二は第一の方法を以て、尙ほ物價の調節を期する能はずんば、國家の威力に依て、物價を限定することと是れなり。固より物價騰貴の原因中には人力を以て、將た又我國の獨力を以て之を如何ともする能はざるものあり。例へば敵國物資の輸入杜絶したるが如き、戰爭の繼續しつゝある今日に於て、其の輸入の復興を期するは企及す可からず、又今日聯合諸國に於ける物資の生産を豐富にして、我國に於て其充分なる供給を受けんとするが如きも、戰爭の繼續中望む可からざる所に屬すと雖も、他の原因に至つては、我國の裁量と用意とに依て、之を左右するの道に乏しからず、政府が今日に至るまで此邊の處置を怠れるを以て、吾輩は施政上に於ける大なる錯誤とするものなり。

故に政府にして物價の調節を計畫するの意あらんか、爲す可きの道多々あり。我國に於て産出せらるゝ物資に對する外國の需要劇増して、供給之に及ばず、爲めに物價の騰貴を來すものとせんか、或る種類の物資に對して、其輸出を禁止し、又は政府の特許ある場合に、之を制限するは、卽ち物價調節の目的を達する最良の手段とす可し。我國に於ては輸出貿易を以て、各種經濟上の取引中、最も有利なるものとし、之を盛ならしむる爲めには如何なる犧牲を拂ふをも辭せざる者あり。斯の如きは畢竟マーカンチリズムの誤解に基くものにして、一顧に値せずと雖も、斯る議論の行はるゝ以上は、之を排して、或る貨物の輸出を制限するが如きは、實際に困難なる事情あり。然れども一つ貨物ありて、之を外國に輸出するを以て、利益ありとす

るや、將た又內國に保留して、國民の消費に供するを以て、利益ありとするやは一に時の事情に依て之を定む可く、決して絶對に一方を利とし、他方を不利とするものに非ず。今歐洲諸國は戰爭に臨んで其國運の危きを告げ、之に應ずるが爲めには、如何なる代價を拂うても、尙ほ外國の物資を購入せざれば已まざらんとす。斯る急劇の需要の起れるを奇貨として、我國が歐洲交戰諸國に軍需品を賣却し、又合衆國の好景氣に乘じて、生絲其他の物資を輸送しつゝあればこそ、巨額の輸出超過を現出するに至れるものなれども、斯る需要の增加に應じて、內國に於ける產出の必ずしも增加したるに非ざる以上は、物價騰貴を助長するの原因と爲り、內地に於て貨物を生產する者と之を消費する者との間に利害の衝突を來す可く、其衝突の劇烈なる、國家の干涉を必要とするものあり。一國は外國の消費者に便益を與ふる爲めに、內國消費者に特に苦痛を與ふるを正當とするが如き理義ある處置とす可からず。政府は近來に至つて紙並に肥料に對して輸出を制限するこゝしたるが、斯の如きは今日に至るを待たず、夙に實行す可き理由の存したると共に、米に對しても、軍需品として外國に輸出せらるゝ爲めに、其の代價の騰貴したる時に於て輸出を制限するを至當としたるや、論を俟たざるなり。然も政府は最近に至るまで輸出の如きは如何なる貨物に於ても其の行はるゝに任せて、之れを顧みず、船舶に就ても一般物資と同じく、船主が之を外國に賃貸するも、將た又外國に賣却するも、之を念とせざりき。斯の如くなれば左なきだに內國に於て供給の不足せる物資が益々缺乏して、其代價の騰貴を助長し、運賃の上進、運輸の不便が更に之を助長するも亦た怪むに足らず、政府に確乎たる經濟上の政策の缺如せるは、卽ち物價騰貴の一原因たりしことを爭ふ可からざるなり。

政府の物價調節令

若し夫れ通貨の膨脹に至つては、物價騰貴の一般的原因たることを爭ふ可からず。政府にして物價の調節に意あらんか、正貨を處分して、通貨の膨脹を制止す

るを以て、經濟上重要の施設とす可く、而して正貨處分の方法としては、對外放資を急要としたるの道理なるに、此點に於ける政府の所爲頗る緩漫を極め、通貨を其膨脹するに任せ、物價を其騰貴するに委したるは、經濟上に於て無政府と異ならざるの愚を演じたるものとす可し。通貨の膨脹すること既往の如く爲る以上は、他日の反動は兎に角、其膨脹しつゝある間金融緩漫の狀勢を馴致するは當然とす可し。金融の緩漫なること從來の如く爲らんか、多少の信用を有する者が資金を融通して、物資を買占め、又一旦買占めたる物資を賣惜むは自然の勢とせざる可からず。殊に將來我國に通貨の膨脹すること既往と異ならず、益々物價の騰貴を惹起するものとせんか、此狀勢を豫測する當業者は愈々物資を賣惜みて、一方に物價騰貴の勢を煽揚すると共に、他の一方に於て自ら利益を占めんとするに至る可し。

　政府は過般物價調節令を制定し、數種の貨物を指定して、其買占、賣惜みを取締ることゝしたり。買占賣惜みが物價騰貴の一原因なりとすれば、政府の取締令亦時機に適したりとす可し。問題の要點は買占賣惜が物價騰貴の一原因なりや否や、其一原因なりとして、如何なる程度まで之に重きを置く可きや、又買占賣惜に對する制限の如き、果して之を斷行するを得るや否やの三箇條に外ならざるを見る可し。第一の問題に對しては、吾儕は之を肯定す可し。然も第二の問題に對しては、吾儕は物價の騰貴を助成する原因として之を見れば、買占賣惜みの如きは、其從たるものに屬し、金融の緩漫を以て、其主たるものとするの適當なるを信ぜんとす。隨て物價騰貴の主たる原因を除却せんか、其從たる事相に過ぎざる買占賣惜みの如きは期せずして、之を抑制するに難からず、政府が此關係を閑却し、正貨の横溢金融の緩漫を制せずして、却て買占賣惜に對する制限を施したるを以て、事の本末を顚倒し、大局を忘れて、些事を顧みるの陋態に陷れることを難ぜざる能はず。

　或は買占賣惜みに對する取締にして、眞に之を斷行

するを得て、商人をして貯藏品を早く市場の賣買に付し、需要供給を調節するの一助たらしむるを得れば、尙ほ可なり。然も代價の最も高かる可き時に、物資を賣却する爲めに、其低廉なる時に、其賣却を制限し、一方に代價の低廉なる時に物資を買入れて、其騰貴する時まで、之を貯藏するは、商業家日常の行爲にして、此自由認められずんば、商業家は殆ど取引を行ふ能はず、彼印紙煙草の賣捌人と同様の地位に陷るに至る可し。政府如何に經濟政策上に無定見なりと雖も、調節令に指定したる米穀、石炭、綿絲、綿布、紙、染料、藥品等を取扱ふ商人をして盡く印紙の賣下業者や、煙草の小賣人と同等に遇し、以て商業社會の活氣を奪ひ去らんとするものに非ざる可し。然らば調節令に於て、政府が暴利を目的とする取引を取締る可しと云ひ、市價に影響、變動を生ずる手段を禁止すと云ひ、經濟社會の安全を害する所爲を制限すと云ふや、盡く抽象的文字に屬し、何を以つて之れに充つるや、其意の明ならざる以上は、調節令を斷行するが如き企及す可からざる所なり。要するに調節令は一個の案山子に過ぎず、政府は之を掲げて以て經濟政策上に無爲ならざることを辯明する材料に充てんとするものなる可しと雖も、今や物價問題は斯る案山子を弄して、一時を瞞過せんとする時に非ず、其暴騰の原因に遡りて對症的療法を講ずると共に、戰後に於ける經濟社會の平靜を維持するの目的を以て、之を解決するに非ざれば、經濟上の危機、或は此問題に關聯して、發生せざるなきを期する能はざるなり。

露國の前途を樂觀す

法學博士　吉野作造

（一）

露國の前途の觀測について我國の論壇には悲觀論が多い。否な、殆んど全部が悲觀論と言つてよい。恐るべき外難を扣へて居りながら、內部の狀態が混沌とし

て更に歸する所なきを見ては、悲觀說の唱へらるゝも尤もである。五月初めにはクロンスタットの獨立があつた。七月の央にはウクライナの獨立要求があり、つゞいて數日の後フインランドの獨立宣言があつた。之に加ふるに中央に於ては一方には過激派、他方には反動派の辛辣なる陰謀を逞うして極力政府顚覆を計るものがある。戰線の士氣至つて振はず、九月三日にはリガの陷落を報じ、獨軍長驅して露京を衝くの日なかるべきかを憂ふる者あるに至つた。斯くして露國の前途を悲觀せざらんとするも得ざるのである。

併しながら露國の前途を觀察するに方つて、動もすれば、我々の看過せんとし、而かも決して看過するを許さゞる點が二つある。第一は內部の狀態が紛亂に紛亂を重ねて居る樣に見える中に、自然に大勢の歸嚮の歷然たるものある事である。換言すれば、中央の政界はケレンスキー及び其一派を中心として漸次堅まりつゝある事である。凡そ革命後の政界の暫らく紛亂を重ねて容易に歸嚮する所の定まらざるは、何處の國に於ても通有の現象である。假令對外的國難は內部の紛亂の收拾を急がしむる傾向ありとはいへ、社會諸勢力の安定の爲に數年の歲月を要するは當然である。獨り露國が革命後半歲を經て內部の統一其緖に就かざるを怪むべきでない。況んや露國は此短日月の間に、略ぼ何れを中心勢力として政界の安定を見るべきやの意、極めて朧ろげながらつけつゝあるに於てをや。我々は固よりケレンスキー並びに其一派が結局露國政界の中心勢力となり了せるか否かを豫言する事は出來ない。けれども彼は初め臨時政府に法相の地步をとり、やがて陸相となり、又首相となるの間に於て、漸次無政府主義的過激派と戰つて大いに其勢力を打破するに成功した。所謂レニン一派の運動なるものは革命後一二ヶ月の間頗る勢力を有つて居つたが、彼は常に之と戰ふに餘力を殘さず、殊に七月央ば此派の首都に騷擾を起しやがてルボッフ公に代つて首相の地位につけるを機とし、更に彼は內に於ては高壓政策を以て過激派に望み、外に於ては一時國境封鎖を宣言して此派の運動員の外國より流入するを防ぎ、以て國家の統一を阻害する有害分子の掃蕩に努めた。此政策は今日まで大體に於て成

功しつゝあると言つてよい。併しながら彼の政策に對して紛々たる非難を加ふる者は獨り過激派のみではない。彼のよつて以て根據とする所の社會主義者の間にも少からずある。蓋し彼は穩健的社會主義を有つて居るに對し、所謂社會主義諸黨の中には彼を以て餘りに右的なりとする者があるからである。併しなが彼の堅忍不拔の意志と、其一點私心を交へざる赤誠とは、彼をして深く彼等諸黨の意嚮を顧慮する事なくして自由に奮闘するを許して居る。八月六日彼は內閣組織の困難を口實として一旦辭意を決したが、彼の外に此難局に當るの人材なしとして强いて留任を求めらるゝや、彼は再び政柄を秉つて內閣組織を決行した。而して閣員は民主黨たると社會黨たるとを問はず、當分其黨議に拘束せられず、其屬する政黨に對して責任を負はざるべきの宣言をなした。此宣言が何れ丈け有力なりやは、時の勢によつて自ら異る所あるべきも、要するに彼が紛々たる議論を超絕して自由に其手腕を振はんとするの意氣に對し、甚だしく之に反抗する者なかりし事丈けは明白である。尤も所謂勞兵會はケレンスキーの此態度に對しては反對であつた。故にケレンスキーが自己の政府の後援を國民的基礎の上に置かんが爲め、モスコー國民議會の開催を唱道するや、現政府の唯一の後援者を以て任じて居つた勞兵會は盛んに之に反對し、其過激なる分子に至つては後開會の當日、勞働者を煽動して同盟罷工、示威運動等を行はしめ、以て極力會議の進行を妨げんとして居つた。之より先き政府が七月十七日の露都騷擾に對し、政府が高壓手段を以て之れに臨まんとした時にも、勞兵會は高壓手段を政府に認むるの交換條件として共和制の即刻の宣言、農村の土地制改革案の實施、國民會議開催の中止の三件と共に政府は須らく勞兵會に對して全部の責任を負ふべき旨を要求した。以て勞兵會の政府に對する態度を見るべきである。併しケレンスキーは此要求を容れもせず、又事實其要求に服從して居ないが、又全然勞兵會を無視して居ない事は論を俟たない。なぜなれば、勞兵會とても亦彼に於て自家團體の意見を實行すべき好個の代表者を見出して居るので、彼によつて勞兵會は實際政界の偉大なる勢力たるを得るのである。

從つてチヘーゼの指導するところたる勞兵會一派の議論は、ケレンスキーの政見と正しく一致するところあるにあらざるも、又兩者は不即不離の關係を持續して居ることは見逃すべからざる事實である。ケレンスキーの如き人材を缺かば、政府或は勞兵會の傀儡となり了つたかも知れないが、兎に角ケレンスキーあるによつて、今の露國政府は勞兵會の政府にあらずして露國の政府たりといふ權威を略ぼ立て得た事は之を認めねばならない。若し夫れ革命政府にとつて最も恐るべき反動派の勢力に至つては、コルニロフ將軍の失敗によつて測らずも大打擊を之に與ふるの好運に際會したと言つてよい。革命匆々の事とて暫く鳴を鎭めて居つたとはいへ、流石古い君主國丈けに保守的反動派の隱れたる勢力は、決して輕視すべからざるものと見なければならない。革命後の政界の紛亂に乘じて、此等の反動派が頭を擡げ、爲めに屢々政界の進步を逆轉せしめる事あるは多くの國に於て經驗せるところである。此苦き經驗は、恐らく露西亞に於ても必ずや一度は嘗むべきものであつたらう。然るに幸にして反動派の頭を擡ぐべき機運の到來に先つてコルニロフ將軍の蹶起あり、而して之の失敗に連座して多數の反動主義者がそれ〴〵の處分を受けたのは、啻にケレンスキーに取つて僥倖であつたのみならず、臨時政府の前途を著しく平坦ならしむるものである。コロニロフ將軍がルボッフ公を通じて內閣の讓渡しをケレンスキーに要求したのは九月九日である。此種反動的の騷動あるべしとの噂は、莫斯科會議の閉會以來、殊に九月初旬に於て盛に流布せられて居つた。而してコルニロフ將軍の立つあるに及んで、ケレンスキーは直ちに之を拒絕するのみならず、且つ此等の運動に對しては叛逆者として嚴重に所罰するの決意を示すに及び、天下の大勢は忽ちにしてケレンスキー內閣を支持するに決した。之れに依つてケレンスキー內閣の權威は更に一段の重きを加ふる事になつたのである。

第二に考へねばならぬ點は、社會主義にかぶれて居る露國民の多數が自家階級の利害を考ふるに急にして、目前に迫れる國家的大難を深く顧慮せざる點を、我々日本流の思想で一概に之れを非難するは必ずしも

當らないといふ事である。國家の爲めには何事を措いても全力を捧げよと云ふのは我々日本人の最も重きを置く道德で、之れあるが故に日本國民は其國の小、人の寡を以て能く强國の面目を保ち得るのである。併しながら西洋の、殊に勞働者階級、就中其社會主義にかぶれて居るもの丶間には、啻に斯の如き思想の旺盛でないのみならず、寧ろ斯の如きは排斥すべき思想と考へられて居る。彼等は動もすれば人道を云ふ。人道の前には國家的道德の如きは第二義第三義のものとせられて居る。「勞働者に祖國無し」とは彼等の誇を以て主張する所である。斯の如き者の善いか惡いかは姑く之を別問題として、兎に角是等の連中に、國家の目的に其尊しとするものを捧げんことを期待するは、抑も期待するもの丶誤りである。假令其說の根柢が謬つて居るにせよ、彼等は戰爭を以て資本家階級の利益の爲めにする事業であると考へて居る。資本家階級が國家の運命を左右して居ればこそ戰爭がある。勞働者の天下になれば戰爭は有り得ないといふのが彼等の金科玉條である。斯う云ふ思想の人々に戰爭遂行の爲めに全力を捧げしむる事が出來やうか。彼等の斯の如き態度が結局露國を如何なる運命に陷れ、彼等自身も亦之れによつて大いなる不利益を被る事なきかは、我々の彼等の爲めに憂ふる所であるけれども、彼等自身の立場から云へば、國家防衛の名の下に資本家の爲めにする戰爭に從事するよりも、彼等自身の利益に取つてもつと重大なる問題があると考へて居るのであらう。故に露國民が今日の困難に方つて内爭に紛々たるは、彼等の立場からすれば、彼等の最も大切とする問題の爲めに狂奔して居る所以であつて、階級的利益の爲めに國家の大事を忽諸にして居ると罵るべきでない。暫く小異を捨て丶擧國一致して外敵に當るを急務とすべしといふのが、我々の立場からする判斷である。而して我々の立場から云へば、國家的精神の缺乏は多く民心頹廢の結果なるが故に、我々と思想の根柢を異にする國民に就ても、我々は動もすれば此兩者の間に必然的關係を認めんとする。併しながら露國民が國家的問題を第一

義とせざるは、必ずしも民心頽廢の結果と見るべきではない。況んや彼等は前にも述ぶるが如く彼等自身の立場より見れば、其主義並びに確信の爲めに傍目を振らず奮進努力して居るを見るに於てをや。彼等を以て其最も重んずべしとする事を取違つたと責むるのは妨げない。彼等が目前の利害に追はれて何等高尚なる目的の爲めに盡くすの誠心を失つたといふは恐らく大いなる誤りであらう。

（二）

革命後の露國の政界には各種の勢力が勝手に横行して、殆ど統一する所なきが如く見える。併し斯の如きは革命後の政府に於ては何處の國でも致方がない。而かも其間に於て社會主義の一派が斬然頭角を現はし、漸を以て一般民衆を率ゐんとするの概あるは、寧ろ革命後の恢復力に於て露國民の他に優るものあるを思はしむるの一例になると思ふ。要するに今日並びに近き將來に於ける露國政界の中心勢力は、廣義に於ける社會黨である。從つて此黨が革命後如何にして其勢力を張り、又如何なる主張を以て國民を導き、又如何なる態度を以て他の外國と交渉し來りしかを見るは、即ち露國の將來を見る所以である。

一體舊政府を殪した勢力は下層階級を根據とする所謂社會黨ばかりでない。中產階級を中心とする所謂自由派も亦有力なる一原素である。自由派と社會黨派とが共同の敵を殪す爲に、革命の實行に一致したのである。從つて革命後の臨時政府は此兩派の相寄つて組織する所であつた。然しながら此兩派はもと凡ての問題について其政見を同じうするのではない。故に共同の敵を殪すといふ消極的目的の爲めには一致しても、革命後の政治を經營すると云ふ建設的事業に於て意見の岐るゝは止むを得ない。果せる哉此兩派は間も無く戰爭の繼續について、激しく意見を異にする事になつた。何となれば自由派は英佛諸國に共同して、依然最後まで戰爭を繼續すべきを主張するに反し、社會黨は戰爭の目的は自衛以上に出づべからず、侵略の目的を以て戰爭するは常に文明並びに人道上の最大罪惡であ

りとなし、而して此目的を否認せんか、一擧して一般的平和を齎らし得べきを主張して、直接に戰爭の繼續を豫想する凡ての施設に反對せんとした。斯くして革命後の臨時政府は差當つての最も重大な問題、即ち戰爭に對して如何なる態度を取るべきかの問題について二派相爭ふ事となつた。而して社會黨が斯の如き主張を取るは、社會主義本來の主張に照して毫も怪しむを須ゐない。然しながら宮廷一派の親獨的傾向に反對して起つた革命なるに鑑み、其革命の指導者から戰爭繼續反對論を聞くとは各國の豫期せざる所であつたに相違ない。協商國が革命後の露國政府が前よりも一層の熱心を以て戰爭の繼續に盡力すべきを豫想した事は、英佛が三月十八日を以て早くも革命政府を承認し、米も亦廿四日之に倣つた事を以てゞ明かである。當時英佛は暗に革命運動を助けつゝありといふ風說すら行はれた程である、然るに今や彼等は戰爭の繼續を無條件に承認せざらんとするの態度を取る。而して偶々其間に無政府主義並びに獨探運動などがあつて、無智の下層階級を煽動して獨逸と和せしめんとするの陰謀も行はれたので、露國政府は一轉して單獨講和を希望するものではあるまいかと云ふ說さへ行はれたのである。併しながら之は皆露國の社會黨を知らざるの誤解に出づるものである。彼等の期する所は初めより一般的平和を以て終始して居る。一般的平和の促進に妨げあるが故に、先に彼等は宮廷の親獨傾向に反對した。何を苦んで再び單獨講和の說に迷つて當初の素志を拋擲すべき。彼等は一般的平和に熱中するが故に、英佛に同じく戰爭の繼續を說かない。戰爭の繼續を說かざるは、必ずしも獨逸と單獨講和を爲すに意有るが爲めではない。單獨講和に意無くんば、徒らに講和論を流行せしめて、戰線に於ける士氣の頹廢を招致するは避くべきではないかといふのは、我々の議論である。如何なる忌ふべき結果を生じようが自家の主義は隱す所なく明ら樣に之を主張すると云ふ一本調子は、由來社會黨の特色である。是に缺點もあるが又長所もある。目標を睨んだら最後、傍目も振らず突進して全然左右を顧みな

いといふ所に、兎も角も我々は露國社會黨の潑溂たる元氣を認めねばならない。

臨時政府は社會黨と自由派との相寄つて作くる所なるは前述の通りである。併しながら此革命政府の後援となつて居る民衆の大部分が、社會黨若くは社會黨系のものたるは言ふを俟たない。而して此等の民衆的勢力は前述の如き社會黨の主張を掲げて、其承認を政府に求めて止まない。此種の要求の初めて現はれたのは三月廿七日で、其結果政府は止むを得ず所謂戰爭目的の宣言なるものを發表したのは四月十日である。社會黨は國內に於ける宣言のみを以て滿足せず、更に之を同盟諸國にも通告し、所謂非併合・無賠償の主義に各國を承認せしめて、玆に一般的平和の到來を促さん事を主張するに及び、政府は五月一日此要求に押されて戰爭目的に關する露國政府の所見を同盟各國に通告したが、其際露國の所見は同盟諸國の今日まで宣言せる所に表はれた目的と深く異るものではないと云ふ附け加へをした爲めに、民衆は大いに憤慨し一大騷動を露都に現出した事は曾ても述べた通りである。斯くて五月の央には陸相外相の辭職によつて自由派の有力者は退き、臨時政府は殆ど社會黨を以て占領する所となつた。而して社會黨の優勢を占むる臨時政府は更に一步を進めて、協同諸國に密約改訂の要求を以て大いに肉迫する所あつたのである。

社會黨は非併合・無賠償を金科玉條として、斷じて侵略的目的の戰爭を否認して居る。之れ一般的平和の促進を妨ぐる唯一の原因であるからである。然るに現在の戰爭は其起源が何であるにせよ、又當初之れを起した目的が何であるにせよ、少くとも聯合國が戰爭の繼續によつて達せんとする所の目的の中には、併合と賠償との二大利益を含んで居る事は疑ない。之れ協商國の間に共同作戰の步調を一にする爲めに締結せる秘密條約の定められる所にして、而して革命後社會黨は是等の秘密條約を手に入るゝと共に依つて此事を知つたのである。斯くして社會黨は英佛諸國に向つて我々の戰爭目的の中には侵略の意味が含まつて居るではない

か、之を我々から卒先して拋棄するに非ずんば、平和の克復が永久に望まれないと主張するのである。之れ密約改訂の說ある所以である。露國政府が此希望を以て同盟國政府の內意を探りつゝあるといふ報道は、五月の末已に我々に傳へられて居つたが、六月十六日に至り遂に外務大臣テレスチエンコーの名を以て『臨時政府の交附したる戰爭の目的に照し、各國間に現存する條約を調査するの目的を以て聯合國間の會議を召集せん』ことの通牒を發するに至つた。此露國政府の希望は未だ十分に聯合諸國の容るゝ所とならざるも、兎に角彼等が飽くまで目的の地に突進するに功なるを想像する事が出來る。

（三）

以上の如き露西亞の態度には差當り英佛は大いに困つたやうである。何故なれば平素正義公道を口實とする協商國は、形式上難のない露國民の意見に表面から反對する事も出來ない。又强いて反對すれば露國の同盟より分離し去るを恐れねばならぬ。さればと云つて露國民の言分に全然贊成する譯にも行かないからである。而して一方露國に於ては其決心は牢乎として拔くべからず、同盟の誼は重んずべしと雖も主義に殉ずるは更に重んずべしといひ、英佛にして我々の主義に贊成せずんば、我等は自由行動を執るの止むを得ざるに至るべきを說いて居る。中には何の必要あつて我々は英佛の侵略的目的を達する爲めに戰爭せざるべからざるかと憤慨するものも少からずあつた。是に於て英佛側は露國民の言分に屈して、不得要領の講和を爲すに甘んずべきか、又は露國の離反を厭はずして當初の素志を貫徹するに努むべきか、二者其一を選ばなければならぬ事になつた。併し流石は英佛である。彼等は一擧に問題を決定して、黑に非ずんば白とノッピキならぬ關係に問題を片付けて了ふ拙策には出ない。彼等は此問題を決定するに暫く時を與へ、其間にいろ〳〵策略を運らさんとして居る。唯、彼等の苦心はかたくななる露國の社會黨を動かして、其頑强なる態度を改めしむる事を得るや否やが一つの問題である。

英佛が戰爭の目的に關して當初の意思を變ずるの意なき事は極めて明白である。彼等はプロシアの軍國主義を打破する事を以て終局の目的とし、更に戰後に於ける永久平和の保障の爲めに多少の領土と賠償を敵國に求むるを必要なりと認めて居る。此點に於て獨逸の讓歩を見ざる以上は何處までも戰爭を繼續せんと欲するものたる事は疑ない。如何に露西亞の歡心を得んと欲すればとて、此目的を棄てる譯には行かない。此目的を棄てる位なら、初めから露西亞と協同して戰爭を初むる必要も無いのである。此點は動かないが、併し實際上今露西亞に離れられては、戰爭の遂行上大いなる齟齬を來たす。戰爭の目的を達する爲めには是非共露西亞の協同を必要とする。故に戰爭の目的を遂げると云ふ事と、露西亞を同盟國として連れ立つて行かうといふ事とは兩立し得べからざるものながら、尚兩立せしめて行かねばならぬといふ所に協商國側政治家の苦心がある。此等の苦心の結果であらう、或時は露國を威嚇して見た事もある。五月初旬亞米利加の新聞に露國が若し協商國に負くならば、日本は卽ち協商國の爲めに露國の背後を衝くであらうといふ說の如きは卽ち之れである。こんな事に利用された日本は甚だ迷惑であるが、然し已に國家防衞の必要を第一義と見做さざる露國の民衆に取つて、斯の如き威嚇は何の効も奏しなかつた。此威嚇の結果として現はれた唯一の產物は、露國民衆の排日思想のみに過ぎない。かゝる下らない策略を外にして、英佛側の露西亞に對して執つた策略の一つは、戰爭の目的に關する宣言の連發である。

露國の政府並びに社會黨が戰爭目的を宣言するや、他の諸國に於ても社會黨員などから、一體何の目的の爲めに我國も亦戰爭に參加して居るのかを問ふものがあつたので、二政府は勢ひ之に應じて戰爭目的の宣言を發表せねばならなかつた。併し政府の戰爭目的に關する宣言の發表は、啻に此理由にのみ基くものではない。是等諸國政府の此點に關する意見を、暗に露國の政府並びに國民に向つて宣言するといふ意味を含んで居

るものである。而して是等の宣言に表はれた所に據ると、彼等は主義に於ては露國と同じく非併合・無賠償の原則に賛成であるが、併し非併合・無賠償といふ文字の意味の取り様によつては、必ずしも露國の所見と一致するものではないといふに歸するやうである。例へば米國大統領ウィルソンは非併合といふ文字が『住民の爲めに公正なる生活及び自由を確保する目的以外には決して他國の領土を侵さない』といふ意味ならば賛成であり、又無賠償といふ文字も『明かに非行と認めらるゝものに對して賠償するものの外には絕對に要求せず』との意味ならば賛成であると述べ、更に『戰爭の目的は獨逸軍國主義の剿滅にあり、之れが爲めには先づ獨逸の已に犯せる非行を强制し、更に其隱謀の由つて發する機會を永久に絕滅するを要す』と說いて居る。英國に於ても社會黨の名士スノーデンの要求に對しセシル卿の答辯する所に據れば、英國は決して侵略の目的の爲めに戰爭するものではない。而して白耳義、セルビア、北部フランスの獨軍によつて加へられたる損害の賠償を求むるは懲罪的意義の賠償にあらず、又不當に外國によつて虐げられたる地方卽ち波蘭、アルサス・ローレン、伊太利イルレデンタの恢復は併合にあらずと說き、更に一歩を進めて外國の暴政に苦む民族に自由を與ふるの大義を名として『獨の毒手を免れたる異民族』を再び獨逸に委すべからざるを說きて、既占殖民地の保持を說けるが如きは最も注目するに足る。同じ様な說明は五月の末佛國に於ても亦時の宰相リボーの口から發せられた。之に據つて見れば、協商諸國は文字の上に於ては露國の主張に賛成して、其顏を立てゝやりながら、事實に於ては彼等の宿望をして露國をして承認せしめんとするものである。此見解に對して露國は決して讓步する所なかつた。何故なれば彼等は戰前の狀態に恢復するを以て所謂非併合・無賠償の原則の根柢となし、之れにあらずんば一般的平和は、之を促進するに由なければなりと主張して居る。若し此方面に於て英佛側と露國側との間に意見の一致を見た點ありとすれば、そは所謂民族自定主義

のみであらう。虐げられたる少數民族の自由を保護すると云ふ點は、露國側の必ず反對し得ざる主張である。其處で戰前の狀態に恢復すると否とに係はらず、問題となつて居る民族の運命は、其民族自身をして之を決定せしめようといふのである。此主義に據れば大體に於て英佛の希望は達せられる。露國の社會黨は英佛側の希望の達せられると否とは其問ふ所でない。歸する所は主義の一貫のみにある。從つて民族自定主義は又彼等の喜んで贊成せる所である。現に此主義が立つて、彼等は七月の下旬已にフィンランドとウクライナに對して、或意味の獨立を認めたのである。併し是等の點を外にしては露國民の戰爭目的に對する態度は、未だ頑として一步も英佛に讓る所はない。主張其物の是非善惡は姑く之を問題外に措く。唯其毅然として所信に忠實なるの態度を見て、我々は露國民の容易に侮るべからざるものあるを思ふものである。

英國側の取つた策略の第二は、名士を派遣して露國國論を動かすといふ事であつた。外交的手腕によつて露國政府を動かさんとすれば、其背後の勢力たる社會主義的民衆の見解を改めねばならない。此目的の爲に英吉利は政界の元老にして勞働黨の領袖たるヘンダアソンを送つた。佛蘭西は之れ亦見識聲望兼ね備はる所の社會黨の名士トーマーを送つた。白耳義は又同國勞働黨の首領にして、萬國社會黨同盟の總指揮官として世界的の名聲あるヴァンデーヴェルトを露京へ送つた。世界の社會黨中に普く之れを搜すも、才德聲望に於て恐らく此三氏の右に出づるものは餘り多くあるまいと思はれる。此三名士は六月より七月に亙り、露京に會して同國社會黨の名士の間に奔走し、勸說大いに努むる所あつたやうだけれども、結局に於て何等の効果を奏せなかつたやうである。之れによつて見ても、露國社會黨の態度の如何にも牢乎たる點が思はるゝのである。徒らに頑迷なのではない事は、彼等の爲す所に初めから一貫した主義の流れて居ることによつて、略ぼ之を察することが出來る。

（四）

革命政府は創立以來絕えず動搖があつた。五月の央には自由派の有力なる名士が去り、七月の央にはルボッフ公の退隱によつて政權全く社會黨に歸し、八月上旬政變によつてケレンスキーが政界の首腦となつたけれども、彼自身の勢力の根柢は尙未だ確定せず。八月の下旬莫斯科國民會議によつて、自家政權の基礎を

國民的根據の上に置かんとするの計畫も十分に成功しなかつた。却つてコルニロフ將軍の人氣彼を壓して、反動的傾向の盛んならんとするを憂へしめた程であつたが、機熟するに先つてコロニロフ將軍の政權を奪はんとするの隱謀あり、九月央を以て漸くケレンスキーを中心とする政府の權威は確立しかけたやうである。併し其果して確立せりや否やの未だ明かならざると共に、全體として中央政府は之れまで甚だ動搖常なかつたと見なければならない。併しながら如斯は社會黨中の如何なる方面に勢力の歸すべきやの決定の爲めに行はれたる動搖にして、社會主義が革命露國の指導的中心であると云ふ主義は、五月央より今日に至るまで一貫して些の動搖をも見なかつた。從つて內外の政務に關する露國民の態度並びに決心が、初めより確固として動かすべからざるものがあつた。故に五月十七日社會黨で固まつた內閣の發表せる八ヶ條の宣言、又七月二十二日改造後の政府の宣言は、露國民の決心を最も明白に語るものであつた。中にも七月下旬の宣言の如きは最も明白に露國民の態度を宣明するものであつた。此宣言は前後九ヶ條より成つて居るが、其第一條には「外敵と戰ひ無政府黨及び革命反對派と戰つて、飽くまで新制度を保護する事」を宣言した。第二條には「露國外交政策の基礎たる自由、平等、同胞の思想に反する目的の爲めには露國民の一滴の血も流さざる事」を宣し、以て暗に今の儘で英佛と協同戰爭に從事する事能はざる旨を宣言して居る。更に第三條には「政府は本年五月十九日宣言せる所の外交政策の原則を實行すると同時に、聯合國一般の外交方針を改めしめ、且つ聯合國の行動をして露國革命により聲明せられたる主義を行ふに一致せしむる爲め、本年八月を期し聯合國會議を露京に開く事」を提議すべく、與國よりは右會議に專門の外交官の外民主主義の代表者をも出席せしむべしと書いてある。以て自家の主義に英佛諸國を從はしめんとするの熱心を思ふべきである。

尤もケレンスキーは近頃餘程右的になつたやうに見える。けれども非併合・無賠償の原則の下に一般的平和を促進するの主義に聯合諸國を率ゐんとするの態度に至つては前後變はる所を見ない。此事は露國政府が其意見を他の同盟諸國に押し付けんとして爲す所の不斷の努力によつても分る。英佛諸國が容易に承服せざるべきを知りつゝ、露國側が尙頑として其態度を改めざるについては、茲に看過す事の出來ない二つの原因が

ある。一つは聯合國側が大抵の犧牲を拂つても、露國との同盟關係を維持して置くの必要があると云ふ關係である。露國の斯の如き地位にあるといふ事が、其彼等の意志を同盟國に迫る上に有力なる武器である。第二には英佛等の諸國に於て社會主義の系統に屬する民衆の間には、段々露國と同意見のものが輩出しつゝある。露國が頑として其主義を改めざれば、それ丈け同盟國に於ける同主義者の氣勢も揚るといふのが、露國の人々をして意を強うせしむる一原因である。露國革命以來非併合・無賠償の叫びは、敵國の獨・墺內に於ても盛んになつた。況んや英佛に於ては社會主義者中露國の同主義者と策應して此運動の爲めに起つて居るものが少からずある。英吉利でも有名なマクドナルドの如きは即ち此種類に屬する。此等の理由よりして英佛諸國の政府の意に反して露國が頑強なる態度を取つて居るのは、强ち我意を通さうといふ意地ばかりではない。聯合國の內部に於て多數の同志ありとの確信の上に、多大の光明を前途に描きつゝ、所信の實現に努めつゝあるものに相違ない。而して彼等の計畫の下に運ばれつゝあつたストックホルム社會黨萬國大會の如きは即ち此目的に出でたものである。なぜなれば玆に洽ねく歐洲諸國の同主義者を會し、明白に非併合・無賠償の原則を確立する時は、其正に出席した代表者を通して更に其主義を各國の內部に宣傳し、以て交戰各國の輿論を動かし、やがて一般的平和を到來するを得べきを以てゞある。

併しながら、露國民の此立場は前にも言ふ如く、英佛諸國の爲政者の斷じて承認するところではない。彼等は單純なる非併合・無賠償の原則の下に奔るは、即ち不得要領に戰爭を終止するものにして、折角多數の人命と多大の國帑とを費して繼續せられたる戰爭を無意味ならしむるものである。斯くして彼等は戰爭の目的として、獨逸の軍國主義の剿滅を掲げ、所謂虐げられたる民族に對する自由獨立の保障を掲げ、之が即ち永久平和を保障する所以の道なりとして輿論を此方面に導かんとしてゐる。そこで、彼等は露西亞の勢力の下にストックホルムの大會が開かれ、一旦決議が成立しては取返しがつかぬから、之に先立つて英佛の勢力の下に別個の萬國大會を開いて、ストックホルムの大會を壓倒し去らうといふ計畫を立てた。七月下旬英吉利のヘンダーソンが佛蘭西にトーマーを訪ふて、社會黨萬國聯合の委員會を開き、八月十五日を以て開かるべかり

しストックホルム大會を九月央に延期し、之に先立つて八月の終りを以て倫敦に大會を開かうといふ事を決議した。倫敦大會は八月卅日を以て英佛政府の希望するが如き狀況の下に首尾よく閉會し、而してストックホルム大會の方は露國に於ける政變の結果として當分無期延期の姿になつて居るが、然しながら之を以て此點に關する英佛側と露國との暗闘が首尾よく解決せられたものと見る事は出來ない。何となれば、露西亞ではやがて機會を見てストックホルムの大會の開催を實現せんと努むべく、而して英佛政府では敵國の代表者も來る會合に出席するものに對しては旅券を交附しないなどいふて頻りに妨害に努めて居るけれども、社會黨の連中は之に對して猛烈に反抗して居るからである。

一般的平和の到來を希望する點に於ては、英佛側も露國側も固より同一である。而かも之が促進を計る所以の主義について兩者の說と異る所以は、畢竟獨逸其ものゝ觀察に於て兩者の見るところを異にするによるものであらう。惟ふに英佛側では抽象的には素より非併合・無賠償の原則に反對するものではない。併しながら此原則が一般的平和を持ち來たす根本原則たる爲めには、總ての關係諸國が殘りなく之を承認するでなければ出來ない。英佛露が此原則で立つても獨り獨逸が禍心を包藏して改むるところなくんば、到底平和は來らない。而して英佛の實際政治家は從來の經驗上獨逸が全然此禍心を擲拋するや否やが明かでないから、暫く獨逸は從前の儘の獨逸であるといふ實際的見地に立つて今後再び彼によつて歐州の平和の攪亂せられざらんがため、彼より橫行跋扈の機會を奪ふといふ事が必要である。之れ單純なる非併合・無賠償を甘んずるを得ざる所以である。之れに反して露國の社會黨は恐らく獨逸の將來を英佛の如くは見ない。由來勞働者といふ抽象的階級を見て、獨逸とか佛蘭西とかの國境を無視するは社會黨の通習である。彼等の物の見方は、如何なる場合に於ても抽象的である。勞働者は何處の國の人間でも皆同一の者と見る。從て獨逸の勞働者は露西亞の勞働者と何等特別の種類をなすものとは認めない。而して勞働者のみを眼中に置く彼等は、獨逸が如何なる階級によつて支配せられて居るかを顧慮するに暇あらずして、否な殆んど獨逸といふものを念頭に置かずして、純然たる理論的見地から非併合・無賠償の原則を取つたものに相違ない。獨り此事に限らず一般に社會主義の主張の中には、實際的立場を離れた抽象的

の議論が多い。就中平和論に關する說の如きは、何處の國も皆一所にやるといふ事を前提としてのみ考へられ得べき說明が多い。例へば彼等が戰爭防止の唯一最良の手段として年來主張する所の軍器彈藥製造所に於けるストライキの煽動の如きも、各國洩れなく同時に之を行ふといふ條件に於てのみ有効であらう。甲の國獨り之を實行して、乙の國が之れを實行しないといふのでは何の役にも立たない。のみならず甲國をして非常な窮地に陷れる。而して我々は他國がやらないで自分の國丈けやつては、自分の國丈けが非常に損をするといふ懸念があるから、斯の如き說は到底實際に行はれるものではないと考ふるのであるけれども、社會主義は勞働者は萬國を通じて總て利害を一にして居るものであるから、必ず一般的同盟罷工は行はれ得ると信ずるか、或は少くとも堅く主張して動かない。露國の主張に係る非併合・無賠償の原則の如きも、單純なる抽象的理論としては兎も角、實際的政策として共儘之を承認し難きは、彼の一般的同盟罷工と趣を同じうする。斯くして非併合・無賠償に關する露國と英佛との論爭は、社會黨の抽象的主張と、英佛政治當局者の實際政策との爭である或意味に於ては、イデアリズムとトラデショナリズムとの論爭と見てよい。而して實際問題としては、抽象的理論が其まゝに行はれ難いを常とするけれども、然し實際的政治家の因襲的見解に刺激と警告とを與へ、斯くして一般思想界を清新ならしむるの効は之を認めなければならない。況んや露國の非併合・無賠償主義は同盟國に於ける露國の得意なる地位よりして、尙大いに他諸國の思想と政策との上に重大なる影響を與へつゝあるに於てをや。

露國政界の混沌たる狀態は、之を掩ふことが出來ない。社會黨が共偏狹なる思想を以て橫行濶步する事が、國內秩序の安定を早める上によいかわるいかにも疑がある。一日も早く內部を堅めて外、國難に當つた方がよからうといふ見地から見れば、露西亞の前途に憂ふべきもの甚だ多い。けれども確信の上に動き、遠大なる理想の上に動くところの國民に決して滅亡のある筈はない。予は革命の露國に一定の遠大なる主義あり、些の妥協的精神を容れずして最も忠實に此主義の貫徹の爲めに努力奮鬪しる此半年間の大勢を見て、奮國の將來を樂觀せんと欲するものである。

文學博士 吉田東伍先生閲　太田亮先生著

菊判總布函入 一千六百三十六頁

内容見本進呈

日本古代 氏族制度

正價金貳圓五拾錢
送料小包金拾貳錢

從來の學說を打破し古代史の基礎を確立せる破天荒の新學說

我國古代に於ける政治組織、社會組織は總べて氏族を基礎とす。因りて氏族制度の研究は我古代史に最も必要也、吉田博士曰く『我古代史は殆んど此研究によつて解決するを得』と、蓋誣言にあらざるなり。著者此處に見る所あり、此研究に從事する事八年、超人的精力を集注し、苦心慘憺、遂に古代史研究上最も困難とせられたる此學を大成し以て最後の鐵案を下せるもの即ち本書なり。涉獵廣汎、材料豐富、而して觀察論斷極めて銳利にして極めて適確、古代史上幾多の疑問は解決せられ學界に一大光明を齎らせり。之れによりて歷史家は始めて古代の眞相を窺ふのみならず、各時代各地方の研究に稗益する處多かるべく、法律家法制研究著は始めて我古代法制の如何なるものなるかを知るを得べく、神職、神道家及び宗教家は神社の性質を明かにし、古代神道の眞髓を探るを得べし。其の他教育家、政治家、哲學者等卑しくも我國家建設の眞事實を知らんと欲せば須く本書を精讀するの必要あるべきを信じて疑はざるなり。

發行所　東京日本橋鐵砲町六　振替東京壹五〇五六六　磯部甲陽堂

(中付一の一)

出版界を震駭せしめ讀書界を警倒せしめたる
澁川玄耳先生の大名著

讀書界の人氣は本書に集中す!!!

▼中村不折▲石井柏亭▼鹿子七畫伯の▲改版新裝ポケット▲正價壹圓二十五錢

▼名取春仙▲小杉未醒▼木孟▲挿畫二十▲形上製函入無類の▲十五錢

▼平福百穗▲北澤樂天▼郎▲數葉挿入▲美本紙數一千餘頁▲送料八錢▼

十五版出來

改版袖珍

藪野椋十 日本と世界見物

發售二句にして五千部賣切れの新レコードを作りて出版界を驚倒せしめ

讀書界も歡喜せしめた本書は爾來品切れ又品切増刷又増刷と要求益々

無限なり此奇蹟的の電の閃きよりも早き賣行く理由を知らんと欲せば左の批評を見よ

最近重なる新聞批評

東京朝日　藪野椋十の名を以て我が朝日紙上を賑はせし以來既に幾多の年を經たりと云へ共其行文と觀察とに於て當時讀者を驚倒せしめし記憶半月六版を出すの運に至るなほ新なるものあるの感あらしむ縮刷改版成る又遇然に非ず

萬朝報　「前略」椋十の見物記は其觀察の奇警なる點に於て其文辭の酒脫なる點に於て近時の紀行文に一方面を開拓せるもの又一種皮肉なる現社會の側面觀として珍重すべし新らしく而も場面の世界的なる膝栗毛として銷閑第一の讀物ならん

大阪朝日　明治の膝栗毛とも云ふべく此種の文學に新趣向を立てた玄耳氏の日本見物と世界見物との二著の合本縮刷です藪野椋十の内外見物を未だ見ぬ人の爲め便利である

玄耳先生の短冊實費取次致候　但二百枚限り　實費送料共廿五錢

縮刷合本 日露戰役 從軍三年 縮刷上製一千頁 價一圓廿錢

日清戰役 小敵大敵 全一冊 送料八錢

玄耳文選 故郷他郷 中版四百頁 定價一圓廿錢 送料八錢

發行所 東京神田錦町 振替口座六二九四の十九 誠文堂書店 電話本局四二〇八

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

乾坤一擲の大業を三日に仕遂げたる露西亞を見よ

（最新刊）

露西亞に遊びて

大庭柯公先生著

大野静方畫伯装釘・菊判四百五十頁
口繪寫眞版五葉插繪四十六圖總布函入
定價金貳圓　送料金十錢

露西亞は謎の國と稱せらる、著者は此の謎を解かんが爲めに、二十餘年來露國を研究し、歐亞露を遊歷すること前後十年に垂んとす。本書收むる所一露西亞感想記、二露西亞を繪にして、三ロシア小品の三篇數十章社會觀察に一隻眼を有する著者の獨創的印象は第一篇なり。豐富なる材料に挿繪して民族產業藝術習俗を細叙せるものは第二篇なり。趣味景物を點綴小記せるものは第三篇なり。蓋し露國及露國人の根本的研究にして、亦表裏縱橫の觀察なり

發兌　東京日本橋區北鞘町　振替東京一三七五番　大阪屋號
（電話本局三七三七番・四二八九番）

（中付一の三）

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

文學士 藤井信吉先生編

藤井 新獨和辭書

定價二圓三十錢 特價一圓 送料十二錢

十日間にて忽五版

著者曰く：：不肖曩に編纂せし二十世紀辭書が意外にも非常なる歡迎を亨けしは著者の光榮として大に感謝する處なり、然るに其研究を進むるに從ひ種々不備の點を發見したるを以て茲に本書を編纂するに至れり、本書は全然新なる研究の下に獨力苦心五星霜を費し漸く完成せしものにして他の幾多の辭書の如く助手任せにしたる無責任なるものとは趣を異にするものなることは斷言して憚らざるところなり

本書の特色

▲引易く見易きことは天下一品なり
▲術語を本位にせしこと
▲字毎に「シラブル」切り長短高低を示せしこと
▲語數十萬▲熟語の多きこと他に類なし
▲形容詞には必ず比較變化を示せしこと
▲前置詞には其支配する格を入れ且つ其應用を知らしめしこと
▲新語は出來る丈多く網羅せしこと

狂瀾の逆卷寄する如き大歡迎!!!

(中付一の四)

東京日本橋本町三丁目 金港堂 振替東京八八一五

青年士女に薦む

ドクトル・メチチーネ
羽太鋭治先生著

最新生殖器學

生殖器病に關する著述は類書頗る多く汗牛充棟も啻ならずと雖も、本書の如く生殖器の解剖、生理、生殖器病、生殖器の異常、姙娠、分娩等より性慾、性慾教育等に筆を進め、生殖器に關する最新の智識を網羅せるものは甚だ稀なり、加之本書の著者は斯學專攻の新進の學者にして其の記述せる事項は悉く科學に基礎を有し最も正確に最も眞摯に記載せるは本書の最も誇る所なりとす、從來生殖器に關する事は是を口にし或は筆にするを恥ぢたりしが最近の思潮は有識者の間に却つて**生殖器衞生性慾**の道德等の說かるゝあるに至り生殖器學の必要を見るに至れり、著者は此所に鑑み敎育家、宗敎家、文藝家、道德家並びに社會政策學者其他の有識者に提供せんとして本書を著はせるものにして殊に敎育家宗敎家等に一顧を乞はさるべからざる病的性慾に就て眞面目なる解說を施したり。

精巧銅版畫廿七圖
本文五百册五頁
正價壹圓四拾錢
郵税八錢

最新療法 通俗花柳病學

花柳病に關する著書多しと雖も多くは內容蕪雜にして何等科學的記載なく且つ實地に迂遠なり、本書の著者は曩にベルリン、ミユンヘン等の大學に斯學を專攻せし新進の學者にして亦實地の經驗に富めり、著者が本書の爲めに如何に苦辛を重ねたるかは材料の豐富なると記述の正確なるとに徵して是を知るを得べし。其內容は軟性下疳、黴毒、淋疾の原因、症候、療法、豫防法、花柳病の家庭に及ぼす影響等、花柳病に關する事項は殆んど網羅して餘蘊なし、故に結婚前後の**靑年男女**は參考として本書を讀まば得る所蓋し尠からざるべし、又從來斯病の**難治に失望せる人**は顧問として本書を繙かば豁然一大光明に接するの感あるべし。

四六判總洋布函入
石版口繪三葉
本文三百二十頁
正價壹圓拾錢
郵税八錢

東京 本町 博文館

明治大學校外生募集

校外生ハ講義錄ニ就キ修學スル者ニシテ目下新學期開始ノ際ナルヲ以テ入學ノ最好時期ナリ◉新學年講義錄ニモ種々ノ改良ヲ加ヘ且校外生ニ特典ヲ與フ◉詳細ナル見本附規則書入用ノ向ヘハ申越次第送付ス

法科講義錄

各學年共十月初旬ヨリ發行、一ケ年ニテ完結

本大學法科ノ學級ト同ク第一、第二、第三學年ニ分ツ◉月謝ハ各學年トモ五十五錢トス但減額ノ特例アリ◉志望者ハ何學年ヘ入學スルモ隨意トス、三學年ヲ兼修スルトキハ一年ニテ全科目ヲ修了スルコトヲ得

法學選科講義錄

十月十日ヨリ發行一ケ年ニテ完結

警察官、司獄官、裁判所書記其他ノ普通文官府縣郡市町村吏員等ノ職司上及其受驗準備ニ必要ニシテ且ツ國民生活上必修ヲ要スル諸學科ヲ登載ス◉月謝ハ五十五錢トス但減額ノ特例アリ

●完結講義錄●

九月完結ノ大正六年度法科講義錄及法學選科講義錄ハ各殘本少許アリ、希望ノ向ハ至急申込マルベシ

東京神田駿河臺　明治大學出版部

電話本局一八九四番　振替口座東京參貳六五番

(中付一の八)



マルチン・ルーテルと 西郷南洲

『ルーテル傳』著者
マスター・オブ・アーツ 村田勤

南洲とルーテルとは予が年來敬愛する所の偉人である。本年の九月廿四日は南洲の四十年忌に當るし、十月卅一日は宗教改革の四百年祭に相當して居る。故に予はこの兩偉人に敬意を表し、世間同好の士の敎示を仰ぎたいと思ふのである。

『予は百姓の子だ。わが父は農夫。わが祖父も己が曾祖父も皆純粹の農夫であつた』とは、ルーテルが常に平氣で人に語つたところである。彼は今から四百三十四年前卽ち一四八三年十一月十日に獨逸の眞中＝サクセン洲のアイスレーベンに生れ、三百七十一年同じ町で六十三年の多難繁劇な生活を終つた。彼が畢生の事業を打破せん爲に起つたゼスイット協會の一勇將なるザビエーが鹿兒島に上陸した二年前のことであつた。

ルーテルを我邦の史的人物中の誰れに比べて好からうか。別言せば何人に最も能く類似した點があらうか。勿論かくの如く偉人の類似點を探がし求めて、これと對照することは、凡俗な者であらう。或學者の言つた通り眞の偉人は譬へば富士山の天下一品であるが如く、單獨無比のものであらう。その時代その國民の中にすらこれに代はるべき者は一も他に見付からな

い。その事業はその人あつて始めてできたので、他人が代つても同じ事はできない。これが偉人の偉人たる點である。ルーテルは修道僧として結婚を斷行した。親鸞も同樣妻帶を實行した。この英斷は甚だ似て居るやうであるが、恐くはこの二人の性格ほど甚しく異つて居るものはなからう。その同じ妻帶の遣り口に至ても非常に異つて居る。親鸞もルーテルも共に信仰本位の宗教を說いたが具さに調べて見ると、この點にも非常の相違がある。ルーテルには寧ろ日蓮に能く似て居るといふ人がある。成程その熱烈なこと、その大膽不敵なところ、自己の使命を信ずることの堅固なこと、己に逆ふ者を罵詈惡口して、毫も假藉しないあたりなどの諸點は、能く似て居るやうであるが、吾人は日蓮には大分裟婆氣、芝居氣があり、街氣山氣も少々混じてゐたやうに思はれる。勿論これは後人の着色して描いたお祖師樣のことで、眞の日蓮を深く硏究しない我々の不明の爲であるかも知れない。果してさうであるとすれば、吾人は赤裸々の日蓮を知ることは赤裸々のルーテルを知ることよりも遙かに六ケしいやうに思ふ。

予は寧ろ西鄕南洲がルーテルに似てゐるやうに考へて居る。手近いとからいへば、その體格容貌に於て頗似して居る。殊に眼力の鋭かつた點が能く似て居る。南洲に接した者は誰れもその鋭い巨眼を忘れることができなかつたといふが、ルーテルの目も屢々人の注意を惹いた。彼の敵は惡魔の光が輝いて居るのだと評した位である。

二人共平民的人物である。南洲は士に相違ないが格が低かつた。薩藩では士族が八つの階級に分けてあつたが、翁の家は小姓組といふ格で、最下級の與力の一つ上であつた。藩侯に拜謁もできなかつた。聰明な齊彬公が江戸の邸で、西鄕に庭番をさせて引見會談の機會を作られたことは、名高い話柄である。予が南洲を平民的といふのは唯其社會的階級の如何に基くのではない。翁の意向趣味が全く平民的であつたからである。鹿兒島にある翁の住宅の跡を訪ふ者は、誰しも氣

かつくであらう。明き地の眞中に石が建てゝある。予はその表面に、西郷隆盛君誕生地と刻まれてあるのを床しく思つた。いつ頃建てたのかと裏面に廻つて見ると、官位を復された後の事だ。官も位も何一つ敬稱や肩書が刻んでない。しかしこれは確かに故人の精神に適ふて居るのだ。翁の眞知己たる友人等の相談の結果かうしたのであらう。半町ほど先きに大久保利通の誕生地がある。これも同様の碑が建てゝあつた。紀尾井坂の碑とは、その大さから言つても、肩書の點から見ても、碑文の有無から考へても、大變な相違だ。するとこれは舊薩藩士一般の氣風かも知れぬ。翁の銅像も亦能くその爲人をあらはして居る。鹿兒島にある祠堂の中の木像と上野の銅像とは同一模型である。暇さへあれば犬を曳つれて狩遊をされた翁が會心の一面を示したものである。明治六年官を辭して飄然郷里に歸つたときの感想は能く左の二十八字に盡きて居る。

我家松籟洗塵緣。滿耳淸風身欲仙。誤作京華名利客。此聲不聽己三年。

翁がのが座敷の眞中に大の字になりヤン〳〵と大息された時の情況が想像される。翁は確かに平民的の人であつた。翁の親友の一人なる山下房親氏も翁の事について種々話された揚句に『大西郷の精神はかくの如く質素で、而して亦手輕な平民的な御方であつた』と言はれた。維新の際に飛出した偉人傑士は可なり多かつた。岩倉の智と斷、木戸に遠謀深慮、大久保の行政的手腕いづれも西郷の及ばぬ點であつたらうが、扨五十年後の今日、廣く同胞國民の景仰愛慕を博して居る一事に於ては、何人も南洲の右に出づるものはなからう。翁は最早薩藩の傑士であるばかりでなく、日本の偉人である。樗牛の警句のやうに、翁はその時勢が生んだ健兒であり、その時代に缺くべからざる人物であつたと同時に、『その時代を超越』して居つた。英雄回首卽神仙とはこの翁の事である。

マルチン・ルーテルは更は數等平民的であつた。彼は諸侯・高僧・貴族とも交渉があつた。就中サクセン選帝侯の信用厚く、その愛護を受け、一度は十六世紀

の前半中、世界で一番權力廣大であつたカール五世帝にも咫尺したが、彼は依然として百姓の一息で通ふじた。英國の文豪カーライルが英雄崇拜論の中にウォルムス議會のルーテルを敍したあたりは、この書を一讀した者の忘れることのできぬほど壯快な一節であるが、歷史から觀て、あれほど間違つた書き振りはない。宛がら鑛夫ハンス・ルーテルの伜である田舍寺の和尚が單騎獨行、天下の輿論に抗し、皇帝や法皇や高僧大名等に挑戰して居るやうに想はれるが、實は決してさうではなかつたのだ。この會議のあつた一五二一年頃はルーテルの人望が天に冲した時で、あの一箇の修道僧の背後には、獨逸諸侯の過半と、小貴族の殆ど全部とヨーロッパ諸國の人文學者と、下階の僧侶と、一般の平民が扣えてゐたのである。若し此後援さへなければ、コンスタンツのフスのやうに、ルーテル一人を血祭するとは雜作もなかつたのである。法皇黨の首領等はその機會を捕へやうと待ち構へてゐたし、カール帝が、法皇の勅使である大僧上アレアンドロに、一言囁かれても、できた仕事なのだ。ところが夫の和尙の背後に居る連仲が恐ろしかつたので、誰れもそんな無謀なことが言ひ出せなかつたのである。それでは、ルーテルはこの邊の呼吸を百も承知の上、人心の趨勢を看取してウォルムス議場の一大獅子吼をやつたかといへば、決してさうではなかつた。今日でこそ歷史研究の結果、吾人の如き東亞の島帝國に住んで居る一書生でさへ、こんなことが云へるが、その時その局に當つた者には二百十日前の天候と同樣、如何なる大政治家と雖も、明日の事が分らなかつた。朝になつてもその日の夕方の事が豫知されないのである。ルーテルは何時でも利害を打算したり、輿論の向背を考へたりして行動しなかつた。彼は唯神の命と信じ、良心に正とし是とする所に由つて行動した。而も後世から見ると恰も虎が嵎を負ふて立つて居るやうに、彼は同胞國民の輿論休戚を背負つて立つたのであつた。彼は期せずしてその國民の最多數の代表者となり代言者となつたのである。彼が國民的英雄たり、十六世紀の豫言者と稱せらるゝ

所以は玆に存するのである。

その習慣・嗜好・動作すべての點に於て彼は平民的であるが、その言語文章に於て殊に顯著である。この點は大に南洲と異なつて居る。四百年前のヨーロッパは漸く近世文明の曙光が東雲（しのゝめ）を染め始めた頃で、多くの點に於て蠻風を脱しなかつたが、その中でも獨逸は一層後れてゐたやうだ。イタリー人は野蠻人を獨逸人の通稱として居た位である。故に當時の言語文章は甚だ粗野なもので、議論でも戰はす場合には、双方盛んに惡口雜言を極めた。近時文明國で殆ど顧みられなくなつた人身攻擊のごときもその頃には遠慮會釋なくやつた。狐とか狸とか驢馬とか山羊とか犬とか互に獸呼はりをした程であつた。勿論この頃でも和蘭のエラスムスの如き上品な學者もあつた。ルーテルの親友メランクトレでも高尚な文をかいたのであるがかゝる上品な文章は唯上流社會若しくは學者社會に適したもので一般の平民階級には馬耳東風であつた。ルーテルが平民語で書いたもの文は國民全體を動かした。彼は平民文學の首領であつた。彼はナポレオンが文士を嘲つて言つたやうな『美しい文句の製造人』ではなかつた。彼は文章の爲に文章を書いたのではなく、或目的を遂する手段としてこれを用ゐたのである。ルーテルに取つては文章は劍であり、彈丸であり、大砲であり、水雷艇であつた。彼はいはゆる書き放して一氣呵成に草し了つて後、これを訂正したことがなかつた。その言や戰鬪の如しと評した人があつたが、いかにもその文章も亦暴風怒濤のやうである。目指すところの大船を沈溺せずんば止まないと決心する有意識の暴風怒濤であつた。

それより以前すでに十八種の獨逸語に飜譯した聖書があつたに拘はらず、彼は更に自ら筆を執つて、之を改譯する必要を感じた。即ち明晰純潔な獨逸語に譯したのである。この時代獨逸國内には幾多の方言があつて、各洲に通じて用ゐられ了解さるゝ共通の獨逸語はなかつたのだ。加之これまでの飜譯は拉丁語の感化を多分に受けたもので、どうしても自國語を讀むやうな

感じがしなかつたのである。ルーテルは獨逸語の粹を抜き精を聚め、殊に平民の常用語を以て、ギリシヤの原文から譯した。その文體精神全然獨逸流である。この巨人は幽囚の無聊を慰める爲に、この仕事に取りかゝつたのであつたが、新約聖書二十七卷を四個月あまりで譯了した手際に至ては、殆ど人間業とは受取れないほどである。彼の聖書飜譯と改革事業は獨逸國民を宗教と言語の上から統一したのである。

農民の亂に際して彼は初め農民に同情したが、彼等の狂暴甚しきを觀て、遂に團扇を諸侯に揚げ、武力を以てこれを鎮壓させてしまつた。此時以來農民のルーテルに對する人望は過半失はれたのであるが、宗教改革の目的を徹底する爲には彼はこれ以外取るべき方法がなかつたのである。今少しく調停的態度を持さなかつたのが彼の過失であつた。

次ぎに南洲とルーテルとは、世の毀譽褒貶を念頭に置かず、名利を度外した點に於て、相似て居るやうに思ふ。ルーテルは素より出家であるから、名利を求めないのは當然であつたが、ウキッテンベルヒ大學は改革運動の爲に一躍して獨逸の古い一流の大學と肩を並べたのであるから、サクセン選帝侯のルーテルを遇せらるゝこと薄からず、殊に四十二歳で結婚した後は、住宅と地所を賜はつた上に屢々増俸されて年四百グルデン（時價に換算して六千圓以上である）以上に及んだ。彼の妻が貨殖の道に長じてゐた爲、死んだときには、多少の財産があつたが、ルーテルはその邊の事には一切無頓著であつた。救助を求むる者には惠み、貸與を請ふ聲には貸しあたへ、友人中に吉凶禍福あれば必ず贈物を呈し、その他良からぬ人間に詐取されたり他人の爲に裏書して困つた場合も寡くなかつた。後には市の有力者等がルーテルに迷惑をかける不埒な奴等を豫防する方法として、ルーテルの裏書で金を貸さぬことに申合はした。南洲が名利に淡白であつたことは世人の熟知する所であるからザット述べて置かう。

命がけで維新の大業に參加した薩長兩藩以下の志士が、イザ論功行賞といふ一段になり、昨日の浪人書生が

一躍して顯要の地位を占め、懷に時ならぬ春を覺ゆるに當つて、先づ第一に考へたことは、その金の使ひ途であつたらう。中には蝸牛の角の突き合ひをして、位の高下や俸給の多寡を爭つた卑劣漢も多かつた。明治三年七月薩藩士横山安武(森有禮の兄)が時事を憤慨して集議院の門前に割腹した一事に徴しても、思ひ半に過ぐるであらう。安武が懷中した建言書の一節に「大小官員外には虛飾を張り内には名利を事とす。(中略)上下交々利を征つて國危し。在朝の君子忝然妄行す」と書いて居る。南洲翁は横山の爲に碑文を撰んで深く哀惜の情を表された。確かに翁は安武と感を同ふされたに相違なからうと思はれる。參議になつても小倉袴の麻裏草履で內閣に出られた。一日門衛怪んで出門を許さず、馬車で通りかゝつた岩倉公に證明されてやつと出して貰つた珍談もある。小松公(木戶)が京都の妾の腹にできた子に小松家をつがせて自分は華族にならうと企てゝ居るといふ噂を耳にされたとき、翁はオゼ(恐ろしい)了簡ジャのうと歎息されたさうだ。

南洲が明治元年十一月奥羽の亂平らいで、朝野の人望潮の如く彼に集まつた時に、永く帝都に留まるとをすら欲せず、飄然郷里に歸つてしまつた。恰も獨立戰爭の片付くや否やマウント・ヴアーノンに歸農したワシントンそつくりだ。明治二年一月伊地知正治が大久保に贈つた書中に「西郷入道先生も既に四五十日は當山に湯治、犬四五匹、壯士三四人同道の由」とある。運良く長命したお蔭でもあらうが、子孫の爲にシコタマ美田を買ひ、財產を作り榮耀榮華を極めて「乃公(おれが)〳〵」と昔しの手柄を誇つて居る連中とはよほど肌合の違つた人物であつたやうだ。藩侯と同じ三位に叙せらるゝといふ豫報を聞いて大恐縮、友人等に書を裁してその事の中止を賴んだり、五百圓の俸給は封の儘召使の書生に托したり、二千石の永代俸祿を私學校に全部寄附したり、妾を持てと勸められて、愛犬を紹介したりした事實に考へて見ても、翁は確かに名利を度外した人物だといふことが伺はれる。この兩偉人が何ものか名利よりもズツト高い處にその精神を据え、その

眼を著けて居つたといふことは間違なからうと思はれる。

偉人眞人は事物の眞相を看て皮相を看ない。形相に頓著しないで實體を握らうとする。虎を狩るに竹林を探がし歩くことに滿足せず、直ちに虎穴に入つて虎子を捕へやうとするのだ。それだから虛飾虛僞を輕視して眞理實體を尊重するのである。山下房親氏の談に、西鄕は維新前側役をして居た處が、俄かに大目付に昇進の沙汰があつた。大目付は駕乘りの三役と云つて、何れも喜び賀すべきところを、西鄕は如何に主公から勸められてもお受けをしない。不思議に思つて私は一日西鄕の宅を訪づれ「先日は結構なお役替りがあつたさうでお目出度い次第だが、お受けなさらぬと承はるが何故ですか」と尋ねた。西鄕笑つて「おいどんをヨカ者にして仕事をさせぬのだからなあ」とある。

南洲は改革家たる點に於てルーテルに似て居る。舊い形式や腐敗した制度を破壞して、生命あり効果ある新制度を以てこれに換へることが、改革者の仕事だ。物の眞相を看破する一隻眼があり、「富貴も淫する能はず貧賤も移す能はず威武も屈する能はざる」鐵石の志がなければ、改革者たることはできない。ルーテル南洲共に此資質を具へて居た。南洲は藩政を改革してその奧向にまで及んだ。藩公の奧方が西鄕を召されて「西鄕お前は奧向の事を改革するのは餘りひどいよ」と申されて泣かれたさうである。西鄕の炯眼は奧向を改革しなければ、改革の目的を達しられないといふことをチヤンと睨んでゐたのである。

廢藩置縣、その他政治上重要な改革が斷行された明治四年の夏、西鄕は宮內省の大改革を行つた。要するに人物本位の改革である。徒らに舊ひ格式を墨守することを以て能事了はれりとした優柔不斷な公卿に代ふるに剛健朴直な諸藩の義人烈士を以てしたのだ。村田新八が宮內大丞となり、島義勇、高島鞆之助、米田虎雄、山岡鐵太郎等が侍從に任せられた事を觀ても、改革の目的はすぐわかる。吉井友實の日記に「八月朔日今朝女官總免職……數百年來の女權唯一日に打消し愉

快極りなし』とある。西郷が數年前藩に行ひしと同樣根本的改革を斷行せしことを見るべきである。

羅馬敎會は宗敎を基礎としてヨーロッパの中原に建設された一大帝國であつた。ルーテルはその老大な堅城の天主閣に爆裂彈を投じた男であるが彼が二十一歲でエルフルトの修道院に入つた時は、全く主觀內省的で、戰々競々たゞ自己の心靈の救を得んことを欲したのである。今より恰度四百年前の十月三十一日三十四歲の時ウヰッテンベルヒ敎會の門扉に、かの名高い九十五箇條を揭示したのは已むに已まれぬ獨逸魂の爆發であつた。彼は最初から羅馬敎會に反對しやうとか、將にこれを改革しやうとかいふ了簡は少しもなかつた。彼は單に赦罪符販賣の惡弊を視て、激怒憤慨くを止めさせやうとしたまでゞあつた。彼の銳い理性と、既に安心立命の地を發見した良心とは、彼に勇氣と確信とを與へて、正と信じ眞と認むることの爲に、身命を賭して驀進せしめたのである。彼は遂にヨーロッパの人心を羅馬敎會の束縛から脫せしめ、思想信仰の自由に入るべき第一步を取らしめたのである。古今東西を問はず、改革者の主眼は形式を排して眞相を看破することである。

偉人に往々小供らしい性質の存する例がある。又極めて眞面目な人が折々戲談をいふことがある。南州とルーテルには確かにそれがあらはれて居る。故高島子爵の語られた翁の逸話に左の一節がある。

明治六年の時分には西郷さんに附いて居た。丁度征韓論の朝廷を騷して居る間際に大久保さんが歐洲より歸朝した。西郷さん子爵に向つて『一藏が歸つた樣子だから、御土産談を聞きに參らずはなるまいよ、汝もつれて行から』と云はれ、御伴をして大久保公邸に行つた。洋行土産の御話どころか外國の外の字も出ない。談話は例に依つて種々雜多の世間話で朝鮮談などはおくびにも出ない。頓て兩雄共に橫に偃臥して肱枕で話して居たが、大久保さんだしぬけに『君も時々は內閣に出て下知でもしてやつて吳るればイ、のよ』と切り出した。話は餘程輕く出たが西郷サンは之を聞きムックと起き上がりて端座し例の大きな眼球を皿のやうに見張つた。其擧樣の恐ろしさ、アワや如何なる大事件が起るかと驚かれた。スルト一言も云はずしてスーと起ち上り『高島、モー歸るぞ』と云ふや否や左樣ならの別辭も述べすして立ち出でられた。仕方がないから自分も倉皇後について立つと、玄關で履物を

はきながら『あのカステラを持つてこぬか』といはれる。流石の自分も之には大に困つたが據ろ無しに之を取るべく再び庭數に立歸ると、大久保サンは依然として横になつて居られた。アワたゞしく之を一攫し去つて西郷サンに見せたら破顔一笑大滿悦であつた。子爵予に語つて曰く『コンナ所を見ると全然(まるで)子供だね』。

ルーテルの戯談はその親友にして莊重な學者であつたメランクトンを困らしたほどである。クリスマスの祭日などには子供等を相手に戯むれて喜んだ。世を去る少し前アイスレーベンから妻に送つた數回の手紙の中にすら、蜜月旅行の若夫婦にありさうな洒落が書いてある。歷史上大切なアウグスブルヒの議會を前に控へながら、自分が逗留して居つたコーブルヒから四歳になるハンスへ與へた一書は能く彼のあどけない稚心(をさなごころ)をあらはして居る。公明正大な偉人の心中はどこかに光風霽月の別天地が存して居るやうである。故に老いも尚小兒のやうに無邪氣な言行を爲す場合がある。天眞爛熳とは正さにそれであらう。

予は終りに南州の宗敎を述べて見たい。翁が何等宗敎の形式を信じなかつたことは勿論であるが、確かに大悟達觀の士であつたことには、誰れも異論があるまい。翁はイトルニテヰー(永遠無窮)に觸れた人だ。吾人も亦明治十年九月二十四日の曉城山の麓で『晋どんもう此處でよかろう』と言つて、左も無雜作に打棄てられた殘骸を以て南洲先生の全體とも、將たその終極とも信ずることはできない。先生の大精神は爾來四十年尚生きて居る。生きて吾人を感動さして居る。今から百年五百年經つても尚盡きないであらう。要するに翁の精神は不朽不滅である。

南洲の家は代々神道を奉じた。殊の外敬神の念强く又祖先を尊び、閑暇あれば子供等を伴れて墓參に出かけ、墓掃除をされたことがあつた。また陽明學を學ばれ、近思錄、傳習錄、洗心洞劄記等を熟讀された。翁は亦當時の勤王主義の福音書とも見るべき日本外史日本政記等を愛讀された。翁は又島津家の菩提寺である福昌寺の無參和尚について禪學の話を聽かれた。翁はまた月照に學ばれたことがあらう。少くとも感動され

たに相違ない。

翁が青年時代に藩の正義派の義士赤山靭負から受けた感化も亦甚深であつた。この人は不幸にも反對派の爲に穢せられて自刃したが、彼は臨終の際西郷に訓誡を與へ、血に染まつた肌著を紀念として贈つたさうである。

以上述べた種々なる事件は翁の修養を資けた材料には相違なからうが、翁の精神を陶冶し鍛錬したものは兩度の遠島であつたと思ふ。孟子にある『天の是人に大任を降さんとするや、先づ其心志を苦しめ、其筋骨を勞し、其體膚を餓やし、其身を空乏にする』の語は正さに南洲此頃の生涯に當嵌めることができる。最初は安政六年十一月から足掛三年大島に流されたことである。これはどれほどか薩藩が幕府に對する義理もあつたので、大した苦痛でもなかつたやうである。第二回の遠島は、誤解の爲に久光公の勘氣に觸れ、文久二年の八月から徳の島に流され、後更に沖の永良部島に移されて凡二箇年舟牢生活をしたことであつた。この生活は恰もエルフルトの修道院に於けるルーテルに比ぶべきものであらう。否それ以上である。牢番が見廻りに來る毎に、先生はいつも禪僧のやうに默座して冥想に耽つて居られたさうだ。嗚呼この二年間の冥想の中に、先生は天地有形の外なる道を發明されたのであらう。その後言行にあらはれた凡俗を超脱した人生觀を得られたのであらう。『生死何疑天付與。願留魂魄護皇城』といひ、又鹿兒島へ行く人を贈りて『もろ人の誠の積る舟なれば行くもかへるも神や守らむ』と詠まれしを見ても、翁が精神練磨の經過を察するとができよう。人間が死ぬる覺悟をした間際には、五年十年學問しても解からぬほどの難問題が、電光石火のやうに瞬時に解かるものである。南洲は兩度遠島の苦を嘗め一たび月照と海に投して萬死に一生を得た人である。その他先生が死を決せんとせられた場合は幾度あつたか知れぬ。實は絶えず一命を放り出して大事に當つて居られた。翁がいはれた『命も要らず、名も要らず、官位も要らず、金も要らぬ人は始末に困る者なり。此始

未に困る人ならでは艱難を共にして國家の大業は成し得られぬなり」の名言は移して以て翁その人を評すべき適當の語である。翁又いはく『人を相手にせず天を相手とせよ』。『道は天地自然のものにして人はこれを行ふものなれば、天を敬するを目的とせよ。天は人も我も同一に愛し給ふ故我を愛する心を以て人を愛するなり。』翁が鹿兒島にある十七學舍(元は十八あつた。十八結交健兒舍と山陽のうたふたのはその爲である)の爲に揮毫されたが額がある。(唯二つ丈今に保存されて居る)翁は『敬天愛人』の句を題せられたのである。以上の訓言と此題字とを考へ合はして見ても、翁の人生觀はほゞ察せられる。晩年の詩に『我歷辛酸志初堅。丈夫玉碎愧瓦全。』『世上毀譽輕似塵。人世百事僞乎眞』『地古山高靜於夜。不聞人語只看天』等の句がある。之を總合して見ると、翁を單なる神道家といふことができぬ。翁の人生觀には神道の分子もあらう、陽明學や禪學から得られたものもあらうが、翁はそのいづれにも拘泥して居られない。翁は天を相手とし、良心の道を開拓して、自家獨得の人生觀を握られたのである。これ予が翁を稱して宗教の形骸を棄てゝその生命に觸れた人といふ所以である。

南洲の事業と人格はこの信念の結果である。渡邊國武氏南洲を評していはく『何事をするにも眞面目で献身的に働く。即ち自分を殺して犧牲になるといふ確乎不拔の精神が翁にあつた。南洲は云ふ迄もなく、悟道に入つて居つた。凡そ世界中でどの國の歷史を見ても献身的に活動する人物の出ない時代は寂れて居る。一體傍目をふるやうな者は凡人である。度胸が据はらないと左顧右眄する。一人が萬人を動かすには權謀・術數は駄目だ。眞心を以て、而も献身的に猛進するから天下皆その無私の精神を德として敬服するのである。』黑田清綱氏も『翁は國事に付きては常に身命を拋つ事を躊躇せぬ人であると同時に、天道を信じて疑はなかつた人である。所謂人事を盡して天命を待つといふ崇高な信仰を有つて居つた人である』と云つて居られる。利害を眼中に置かなかつた事も、幾多積累の大改

革を行ふた時も、凡そ西郷が一たび確信して之を成就した事もなければ一言半句の言譯もせず、桐野利秋が城山の最期に「最初若し予の策を決行せば今日の事なかりしならん」と慨歎したるを聞きながら、「ハア強ッカナ」と大笑して又何をも言はず、從容として首を部下に授けた、その大襟度大度量大慈悲に至ては古今東西殆ど群を拔いて居る」。（惜しい哉話者其名を匿くせり）

海舟翁の

ぬれぎぬをほそうともせずこどもらが
爲すがまに／＼果てし君かな

の一首は恐くは翁の心事を穿つて居るであらう。大悟徹底の人でなければ此の如き振舞はできない。上は、嘗て親しく補佐し奉つた天皇陛下より下萬民に至るまで擧つて翁を誤解して居つたに拘はらず、その前夜山縣參軍から山野田に托された長文の書面にすら一言の返辭をせず、泰然として冥目した覺悟は獄中に沈淪を仰いだソクラテースの死に優つて居ると吾人は信ずるのである。

ルーテルは本來宗教から出發した人物であるから、

しやうと決心した上は、一命を賭し全力を罩めて懸つたのである。朝鮮に使者となつて行かうと言ひ出した時も同様であつた。

十年の亂が翁の志でなかつたことは明かである。たとひ誤つたり仕損じたりと思ふたにしても、自分が六年間養成した子弟や、戊辰以來股肱と頼んでゐた子分を棄つるに忍びない。即名も官位も命までも棄てゝ子弟のなすがまゝに任かしたのである。翁がその子弟と死を共にしやうと決心したときの心理狀態は安政五年の冬月照と海に投じた時のそれと同一であつたに相違なからう。「大義名分を誤り順逆地を易ふる朝敵になつたのぢや。西郷の腹の中に入つて見たら、嘸ぞ苦しかつたらう、辛らかつたらう、分疏もあらう、辯解もあらう、イヤ理窟もあつたらう、併し櫻島の一擧、只天を仰いで瞑目一長吁した以來八箇月の久しき、アチラに逃げろといへばハイ／＼、コチラに遁げろといへばハイ／＼と部下のぬかすがまゝに任せて、一事の指圖を

多言を費やすに及ぶまい。彼の性格は生れながら大きかつたであらうが、神を畏れ神を信じ神に頼るの信念はその性格の脊髄を形造つて居る。神を畏るゝが故に人を恐れない。どんな貴人王公の前に出ても驚かない。神を信ずるが故に人を信ずることも厚かつた。神に頼るが故に人の援助を副とすることが出來た。彼は自ら神の事業をして居ると考へた。彼敗るれば神が失敗し給ふのである。大能の神に失敗はない。故に彼の爲すところは何時か神が爲し遂げ給ふと信じた。要するにルーテルの大勇氣も大安心も剛毅も樂天的態度も、すべてこの信念から發したのであつた。

ルーテルと南洲が各々その使命を確信し、その事業に献身し、名利を度外視し、死生を顧みなかつた點に於て、どこか似通ふてゐるものがあると予は信ずるのである。

雄辯は銀、沈默は金といふ語を實踐躬行した者、世界廣しと雖も、恐くは西郷の右に出づるものはあるまい。翁は又能く「忠臣去國不潔其名。君子絶交不出惡聲」の金言を服膺した人だ。征韓論のイキサツの場合に三條公は勿論、岩倉公が翁に對した仕打も亦酷かつた。忠義と至誠の化身とも見るべき大元勳に對する道を逸して居つた。この邊の内幕をさらけ出せば、問題になることは山ほどあつたらう。翁は退朝後間もなく、飄然編笠を冠ぶり、日本橋小網町の寓を出で、黑堤にある知人某の別莊にかくれた。偶々探しあてゝ會ひに來た友人（黑田淸隆）にも口を緘して何をも語らず、唯大久保に聞いてくれと言つた切りであつた。『獨不適時情。豈聽歡笑聲』といひ、郷里に歸つて武村の邸に入り、庭前の松籟にそよぐ淸風を樂んだ。近頃の政客が議會に出て互に人の非を發き合ひ、競ふて惡口罵詈を逞ふし、甚だしきは無根又は不確な事まで並べ立てゝ他を誣いんとするに比べると、大變な相違である。ルーテルは此點では西郷と全反對である。彼は直言徑行司馬温公の所謂『閨中で語つた言も人々に對して言ふを憚らない』質であつた。お陰で吾人後世の者は四十年前の西郷の事よりも、四百年前のルーテルの事を一

層審かに記ることができる。

要するにルーテルも西郷も共に道義的精神的の偉人であつた。ルーテルが「獨逸人中の獨逸人」であつた如く、西郷は日本人中の日本人である。卽ち我國人の長所美點を代表した偉人である。ところが獨逸國民はルーテルの精神を繼承遺傳して爾來益々その國粹を發揮して來たが、我同胞は徒らに翁を稱賛するばかりで實際は翁の精神に背馳して居る。輕佻浮華にして虛榮を衒ひ豪奢を競ふ成金風や、阿諛牽引 忠君愛國のお題目を唱へながら只管己が腹を肥やさうとする僞忠臣、西洋文化の唯物的側面のみを觀てこれを趁ひ、他の半面に深奥雄大な精神的文化あることに氣付かず、同時に我邦傳來の道義精神をも迂濶視する風潮は、明かに予の言を證明して居る。日淸日露の兩役に好運なる捷利を收め、歐洲の大戰亂に際して思ひがけない金儲を爲し、意氣揚々殆どお祭の如く喜び祝して、深く百年の長計に思ひ到らざる國民は西郷の志を繼ぐものと見ることができない。今や歐米列國の民はこの曠古の大慘劇のたゞ中に在つて、政治にも會社にも、殊に精神界に顯はれやうとする一大改革の曙光を認めて居る。ウエルスの豫言小說はその兆候の一端を示すものであらう。一段の苦境に立つて居るルーテルの子孫同胞も亦猛火の洗禮を受けて大悟徹底するところがあらう。吾人は目前物質的の榮華に醉うて有頂天になつて居る同胞に一大警告を與へたいと思ふ。吾人の享樂して居る大正の照代を將來する上に、第一の功勞者であつた南洲先生はその勞に對していかなる報酬を得たか、どんな有樣で生き、どんな有樣で死なれたか。誰れか翁の終焉地に立つて無量の感慨を催さない者があらうか。吾人は我邦の精神的文化の炬火が城山の麓から燃へ上らんことを願ふのである。

本篇起草の際予は勝田孫彌氏長谷場純孝氏等の南洲傳その他を參照したが、處々名士の直話を引用したのは明治四十二年九月日本及日本人臨時增刊南洲號に輯められたものから採つたのである。

北廓新誌　紅樓茶談

村松梢風

一

其の夏は廓に燈籠が飾られた。歐風の高樓が軒を並べた大通りに、瀟洒な市松格子の屋根をしつらへ、下に七草などをあしらつて、名だたる繪師が素絹に思ひ〳〵の腕をふるつた。或は萩籬を立て廻し、俳諧の聯など懸けたところもある。源氏名をそのまゝの俳名が何となく艶めかしい趣を添へた。

或る晩、燈籠見物の素見客も散つてすでにひけ過ぎといふ刻限に、仲ノ町の引手茶屋上總屋へふらりとひとりの客があがつた。

客は初會の顔、二階へ通してまづお定まりのあがり花を運んだが、さて其のあとは女中では埒が明かず、軈て角力取のやうに肥つた女將が顔を出した。

「なにしろどこも初めてなんだから、成るべく好さゝうな所へつれてつて貰ひ度いね」

紫檀のちやぶ臺に輕く肘をもたせて、金口莨の煙を細く曳かせながら、にこ〳〵笑つてから云ふ客の樣子は、どつしりとした體格の卅五六と見える年配、髮の毛を綺麗に横から分けて、薩摩上布の帷子にくすんだ絽の羽織、茶獻上の角帶をしめた穩やかな風采は、まづ相應な銀行員かさもなくば少し氣の利いた家作持とでもいふところ。いづれにしてもふりの客としては上の部と見てとつた女將は、遠くから團扇の風を送りながら、萬事如才なく調子を合せて景氣よく笑つた揚句、時間も遲いから早速お供をといふ段取りにした。

客は其の夜江戸町一丁目の大文字屋へ送られて行き、舞衣といふ二枚目の妓を買つてあつさりと遊び、翌朝其所から俥で歸つて行つた。

中一日隔いて其の客は又上總屋へやつて來たが、今度も同じ所へ行つて馴染をつけ、それから足繁く通ひはじめた。

其の客の名は「織田」と云つた。

二

さしも酷しかつた今年の暑さも、そろ〳〵立ちそめた秋風とゝもに、次第〳〵に洗ひ去られて、まだ夏の姿をしてゐる地上の物に、早くも冷たい空の色が映つた。

九月になると間もなく、廓では仁和賀が始まつた。宵の口は、何臺も〳〵踊り屋臺が仲ノ町を練り歩いた。陽氣なしやぎりや囃子の音が人の心を浮き立たせるやうに鳴つた。大髻に、引き眉、燃ゆるやうな襦袢の袖を見せた手古舞の伊達姿。木遣りの音頭。とりどりに趣向を凝らした幇間連の所作事。——すべてが此の廓にのみ限られた華やかさを添へて、果てしもない歡樂の夢をそゝり立てた。

織田と云ふ客は相變らず上總屋へやつて來た。

どういふ譯か、織田の來る日は必ず極つてゐた。それは火、木、土と一晩置きに來て、日曜をゐ續けして月曜の朝歸つて行くのである。それが版に刷つたやうに唯の一度も狂はぬので、誰れしも不審に思はずには居られなつかつた。

「なに、一晩隔きにうちで息休めをするんだよ」と、織田は其の話が出ると、何でもないことらしく笑つて云つた。

然し不審と云へば、織田にはまだ他に訝かしいことがある。もう來始めてから二た月近くにもなるのに、彼れはいまだに住所も職業も明かさないのであつた。どれ程話しに興がのつた最中でも、自身の身性に係はることになつて來ると、彼れはついと話題を外らせて逭げて終ふのが常であつた。

織田は必ずひとりで來た。大抵は雷門の俥で來たが時にはふらりと表へ立つて、暖簾をくぐつて這入つて來ることもある。遊び振りは至極靜かで、酒は精々二三杯といふところ、義理で藝者を聘ぶことはあつても

茶屋の二階で無駄口でもきゝ合ひながら、罪もなく時間を消すだけのことである。

上總屋の悴の琴一郎は、來年が徴兵檢査といふ、女のやうに色の白い、噺家の眞似と長唄の三味線が上手な若者である。これが頗る織田の氣に入りで、いろんな持物を貰つたり、淺草あたりへ連れられて行き御馳走になつて歸つたりした。然し琴一郎も淺草公園迄はお供をしても、それから先き織田が何處へ行くのであるかは、かいくれ見當がつかなかつた。織田は料理屋の門などを出ると、必ず六區の活動小屋の方へ足を向けた。そして偶にはそんな物へ這入つて見ることもあるが、結局其の邊から琴一郎を歸してしまつた。雜閙してゐる活動小屋の眞中で、織田はつと立停ると、

「琴ちやんもうお歸り」と、命令するやうに云ふのである。そして其の場に佇んだまゝ、明晩の約束などをして歸つて行く琴一郎の姿を充分に見送つてから、織田は群衆の間を徐かに足を動かし始めるのであつた。

織田は追々奇怪な人物として人々から扱はれて來た。上總屋では、よく藝者や女中などが集まつて、織田の問題で話に花を咲かせた。

「わたしはネ、とうから詐欺師の親分と睨んでゐるんだよ」

と、女將が火鉢の側から小さい聲で云つた。そして可成り前のこと、矢張り住所を明かさぬ客があつたがそれが詐欺師の親分で、最後にうちからあげられて行つたので初めて分つたといふやうな話をした。

「前の詐欺師もさうだつたが、確に飲める口だのにあの通り飲まないなんて要心は、兎に角尋常の人間の業ぢやないよ」

「あたいは坊さんだらうと思つてよ」と、一番若い藝者が云つた。

「どうしてさ？」

「でも、何んだか坊さんくさいぢやないの、織田さんは」

「おや、この人はいつの間にか織田さんのにほひを嗅いでしまつたんだよ、本統に油斷も隙も出來やしな

い」

みんな一度に笑ひ出して、問題はそのまゝお流れになつてしまつた。

こんな噂の持主の織田は、鵜の毛でついたほどの秘密もないやうな明るい顔をして、相變らずの規則通りにせつせと舞衣の許へ通つて來た。

三

矢張り上總屋の客に木村といふ男があつた。私立大學の政治家出身で、一と頃は新聞記者をしたこともあるが、現在はそんな方面の關係も斷つて、事業の劃策などに奔走してゐた。其の頃妻子を田舍へ遣り獨りで宿屋住まひをしてゐた木村は、殆んど毎晩廓へ入りびたりになつてゐた。

織田と木村は直きに懇意になつた。始終上總屋で落ち合ふばかりでなく、木村の行く先きも矢張り同じ妓樓であつたゝめに、自づと二人は親しくなるわけであつた。織田と木村はよく揃つて大文字の店を上つて行つた。

木村も織田に對しては疑ひの眼を注いでゐた。女將の云ふやうに「詐欺師の親分」などとは考へられなかつたが、兎に角織田が尋常一樣の客でないことだけは頷かれる。

「餘程の秘密でも持つてゐなければ、あゝまで素性を隱す譯がない」

さう思つて木村はそれとなく織田を觀察し始めたのであつたが、單に修養のある、そして稍々遊び慣れた中流以上の紳士といふほかに、織田の外觀から何物をも掴むことが出來なかつた。たゞ强いて求むれば、織田は曾て米國に居たことがあるといふことゝ、印刷術に關する專門的の智識を持つてゐるらしいといふことを、談話の端から知り得たのみで、いつ迄經つても綾つた事實は認められなかつた。

「存外平凡な人物かも知れない、世の中にはくだらないところに常人が想像の出來ない程の祕密性を持つてゐる人間があるから」

そんな風に、しまひには木村も考へるやうになつた。

二三日續いたしけ模樣の空がカラリと晴れると、世間は一度に秋らしくなり、袷羽織を着た人の姿が、何となく爽やかに眼に馴染んで來た。

或る日、例に依つて事業の運動に出た木村は、網ッ引俥で、九段坂の方から神保町の大通りを走らせてゐた。黄ばむだ午後の陽がしづかに街を流れてゐた。

と、向ふ側のある露地口から、ひよつこり出て來た二人の男の姿を、木村は偶然認めた。その一人が織田であつた。織田はいつものやうに和服の上に霜降りのインバネスを着て、黒つぽい中折帽子を稍々眼深に冠つてゐる。いま一人の方は淺葱色の支那服を着て、土耳古帽の下から長い辮髮を脊中に垂れた、ヒョロ長い體格の、眼つきのギョロ／＼光る支那人であつた。

突差の間に、木村の眼に映じたのは是れ丈であつた。彼れが俥上から振り返つて見た時は、二人は反對の方角へ、肩を並べて話しながら行く容子であつたが、續いていろ／＼な物の蔭に妨げられてそれも見えなくなつてしまつた。

暫く忘れてゐた織田に對する疑問が、再び木村の胸に頭をもち上げて來た。郎以外にはじめて織田の姿を見たといふことも、木村には何となく興味のあることであつたが、彼の支那人の面影が何物かの祕密を囁くやうに、ハッキリと木村の頭に映つてゐた。

織田と支那人――。木村はさま／＼に空想の絲を綾なしながら、賑やかな街を通り拔けた。

四

舞衣が織田に夢中になつてゐるといふ話をきいても、初めは誰れも本統にしなかつた。

「手くだなんだよ。舞衣さんには歴とした親指があるんだもの」

などと人が云つた。それは町田といふ兜町の人で卅前後の優男である。ふたりの仲は誰れ知らぬ者もなく、初めは異見をした町田の店の主人まで今では反つて舞衣を見込んでしまひ、年が明けたら自分が媒酌人をして必ず立派に添はせてやるからと、今から世帶道具など町田に買はせてゐるといふ力の入れ方である。

それ程の町田であるが、近頃時々氣拙い顏をして、夜なかに歸つてしまつたりするやうなことがあつた。手くだとは思はれないやうなことが、織田に對する舞衣の素振りの中に追ひ〳〵目立つて來た。

或る晩、織田と木村は、一緒に廓を素見して歩いた。兩側からふるやうに呼び掛ける女に構はず、二人は勝手な話に耽りながら、明るい往來の眞中を歩いてゐた。

と、ある家から「織田さん。織田さん」と甲走つた聲で呼びかけた。それは島田にゆつた可成り年增の女で、織田がそ知らぬ容子で通り過ぎてしまつてからもいつ迄も〳〵格子の中から呼んでゐた。

「戻つておやりになつては如何です。大分功德になりさうぢやありませんか」

と、木村が半分冗談のやうに云ふと、織田は苦笑をもらしながら、

「一二度上つたばかりなんですがね、いつ迄も覺えてゐられるんで閉口です」と云つて、直ぐ他の話に移つてしまつた。

それから二三日過ぎてから。木村はある好奇心を持つて其所の店の客になつた。木村の相手に出た女は、織田の名を呼んだ女とは違つてゐたが、彼れは其の女の口から、織田に關する新しい話をきくことが出來た。

織田は今年の春頃から二た月ばかり此所へ通つて來た。女は蔦之助といふ名で、ちよつと年增の、恐ろしく姿の婀娜つぽい、此所では隨一の賣れッ子であつた。するとうしたものか蔦之助は間もなく織田にのぼせ上つてしまつた。

或る晩こゝの二階に一つの騷動が起きた。名代部屋にゐた蔦之助が、悲鳴をあげて廊下へとび出した。肩のあたりを切られて、よろ〳〵驅けてゆく蔦之助のあとに、ぽた〳〵と血しほが落ちた。それは蔦之助が橫濱で稼いでゐた頃からの惡足の男が、女の心變りを怒つて刄物三昧に及んだのであつた。

こんな事があつてから、織田はバッタリ足を絕つて

しまつた。蔦之助の創は直ぐに癒つて店へ出たが、もう以前の人氣はつかなかつた。

「今でも織田さんのことが忘れられないさうです。あなた一遍織田さんを連れて來て下さいな、どんなにあの人が喜ぶか知れないから」と、女は最後に沁々とした調子で云つた。

木村は女の話をきゝながらも、舞衣のことを思ひ出した。

利かぬ氣のしつかり者と云はれた舞衣が、いつの間にか織田に對しては、魅せられたやうに意久地が無くなつて、永年此の里に慣れた新造でさへ見兼るやうな振舞がしばしばあつた。

「あんな人ぢやなかつたのに、いつたいうちの花魁は何うしたといふんでせう？」

と、年とつた舞衣の新造が、よく／＼不思議さうに云つて嘆息したといふ話なども木村の耳に入つてゐた。

五

木村が奔走してゐる仕事は、支那の革命黨に兵器を賣込む運動であつた。或る日も木村はそんな要件で革命黨側の代表者と會見した。

それは宛然（さながら）西洋の裏町を見るやうな有樂町の、とある横丁の中程にある木造の建物で、彼等黨員が會合などに用ゐる場所であつた。

「臥薪嘗膽」と書いた孫逸仙の額が壁間に懸つてゐるほかに何一つ裝飾もない室で、木村は圓テーブルをさし挾みながら相手の男と話してゐた。それは革命黨の顧問格の篠山幹夫といふ日本人で、瘠せた精悍な相貌を備へた男であつた。

此の室は一枚の扉（ドアー）で隣室と續いてゐた。木村と篠山が會談してゐる間も、時々隣室から人聲が漏れて來るのであつたが、木村の要談が殆んど了りかけた頃、突然うしろの扉が明いた。

「構ひません、お通り下さい」と篠山がそちらを向いて云つた。

木村は何氣なくうしろを向いて這入つて來る男と顔

を見合せた。「あー」といふ小さい叫びを同時に發した。それは織田であつた。彼れは霜ふりの脊廣を着てゐた。

　困惑の表情は突差の間に消えて、織田は例の穩やかな微笑を浮べながら、

「不思議な邂逅でしたねぇ」と、親しい調子で云つた。

「さうです、私も此所であなたに會はふとは思ひませんでした」

　どう云つてよいか分らぬやうに、二人は默て顔を見合はせてゐた。

「おや、いづれ又――」

　織田は意味ありげな笑いを殘して輕く會釋をすると、其のまゝ其處を通り抜けて徐かに階段の方へ歩いて行つた。

「あなた劉さんと御懇意なんですか？」と、篠山は意外らしい顔をして云つた。

「いや別に懇意といふ程でもありませんが、友人の宅で二三回會つたことがあります」と、木村は間に合せの返事をした。

「さうですか。劉さんは永く日本に居るんだから、あれで割合に知己は多い方かも知れませんな」

　篠山は別段怪しむ容子もない。木村は意外な織田の素性に駭いたが直ぐ何氣ない顔で、

「劉さんは黨內でも可成りの方のやうに聞いてゐましたが……？」

「左樣です。あの人は餘り表面には立たないがなか〱有力な黨員です」と云つて篠山は、劉の人物を賞揚して話した。

　彼れは劉星霖と云つて浙江省の生れであるが、極く幼い時分から日本へ來て育つたといふことである。彼れが帝國大學の法科を卒業したのは十年ばかり前のことだが、其の後は殆んど米國で暮した と云つてもよい。兎に角、彼れが革命黨員として活動し始めたのは僅々二三年來のことに過ぎないが、學識もあるし膽力も座つてゐるといふので、直きに黨內でも有爲の人物として重きをなすに至つたのである。

「齢は若いが聢りした人物です」と、最後に篠山は附け加へて云つた。

六

舞衣が突然大文字屋から姿を消してしまつたのはそれから二三日過ぎてからであつた。同時に織田もふつり上總屋へ來なくなつた。

さま／＼の取り沙汰が、ふたりの居なくなつたあとの廓に殘された。

其の日兜町の店にゐた町田は、舞衣から「至急に會ひ度いから來てくれ」といふ手紙を受取つて、怪しみながらも迎ひの俥に乘つて出掛けて行つた。其處は神田のある裏町の狹い露地を這入つた行どまりで、ペンキで塗つた陰氣な家の中へ町田は連れ込まれた。彼れは其所で舞衣と、ほかに一人の男に會つた。

「わたしは織田といふ者ですが、今後これの世話をすることになりましたから御承知下さい。あなたとはいろ／＼約束などもしたことがあるといふ話ですから、實は念のために一寸お呼び立てしたやうな譯です」と男はいきなり云ひ出した。痩せた、眼つきのギョロ／＼光る男であつた。

束髪にして、大島の羽織など引つ掛け、すつかり素人風になつた舞衣は、さながら路傍の人に對するやうな冷やかな顔をして、三年越しの戀人の前に座つてゐた。

この話を、町田は口惜し涙にむせびながら、馴染の茶屋の女將に物語つた。

「町田さんが積んでやつた貯金だけでも二百圓からある筈なんだからね。畜生、どうせ末は碌なことがあるものか」

さう云つて女將は人毎に舞衣を罵つた。

町田は「主人や友達にも會はす顔がないから」といふ書置きを殘したまゝ、十四の歳から育つた兜町の土地をばフイと姿を隱してしまつたが、朝鮮に居るといふやうな噂も風の便りに傳はつた。

木村の運動は可成りの成功を收めて、彼れはしば

〱有樂町の建物を訪れたが、織田にはあれ以來一度も會はなかつた。

「劉さんは近來さつぱり見えません」と、篠山さへ不思議さうに云ふのであつた。

一時は謎であつた織田の素性が、今は一と通り闡明された筈であるが、木村はまだ何となく、はつきりと織田の本體に接したやうな氣がしなかつた。革命黨員、神田の露地奥の家、町田を脅迫した怪しい人物。――さう考へて來ると、まだ何か人の知らない秘密の影が織田の身邊を包んでゐるやうに思はれるのであつた。

其の歳もいつしか暮れ、月日が流れて、世間は再び永い冬の眠から目醒めた。已に櫻の花も散つて、それは芳ばしい青葉のもゆる頃であつた。

或る朝、新聞を手にした木村は、ふと三面に初號活字の題目（みだし）で載つてゐる記事を讀んで駭いた。

それは「大規模な支那人の紙幣贋造」といふ記事であつた。内容をかいつまむと、在京支那人の一團が共謀し、中華民國の紙幣數百萬兩を贋造して、彼等の本國に於て流布しつゝある事實が今回端なく發覺に及び、數名の犯人が警視廳の手に依つて、捕縛された。彼等は神田區××町×番地の露地奥に秘密の巣窟を構へ、其所に精巧を極めた印刷機械を据ゑつけて、盛んに陰謀に從事してゐたのである。勿論此の事件は本國と聯絡のあることで、彼等の一味は各處に散在してゐるらしいが、今回捕縛された者以外に有力な主謀者が潜んでゐる、といふ其筋の意見まで附け加へてあつた。

久しく木村の腦裡に疑惑の雲を殘してゐた露地奥の家の秘密も漸く是れで解決した。織田が印刷術に精通してゐるといふ事情も明かになつた。然し新聞に出てゐる犯人の名前の中には、劉星霖の名は見當らぬのであつた。

それから間もなく、木村が例の有樂町の建物を訪れた時劉星霖の消息を尋ねると、

「劉さんは一と月ばかり前に米國へ行きました」と、黨員の一人が答へた。勿論誰れ一人として、彼の世間を騷がせた贋札事件と、劉星霖とを結びつけて考へて

ゐる人は無かつた。
木村は、自分だけの世界で見て來た織田の面影を描きながら、西洋に似た裏町を歩いてゐた。

七

織田に關する物語は以上で終りを告げたわけであるが、なほ茲に附記して置かねばならぬことが殘つてゐる。
それは舞衣の身の上である。
舞衣は廓を出てから半年ばかり、淺草公園の近くに住まつてゐた。其處でも矢張り織田は一晩隔きに通つて來た。何故織田が一晩隔きに來るのであるか、それは明瞭とは解らなかつたが、何處かに自身と同じ運命の女が一人居るらしいことが薄々舞衣には感じられた。そればかりではない、かうなつてからも、織田は素性を明かさないのであつた。若し舞衣がうるさくそれをきゝ糺したりすると、織田は「もう來ないぞ」と云つて脅した。
「まあ――何んだつてそんな氣味の惡い人にくつついてゐたの？」
ずつと後になつてから、其の話を聞いた人が呆れてたづねると、舞衣は美しい顏をこゝろもち赫くして、
「おほかた魔がさしたとでもいふんでせう」と、答へたといふはなしである。
それは兎に角現在の舞衣は、朝鮮から舞ひ戻つて來た町田と一緒になつて、兜町の附近に平和な家庭をつくつてゐる。

一立齋廣重

（彼の六十回忌に當つて）

野口米次郎

時は十四五年以前の四月の下旬午後も暮近く（日本の春の午後が與へる歡樂の杯に悲哀を盛つたやうな感じは世界何處へ行つても得られますまい）、西洋の近代生活にいたく煩はされて——その當時私は長らく滯在して居た米國から歸つたばかりであつた——何うかして自然に對する正確なパースペクチーブを得たいと願つて居た私は、二三の友人と一所に、向島の花見の小舟に乘つて水の上を滑りくだりました。西洋化して居た私は『綠色の眼』で凡てのものを見て、歪みなりに手當り次第、無意味に不見識に西洋を眞似た日本の墮落ばかりが私に映じて居たのが（前云つたやうに私は米國から歸つた間際であつた）、今私共が滑つて行く靜な落付いた深い隅田川の藍色——この藍色は古い錦繪の藍色だと思ひまするど、私の西洋化した綠色の眼は忽に日本人の『黑い眼』と變じたと感じました。廣重北齋時代までの錦繪が持つて居る藍色は、生の活動を表はす爲め他の色と容易に雜る洋畫の藍色と非異つて、云替へると他の色と雜らぬ以前の純のもつとも純なホモゼニアスな藍色であります。こうゆう藍色を示すやうに思はれた春の午後の隅田川の洗禮を受けた私は——全く急に西洋人で無くなつた私は、徐ろに廣重の繪の境地（この廣重は一生のうち幾枚隅田川を材料としたか私は知りません）に入りこみました。私は「廣——廣——廣重ゼ・グレート！」と絶叫されました廣重通ハツ

バー氏化して來たのを私かに微笑しました。今私の眼前に廣重が向島を題材とした「東都名所」の種々な横物が廻り燈籠のやうに顯はれ、特に「隅田川花盛」と題する一枚を考へて居ますると、櫻の花で彩色されたこの向島はまるで廣重の繪同様に見へて來るのを感じました。私は思はず知らず「はゝ自然が藝術を眞似る――今日の向島が昔の廣重の繪を眞似る！」と叫びました。

諸君はこの私の言葉を何んと了解されるで有りませうか。同じ小舟で隅田川――廣重が斯くも愛し斯くも澤山の繪を描いた隅田川の景色の間を滑つて行く友人と私は『近代に成つて段々人間が藝術化して來る』といふ問題を論じました。我我の心（諸君の心にしても又私の心にしても）が尊敬すべき珍らしい藝術を見ると之れを眞似やうとするに相違無い。廣重の繪で一杯に成つて來た私が、眼前の景色を廣重の繪以外に見ることが出來なかつたのに何等の不思議は有りますまい。『今日の向島が昔の廣重の繪を眞似た』のでなく、實際は私の不肖な頭が廣重の繪を眞似て居たのであます。云ひ替へると私の頭のなかに廣重が目醒めたのであります。更に云ひ替へると我我（諸君にしても又私にしても）は少くも風景畫の點では、廣重といふ畫家であるのであります――丁度、男も女も一様に人間は皆なハムレットなりといふ言葉が有るやうに。我我皆な廣重であればこそ彼の作に共鳴し彼の作を宛も我我自身の作であるかのやうな心持ちを感ずるのである。我我の心のほかに潜んで居る廣重は實際の廣重――西洋の年號で千七百九十六年に産れて千八百五十八年に死んだ廣重に代表畫家を發見したのである。彼は實に日本唯一の郷土的又國民的畫家であります。

今私は日本人としての我我は皆な廣重なりと云ひましたが、西洋に於ても日本人同様に『僕も廣重だ』といふものが澤山居る。さうゆう連中の中で一番著名な人は畫家ウイスラーでありませう。愛耳蘭の文學者ジヨウジ・ムーアは『藝術はバロチアリズムに産れて、世界主義に殺される』と云つて居りますが、バロチアリ

ズムは宗教的の意味では牧師の管區的一班には一地方主張である。ムーアのこの言葉は彼一流の奇言であつて、眞實なるパロチアリズムの價を力說したのに止つて居ると思ひます。日本で眞實なる星や花や月は西洋に於ても眞實なる星や花や月である。又日本で眞實なる廣重の風景畫は倫敦巴里のどん眞中でも眞實なる風景畫たるに相違無い――倫敦巴里の風景のなかにも日本の鄕土的畫家廣重が潜んで居る。その潜んで居る廣重に早い時代に接觸した大畫家は今いつたウヰスラーであります。再び繰返すと日本人としての我我が皆な廣重であるやうに、彼も亦廣重で、廣重の眼でテームス河畔の風景を眺めたのであります。して彼は西洋畫の風景の上に、廣重の眼で自然を見た結果として珍らしい獨特な藝術上の効果を示すに至つたのであります。

西洋の風景畫は、コンステーブル、コロー、近くは五六年前に死んだアルフレッド・イーストの作に至るまで、精氣の抽象的勇往突進を缺いて居る點から見ると、皆なエンバイロンメントの產物でありませう。何んなに立派な風景畫でも所謂寫實に卽しすぎて居る爲めに細々した偶然の現象から逃れて居りません。大概の西洋の風景畫は、永年是認されて來たストック・イン・トレード卽ち大な巧に平均された森林の前景、之れに添へるに一筋の川、遙かに見る空中の亂れた雲といつたやうな工合（風景だけでは滿足の出來ない何處かに氣の弱い所のある畫家――一二の例を上げるとコローや今日まだ生きて居る英國のパーソンなど〻なると風景に人物の景品を添へるのであるが）を一樣に追つたもので、廣重の風景畫のやうに自然の個性が突然全體から分離して浮いて見へる、ウヰスラーの有名な言葉を借りていふと「自然がすこしづ〻這ひあがつて來て」獨特な身振り（ゲスチュレーション）をした場合を巨大な藝術の腕で鷲摑みにしたものでありません。西洋の畫家がいつも使用するコンポジションなる言葉は、音樂家のハーモニー、詩人のメターと同樣に、不徹底な中性的な曖昧極まつたもので自然の個性的表情を特別に評價せぬ場合が多いと

思ひます。眞實なる風景畫家はコンポジションで無くてアイソレーション即ち孤立といふ言葉を尊敬せねばならぬ、これは何ういう意味かといふと、自然のある現象がその他の現象と一致行動せぬ時のずば拔けた特種な孤立の表情を藝術家は見ねばならぬと思ひます。廣重はそういう畫家でありました。彼の今日有名である諸作は悉く自然が珍らしい個性を發揮して孤立の表情を傳へたものであります。建築學者が用ゐるコンセントレーションといふ言葉は邦譯すると中心歸聚である、一貫した建物の動脈ともいふべき方則に從つて重要でない細々したものは皆な切捨てるのを意味する。今日の英詩界ではこの點を力說するのであるが、藝術界で廣重はその作にこの「中心歸聚の妙諦」を活用して居るのであります。この秘密（日本流に云へば東洋の繪畫界では必ずしも廣重だけの專有物でないが）を握つて居たから、廣重の作でも上乘なるものになると極めて暗示的であると云はねばなりません。在來の西洋の風景畫は寫眞以上にせよ又は寫眞以下にせよ、その大部分は自然を模造し或はその後塵を取らうとした。その作家は自然に對する愛人といふとが出來る場合はあるが、戰勝者の態度で自然へ戰爭を吹掛けるとが出來る所謂藝術の勇者でありません。西洋の上乘なる風景畫家は繪の具の論理學者であるとが出來やう、又心理學者（メタフヰシアン）であることが出來やう、又イーストのやうに散文的詩人であるとが出來やうけれども、彼等は平凡な小心翼々な知識に束縛せられたが爲め或はまた彼等はその作で何物かを說明しやうとする在來の習慣を脫することが出來なかつた爲め、折角の藝術を暗示を生命とせねばならぬ詩の風景畫を作ることが出來なかつたのであります。自然に入つて自然を忘れよ、又自然を描いて自然を脫せよといふ言葉は、捕へたい見たい描きたいと思ふ最大要點を得た時にその他の細々した小自然の現象は切捨てゝ顧みなかつた廣重のやうになれといふやうに私は解釋したい。そしてそれを立派にカンバスに傳へやうとするには暗示的藝術の力に依るより外に方法はありますまい。この點を逸早く

注意したのは西洋ではウヰスラーであります。日本の繪畫がまるで知られて居ない時代に、その眞價を認めて自家薬籠中のものとする程所謂廣重宗の大信者と成つたウヰスラーの功績は、確にワグネルが『音樂の無い音樂だ』と冷笑され又ウヰトマンが『詩の無い詩だ』と輕蔑された時にワグネルやウヰトマンを認めた賢明な批評家と一樣に認めねばならぬものと思ひます。

私の想像の眼は眼前にウヰスラーが得意の鼻眼鏡を掛直して、廣重の風景畫を眺め乍ら『何んといふ驚異！何んといふ驚異！』と叫んで居る一幅の繪を見るのであります。私は倫敦でペンネル氏からウヰスラーは初めて倫敦橋（ロンドンブリッヂ）の脇にあつた穢い支那人の喫茶店で廣重の板畫を見たのだと聞きました。又私はリケッツ氏からウヰスラーは初めて一斤の茶を包んで來た袋紙から廣重に接したのだと聞きました。實際ウヰスラーは支那人の喫茶店で見たので無く、又茶の袋紙で見たのでなく、或は昔の日本へ西洋から遣つて來て居た詰らない傳教師が彼に野蠻の風俗として贈つたものかも知れぬけれども、話が素敵に面白ければ面白い程眞實と思はれるのを考へると、『如何に廣重が歐洲に入込んだか』といふとは世界の繪畫界で一番不思議な物語と云はねばなりません。眞實なる作は仕舞には勝利を得るといふ言葉は平凡ではあるけれども、廣重はその適例の最大なるものといふことが出來る。又人生は短いが藝術は長いといふ言葉の意味も考へるとひし／＼身に迫るやうな感じもするのである。

暗示的な藝術は表現のイデヲムとして溌溂たる生氣に富む單純な描寫を持たねばなりません。廣重の作の上乘なものを見ると一枚／＼新らしく見え、いつも最後に見る彼の繪が一段と驚くべく思はれ、暫くの間はもう他の繪を見る必要がない位心の滿足を感ずるのであります。世界に有名な畫家の作は一枚だけで充分であるやうに、廣重の繪も一枚あれば澤山だと思ふ場合がある。これが畫家として彼の大なる證據で無くて何んでありませう。近頃英語國の文壇にポリフオニック・プローズといふ言葉が盛んに使用される。『ポリフオ

ニック」は多音とか多響の音味で、一篇の詩文に種々な音律の色取りが表はれるのをいふのである。これも古い習慣を文學上に破つて自由な風を吹込もうとする新運動で、形式の上では作家の感じ或は心持乃至趣味を金科玉條として、一章のうちでも場合に依つて所謂メターを追ふ所もある。又追つて來た平仄の音律から急に離れて散文體に變化するといふので、勿論一定の方則は無い、作家銘々に方則を持つゝ居るのである。このポリフオニツク・プローズを思ひますると、西洋は日本より文學上では遙かに後れて居る、云ひ替へると西洋は日本に段々接近して來るとも論斷することが出來る。その理由は、彼の平家物語でも又謠曲を見ても皆な西洋の今日新らしがつて居るポッフオニツク・プローズに相違ないのであります。文學の方面は論せずとして、日本の繪畫、今私が此處で問題として居る廣重の板畫をお覽じろ、彼はポリフオニツク・プローズの主張を繪の具の上で實行して居ると云へる、何ぜならば、彼は寫實と理想――現實と想像を自分だけの獨特な趣味で統一して居るからであります。理想派或は寫實派或は何の派でも畫家が自分の藝術に眞實であればその畫家は善良な畫家であるといふと、人は私を曖昧な言葉を使ふと非難するかも知れません。然し日本の繪畫で表面上寫實に見へても、その繪畫が立派である場合にはいつも主觀的な權威を持つて居る。又云ひ替へると、表面上理想的に見へても、その繪畫が立派である場合には、いつも客觀的描寫を忘れたもので無いと確に云ふことが出來ると思ひます。廣重の風景畫が即ちそれである。彼の作は人間と自然との關係を適當に傳へて、我我の藝術的興味を木や空や川や山やへ導いて行く點からいふと、彼は客觀的畫家の範圍の人だといふことが出來やうが、誰が彼の作は徹頭徹尾自然の外形を寫實的に追つたものであると斷言することが出來ませう。彼の作が持つて居る寫實的分子は、彼の藝術的空氣云ひ替へると人格性を更に一層高く又深くならせる重大な役を勉て居る點から見ると、彼は寧ろ理想派或は主觀的畫家と呼んだ方が眞實に近くはある

まいかとも思はれます。彼は趣味を中心とした郷土的風景畫家で、どうして女性的な繪畫の混亂を避けるかを彼は支那の風景畫から教へられたといふことが出來る。して又西洋でウヰスラーは廣重から學んで、女性的な在來の混亂せる寫實を切つて捨てゝ此處に現實と想像が音律的に程良く調和せる一生面を西洋の風景畫の上に起したのであります。今日倫敦のテート畫館に懸つて居る例の『バタシー・ブリッヂ』の夜景を見ると、如何にこの繪が外面的寫實を超絶して又内面に漂つて居る音律的詩趣が寫實的技巧で或る程度まで助けられて居るかを知ることが出來ると思ひます。

この今日著名な夜景の繪がジョン・ラスキンに『繪の具を無鐵砲にばら撒いた丈けで幾千圓の正札を着ける大山師の手品』とか何んとか罵倒されたが爲め裁判汰沙にさへ成つたのを思ふと、如何に其當時の大部分の批評家が東洋的藝術趣味に盲目であつたかゞ察せられませう。又如何に其後西洋の藝術や文學が東洋に段々接觸して來たかを考へると唯驚くの外有りません。ラスキンは豫言者の名譽を摑みそこねたと同時に、畫家ウヰスラーは『藝術は俗論と戰爭するうちに眞生命を放散する』といふ生きた實例を提供したのであります。このウヰスラーの信者共が抗辯しても彼がその風景畫の上で廣重に負ふ所が澤山あるのを拭つて仕舞ふことは出來ません。今全體に渡る根本的藝術心から一枚の繪の上に於ける小さな落款の點に注意を向けて御覽なさい。西洋の繪では筆者の落款は單に記號であるに止まつて居やうが、日本では（廣重ばかりで無い何んな畫家でも）落款は全體の繪と重大な關係があるとせられて、その書風や位置は細心に硏究され來つて居る。ウヰスラーも尤も然るべきことだと認めて彼は圓い蝶々の書き判を工風するに至つたが、この判が何んなに、その例を出すと、『キンセラ孃の肖像』にせよ『自畫像』にせよ或は又『カーライルの肖像』にせよ、更に又『黑色の整齊・ハス夫人の肖像』にせよ、一種深い香氣を漲らして繪として無くてならぬ價値を持つて居るかを知ることが出來る。してこれはウヰスラーの繪の上では

重大な問題であります。

それから又日本の藝術文藝何んなものでも、西洋人の『緑色の眼』で見ると異つた珍らしい――我々日本人がついぞ思つたことの無い――意味が湧いて來る場合が澤山ある。此處で私は廣重を問題として居るから廣重のことで其一例を擧げると、彼の辭世として知られて居る『東路へ筆をのこして旅のそら西のみ國の名ところを見む』の歌である。我々日本人にはこの月並な歌は寧ろヒユモラスで散文的であるに過ぎない。其時代の流行を追つた臨終間際の一遊戲とのみ見へまするが、この平凡な辭世も一度英譯して見ると急に別途な如何にも嚴肅な面白い響を發するのであります。原歌では不眞面目な言葉も英語の衣裳を着けさすると痛切な眞面目の發言となる、詰り英語國の空氣に觸れると全然の別物となつて此處に復活するのであります。かういふ譯で廣重は極めて下らぬ點に於ても、西洋で發見せられてから改造された新らしい意味で解釋されるに至つて居ります。故に彼は或る點まで、嚴格な批評を下すと、西洋人の發見であり又創造であると云はねばならぬ。私自身も西洋人の『緑色の批評眼』で彼を批判するのが當然であり又彼に對する禮儀であると思つて居りますが、日本人の眼で見る廣重は自然に『西洋に於ける廣重』とは多少異ならざるを得ません。然し日本でも近頃は彼に對する批判が西洋の意見を土臺とするに至つて居るのは云ふまでも有りません。

私は前に廣重は支那の風景畫に負ふ所が多いと云ひました。私はまた彼を時々所謂漢詩人として考へて、彼の著名な作を七言絶句の『起承轉結』の方則に當嵌めて見ることが有ります。『雲はらふあらしにつれて百ふねも千ふねもなみの粟津にぞよる』の歌が書いてある『粟津の晴嵐』を取つて見ると、湖畔に松の並木があつて向ふに山々が見へるがこの一篇の詩の起承で、白帆を風に孕まして船はまさに出掛けやうとするのが『轉』たる所、して白帆のあるものは小く成つて遙かに見えなくなるのが卽ち『結』の場所と見ることが出來

ます。更にまた東海道五十三次の庄野の暴風雨の景を注意しまするど、暴風雨の爲に一方にずつと竹藪は紆曲つて居る、又自然の脅嚇に震へて居る百姓の家の屋根が見える、半分窄めた雨傘と簑や笠で驅ける百姓と裸體でづん／＼急ぐ駕籠舁が居る、して細い綺麗な線の雨は地上を横なでに打つ、この一幅の繪は容易に一篇の七言絶句とすることが出來ると思ひます。廣重の繪で上乘な作は『起承轉結』と云ふ絶句の作詩法の理論をいづれも適用して一篇の漢詩と變ずることが出來ます。繪畫が詩に關聯して居るのは西洋よりも東洋の方が遙かに深いのであるが、廣重の風景畫は特別に詩と離れることの出來ぬ間柄であると思ひます。

近代の英詩の評者――殊に新派の評者――は『眞實の詩の基調は文字の數や又質のなかには無くて、ストロプを以て基調とする』と主張して居る。この『ストロプ』といふ言葉の意味は希臘の劇で舞臺の中央に置かれて居る祭壇を廻つて合唱が歌ふ詩の一聯をいふのである。眞實の詩は、抑揚あり緩急宜しきを保つて居る各々のストロプが互に調和して聯絡したものであると主張するので、この各々のストロプの調和を繪畫の上に適用すると對照とも云へるし又バランス即ち平均ともいふとが出來ます。今この主張の眼で廣重の繪畫を見るに、例を『月二十八景の内弓張月』の名畫に取りますと、弓なりに傾いて居る月は落つる瀧の浪と對照し、又右手の岩山は左手のそれと平均を保ち、更に繪の上の方に書いてある『曉月……』云々の七言の詩句は下の左方に見る落款と相對照して各のストロプが完全に調和して居るといふとが出來ます。繪の上に於ける對照の技巧は東洋では古代からの遺傳であつて少しも珍らしくない、東洋の畫家の血のなかには必ず潜んで居る自然的な表現法であるけれども、これを西洋人が見ると此處に深い暗示があるとするのであります。

『西洋に於ける廣重』は今は研究の第三期に入つて居ります。不思議な風景畫珍物取扱ひした第一期と猶も杓子も廣重の藝術を唱へて（丁度さういふ時期が北齋にあつたやうに）その作品を無暗と蒐集した第二期は

終つて、第三期即ち廣重の繪の整理時代云ひ替へると嚴肅な批判時代に入つて居る。この意味なる第三期ではこれまで世人から顧みられ無かつた斷片が持つて居る藝術的メリットで案外な聲價を得るに至る奇蹟が確に演ぜられるのを見るだらうと思ひます。普通一般の批評以上に正確な純藝術的な廣重研究がこれからの仕事であるのであります。私の友人なる米國人で浮世繪研究家を以て任じて居るある青年詩人はつい近頃日本に滯在して居たうちに、極めて小形の廣重二三枚を、氣に入つたといつて格外な代價で買入れましたが、それも廣重研究第三期に入つて居る事實の一證據と見ることが出來ます。して日本では漸く第二期に入つたばかうであるのを聊か遺憾に感じます。

最後にもう一言。初代二代の問題を爭ふのも廣重研究者の一事業に相違なからうけれども、私は廣重の二字を個人的意味で代表せしめずに、風景畫に顯はれた眞藝術の價のシノニムとして見たいと思ひます。であるから實際初代廣重の作でも、所謂廣重メリットに達して居ないものは二代としようが又三代としやうが、そんなことは何うでもよいから切つて捨ても差支へ無いと思ひます。

耶馬溪の奇勝　青の洞門物語

田中貢太郎

一

正徳五年の春の夜であつた。紗絹に包まれたやうな薄赤い月の光は、夢の中に見るやうに庭一面を暈して、庭の先にある花をつけた老木の櫻は、濃い一團の

幽かゝつたやうに微白く、黒い幹ばかりが骨々して見えてゐた。櫻の花は、音も無く飛んで來て、緣側に佇んでゐる女の頰に觸れた。

女は中川家の内室お京であつた。お京は三歳になる實之助と云ふ男の子を寢かした後で、手馴の三味線を持ち出して、爪彈しながら、夕方から仲間一人連れて、向島の友達の許で催される謠曲の會へ出かけて行つた夫の歸りを待つてゐたが、少し逆上せて胸元がむかくし出したので、靜に三味線を片寄せ、雨戸を一枚開けて、戸外の空氣に身を浸してゐる所であつた。

月魄の具合では、もう亥刻に近かつた。お京は綺麗な月の光に魅せられたやうな恍惚とした眼で、見るともなしに櫻の梢の方を見てゐた。と、庭の土を踏みしめる下駄の音がした。驚いて耳を聳てると、下駄の音は右手の月の陰になつた植込の暗い中からであつた。續いて小さく咳する聲がした。咳の聲は耳馴れてゐる聲であつた。

「市九郎」とお京は云つた。

「はい。」と返事をしながら植込の中の小徑から出て來た男があつた。昨年から抱へた市九郎と云ふ若黨であつた。

「今頃何んで庭を歩いてゐる。」とお京は詰問するやうに云つた。

「旦那樣がお留守で御座りますから、お庭の要心を見て居りまする。」と云ひ云ひして緣側に近寄つた。

「それは大儀ぢやのう、」とお京はもう優しい平生の態度になつてゐた。

「それにしても旦那樣は、隨分お遲いでは御座りませんか、」

「謠曲の會へ行かれたら、子刻でないとお歸りなさらない。私も一休みしますから、お前もお庭を一廻りしたなら、それで一休みするが好い。」

「はい。」と云つたが市九郎は動かなかつた。

お京は、ふと物の力の壓迫を感じた。眼尻の切れ上つた左の眉の上に小さな黒子のある色の白い男の顏が凝と自分を見詰めてゐるのが眼に付いた。お京は突然

雨戸に手をかけて、『早くお休、』と云つて閉めやうとしたが、雨戸は動かなかつた。雨戸の端には男の手があつた。

『何をする。』

『奥様、』と市九郎の聲は震を帶びてゐた。

『何用がある。用事がお在りなら、明日旦那樣の前で聞きませう、女子一人の時に無禮であらう、』

『まア、奥様、そのやうに仰つしやらずに……。』

『聞きません、其所をお放し、』とお京は叱りながら力を入れたが、男は雨戸にやつた手を放さなかつた。

『お竹、お竹、お竹、』とお京は思ひ付いて女中の名を呼んだが、假寢(うたたね)をしてゐるか音もなかつた。

『奥様、まア、お靜に……』と市九郎は一方の手をあげて、空間を押し押しした。

『無禮な事をお云ひでない。』と云ひ捨てたお京は、雨戸はもうその儘にして、つかつかと座敷の中へ這入つて行つた。

これを見ると市九郎も縁側に飛び上つて、その後を追つて行つた。敵が迫つて來た事を知ると、お京は行燈の火を背に浴びて、きちんと坐つた。二十五六歳の背のすらりとした面長の美しい女の顏は、怒の爲に熱(ほて)つてゐた。

『狼藉者、』とお京は叱りつけた。

市九郎は入口にぴつたり坐つて、『決して狼藉ではありません、奥様、私は奥様に……。』

『そのやうな事を聞く耳は持たない、狼藉者でなければ、其所をお下り。』

『直ぐ下りますから、私の申しますことをお聞き下さりませ。』

『聞く事はなりません。お下り。』

『それはあんまりで御座います。』

『何があんまりぢや、女子一人と侮つて狼藉を働きながら。』

市九郎の眼には野獸の光があつた。彼は突然起ち上つた。お京は恐れて、飛び退つて身を躱(かは)した。片寄せてあつた三味線の棹に足が觸れて、ポキと折れた。三

味線の傍に置いてあつた二三冊の草双紙のやうな本が飛んだ。

市九郎は折れた三味線を越えてお京に迫つた。お京は大聲に叫びながら次の部屋への襖を引開けた。市九郎は片手でお京の黒繻子の帶の端を摑んだ。帶はずる〳〵と解けた。お京は裾を亂して次の部屋へ走り込んだ。市九郎は帶を捨てゝ追ひ縋つた。

『不届者。』と云ふ聲と共に、市九郎は後方に突き戻された。市九郎は機を喰つて横倒になつた。驚いて起上らうとすると『汝は市九郎だな。』と云ふ聲が頭の上でした。聲は主人四郎兵衞の聲であつた。市九郎はその儘俯向いて疊に額を摺りつけた。

四郎兵衞は可成の旗本の武士で、四十格好の痩せた男であつた。謡曲の會から早目に歸つて、淺草にある我家の門を這入つた所で、家の内で女の叫ぶ聲がするので飛び込んで來た所であつた。四郎兵衞の右の手は太刀の柄にあつた。仲間の半造も腰に差してゐた木刀を手にして、主人の後から隨いて來てゐた。

『奥、何うした。』と四郎兵衞は細帶一つになつて呼吸を喘ましてゐるお京の方を見て云つた。

『少し逆上せて來ましたから、雨戸をあけてお庭の方を見て居りますと、市九郎が來て狼藉に及ばうといたしました。』とお京は言葉を切り切り云つた。

四郎兵衞は市九郎の方に眼をやつた。『たはけ者、一刻も屋敷に置く事は相成らん。出て行け。』と云つてから、半造の方を見返つて、『半造裏門から追ひ出せ。』

半造は布子の尻を端折つた儘で赤黒い毛脛を露はしゐた。『市九郎立て。』

市九郎は靜に起上つて、四郎兵衞お京の方に冷かな一瞥をくれながら、緣側の方に出て行つた。半造は肩を怒らして隨いて行つた。

お京はその後で、恐ろしかつた市九郎の狼藉をそれからそれと話した。そして夫婦で男の子を寢かしてある部屋に行つて床に這入つた頃には、子刻を過ぎてゐた。枕頭に据えた有明の燈火は、靜に親子三人の頭を照らした。

四郎兵衛は、ふと何かに夢を破られて眼を見開いた。怪しい人影が行燈の傍で動いた。四郎兵衛は當てゝゐた括り枕を取つて投げつけた。枕は行燈に當つて燈火が消えた。四郎兵衛は手探りに枕頭の刀掛けを探つて、刀の柄に手をかけた。同時に右の肩先から背にかけて强い痛みを覺えて、感覺を失つて了つた。お京の叫ぶ聲と、子供の泣く聲が部屋の中に起つた。

この時戸外では、空の薄霞が取れて、西に傾いた月は、青白く輝いてゐた。中川家の臺所に付いた天窓を這ひ上つて屋根の上に出て來た者があつた。それは脇差を一本腰にした市九郎であつた。

二

市九郎は越後高田の藩士で福原勘太夫と云ふ定府侍の倅であつたが、市井の惡少年の群に交つて、放蕩に身を持ち崩した爲に、家を追はれ、其所此所と流れ渡つた末に、中川家に奉公したものであつた。彼は貞享四年の生れであつたから、その當時は二十七八歳であつた。

中川家の奉公は、淺間しい結果に立ち到つた。彼は四郎兵衛を暗殺すると共に、江戸を逃げ出して、先づ奥州街道に彷徨ひ、北陸に彷徨ひ、中仙道に彷徨ひ、彷徨ひ彷徨ひして、木曾街道に這入つた頃には、追剝をするやうになつてゐた。

その日も市九郎は、三四人の部下を連れて、藪原に近い山坂で旅人の來るのを待つてゐた。其所は峠から少し横に這入つて行つた林の中で、象の蹲つたやうな黒い岩が背後にあつた。頭の上の樹の梢には、明い月の光がチラ／＼動いてゐたが、下は陰氣に薄暗かつた。市九郎はその岩の下で、風呂敷包のやうな大きな包みを枕にして鼾をかいて眠つてゐた。その前に二人の部下が、カルサンを履いた膝を投げ出して、何か話してゐた。市九郎の枕頭の方の岩には、一張の重籐の弓と、刀が四五本立てかけてあつた。刀に添うて十本ばかり矢を盛つた壺胡籙があつた。

枯枝を踏む足音がした。話してゐた二人は耳を傾けて聞いてゐた。足音は岩を廻つて來た。と、小さな咳

をした。麓の方へ斥候に行つてゐた二人の部下が歸つて來た相圖であつた。二抱程ある赤松の幹の傍から二人の姿が見えた。

市九郎は呼び起されて胡座を掻いた。『何うだ、見えたか。』

『女子を乘せた籠が來ました。』と斥候に行つてゐた一人が答へた。

『供は何人ある。』

『若い侍が二人隨いて居ります。』

『京の青侍か、』と云つた市九郎は、一とわたり部下の顏を見渡して、『ぢや、又乃公が弓を引いて轎夫を追拂ふから、手前達は侍を縛れ、決して殺すな、殺した所で人間の身體は文にもならない。第一衣裳を血で汚しちや何んにもならない。好いか、決して殺すな。人を殺す時は自分が生るか死るかの時でないと殺してはならない。甲州松は氣が荒いが、殺しちや不可ないよ、』と直ぐ右側にゐた背の高い圓顏の男の顏を見た。

『へゝゝ、頭はこの頃厭に佛樣染みて來たよ、』と甲州松と云はれたのは笑つていつた。

やがて胡籙を負ひ弓を手にした市九郎は、四人の部下を從へて、峠の上に出た。もう申時下で、紫色をして重なり重なりした山の巓に近く傾いた夕陽は、峠の左側にそゝり立つた峰を明るく照らしてゐた。秋の中頃で、紅葉しかけた木の葉は、山の肌に黄ろな斑を置いてゐた。其所にも此所にも蜩が鳴いてゐた。

女を乘せた籠は、うね／＼した山坂を登つて來た。坂路は日陰になつて空氣は冷かつた。籠の背後には、編笠を著た二人の侍が隨いてゐた。垂を捲てある籠の窓からは、中にゐる人の派手な衣の端をチラ／＼さした。麻の襦袢一枚着た轎夫の背は、汗でビッショリ濡れてゐた。

直ぐ眼の前に見える峠には、陽の光が一杯あつた。『あすこが峠だ。』と侍の一人が連を顧み云つた。と、何所ともなく弦音がして、二三本の矢がヒラ／＼と飛んで來た。一本の矢は轎夫の足許に落ちた。轎夫は籠を投り出して置いて、麓の方へ逃げ出した。二人の侍

は恐れて突き坐つた。

三

盗賊の一團は、山から山を傳つて引上げて行つた。暗くなると小さな松明が先に歩いてゐる者の手で燈された。

一團の棲家は、谷の底にあつた。其所には四五軒の小さな堀立小屋が並んでゐた。屋根の上にに、星が二つ三つ光つてゐた。盗賊の一團は、市九郎の小屋となつてゐる比較的廣い小屋の中に這入つて行つた。小屋の中に切つた圍爐裏には、火が燃えて、その傍に市九郎の女房になつてゐる女が淋しさうに坐つてゐた。『今日は何うだね。』と女は市九郎の顏を見て云つた。市九郎は、『うん』と云つたぎりで、後は何とも云はずに圍爐裏の傍に坐つた。二人の部下の背にあつた盗品の包みは、筵の上に降ろされた。

圍爐裏の傍で直ぐ酒がはじまつた。夕方追剝いだ女連の事を何人かゞ云ひ出した。籠に乘つてゐた女は、名古屋あたりの商家の女房で、侍と見せてゐたのは、店の男らしかつた。『豪い侍があつたもんだ。』と一人が笑ひながら云つた。

『その着物は何處。』と酒を沸してゐた女が云つた。

部下の一人は、自分の背後にある包みを見返つて、左の方にあるのを指さした。『これだ。私の背負つて來た奴に這入つてゐた。』

女は立つて行つた。包みを人と人との間の燈明の達く所に寄せて、急いで結目を解いた。中からは三人から剝いだ著物がそつくり出て出た。女の著付と思はれるのは、御納戸茶に白紋唐藍染の裾模様ある縮緬の袷で、他に緋縮緬の長襦袢と、黑繻子に縞模様をした帶とが眼に付いた。『おう、これは好い著物が。』と女は袷を取上げた。

『姊御が著たら好いぢやないか。』と包みを敎へたのが云つた。

『左樣だね、私(わちき)が著やうか。』と云つて女は、袷を自分の著物の上にかけて手を通して前を合せながら、『似合うかね、』と部下の方を見た。

市九郎は厭な顏をして圍爐裏の方を見ながら酒を飮んでゐた。

女は袷を脱いで、今度は長襦袢を取上げて、『こんな著物を著る人だから、頭の物も好い物を挿してゐたんだらう、櫛なんかは何うしたの。』と云つて又部下の方に眼をやつた。

『淺間しい奴だ。』市九郎は突然かう云つて、手にしてゐた盃を圍爐裏の中へ投り込りだ。『年中人の物を奪つてゐる乃公でさへ、惡いと思はずにした事はない。いくらぬすつとの仲に居たつて、淺間しいと思はずに、好く櫛の詮義まで出來る事だ。』

部下は顏を見合せて何も云はなかつた。市九郎は默然として何か考へてゐたが、間もなく身體を横に倒して肱枕をして寢て了つた。

その夜の明け方には、白くあされたやうな下弦の月が小屋の上にあつた。宵の儘で圍爐裏の傍らに寢てゐた市九郎は、傍に寢てゐる女に知らさないやうにして戸外に出て、小屋の前から小さな谷の流れに沿て行てゐる蛇のやうな山路を下りて行つた。

四

五十前後の痩せた僧は、左の手に石鑿を持ち、右の手に金槌を揮つて、眼の前に聳え立つた岩に穴を穿りはじめた。其所は豐前國山國川の谷に沿うた青と云ふ土地であつた。川の兩岸には、集塊岩が筍の生へたやうに聳えて、世に所謂ゆる耶馬溪の峽谷をなしてゐた。

チャン、チャン、チャン。鑿の石に觸れる音は止まなかつた。下流の樋田村から來た路が削り立てたやうな岩山に支へられたので、水中の岩と岩山の岩の尖りとに木を横たへ、板を敷いて、それを鎖で縛り合はせて危險な路をつけてあつた。土地ではそれを鎖渡と云つてゐた。老僧は路を支へた岩山の洞腹に洞門を穿つて、安全な路を作らうとしてゐる所であつた。

時は享保十九年の秋であつた。老僧はその傍に結んでゐる庵から、毎朝早く出て、附近の村へ托鉢に行つた。そして歸つて來ると、石鑿と金槌とを手にしか

チヤン、チヤン、チヤン。

『ヤア、狂人さん、遣つてゐるなア……』鎖渡を通る村の者は笑ひ笑ひ通つた。『狂人にしてもよつ程豪い狂人だ。』と云ふ者もあつた。老僧は傍視もせずに、一心になつて槌を揮つてゐた。

翌年の春になつて、高さ二丈ばかりの大きな洞門が三四尺ばかりも岩山の胴腹に穿たれた。笑つてゐた村の人々の中にも首を傾ける者が出來て來た。『どうして、狂人であんな事が出來るもんか。』『何かあの人には、大願があるらしいな。』などと云ふ者も有るやうになつた。

その内に老僧の名は、禪海と云ふ名で、生國は江戸であると云ふ事が分つて來た。『享保十五六年頃、禪海が豐後の油布院にゐたのを見た事がある。』と云ひ出した者があつた。

胴腹の穴は、次第に深くなつて行つた。深さが二三歩ばかりになると、川に臨んだ方に窓を穿つた。禪海の努力の功が日一日と眼に立つて來た。附近の人は感激して、財物の喜捨をはじめた。財物を喜捨する資力のない者は、身體を持つて來て禪海の傍で働いた。

五

洞門の開鑿は、十年を費して、禪海はもう六十近くなつてゐた。それは初夏の頃で、集塊岩の岩山には、紫色の躑躅が綺麗に咲いてゐた。ある日、晝飯の時刻になつて、庵に歸らうとした禪海が、靜に洞門の口を出た所で、その出口に立つてゐた三十一二歳と思はれる色の白い見知らない侍が、その前に立ち塞つた。

『福原勘太夫の一子市九郎待て。』と云つて侍は刀の柄に手をかけながら、左の眉の上に黒子のある老僧の顏を睨みつけた。

『それでは貴君樣は、中川樣の御子息。』と云つて禪海はその顏を凝と見返した。禪海は市九郎であつた。彼は木曾山中を出ると共に、六十六部になつて罪業を消滅しようとした。そして一日鎖渡を通つて、その危險を見たので、大誓願を起して開鑿に著手したものであつた。

「汝の爲に殺害せられた中川四郎兵衛の一子實之助だ。勝負しよう。」と侍はぢりぢりと詰め寄つた。

「貴君樣の御立腹になるは御尤で御座りますが、見らるゝ通り……」と禪海は洞門を見上げるやうにして、「里人の難儀を救ふ爲に、この大願を起して、今日でもう十年餘りになります。後三四年も致しますれば、成就しよう思ひますから、それまで私の生命を借して置いて下され、この上で讐を討たれましよう。」

「よし、それでは、三年待たう。」と實之助は刀にかけた手を引込めた。

六

實之助は禪海の庵の傍に、これも小さな庵を作つて、禪海の見張りをしてゐた。ある時なんぞは、父のやうに暗殺せられはしないかと思つて、刀を枕頭に置いて眠らずに夜を明かした事もあつた。

併し禪海は、開鑿以外に餘念がなかつた。何時の間にか洞門の中へ這つて行つて、石を運び出してゐる實之助の姿を村の人が見るやうになつた。

實之助は、ある夜、禪海の庵に行つた。「貴君の立派な心が分りましたから、私は恨を捨てます。」

禪海は案外な顔をして聞いてゐた。

「明日、私は江戸に歸ります。貴君は何うか大願を成就さして下さるやうに。」と云つて恭しく挨拶した實之助は、翌日、其所を出發して江戸の方に歸つて行つた。

補遺

洞門は延寶二年になつて功を竣つた。高さが二丈、長さは三百八歩あると云はれてゐた。この洞門は青の土地にあるので、「青の洞門」とも云ひ、又、「山陰鑿道」とも云つてゐる。明治になつて二回道路の大改修を行つた爲に、その洞門は大部分を破壊せられて、僅にその面影を留めてゐるなどは、甚はだ惜むべきである。

禪海はこの後も同地に留つてゐたが、權大僧都に進められた。亡くなつたのは、安永三年八月で、歳は八十七八であつたらう。今その墓は、羅漢寺の山中、智

剛寺の上の方に在る。

本年の一月二日、先輩某民と共に耶馬溪に遊んだ筆者は、折柄の大降雪で、柿坂行の輕便の中から雪のかかつた靑の洞門を見ただけで、この儘又中津の方へ引返したので、見たいと思つてゐた禪海の墓も見る事が出來なかつたのは、今に遺憾とする所である。

山本鼎と正宗得三郎

（此秋の注目す可き二洋畫家）

健堂生

一

此の秋、著るしく世間の注目を惹いた二畫家は山本と正宗とである。此の二畫家を對照、評論するのは、種々の點から見て、興味ある題材である。

山本は院展で光つて居り、正宗は科展で光つて居る。

此の秋に於ける院展と科展との花形役者は、此の二人である。光つて居るといふ事の意味にも、種々あるので有るが、此の二人の場合に於ては、藝術の渾成といふことよりも、今、此の二畫家が畫筆を執る上に、油が乘つて居るといふ事實を示すものである。全く、此の二人は、油が乘つて居るらしい。油が乘つて來ると光る。光ると、新らしく見える。此の二人は、新進といふわけでは無く、二人ともに隨分、早くから認められて居る。然れども此の秋の二人は新らしいように光つて居る。

畫壇に於ける批評家としても、此の二人は、此の秋に於て、尤も興味ある批評振を見せた。山本は科展を、正宗は院展の批評に筆を執つた。何方も隨分思ひ切つ

た批評をした。互に、遠慮、會釋の無い、お世辭も飾氣も無い批評を發表した。傍若無人の慨が見えぬでも無い。或は、老成家の眼から見れば、亂暴と思はれるかも知れぬ。併し、此の亂暴と見える中にも、眞摯な、眞劍の意氣が現はれて居る。所謂老成‥‥世俗的に老成せざる間が藝術家の生命健やかなる時である。此の如く亂暴と見える態度は、新らしくて、油が乘つて居なければ、出來ない事である。故に、批評の態度から見ても、此の二畫家は、此の秋の花形であるといひ得る。其の批評及び批評文の巧拙如何は暫らく措き、これほどの意氣を、批評の上に發表した畫家は、近頃珍らしい。

二

山本と正宗とは、來年も續いて花形になるであらう。而して畫のみならず、其の畫評が、恐らく畫に劣らぬほどの興味を以て、讀者から歡迎されるであらう。吾輩は、彼等が、飽くまで今年見せたと同じき、眞摯なる態度を以て進まん事を期待して居る。

此の二人の人物、面影が畫にも、批評の上にも表現されて居る。批評は、何方も傍若無人であるが、趣を異にして居る。正宗は、院展には、十分、探して見たが批評に値する畫が無かつた、山本一人丈けであると喝破したのは、隨分、無遠慮である。彼の我武者な性格を發揮して居る。正宗は、一言以て蔽へば、我武者な人である。併し彼の我武者には、智慮もあり、愛嬌もある。眞摯である故に、其の我武者が却つて人に好かれるといふ意味もある。彼は七八年前から、讀賣の紙上に、美術の評論を、盛んに書いて居た頃には、其の我武者は頗る露骨であつた。其が去年、巴里の留學から歸朝して以來圭角も減り、大分、圓熟して來たように、評判されて居たが、此の秋の、彼の院展評を見ると、我武者は依然として我武者である。彼の眞骨頭は少しも隱れて居らぬ。彼が圓滿になつたといはれるのは、社交の上だけであつて彼の批評には社交は無いのである。此處が彼の妙處であると、吾輩は思ふ。

山本の批評は、正宗とは出發點が違う。正宗は「自

分が感服した畫でなければ、批評するに足らぬ」と考へて居る。若し、此の見地に基づいて批評を試むるものとすれば、其の批評は推稱であり、感嘆であらねばならぬ。山本の見地は全く違う。彼は、「自分の推服しないものでも批評す可きもの」で、彼が批評は、寧ろ」畫の見方を示すつもりである」と言ふつもりらしい。彼の油は乘つて居るだけに、其の鼻息は中々荒い。彼の父は、元來、舊幕臣の江戸兒で、今の自宅は淺間山の麓であると聞く。彼の批評、觀察に就いて、奇警といふ要素は、江戸兒たる父から受けて先天的であり、其の勇敢な、鼻息の荒い、鼻柱の强いところは、淺間山から受けたので、後天的である。彼は先天的には江戸兒、後天的には信州である。

山本と正宗とは、其の畫と批評との上に、性格の異なるところが暴露されて居る。山本は極めて理智的な批評を試むる人であるが、其の實、内には感情が燃えて居る。譬へば感情の餡に、理智の肉を付けた白饅頭のようである。之に反して、正宗は粗放に見えて、内には理性が澄んで居る。譬へば清水を湛へた山の井井筒が荒くれた自然木を用ひたようである。

正宗には敏捷な閃きが見られるが、山本には案外に、古樸なところがある。此の二人は、此の秋、傍若無人な批評振を見せた。彼等の批評振を批評する事が、吾輩に、一種、批評の興味を味はしめるものがある。

三、

吾輩は、正宗を、荒くれた自然木の井筒を有する清水に譬へた。清水が彼の生命である。然し其の荒くれた井筒は、此の水に就いての印象を形作る力强いものの一つである事を考へねばならぬ。而して山本が感情の火は、周圍の紗を透して美しく輝いて見える事がある。

吾輩は、五六年前、正宗の畫を見る時に、恰も彼の評論を讀むと同じような心持を以て彼の畫に對して居た。彼の畫の將來は如何に變化して行くだらうかといふ期待は、つねに吾輩の心を煽つて居た。其の頃の彼の畫は、繪具の塊を塗りつけたような心持のする畫で

あつた。梅原良三郎の畫とは違ふ。彼は、梅原ほどに色彩に重きを置いて居たのでは無かつた。併し彼の畫が繪具の多量を要したのは事實である。それが此の秋の彼の畫を見ると、彼の手法が著るしく消化れて來た事が目に著く。彼の行程は、確に一段落を劃したが、彼の前途には猶ほ一の難關が横はつて居ると思ふ。

吾輩は、去年の秋、旅行した爲に、二科會を見なかつた。去年のは、正宗の巴里土産の製作が出された。此の秋のは去年の殘りの少しと、歸朝以來の作品とが見せられた。山本のは全然、歸朝土産ばかりなので、歸朝後の製作は未だ一枚も見ない。歸朝土産の中には、何人の作も、概ね誇示するに足るものが有るので、歸朝土産よりも、歸朝後の製作如何が問題である。多くの人は、歸朝後に、必ず手法の變化を示すもので、其の變化如何が問題である。此の秋の正宗のは、歸朝後の變化が、滯歐中の製作と並べて見られる。山本のは、如何に變化し行く可きか未だ分らぬ。

四

山本の批評は、警句に富んで居る。彼が造語の力は、恐らくは藝苑に稀に見るところであらう。少くとも吾輩の知つて居る範圍の中では、彼に匹敵する者は無い。彼の二科展に對する批評文の、簡明、直截、而して譬喩に妙に、警句に富んで居る事は、讀者を魅した。警句の盛んなる事に於ては、正宗は山本には敵はない。山本は文章としても中々巧なところが有る。彼は、美術評論家として立つ可き天分を有して居るように見える。批評文に就いて、此の二人を比較して見ると、文章は山本が優さつて居るのは爭はれない。然し、正宗は文章に拙なように見えて、全體としては、捨て難いところが有る。一章、一句の間には、巧いと思はれてゐても、一篇としては、讀者を引付ける力を有するのが、正宗の特徴である。正宗の巴里紀行ともいふ可き書には「畫家と巴里」といふ一冊が有る。文章の技巧には、取立てゝ言ふ可き巧妙なところは無いが、逸氣縱橫の概が有つて、無技巧と見る間に、なか／＼技巧が有る。頗る面白い滯歐記である。彼の友人の中

には、日本畫家の滯歐記の中の第一だと激賞する人もあるが、吾輩は、未だ廣く滯歐記を讀破して居らぬから、何とも斷言するわけには行かぬ。兎に角、正宗の滯歐記は面白い本であるといふ事は斷言し得る。藝術家としての彼の見解、態度、努力、文才、さては彼の人格も、此の書に表はされて居ると言つて差支無からう。無技巧……渾然たる無技巧の間に、技巧を藏するのが彼の文章であり、彼の畫であり、彼の人物である。彼は、世の中の事は分らぬやうな顏をして居て、なかく心得て居る。彼の畫が、七八年前から、吾輩の如き素人目には、上手か、下手か、俄に見分けの付かぬやうなものを畫きて居ながら、何となく人を引き付けて來たのは、無技巧中の技巧の力であつた。彼の人格は則ち彼の藝術である。

山本には未だ滯歐記の著述が無い。吾輩は山本の滯歐記が出來たら面白いものであらうと思ふ。正宗のと對照して、一層、興味が有るだらうと思ふ。然し、彼等の在歐中の態度は、必ずしも其の自記の文章ばかりで無く、小杉未醒の「畫筆のあと」、高村眞夫の「美術巡禮記」等に現はれて居る。其等のものと、正宗の滯歐記と、文章を比べて見ると、尤も精練されざるのが、正宗の筆で、而して尤も簡勁、直截である。彼の文は、「正宗の短刀」といふよりも、「庖刀正宗」といふ刀が有る。其の庖刀正宗を揮り廻はす氣分が漂ふて居る。

五

山本と話して居ると、警句、奇句、口を銜いて出で、咳唾も警句を成すといふ趣が有る。聞いて居る中に、自づと微笑まずには居られぬ位である。先年、彼が、佛蘭西に往く前に、吾輩の家に訪ねて來て、偶、靑木繁の話をした事があつた。其は、長閑な天氣の日で、主客とも佳い氣分になつて話に油か乗つた。而して話題が、山本の尤も快心の題目であるので、彼が油の乗り方は、實に高潮に達した。彼は、花が咲く如くに話した。吾輩は、此の以前から彼を識り、彼の批評、話方、警句を認めて居たが、此の時ほど彼の話に魅せられたことは無かつた。靑木繁は、吾が邦の洋畫界が

產出した一天才である。而して山本が唯一の崇拜する畫家である。彼の語るところに據れば、靑木が奔放の畫才は端睨す可らざるものであつた。此の日の山本の話は、極めて眞面目なる無數の警句を以て、靑木を、自由に、眞摯に批評して、靑木の音容が髣髴として眼前に現はれて來つた。吾輩は、嘗て靑木を見たことは無かつたが、山本の話に依つて全く靑木を理解し、印象したように思ふ。此の時、山本の用ひた警句は、換骨脱胎とか斷章取義とか、或は當意卽妙に他人の語を利用する等の種類のものでは無く、全く、前人未發の句に富んで、新味に充ちて居た。吾輩は、深く彼の造語の力を感嘆し、將來の彼の評論文に期待するに至つた。

先年、始めて谷崎潤一郎の小說を讀んだ時、其の文章に感服し、殊に、譬喩の才が非常であると思つた。而して谷崎の譬喩を感心すると共に、忽ち聯想したのは山本であつた。今日に於ても、依然として此の感想を有つて居る。然し、山本を正宗と較べて見ると、山本は警句に苦心するといふわけでも無からうが、兎も角、文章に苦勞する。正宗は苦勞しないと思ふ。

山本の批評及び其の警句は、彼の特色であると共に、彼は、其の警句の爲に累を受けることは無からう乎。彼の奇拔なる批評、及び警句は其の餘りに奇警なるが爲に、被評者に誤解され、或は、反撥、反抗を招致するような事は無かろう乎。往々、有るだらうと吾輩は想像する。犬養木堂の批評が、言々、毒舌である如く、彼の批評は、句々、警句である。木堂から毒舌を除けば、批評無く、山本から警句を除けば批評無し。彼等は、毒舌と警句とを用ひずしては、批評する能はざる人々である。若し、苟くも批評すれば、其が悉く毒舌と警句とになつて居るのである。毒舌や、警句は第三者に對しては、多くの興味を挑發するが、受評者に取つては、深い不愉快に襲はれることもあるらしい。而して毒舌と警句とは、天才と狂者との如く相接して居る。餘り多くの警句の所有者は、却つて幸福では無いかも知れぬ。山本のは毒舌では無い。

梅原良三郎の畫に對しては、山本は同情を有して居たらしい。然れども其の批評文は贅句が多かつた。梅原は、山本の批評に對し「愛すべき空想家山本君に」と題して答文を公にした。梅原は畫人であつた、文章家では無かつた。然し、空想家の一語は、山本に當つて居る。

六

未醒、柏亭等の諸人に較べると、世間では、山本、正宗等を餘程若い人と思ふであらう。何となく新進らしく思はれるところも無いでは無い。然し、事實に於ては、正宗は三十五、山本は三十六、未醒、柏亭より一つか二つ若い丈けである。寧ろ同時の人である。然れども畫人としての閲歴の上から見れば、山本、正宗は未醒、柏亭等に比して、著るしく後進である事も亦た事實である。世故を味はつて居る上から見ても、未醒、柏亭は既に老成人の域に入り、山本、正宗は、未だ若々しい人々である。

山本、正宗及び森田恒友は、美術學校の同期生であるといふ。彼等は在學中から轡を並べて馳聘して來た。入學試験には森田が首席で山本が殿であつた。山本には油畫の素養は全く無かつたのださうである。然るに次の學年には、山本が左翼一番から一躍して右翼先登になつた。かくして在學中、山本が首席を維持し、森田が第二席であつたが、卒業の時の席順は、再び森田が首席を占めて、山本が第二席になつた。かうして置かねば保證人に濟まないと、溫厚なる森田が言つたさうだ。正宗は勉强家で、山本は不勉强家のやうに思はれて居るやうであるが、在學中の山本は隨分、勉强して油畫を描いた。其の卒業製作も立派なものであつた。吾輩も一見した事があるが、其の時、山本が、青木繁にも賞められたと話した。彼の權威は青木繁であり、今日に至つても、依然として、彼の頭中には青木が權威である。

此の同期生の三人が、同時に、巴里の畫室生活を營んで居た事も面白い事實である。世間から無經綸のやうに思はれて居た山本が一番先に飛出して、巴里に往

つて一番長く滯在して、一番、多くの畫を見て、一番遲く歸朝した。山本ほど長く巴里に居た者も少かつた。正宗は、一番短かく巴里に居て、而して伊太利へは往かず、山本が讃嘆、驚喜するミケルアンゼロの大藝術を、正宗は見ないで、佛蘭西から直に歸朝した。此處にも山本と正宗との對照が見られる。山本は歸朝前に伊太利を游歷して、ミケルアンゼロを見た。それから希臘の藝術を見た。彼は、巴里に少く居て、多く希臘、伊太利の藝術を見た方が佳かつたと思つて居るらしい。正宗は巴里で畫を見、巴里で畫を描く氣分に憧憬して、孜々として畫に從事した。彼は努力の人である。彼は空想を追ふて進むように見えるかも知れぬが、彼は空想の人では無い。大なる光彩環が、高く彼の眼前に懸つて居るに相違ない。然し、彼は敏感、敏捷、行に敏にして、又た努力の耐久する人である。

七

正宗の「畫家と巴里」といふ本を見ると、かういふ事が有る。正宗が巴里に着いて間も無く、山本が彼を、レストランに案内する途中で、巴里、長く居るつもりならモ少し服裝に注意しろと言つた。正宗が見ると、山本こそ自分は數年越しのボロ服を著て居たと書いてある。巴里に於ける正宗の畫室は、物置同樣であつた。斜に細引を渡して洗濯物を懸け列べ、其の上にはバケツやら何やら雜然として並んで居る。其の一部で、彼は大眞面目になつて、勉强して畫を描いた。然るに正宗から見ると、山本の畫室は、全然、物置であつた。ヒドイ物置であつたと書いてあるが、吾輩は山本の方が、より多く物置であつた事を想像する。

正宗の記事の一節に、或一日、山本が訪ねて來て、計らず徹夜して畫論を試みた事が見える。山本が、吾々は寫實から出發せねばならぬと話した。クールベやセザンヌの自然描寫の畫論が出た。興奮して居たのであらう、何時の間にやら夜が明けかけた。鶯が鳴く。やがて紗窓から青白く空が見える。馬車や、電車の音がする。二人とも疲れた。「藝術の話を心に抱いて眠るのはいゝ氣持だ」と書いてある。

高村の美術巡禮記に、戀愛と戰爭といふ一章がある。其の中のKさんといふのが、鼎さんで則ち山本である。彼は失戀の人で、失戀の惱みを忘れるのが外遊の動機の一つであると記してある。而して山本は、巴里の鈴を付けた馬車を酷く愛して、懷の裕かなる時は、友人を誘ふて巴里中を乘廻はすのであつた。彼は酒を好み、酒興徐ろに昂がる時は、屡、戀愛に關する警句を吐いた。ストリントベルヒの「職業の隙に戀愛をする奴」といふ警句は、彼の愛する句であつた。彼は戀愛のイデアリストであり、彼は戀愛の幻影を逐ふて畫筆を執つた。大戰爭が始まつて間も無く、戰線が巴里から餘り遠く距れて居ない頃、本國に於ける戀人の結婚を聞いて、一時、沈鬱に落ちたが、數日の後、また元氣附いて、「ツイ百キロ許りの先きには、生命も戀愛も、喫茶と飛散つて居るんだ」と言つたさうだ。

吾輩は、巴里の彼から度々、繪葉書を受取つたが、彼は巴里に於て、日本的生活をして居た。日本の米を食ひ、醬油を飲み、漬物を漬け、つねに日本に居ると同樣の生活をした。最後には、畫室の一部に、疊を敷きて机を置いて、坐つて勉强して居たさうである。巴里に居て、日本飯の茶漬を食ふといふ事は額田博士の所謂安價生活では無い。事實に於て、一の贅澤である。質素なる高價生活である。彼の眼中には、巴里は畢竟、日本人の畫室的別莊たるに過なかつた。

八

吾輩は、多年、山本の版畫を見て居た。彼の版畫は、畫壇一品である。是は山本の貴い表藝の一つである。巴里に居ても版畫を試みた。油畫としては、寫實の一語が彼の性命である。彼の畫は、此の一語の上に立つて居る。彼の平生を知つて、若くは彼の評判を聞く計りで、此の秋、彼の畫を始めて見たといふ人は非常に多かつた。而して皆、驚かされた。彼の畫風の極く堅實なる手法であるのに、驚かされた。彼の畫は、其の人物の天才的、警句的なるには似ずして、極めて堅實なるのは事實である。色彩も美しい。佳い色である。色の數が多い。少しく派手であると言つた人もある

が吾輩は左ほどには思はぬ。然し院展の彼の畫の中で、モスクワの夏も佳いが、色彩の數の少いブルダニュの夏は、落著いた氣分を見せて佳作であると思つた。彼の爲にも會心の作であるらしい。食後も、自畫像も共に佳い。彼が堅實なる手法で作られる彼の畫には、駄作は少いわけである。尤も未完成で終つて仕舞ふ畫は、隨分、少くは無いように見える。發表せずして仕舞ふのも中々あるらしい。彼は、雲の如くに來去する人であるが、彼の藝術に對しては、決して、寸毫もズボラも無ければ、不都合もないらしい。

今日に於ける彼の態度は、畫家として稱揚に価するものである。正宗は、阪本繁次郎の態度を、畫人の理想的であるとして賞めて居た。吾輩の見るところでも、阪本は靜かなる畫人である。彼は短身瘠軀、鬚振までも凡帳面な人である。畫家の中で、彼は擊劍には堪能な方であると聞いて居るが、定めて眞面目に稽古した擊劍であろうと想ふ。彼は靜なる人で、靜かな畫を描く。彼は、雜司ヶ谷あたりの靜な郊外に閑居して、畫きたいものだけを畫いて居る。生活にも、健康にも、何等の壓迫をも受けざる畫家である。二科會には安井曾太郎とか、梅原良三郎とか、有島生馬とか生活上の呑氣な人は有るさうだが、阪本の如くに、無條件に閑靜な人は少い。而して獨り超然として、其の靜を守るを得るのが阪本の生命である。又た現代の畫壇に、殆んど唯一、無二ともいふ可き畫人であるといはれる。此の點に於て、正宗も山本も、共に、阪本に垂涎して居るらしい。然し、太甚しく閑靜な畫人の畫は、衰へるものであるが、阪本の畫はつねに世評に上りつゝあるのである。彼の畫は淡い。而して正宗、山本ほどの元氣が畫面に漲ぎつて居らぬ。

九

正宗の努力は稱揚す可きものである。彼が、巴里に滯在中も、汲々として畫を作つて居た。其の日記は、畫日記であるが、歸朝後も亦た怠らず努力して居る。此の秋の出品を見た者は、先づ彼の努力を賞める。彼が畫くのは、時間がかゝる。なか〳〵手法が緻密で、丁

寧である。或人が三四日で出來るものを、彼は十四五日を要する。滿谷とか吉田とかは早い、健筆である。未醒も健筆で極早い。興趣が筆を驅つて行くのである。是等の諸先輩に比して、速力から見れば、正宗も山本も遲筆である。殆んど問題にならぬほどである。其の畫と色彩とを一見しても容易に認められるのである。然し、同じく遲筆といつても、正宗と山本との間には逕庭がある。正宗は、斷えずパレットを手にして描いて居る。山本は考へて居る間が多い。考へては描き、又た打放つて置いて考へて居る。或場合には一枚の畫の完成までに、非常に時日を要する事が珍らしくは無い。彼が、空想家といはれる半面の理由は、かういふ邊にもあるのであらう。

正宗は、攝取力に富み、又努力して攝取の効果を發表して居る。彼の尊敬する諸大家の畫が、彼の畫心の澄水の中に、投げた石のように飛込むのでは無い。投げられた石は、水中に受取るけれども、再び浮き上がつて來ない。繪具の塊を投げたように飛込むのである。やがて其の澄水に融けて色彩となつて水面に浮き上つて來る。

山本と正宗との畫には、手法の上に、二人の畫才と人物とが表現されてゐる。山本のは一種の手法であるが、正宗の手法には、種々の異調を發見する事を得る。譬へばルノワールとか、セザンヌとか、マチスとか、モネーとか、諸大家の影響が彼の畫に現はれて來る事である。彼は、勉强家で、且つ明敏である故に、諸大家の好處を發見すると、其の會心の處を自分の手法に取入れようとする。其の明敏と努力とは群を拔いて居る。彼の進步、發達の上には、此の如き行程が運ばれたように見える。而して今日となつても、此の行程は未だ續いて居る。彼が自分の獨特の一家の手法を以て、是等の特異の數多き手法を統一する時が則ち彼の大成する時である。今日に於て、彼が獨特の手法が、漸々、領分を廣げて行くのが分る。吾輩の友人の中には、吾輩と共に、彼の畫を見た時彼の巴里の作品の方を擇んだ人もあつたが、吾輩は、彼が歸朝後の製作

の方を好いと思ふ。彼が獨特の眞面目の、次第に現はれて來る故に。

十

此の二人が、現在に於て、共に、畫室を持たぬ事も同じである。山本は今年歸つたばかりであるが、正宗は去年歸朝した以來、未だ畫室を作らぬ。來年、作ると言つて居る。今日までの彼の製作は、皆旅行中に出來たものばかりである。此の勢で、推して行けば、畫室は無くとも構はない。山本も、其の通りである。先日、吾輩は岡落葉と共に、正宗を訪ねた。久し振に鼎座して快談した。先年、初めて彼を訪ねた時も、落葉に案内して貰つた。中澁谷の、彼の閑かな小さい庭に、彼が奈良から持つて歸つたといふ石佛が置かれて、檐の下には、大きな金色の額縁(ガクブチ)などが突込んであつた。少し破損して居るといふた。山本は田端の臺に寓居して、彼の二階から西南、藍染川の空を見れば、田端の森林に圍繞されて、斯身は、緑葉の梢の上に居るようである。二人とも、考へる爲の家であつて、畫く爲め家に居るのでは無い。彼等が、此の如き生活を續けるのは、最早、長くはあるまい。併し、長く續けて見るのも宜いかも知れぬと思ふ。

此に於て、吾輩は想ふに、彼等の保護者たらん者は、彼等の爲に、畫室を提供するよりも、寧ろ、つねに旅費を供給して、彼等をして旅行を續けさせ、懸軍萬里、以て、開放したる大畫室の中に、彼等の頭腦を養ひ、彼等の畫を作らしめた方が宜くはあるまい乎と思ふ。殊に、山本の如き性格の人物に對しては、保護者たらん者は、須らく速に報酬を要求せず、悠々と其の成果を樂しんで居る方が善かろうと思ふのである。

吾輩は、此の二人の人と畫とを評論するに當りて、彼等が、つねに其の所信、所思を隱くさず、抑制せず、放たれたるその精神を以て、人と自然とに對しつつある事を喜ぶ者である。尚ほ此の二人の話を終るに臨み、二人と因縁深き森田の事を忘れてはならぬ。森田も亦た美術院の同人である。彼も山本と同じく、美術院に入つたのは、未醒との友誼的關係に本づくのであろう。

此の秋に於ける彼の畫は、彼の本領を發揮して居た。彼の畫は、眞面目で穩健であるが、表現は弱く見えるのは惜しい。正宗や、山本の畫と人とに見えるやうな强い表現力は、森田には見えぬ。然し森田には、其の畫に於ても、性格としても、此の二人者以外に、一種、尊い天分を有して居る。吾輩は、彼の健康を祈る者である。

此の稿を終る前に、柳陰君が、山本君を訪問した歸途だといつて、吾輩の宅に來た。彼は、山本に面會して、院展の作品及び二科會に對する批評の名文を見てから急に貴君の信者になつたと話したら。山本がニコニコして、嬉しいなと言つたさうだ。天眞爛漫なる彼の面目が躍如として、目の前に見えるやうである。

九月二十三日　　健窓生再記、

今秋美術界の新收獲（一）

美術院と二科會

▽最も現代的なる作品

紀　淑雄

今秋は未だ美術の季節と云ふものゝ、二科會と美術院の展覽會位のもので、其他異服店などに一二の展覽會があつたやうであるけれども、さして注意を惹くやうなものも記憶して居ない。二科會も美術院も今年は去年よりもより多く人の足を牽いて居る。從て種々の方面の人々に鑑賞されるやうになつた。それに又作品も、量に於ても質に於ても、去年よりは幾分進歩の跟を示して居る。然し今秋　美術季節に於ける新らしい收獲として見るに足る程の價値のある作品、若しくは今秋を紀念するに足る作品が果して幾點あらうかと云ふに至つては、之れに對する答は容易でないやうに思はれる。素より多少の特長又は藝術的價値の幾分を備へたものは、二科會にも少くないし院展にも有る。二科會に於ける林倭衛氏の「小笠原風景」三點の中一點と、有島生馬氏の「かなりや」正宗得三郎氏の「曇の海」などは色調に或る印象を感じ、松岡正雄氏の「黑猫の居る風景」に表はれた氣分は、今も印象が消えない。然し是等の程度で今秋の新收獲と云ふならば、多少の特長を有つた作品は恐らくは其の例に入れなければなるまい。で此處では先づ新らしい何等かの試みの表はれた作品、もつと正確に云へば比較的現代的で、現代への新らしい要求に多少觸れた如きものを、今秋の新しい收獲として舉けたい。此意味で云へば舊い美術の樣式を復古したものも勿論入れられる。然し院展の富田溪仙氏の「風神雷神」や山村耕花氏の「駱駝」や横山大觀氏の「秋色」などの如く、其の形を寧ろ多く宗達や光琳、若しくは長崎の田島などを描いた豐臣時代から德川初期頃の作品の古描法及び司馬江漢などの古畫などに取つたものは、復古と云ふよりも其多くは形に多少或る試みを惱した如くであるから、此等の種類の復古的なるものは、今秋の新收獲の中には入れられぬ。殊に其作の出來榮えの好くないものの如きは勿論の事である。

斯くの如く見解を限つて來ると、特に今秋の新しい收獲と見るべきものが段々少くなつて來る。院展の山本鼎氏の作品中、小品の或るものに強き印象を得たが、其等は院展のみならず今秋の美術季節の一種の花と見ても可からうと思はれる。又院展の日本畫では小林古徑氏の「竹取物語」速水御舟氏の「洛外六題」、川端龍子氏の「神戰の卷」の如きも、新ら

しい收獲として見られる。「竹取物語」が浪漫的な物語を、所謂浪漫的に、物語的に、古典的に描いた點を、或は復古的の價値あるものと見れば見られやうし、或は新しい試みをした繪卷物ともせられやう。然し之れも注意を惹くべきものではあるが、其の形は古典的な古い繪卷物に多少囚はれて、新しい現代の畫家としての試みは二の次ぎになつてゐる。「濟外六題」は南畫殊に文人畫を基礎として、それに種々の新しい試みをしたもので、之れも亦復古的のもの、又は新しい南畫的のものと云ふ人もあらう。けれども此作品を今秋の新しい收獲とするには餘りに藝術的の特長に乏しい。新しい種々の試みの試みられて、而かも其の効果の十分に藝術的に示されてない點は、藝術的の價値の上より見て之を新收獲のものと云はしむるに難からしめてゐる。

若し今秋の新收獲のものとして、私の見解により近いものは川端龍子氏の「神戰の卷」である。之れは嘗て讀賣新聞に於て批評した如く、私には現代人の新要求に幾分應じた點が著るしく見えてゐる。其形に於て、殊に表現法に於て、洋畫と日本畫の或る傾向を一方に強く發展せしめ、又其の技巧や表現に種々の智的な性質を帶ばしめた點、問題や疑問や刺擊を直接要求して最早や單純な古典的の藝術に何等の興味を感じなくなつた現代人に多少應じ得た種々の試みは、他の作品よりもより多く「神戰の卷」に試みられてゐる。日本人の洋畫は遺憾ながら印象派以後の諸傾向や諸大家の特長を知つたものには、寧ろ單純過ぎるやうに感じられる。其の與へられたる問題や表はされたものは、我々日本人又は我々現代人には寧ろ間接的である。云ふまでもなく歐羅巴に起つた近代の藝界の諸々の主義や傾向や疑問などが、それと同じ強さまでは行かんでも、幾分意識的に日本に於ても解釋せられ、研究せられ、答へられてこそ、初めて我々日本人のものと見られ得るけれども、多くは輸入的、若しくは模倣的若しくは直寫的のものには、我々の生きてゐる、此の現代の興味が直接に密接に感じられない。此意味から云へば元來我々のものである日本畫、即ち毛筆で描いた繪は我々により多くの關係を有つてゐる。多くの油繪殊に二科會や院展の注意すべき作品よりも、或は藝術的な價値に乏しいかも知れないが、兎に角我々現代人に比較的多くの問題や刺擊や興味を與へたものは川端氏の作である。私は此點から今秋の新らしい收獲の著るしいものとして氏の作を先づ第一番に舉げたい。

文展を前にした彫刻界では、美術院の彫刻のみであるが、十點内外の個々の彫刻には、上に述べた意味の新收獲と見らるべきものは殆んど無い。唯、内藤伸氏の「沼の乙女」の浪漫的でありながら、少女の顏に現代的な憧憬を感じて、暫く足を停めたに過ぎなかつた。（談話）

▽洋畫界のヌーボー

山本鼎

▲新進とはつまり、同人以外の前途あり氣な、其名の私の耳に新しい若

千の出品者を指したので、二科にも院展にもある。

▲鋼井克之は二科に『河岸の家と木』といふ油畫を出して居る。豐潤な彩と、飲味ある卒直な調とは所謂質の良い事を示して居る。併し院展に及第した『軍鷄』のやうな器用なまねが募れば危い。

▲横井弘三の畫は面白いと馬鹿氣で居るとの金合にある。あれが『機智』から來た表現だと駄目だ。或はうまくなると悪くなる人かも知れない。『田園の夕』が少しそれを現して居る。

▲二科賞の林倭衛は、器用者だ、手練はあるが實がない。

▲椿貞雄は深く行きさうな人だ、趣味よりも自然に惚れかゝる人だらう。

▲松岡正雄の微細描寫はきつと追隨者を出すだらう。併し、此人の自然觀がもつと活氣を帶びる時此人の細緻描寫は捨てられるだらう。

▲長島重は兩脅掛け持ちだ、一枚も九枚も同じやうな畫だが、畫の整頓には長けて居る、そいつが此人を堕落させさうだ。

▲萬鐵五郎はヌーボーと云へぬかも知れないが、活潑な畫才は、前途を待たしめるし、又危ぶみもさせる。

▲保田龍門は温和な畫家だ。小手先は利かぬとも、畫の生命は一歩々々醇味を加へてゆくだらう。

▲海老名文雄は、冴えた手練を有つて居る、惜しむべし、趣味に自然を當てはめて居る。

▲水木伸一の堅實は胸苦しい。少しも詩人的な醉味はない。希臘の神韻に遠い洞逸風の强調――。

▲中田三也の畫學生風の迫眞力は飾り勝くはある。併し「女」の體は眞鍮製のやうに堅く、肌は垢だらけのやうに不潔だ。つまり此人の迫眞力は大切なものを逃して居るのだ。それは「肉體のナチユール」といふ事だ。

▽心に殘れる諸作から

澤村胡夷

二科會に對しても、美術院に對しても、自分は可成に大きな而して可成に多様な期待を有つてゐる。けれども其期待は要するに私自身の恣な智力と想像力との堆積に過ぎない。從つてその期待が餘りに大きかつた爲めに、今秋の二科會に對しても美術院に對しても、自分が甚しく失望したとしても、自分だけで處理すべき問題であるかも知れぬが、その原因如何に拘らず、私が一時は甚だしく失望した事だけは確かな事實である。

けれども私の放恣な期待を蹂躙して、一度より二度、二度より三度と眺めてゐる中に、漸次に私の心を喚醒ますやうな作品が心の中に映じて來た。而して私の胸に最初にわだかまつた失望の影も少しづゝは薄らいで行つた。しかし尙ほ現在の私には失望の象が全く取去られてはゐないのである。かやうな力弱い記憶から、私の觀去り觀來つた幾多の製作を

喚覺ますと、新らしい多少の興味が喚起されないでも無い。二科の西洋畫に於ては正宗得三郎氏の海岸を描いた二作、殊に『犬若の海岸犬若の岩』などのほか、岸田劉生氏の『静物』、津田青楓氏の『早川し頃』梅原良三郎氏の『風景』等が注意を惹いたが、之を全體の上から云へば、大作のものに注目すべき作品乏しく、寧ろ小畫面のものに於て、やゝ深き省察の加へられた作品を認める。此傾向は美術院に於ける洋畫に就いても同様であつて、小杉未醒氏の『暁靄山彦』の如きは、寧ろ苦心程には其藝術的効果を示さないもので、氏の特調は却つて『西湖』のやうな小作品の上に發揮せられてゐるのである。

日本畫に於て美術院の諸作の中から、川端龍子氏の『神戰の卷』、小林古徑氏の『竹取物語』、速見御舟氏の『洛外六題』等を取去ると、殘りだけでは可成に寂莫を感ずるであらう。川端氏の作品は二荒縁起を闘したものだが、是は昨年の『霊泉由來』ほど諧趣を帶びてゐないのみならず、彼れよりも總べての技巧に於て緊縮した氣味がある。けれども其技巧の精鋭を加へて來た事と、その意想の縱横自在な事と、その閃々たる才鋒の隨所に現はれてゐる事とは、此作をして場内諸作中特殊な地位に置かしめる。其作法が洋畫を咀嚼して之を日本畫の風致に誘導したものなる事は云ふ迄もないが、其輪線は之を省略して急所のみに投入し、其大部分は濃厚な色彩を以て沒線的の作法に從つてゐる。此畫を觀る上に於て、各画を獨立に考へる時には、聊か單調の嫌いが無いでも無い。が、然し此畫の特調から云へば、其苦心は色調上の效果に留意し、各段相互的に關聯連結してゐる點にある。然るに小林氏の『竹取物語』は技巧上の態度頗る復古的であるから、此點に於て川端氏と多少方向を異にしてゐる。『竹取物語』の技巧は所謂隆能源氏の畫法のほか、天神縁起を始め、朝鮮古墳發見の壁畫に於ける意匠技法等を參酌してゐるのだが、是等技法の驅使に就いては、作家の練熟學習の手腕は充分に認められる。けれども作家は靜的なる技法に卽して、他の動的なる一面を顧みやうとしてゐない。此點に於て文學的作品としての竹取物語を內面的にも外面的にも解釋して行くに就いて、甚だ徹底的ならざるものがある。そはともあれ小林氏がかく精細の描寫に耽つてゐる事は、一面に於てその前途を危くするやうな結果に到達せないかと懸念せられる。氏は今や餘りに旣成品たらん事を急いでゐるもののやうであるが、氏は尙ほ今後努めて未成品として自己を保留せねばならない。要するに『竹取物語』に於ける全局の缺點は、すべて其氣魄の纖弱に過ぎて、底力を有せない事である。此點に於て氏は川端氏が思ふ儘に放縱に、事象を消化して行く方面に一瞥を與へる必要がありはせないか。

速見氏の『洛外六題』は小林氏の謹細緻密な描寫に對して好個の對照をなすものである。氏は細闊な毛筆で、極めて放縱な仕方に於て、洛外の實景を描寫してゐるのであるが、その畫法には種々な要素を混じてゐる。けれども其精神は事象を內面的に觀察し、之れに基いて作家の情趣を流露せんとしてゐるもので、畢竟所謂南畫の精神を以て、自然描寫を試みたものに外ならぬ。其淸新の氣の潑溂たる所は、若い南畫の形式的

反復以外に立つて、新領域に入らむとする事を暗示する様にも見える。横山大觀氏の作品にも亦此種の主張を暗示してゐるものがある。無論その技巧の性質の如きは大に異つてゐるけれども、かの『雲來去』の如き、即ちそれである。此畫は可成に作家の苦心を想起せしめるものだが、到底それは氏の『達磨』の直截簡勁な手腕を發揮したのには比すべくもない。とにかくも大觀氏の『達磨』のほか、川端、小林、速見の諸氏の努力は、その成果の如何に拘らず、今秋に於ける日本畫界の注目すべき出來事とせねばならぬ。

▽兩展覽會に對する寸感

正宗得三郎

僕は是迄いろんな處から頼まれて書いたり、遂自分でも喋りたくなつて喋つたりして來たが、創作に心の傾くに從て批評する興味は餘り起らない。批評となれば全部に眼を着けて、自分の感興を惹かない作品までも觀て、之れを又文字の上に配列しなければならない。特別に自分の感銘した作品は褒めずにゐられなくなる。その時には批評も意味があらうが、所謂の批評としての一々批評を下すのは非常に詰らない事だと思ふ。之れは自分が作家であるからに、さう感ずるのかも知れない。

院展の洋畫は、質に於ても量に於ても洋畫としての價値に乏しい。ただ今年は新に參加した山本鼎君の作品丈けが我々に共鳴してゐる處が多くあつて、いろ〳〵感興を以て觀る事が出來た。山本君は洋行前から見れば、畫品なり、色彩なり、畫に對する立脚地なりが好くなつたやうであるが、然し山本君の本當の獨創的な處の出るのは今後だらうと思ふ。森田（恒友）君の二點は如何にも畫面が生氣が無い。も少し今の生活を向上さして、內部生活が豐富になつたら、作も好くなつて來るであらうと思ふ。院展の洋畫に就いては先づ此れ位。

二科會の同人諸君は兎に角皆夫れ〳〵の研究があるし、我々に感ずる事が最も多い。尤も高いレベルから見れば二科の作物もほんの出來合の氣がする。二科も成るだけ同人が他の展覽會に出さずに、此會にだけ出すやうになれば、會員だけで立派に一つの展覽會が出來ると思ふ。二科の人は今各自その作品にあきたらないだらうが今四五年も經てば、多少獨創的な立派なものが出來ると思ふ。自分を始め同人は、何よりも先づ外部でなく內部生活を充實させたいと思ふ。

院展の第一部から引いて日本畫に對する自分の一番の疑は、或人が云ふやうに、今の日本畫家が現代の事を題材とせずに、過去を題材とするのが詰らないと云ふのではない。題材を現代に取り、過去に選ぶと云ふ事は第二の問題として、現在自分がまのあたり觀たり感ずる自然や、我々の感情や智識と日本畫家の作品と一致しないのが不滿なのである。之れでは畫と彼等畫家の生活とが離れてゐる。も少し畫を生活と共にしやうとするには、從來の表現法が自然變つて來なければならぬ。例へば繪卷

物などがあるが、古くあつた同じ意味の繪巻物を、僅か色彩とか表現法で變へただけのものであらうと思ふ。これでは趣味の變遷である。日本畫の材料其ものが詰らないと云ふよりも、作者が今迄の凡ての習慣性に囚はれて居て、今日の作者其ものゝ生活でないから詰らないのである。これでは日本畫の前途に光明がないではないか。（談話）

▽院展の逸品

笹川臨風

今秋の院展會場に於ては、横山大觀の「雲來去」を推して逸品第一とす。

氣魄雄大にして深厚、格調高逸にして、逸宕。南畫の精神を現すに北畫の風趣を以てす。溫潤の氣、畫幅に滿ちて、雲烟眼前に徂徠するの興盡きず。湖上の大觀殆ど此に集れるやの觀あり。若し夫れ難を言はゞ、樹木の配置と、近景の一山巓とに議すべきものなきにあらずと雖も、畢竟するに之れ白玉の微瑕のみ。雲烟の變幻、巒樹の出沒、殿閣の參差、水禽の浮きつ宿りつする、水波の鍛角に、鳥の足掻に白く泡立てる、佇立して久しく凝視すれば、身も畫圖裡に入るの思あり。自然と作家と觀者と渾融して冥合するものと云ふべし。今春琅玕洞の展觀に於ける「歸去來」は、更に一段の進歩を經て、此に「雲來去」となれるなり。蓋し之れ大觀傑作中の一にして、今秋の藝術界に於ける、最も優秀なるものたるや、論なかるべし。他の展觀諸作が多く弱々しく、影の薄きに似ず、「雲來去」は亭々として、獨り、己を昂うす。雄大の氣會場を威壓し、力强き男性美を發揮し殆ど餘蘊なし。

次號には

「今秋美術界の新收獲」（二）

として文展の批評を掲載すべし

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

新學年開始二校外生募集

早稻田大學

大隈總長統裁ニ經營三十餘年

政治經濟科講義

法律科講義

文學科講義

中學科講義

商業科講義

各科十八ヶ月卒業
第壹號十月初旬發行

見本ツキ規則
申込次第直に送付すべし

中學入校同樣
十月一日第一號發行
見本附規則申込次第呈
大特典（提供入學好機）

商業講義は春期新學年開始。何時にても入學せしむ。

（中付二の三）

東京牛込 早稻田

早稻田大學出版部

振替東京 一一二三

■岡田播陽氏著■

（是れ地底の熱火乎晴天の霹靂乎天下の奇書）

新刊發賣

東京 京都 大阪 三都生活

此書恐らくは大正出版界に於ける空前絶後の最大奇書たるべし。著者は現代都會生活の一切を呪ひつゝしかも新生活新生命が都會の那邊に潜在し夜明けむとしつゝあるかを叫びつゝあるものそして本書の内容は政治・實業・藝術・思想・宗教等のあらゆる方面より東西三京の生活を嘲評痛罵したるものなり「贅六町人」たる著者播陽氏素より賣文賣名の徒にあらずして此の奇書を公にす豈に胸中綑羅たる不平の氣終に已むを得ずして發するものに非らざらんや、敢て大方の一讀を希ふ。

目次の一斑

都會—獸の都大阪—女性の京孃と男性の東京—八百熊親分—三都の女—三都と人形—三都の玄關口—三都の青葉—三都盲人待遇法—三都の家屋—贅六と金—極惡惡人—殺人犯罪—狂蕩子無腸—私生兒—三都の子供—煩惱即菩提の都—古い京都—乞食—生のつかれ—寢入り込んだ京都—三都の火事—帝都と大阪—江戸ッ子と嘔吐ッ兒—三都人の特質—山の手と下町—贅六と喧嘩—大阪人と支那人—京都人と朝鮮人—三都商人氣質—盗む東京賣る大阪貰ふ京都—金招牌の蝕入—人員調査—箱根と有馬—土臭い都會—贅六と信仰—大阪の藝術—文展—繪畫より觀たる江戸と京阪—三都の名畫家—大璽中齊—文明の兩性と其消長

四六判最上製美本

正價金壹圓四拾五錢

郵税金八錢

繪畫執筆者

太田喜二郎　大谷句佛　土田麥仙　北野恒富　野田九浦　水島爾保布　島成園　菅楯彦　河合新藏

三色版四葉　寫眞版十數個

忽ち再版

東京帝國大學講師 紀平正美先生著

改訂 人格の力

四六判最上製全壹冊

正價壹圓

郵税八錢

本書は今より十一年前に一度江湖に愛讀を得たるものであるが其後久しく絶版せられてゐた然るに昨年末に其姉妹篇たる『自我論』を出版したに就て再び讀者からの要求が出たので同書の出版者からして再び世に出ることになつたのであるから其儘での再勸は到底許すことが出來ない、それで全部書き改めて自分の責任を新にしたのである。もと四拾錢の定價のものが壹圓になつた内容にそれだけの差があるか否かは讀者の判定に待つべきであるが自分からは時代の推移と諦められん事を願ふのてある。

—（著者識）—

東京市神田區表神保町七番地

■大同館發行■

振替貯金口座東京八七二番

人物評論（八十六）

所管各方面に盛ん
活躍しつゝある

仲小路農相論



▽剃刀農相仲小路

鐵拳禪

一

サーベル首相の下に、剃刀農相あり、仲小路廉と云ふ。其の器素より事務官級の手腕家に過ぎずと雖も、他の伴食級を超越して、虚名の副首相後藤新平、實力の副首相田健治郎等の壘を摩せんとするは、其の凄味と切味との尋常ならざるものあるが故ならずんば非ず。其の凄味と云ふも素より剃刀なり、其の

切味と云ふも素より剃刀なりと雖も、事務上に善用するの鋭利さに至りては、名實の副首相等の及び易からざるものあり。後藤は才氣縱横、生彩煥發、而も包容力を有す。金づかひ荒き浮氣娘の、少からざる魅力を有するに似たり。田は一見重厚の風あるも、奇策百出、殺活擒縱の計を藏す。苦勞仕抜きたる、如才なき年増の、捉へて放たざる程の腕はあり仲小路に至りては年齒漸く五十四、性來の怜悧と、苦學力行の強き反撥力とは、今尚彼れが功名心を喚び、動もすれば他を排して自己を立せんとす。其處に彼れの獨斷と狹量とを暴露し、衆愚の慴服を贏ち得ること能はず。宛然怜悧なる孤兒の院長の目色を覗ふに巧みなるも、友人との折合宜しからず、憎まれながらも他を威嚇しつゝあるに似たり。然れども、彼れが實際の手腕力量を少しく誇大に評價する時は、彼れは稍やかなる一面を去りたる後藤と、辛辣の覇氣を脱したる田とを併せ、更に新に法理の冷靜を加味せるの人物なり。故に彼れは後藤の有する或物を有し、又田の有する或物を有す。其の或物を有するが故に、彼れは一面實業家にして遊説家たり、他面事務家にして策士たるなり。

仲小路の剃刀の綽號を頂戴せるは、今日に始まれるに非ず。その綽號の一般的となれるは、遠く遞信次官の際にあり。剃刀の稱、早く外相陸奥宗光の上に加へられ、其の手腕の外交上に働き、辛辣にして、痛快なるを讃嘆せり。蓋し剃刀の形容、其の能く切れると謂ふ感じを現はせるなり。其の能く切れるに由りて、陸奥は剃刀大臣の名を得、仲小路は剃刀次官の稱を頂戴せり。今その感じを云はんか、一は日本剃刀の如く、一は西洋剃刀の如し。其の輕快なる鋭利さを思はしむるに於て、後者或は前者を凌駕せんも、其の沈着なる切れ味に於て、後者は到底前者の敵にあらず。仲小路の切れ味、時に危險を思はしめたるも、其の手腕の事務上に止まりしが故に、年來の鍛錬に由りて大過なきを得たり。剃刀の稱既に舊時の稱呼に屬し、今日之を冠するの妥當ならざるが如きも、其の刃の未だ缺損せざるのみならず、其の鋭利の素質を愈よ發揮し來る以上之を襲用して剃刀農相と云ふ、決して失當の綽號なりとは信ずる能はず唯彼れが果して剃刀の鋭利さを以て、縱横無盡に切り捲くるを得るや否やは、今後の施政に徴せざるべからず。

二

剃刀農相仲小路は德山藩士の倅にして、伯兒玉と郷關を同じうす。然り、郷關を同じうせりと雖も、彼れの今日あるは、兒玉の推薦に由らずして、子清浦の抜擢に因れり。官途の系統より觀れば、彼れは正に清浦系の人物なり。清浦は西海の産なるも、薩長の二大勢力圏上より觀る時は、長閥圏内の一人物なり。從つて仲小路も亦、同一圏内に屬す。既に彼れは長州出身にして、長閥圏内の人物なり。その派の武斷文治の何れに屬するを問はず、甚しき馬鹿に非ざる限り先輩の推輓によりて隆達すべき、當然の好運を有す。況んや彼れの如き、半地を擡げて太き芽の如く獨立し、鮮明に頭角を現はしたる人物をや。彼れの學閥を負はず、苦學力行して、官界に擡首し得たる所以のもの、一に學閥より以上の大勢力たる、長閥の背景を有せるためならずんは非ず。

彼れは明治の初年父に伴はれて大阪に出で、中學を卒へて開成校に入り、英法學を研鑽して得る所あり。父の歿後、兄の任官するに隨ひて浦和に赴き、兄の歿後を奉じて神戸に出で、神戸裁判所の書記となり、傍ら英和學校に教鞭を執ること約二年、司法官の考試に應じ、優等の成績を以て登第す。是れ實に、彼れが二十一歳の時なり。初て神戸の檢事に擧げられ、次で横濱を經て、東京に轉ずるに及び、茲に其の鋭利なる舌鋒と、辛辣なる手腕とを揮ひて、法曹界の耳目を惹くに至れり。就中彼れが金玉均暗殺事件の主任檢事となりて苛酷なる檢擧を敢てせるが如

き、東京市鐵管事件の主任檢事となりて收賄檢事森と共に贈賄者横野函宮の家族及び技師野呂等の罪狀を査發して剰す所なかりしが如き、遼東還附の際に於ける尾崎等六派連合の政社法違反事件の主任檢事として冷靜水の如き法理を以て諸名士の熱辯を論駁せるが如き、森嚴苛酷、苟も假す所なきを以て、其の名を知られたるなり。斯て彼れは登用されて司法省參事官となり、時の法相清浦の値遇を得、その材幹を伸すの機會に接せり。

當時、法相清浦は首相山縣の智嚢として、却々の勢力あり。條約改正の機迫れるを以て、全國法官中より九名を選拔し、之を歐洲に派遣して治外法權撤廢後の裁判に資する所あらんとせり。何等學閥に負ふ所なき仲小路は、他の學閥出身者八名と共に、其の選外法官の一人に加へらるゝ事となれり。法相清浦の紛々たる群議を排して、特に彼れを拔擢せるは彼れの優れたる材幹を認識せること勿論なりと雖も、亦長州出身たるの關係なくんば、如何ぞ斯の如くなるを得んや。而して彼れの怜悧なる秋霜烈日の如き鬼檢事として先づ自己の存在を廣告し、次て長州の大勢力と結んで、其の地歩を占め、更に司法官增俸問題を提けて、其の俠骨を天下に傳らんとす。歸朝後彼れは選外八法官を結束し、司法官增俸を法相清浦に迫りて容れられ、議會に提出せしも下院に於て否決され。翌年再び法相金子の同意を得て議會に提出せしも、新事業削減の理由の下に葬り去られたり。三たび增俸問題の起るに及んで、彼れは運動の中心となりて活動し、全國法官の裁判休止を見るの事態をすら惹起せしが、彼れは毫も世上の非難を恐れず、一意之が通過に盡力せし結果、上院の是認する所となれるも、下院に於て又もや否決の運命に遭遇せり。玆に於てか、彼れは同志の一人なる長森藤吉郎と共に辭表を提出し、法相金子の留任の勸告をも聽かずして、決然參事官の椅子を蹴つて去れり。その默々ッ兒同の態度、或は稱すべからずとするも、夫の責任を自ら負ふことを知らずして、その椅子に噛み付く者に比すれば、優ること萬々地獄の沙汰も金次第と云ふと雖も、鬼檢事の增俸運動に失脚して、硬骨參事官の名を得たるは、蓋し一種の皮肉ならずんは非ず。

三

仲小路は鬼檢事、若くは硬骨參事官と稱されたるも、無味乾燥の法理一點張の人にあらず『中庸』の愛讀者なり。泰西文學の玩味家なり。文才を有し、韻致を解す。新聞記者乃至雜誌記者としても相應に飯の食へる男なり。醒軒と號し、南柯小史と稱して草する所の物を見るに、簡潔にして暢達、而も多少の情趣あり。彼れが司法官勇退後、著述に生きんとせるは、己れの好む所に進まんとせる者なりと雖も、克く幾許の發達を見るべきや疑なき能はず。官界は、蓋し彼れの適所たりしなり。

男後藤の先年遞相を辭して野に下るや、指を出版界に染めんと云ひ、或は著述に專心せんと云ひしも、跡を政界に絶つ能はずして、躍起運動乃至裏面運動に腐心焦慮せり。出版は男の柄に非ず、著述も亦得意の業に非ざるなり。其の玆に没頭せざるは、己れを知る者なり。尤も男に著述無きに非ずと雖も、その自ら執筆せるもの幾許ありや。吾人は新平の筆蹟を知るも、未だ自筆の文章に接したる事なければ、如何の文才を抱くや之を覗ふこと能はず。侯大隈は口頭の新聞記者なり。雜誌記者なり文章家なり。一筆を動さずして、能く天下の一大論文を成す。男後藤も亦、口頭の著述家にあらざるや。仲小路は自ら想を構へ、自ら筆を執り自ら文を草す。近年の著述にも、何とか云ふが有る筈なり。彼れの關係必ず著述を試みんとする、後藤の夫れとは其趣を異にす。併し野に下れは、乃ち著述に生きんとするは相當たり。

伯芳川の第一次桂内閣の遞相となるや、仲小路は登用されて官房長と

なり、再び官途に蘇生せり。長州の庇蔭は、太き芽蘖の芽を、飽までも培養せずんば歇まず。芳川の内相に轉ずるに及んで、彼れは土木局長に進み、次で警保局長となり、鬼檢事の怪腕を再び揮ふの機に會せり。第一次西園寺内閣の時、彼れは早くも儕輩を拔きて、小山縣の下に逓信次官となり、爾來逓相堀田・後藤の三代に歴仕して、第二次桂内閣の時に及べり。此の間、彼れは鐵道國有を完成し、剃刀の切れ味の如何に凄きものなるかを示せり。然りと雖も、彼れの剃刀次官と稱されたる所以のもの、長州の勢威を頼み、無能大臣のあれども無きが如くに振舞ひて、省内を切つて廻せるにあり。この時既に逓相の實權は、殆んど、小山縣にあらず、子堀田にあらずして、次官仲小路の掌中に握られたるを見る如何に彼れが頭腦と手腕との敏活に、而して辛辣に事務の上に働けるかを思ふべきなり。

男後藤の逓相となるや、彼れは後藤の下風に立つを喜ばす、蹶然辭し去らんの氣勢を示せり。時の陸相寺内は彼れを去らしむるを欲せず、其の留任を強要せるに由りて、遺憾なく長閥の寵兒たるの面目を發揮するを得たり。之が爲に彼れは屢々後藤と衝突し、或は後藤を凌がんとせしも、後藤も亦一代の驕兒なり。其の事務上の頭腦に於て讓る所あるも、其の政務の才に至りては必ずしも彼れの下にある者ならず。彼れが閥族の多數を頼んで傲然たるも、後藤は強ひて其の暗礁に觸るゝ事をなさず何時しか巧に彼れを懷柔し、包容し了せり。是れ併しながら、彼れの懷柔されたるに非ずして、彼れの怜悧なる、長官と爭ふの不利なるを知りて暫く其處に隱忍せるに非ざるか。彼れは一面無理想にして傲岸、他に屈せざるも、他面頗る怜悧にして機を見るに敏なるが故に、他日の雄飛を期すべく隱忍する位は、物の數とも思はざる程の横着さを有す。動もすれば疾言遽色の風ある後藤に比すれば、韜晦に長ずる仲小路は却々に人の惡き所あり。是れ、彼れが後藤の羽翼下に包容されたるが如くにして而も他日の雄飛を期せる所以。

四

仲小路は德望の人に非ずして、威望の人たるは、世既に定評あり。偶ま節操の確かならざるを非難されたるも、怜悧にして處世に巧なる彼れは依然として長閥の忠僕なり。時に伊藤系に行き、時に山縣系に行くは、一時の便宜に出でたるものに過ぎずして、政治的色彩の變色せるに非ず。公桂の同志會を組織するや、之に入りて黨人に伍したりとて、山縣系に背けるに非ず、第三次桂内閣農相たる關係より來れるなり。伯寺内が國有鐵道總裁たりし時より、其の伎倆を伯に認められ、爾來麾下の一人たりと雖も、子清浦に對して後足にて砂を蹴たるに非ず、唯將來の便宜を思ふが故なり。桂の歿後、直ちに同志會を飛び出せるも亦、全然將來の打算に囚はれずと云ふ能はず。彼れの入黨は、彼れが政黨政治を理想するより來らずして、一に彼れが陞進の便宜より發足せるの觀あり。桂あれば在り、桂亡ければ即ち去る。彼れの入會脫黨の底意は、極めて單純明白なり。男後藤の總裁を望んで得ず、子加藤との權勢爭奪の不快より駄々を捏ね、逡巡として同志會を出で、政友會の後門に戸惑ひせるとは、自ら其の選を異にせり。伯寺内にして倘し桂の後繼者たらば彼れ或は同志會に留まれるや知るべからずと雖も、伯にして斯かる野心を抱かざる限り、決して茲に留まらざるは固より明かなり。彼れの同志會を脫せるは、伯の門に歸還し、伯の麾下に入りて一旗揚げんが爲なりしなり。是れ後藤の如く徒らに政權を握るに焦燥せず、初より宗とする所あるが故なり。

彼れは斯の如く長閥の爲には操守を變へず、時代と逆行して超然内閣を出現すべく、諸有努力を致せり。彼れが[illegible]問題を提げて、上院

に舌戰せるも之が爲なり。男爵藤等と謀し合せて、民國破壞の策を講じたるも之が爲なり。而して首尾よく其の目的を達するや、彼れは再び農相の椅子を占めたり。前回の在任は極めて短時日にして、何等施す所なく、剃刀の痕を印するに由なかりしも、今次其の席漸く暖まりて、彼れ自身も赤油の乘り來れるの感あり。彼れが爾來唱道せる善政の爲に、如何の貢獻をなさんとするか。單に事務の末節に拘泥して、善政主義の經綸を施す所なくんば、善政主義は一片の反古紙のみ、彼れに由りて、其の價値と光輝とを發揮するものに非ざるなり。

由來農相は、役徳多くして情弊を釀したり。曾て予伊東は取引所問題の事よりして、隱退を餘儀なくされたることあり。品性高潔にして、一黨一派の用に供せられざるの人物に非ざれば能く其の任を全うすること能はざるなり。彼れは予伊東に比すれば比較的阿賭癖なく、法案の改正に由りて奇利を博せんとするが如き惡心を抱かざるに似たり。其の長閥に忠なると、權勢慾の盛んなるとは、又如何ともすべからずと雖も、中外の事情に鑑みて緊切なる施政經綸をなさんとするの政治的良心は多とせざるを得ず。彼れが南船北馬の何程か黨勢擴張の意味を含むにせよ、官僚の勢力を緊張せんの傾向あるにもせよ、其の地方視察の結果よりして何物をか掴み、卓上の識見を補はんとするの努力は稱せざるを得ず。彼れの炯々たる眼光は、必ずや農村の疲弊に透徹し、產業の不振を洞察すべく、官僚の通弊たる威風堂々の擱挨に因はれず、振舞酒の味に現を拔かすが如き事なきを信ぜんとす。

人或は、仲小路の物價調節令を以て、彼れが一大功績なりと吹聽す。然れども、吾人を以て見れば、彼れの一大英斷にも非ず、彼れの一大成功にも非ざるなり。調節令は既に時機を失せるのみならず、一法律を突發し、官憲の威力を以て、人爲的に物價の調節をなし與ふべしとするは拙きの愚見なり。見よ、調節令の發布に由りて、一反一圓二十錢の晒木綿が八十錢に墜落せるのみ、夫れも綿絲相場の暴落に原因せりと云ふに非ずや。其他市場の物價は、調節令に反抗するが如く、月に日に騰貴しつゝあるに非ずや。該法の精神に於て日用の物價を調節するにあらば、確かに彼れの失敗にして、其の精神に反せるの結果を來せり。若し之を以て空米師、乃至株屋の暴利を貪る者を制止するにありとせば、そは確かに成功せり。何となれば、該法を以て彼等山師の買占を取締り、其の橫暴を制止することを得ればなり。斯の如きは何人にも敢てし得る事にて、剃刀農相仲小路の手腕を待ちて始て成し得るの藝當に非ざるなり。其の之を敢てせるは、敢てせざるに優ると雖も、吾人の彼れに期待するは、他の根本的善政策にあり。

さはれ、現内閣の成す所を觀るに、悉く一時の糊塗政策に非ずんば、刻下の彌縫政策なり。如何にして人氣を吸引し、如何にして議會を通過し、如何にして内閣を支持せんかにあり。仲小路も亦この範疇を出でざるは無理ならずと雖も、今少しく從來の鯁骨と辛辣味を加へて、在野時代に主張せし所の主張位は實現しては如何と思ふなり。然らざれば、畢竟剃刀次官の雄のみ、事務官級の手腕家のみとの世評を否認すること能はざるべし。空しく超然内閣の員に備はり、善政主義を高唱するのみが彼れが政命を持續する所以にあらず。(大正六・九・二二)

▽農相としての仲小路氏

鵜　崎　鷺　城

仲小路農相は物價調節令で、奸商の頭上にビッグ、ステックを振廻して以來、俄に問題の人になつて當面の時局に花を咲かした。從つて本人も大分調子に乘つて引續き紙、パルプ、肥料の輸出禁止やら、農商務省臨時職員設置やら、其の他いろ〳〵新施設に氣焰を揚げ、近くは北海道に出懸けて可なりの燥ぎ方である。

仲小路氏は藩閥の片割であつても學閥との結付はない。學校は大阪開成所を出た位のもので二十一年司法官試驗に及第して檢事になつたのが役人の振出しである。尤も十六七年頃暫く神戸始審裁判所の腰辨をしてゐたさうである。それにしても出世の早い方で、初めて大臣になつたのは大正元年であるから、二十一年大學を卒業したものに比べると、流石に藩閥といふ偉強な後楯があつた丈けにトン〳〵拍子にノシ上つて來た。氏の官場生活は劃然として前後二期に區別すべく、前半期は三十四年頃まで司法官を勤めた。氏が東京地方裁判所及び控訴院檢事として關係した裁判中には、金玉均朴泳孝暗殺事件、相馬家疑獄、東京市不正鐵管問題の如き、いづれも時人の耳目を引いたる事件があつて、今の後藤男を始め故前島彌次郎、濱野茂などは氏の論告の標的になつた。司法官時代の氏は年も若かつたし、元氣も壯んであつたから、氣焰當るべからずといつた風で、或は司法部の改革を論じ、或は同僚と議論の花を咲し時として長官に喰つてかゝるなど、隨分露骨な行動もあつた。氏は司法官で一生を通す積りであつたか無かつたか、周圍のものも氏が二度も入閣する未來を豫想したかせぬか、それは兎に角として前途のある司法官と目を附けられ、殊に司法部に關係の深かつた芳川顯正や清浦奎吾氏等から陰に陽に引立てられた。氏が司法省を飛出して官場生活に一轉機を劃することになつたのは、明治三十三年の法官の同盟運動である。

此の騷ぎの爲めに司法官を棒に振つて虻蜂とらずに終つたのもあるが、仲小路氏に取つては偶然の幸福であつた。少くも是れが氏の今日ある基調となつてゐるとも言へば言へる。それは伊藤公が政友會を組織して第三次內閣を造つたときで、其の時の司法大臣は金子堅太郎氏であつたと思ふ。是れより先き政府は條約改正の結果として、司法官九人を選拔して司法制度取調べの爲めに洋行させたが、其の中には仲小路氏の外に、同じく檢事として一時鳴した長森藤吉郎も加つてゐた。然るに此の連外法官が西洋から歸つてくると、司法官の位置の向上を論じて增俸問題を提唱した。此の議論は忽ち全國地方官に共鳴を與へ、殆んど司法官全體の運動となつたので、金子法相は增俸の豫算を第十五議會に提出すると案は兩院協議會で否決された。そこで司法官の同盟運動はます〳〵火の手を加へ、盛んに大臣の無能を攻擊し、職務を抛つて狂奔するなど、丸で、ストライキ同然の形になつたので、貴族院でも衆議院でも官紀振肅の質問書を出して法官の責任を問ふに至つた。此問題では金子も一時當惑の體であつたが、結局重立つた法官の辭職で漸くケリが附き、さしも世間を騷がした騷きも泣寢入りに終つた。當時增俸運動の急先鋒と目されたのは仲小路と長森で、特に仲小路氏は最も問題の人であつた。此の運動の表面の事實は遣外法官の增俸要求といふ極めて單純な問題であるが、飜つて政權爭奪史の上から解剖して觀ると、其の裏面には複雜した事情もあるようである。即ち山縣系と伊藤系の暗鬪、政友系と官僚系の衝突、清浦對金子のイキサツといふような暗流が原因の一部になつてゐると認むべき理由がある。衆議院が增俸豫算を否決したに對して、貴族

院が之れを可決し、寧ろ初めより暗々裏に聲援を與へたるが如き、又辭職後間もなく第一桂内閣は仲小路、長森の二人の骨を拾つて、一を遞信省官房長、一を大藏省官房長に任じたるが如き、此の法官事件が一つの政略問題と結付いてゐたことを語つて居りはせぬか。

仲小路氏は芳川遞相の下に遞信官房長になつたが、間もなく内務省に轉じて土木局長、次いで警保局長に任ぜられ、三十九年から四十五年まで遞信次官を勤めた。概して次官は内閣が更迭すると入代はるのが普通であるけれども、遞信大臣は山縣伊三郎、後藤新平、原敬、堀田正養と四人も大臣の顔觸れが變り、第一西園寺内閣、第二桂内閣、第二西園寺内閣と三度も内閣が更迭したに係らず、氏の位置に變動がなかつた。三十四年第一桂内閣の官房長になつた時から起算すると、司法部から行政部に轉じて七年餘りの間に一度も閑地に就かず、其の間に吏務の經驗や官途の情偽や對人術の研究を積み、司法官時代と殆んど別人のようになつた。山縣の遞相時代は政友會の天下であつたから、仲小路氏も多少遠慮の氣味がないではなかつたが、第二桂内閣の時から氏の勢力はズン／＼遞信部内に伸び、特に省内の事情に通じてゐるし、吏務に習精であるし、仕事も出來たしするから、後藤でも原でも、堀田でも氏を粗末に扱ふことが出來なかつた。別して堀田の如きは唯だ大臣の名がある丈けで仕事の切廻しを一切次官に委したから、氏は事實上の大臣であつた。後藤は覇氣があるから遞信省を仲小路の意のまゝにするを好まなかつたけれども自分が大にやらうとすれば勢ひ衝突することになるから、寧ろ自分は專ら鐵道院の方に沒頭して遞信省を仲小路に當がつた形があつた。鐵道國有完成は次官としての功勞の一である。兎も角氏と若槻禮次郎とは次官中に異彩を放つた官僚系のチヤキ／＼である。其の時代の次官で後に大臣になつたのは氏の外に、外務の石井、内務の一木、大藏の若槻、文部の岡田等があるけれども、仲小路と若槻とが一番早く有聞き、而も同時に第三桂内閣に入閣して同時に貴族院議員に任ぜられた。

氏は元々長閥を背景とした官僚系であるから、政黨團體内に入つて心から政黨化することが出來ない。一時氏は政黨に關係したけれども、それは最後まで政黨で押通すといふ堅い決心からでなく、實を言へば一時の功名利達が元になつたのである。詳しく言へば政黨を踏臺にしようとしたのである。氏は桂公がさう早く死なうとは思はなかつた。氏は公が同志會首領として早晩必ず天下を執るべきを信じ、公に資說して再び内閣の人となる機會を窃に期待してゐた。是れに獨り仲小路のみならず、當時桂公の傘下に馳せ参じた官僚分子は大抵其の考へであつた。然るに唯一の綱と頼む桂公が死んで仕舞へば、同志會は到底天下を執る望みが無いとした。固より氏は他にも居心地の惡い事情もあつたであらうが、要するに桂公の死が脫黨の根本の理由となつたのである。公の葬式が濟むか濟まぬ中に飛出したのは、餘りに現金であるにせよ、第二のパトロンを求めて新しい立場を政界に築くといふことは、官僚育ちの氏としては強ち無理でないかも知れぬ。何とかの言にも一分の道理あり、黨中亦た道ありで互ひに理窟を鬪はす日には氏にも相當の言前があるだらうが憲政會即ち前の同志會に言はせれば公の死と共に同志會が落目になつたのを見縊つて逃出すとは、公の恩義を忘れた背徳な沙汰として面白い感情がしない。そこで問題は何人を意中としたかといふ事であるが、氏は桂公生前より寺内伯に意を寄し、現に第一西園寺のときは次の内閣の伯に依て組織さるべきを豫想して遞信省を固め、自から秘に遞相を以て擬してゐたといふ位である。それ故に桂公が死んだ後寺内伯の側に飛込む氣になる道理で、公が生きてさへ居れば公に義理を立てねばならぬが公の去つた後は最初から伯派、契合も何もない實際には獨立して、寺

内伯を失ふの不利なるを思ふたのである。

蓋し氏は野心家といふ方でなか〳〵功名心が强ひ。夙に台閣を夢みて内々其の準備に怠りなかつた。野心を満すに必要な材料は、何事によらず利用せずには置かぬ。氏は頭が論理的で頗る綿密であるから、斯らすれば斯うなるといふことを豫察して何事にも臨み特に人に對しては最も用心深い。氏の對人祕訣は先づ自分を充分固め、別條のない丈けの準備をして置いて、温味を示す一方に苦味を見せることである。それであるから上に對しても下に對しても一言一行が策で、對手の缺點を捉へるに拔目がないと同時に、自分の非を打たれるようなことをしない。氏に脫線などは皆目無い。頭の毛が一本亂れても、カラーが一寸曲んでもチャンと直して自分の缺點を見せない。次官時代の氏の用心深い態度と策士的心術とで後藤、山縣の首根ッ子を押へ、湖田を尻の下に敷いた。表向コムプロマイジングの容子を示しつゝいざといふ場合に、强硬な風を吹かした點はなか〳〵老獪である。氏は頭が好いから言ふことも條理が立ち、流石に檢事時代に鍛へた丈けに、辯舌にネバリと味がある。英氣潑剌たる雄辯家でないけれども、所謂る能辯達辯の方で、敵を攻擊する場合などはジワ〳〵と咽喉を締める。特に氏が質問に答へる場合は、涙を流さぬ許りにして如何にも熱心と誠意と沈著とを面に現はし、掻口說くように諄々として說明するから、大概の議員は氏の辯舌に魅されて了ふ。曾て國民黨の一議員は何かの問題について一論判する積りで、氏を官房に訪ふと、忽ち氏の泣くが如く訴ふるが如き口說上手の辯舌に胡麻化され、感服して歸つたことがある。配下のものに對しても得意の猫撫聲で丸め込んで了ふ。兎に角口も八丁手も八丁の拔目のない男で、昔から只の鼠ではない。

氏は舊同志會を拔けてから一寸政治上の立場を失ふた形で、一箇の惑屋として貴族院の一隅に氣を吐いてゐた。山本内閣の時もかなり食つて掛つたが、特に大隈内閣に對して最も深刻に攻擊の鋒先きを向けた。由來貴族院には采配役はゐるけれども、華々しく政府と渡り合ふ闘士に乏しい。其の少數の闘士中で、仲小路は今の遞相の田健治郎や今度特派財政經濟委員長に任ぜられた目賀田男と共に、いつも陣頭に立つて氣焰を上げたので、世間から躍起組の常連の如く見られた。昔から不言實行を重んずる慣習になつてゐる貴族院の如き一種の氣分の中では、氏等の折角の言論も又かといふ風に餘り歡迎されず、間々仲間内の反感を招くような傾があつたが、兎に角政府に取つては可なり小うるさく思はれた。氏は後藤、田及び長島隆二等と共に前内閣破壞に務めたといふので、憲政會一派から陰謀團の如く言はれ、特に後藤仲小路の二人は政治的野心の爲めにいろ〳〵やることが一際目に立つた。前年の脫黨以來氣を惡くしてゐる處へ、前内閣に對して斯うした態度を執つたので、ます〳〵憲政會側の感情を惡くし、彼等が此の二人を憎むことは一通りでない。少くも此の二人が閣僚であることは、憲政會の政府反對理由の一つになつてゐると認めて好い。要するに憲政會と後藤、仲小路等とは、理窟が二分、殘る八分は感情で、全然感情に於て相背馳してゐる。それ故に初め乘公持平策の上から、敵の多い陰謀家視せられ此の二人を入閣せしめるの不利なるを說いたものもあるらしいが、寺内伯としては二人を除外されぬ事情があつたし、二人も嘗に同志會に後砂を蹴て出た時からの連續的志望であつて見れば、折角寺内伯が政權を執つたのに、見す〳〵此の機會を取外すに忍びなかつたであらう。寺内伯としては必ずしも憲政會へ面當ての爲めに二人を入閣させた譯であるまいが、憲政會としては面當ての意味に僻んで取つたのも無理はない。

仲小路氏の農商務入りは二度の勤めである。最初の農相時代は大正初

頭の大政變の爲めに、二三度議會の大臣席に顏を出した丈けで、餘りに呆氣ない運命に終り、何一つ仕事も出來なんだ。今度は明暮念じた效があつて、漸く五年振りに再び同じ農相の職に就いたのであるから、是非何事をかして見たいと云ふ氣がある。特に性來功名心の强い氏としては無理もない。農相に任ぜられて間もなく東京商業會議所が中野武營の後に添田壽一を會頭に推薦すると、氏は法律を楯に取つて不許可を言ひ張り、許せ許さぬの問題で大分ゴッタ返したが、此の意地ッ張りは氏の存在を認めさせる上に多少の效能があつたかも知れぬが、是で大に男振りが上つた譯でない。そこで氏は今度農相としての顯著なる施設の皮切りとして、物價調節令で奸商退治と出懸け、一番男振りを揚げようといふ氣になつたのである。調節令其物の價値效力については世間の賛否區々であるが、當面の責任者たる夫子は乃公の手並みを見ろと言はぬ許りになか／＼鼻息が荒ひ。氏は内閣大臣中第二流の格であるが、常に伴食に見られまひ／＼といふ氣があつて、新聞記者や雜誌記者が訪問すると、氣焔を吐いて自己の存在を大ならしむるに務めつゝある跡が見える。また實際此の内閣では一廉の論客である。兎に角近來の勢ひでは伴食大臣でないこと丈けは世間に分つたが、餘り得意になつてメートルを上げ過ぎるのも考へものである。尤も用意周到の氏のことであるから、何事も如才なくやるだらう。

▽有望なる未成品

前田蓮山

一

▲仲小路氏が何んな人物であるかは、氏の經歷を述べて見れば、讀者に大概想像が出來るだらうと思ふ。

▲氏は長閥の人であるが、同じく長閥と云つても、伊藤公、山縣公、井上侯、桂公などは本藩萩の出身で、乃木將軍とか寺内伯などは長府、兒玉源太郎伯や仲小路氏などは德山出身である。そして長閥内部では、此等出身地の相違によつて、親疎の別があるのである。

▲伊藤公のやうに藩閥とか乾兒とか云ふ者に冷淡な人は別として、山縣公などは乾兒に對して親切である代りに、右のやうな本藩支藩の區別に依りて、隨分厚薄があつたやうである。

▲乃木將軍と山縣公との間柄は、誰れでも知つて居るやうな有樣で、寺内伯なども、初めは兒玉伯から引き立てられたものである。其の兒玉伯は桂公に比して、山縣公の寵を得ること薄く、伊藤公在世中は、桂公は山縣派で兒玉伯は伊藤派と云ふ傾向があつた。兒玉伯が頓死した時には——無論嘘であらうが——伯が山縣公の仕打ちを怨んで憤死したと云ふ噂まで立つた位である。

▲仲小路氏は此の兒玉伯と同じく德山藩の人であることを注意しなければならぬ。藩主が僅かに四萬十石の小身であるから、其の家來たる氏の父君が食んで居た祿も大概知れたもので、要するに貧乏武士であつたに相違ない。其れに氏が十一と云ふ年に、父君は氏の兄と姉と三人の子供を遺して死んだ。

▲母君は其の時三十二三で、まだ女盛りであつたから、親戚の者が集まつて、頻りに再縁を勧めた。母親は迷ひに迷つた末、密かに賣卜者を訪ねて易を立てゝ貰つた所が、兄の方は早世するかも知れんが、弟の方は將來必ず出世する。先づ〳〵再縁などは思ひ止まつて、子供を大切に育てるのが宜いと云ふ事であつた。そこで母君も愈々決心して、子供の教養に全身を委ねることになつたが、其の易が全く的中したから不思議だと、或時氏が語つた事がある。

▲其の頃氏の一家は大阪の藏屋敷に住んで居た。そして愈々母親の決心が定まると、氏は兄君と共に或英語學校に入つて、一心不亂に勉強し初めた其の甲斐があつて、兄君の方は十七八になつた頃、神戸の裁判所の通譯になつて、幾らかの給料を取る事になつた。

▲そこで一家神戸に移轉し、其處で二三年を貧乏の間に暮す內、兄君は法律を勉強して判事となり、埼玉裁判所に勤務する事となつて、月給三十圓許り取る身分となつた。此の時の仲小路一家の喜びと言つたら非常なもの、母親は嬉し泣きに泣いた。

▲併し三十圓ばかりの月給で下宿住ひをして居ては、母君に仕送りをする事も困難であるし、又た母君も多年住み慣れた土地を離れて、埼玉に移住するのも好ましからぬと云ふので、兄君は氏を埼玉に伴れて行つて兄弟自炊をする事になつた。

▲其處で氏は下女代りに働きながら法律を獨修し、又た其處から六里の道を東京の英吉利法律學校（今の中央大學の前身）に通學したものである。尤も如何に堅忍不拔の氏でも、毎日通ふ事は出來得べきものでないから、多くは獨學して試驗だけ受けたわけであらうが、兎も角、其の學校を立派に卒業したのである。

▲斯うして居る中に、兄君の判事が風を引いたと云つて一ケ月許りもブラ〳〵と役所を休んだ。肺病に罹かつたのである。一日埼玉裁判所長が密に氏を招んで『實は君の兄は肺病であるが、本人には秘して充分に養生させなさい。役所の方は何時まで休んでも不都合のないやうにして置くから……』と言つた。

▲氏は夢心地で家に歸り、兄君の枕元に坐つてワツト泣き出した。兄君は淋しげに笑つて『又たお前は喧嘩して來たのか、餘り一徹でも不可ないから、チト好い加減にしろ』とたしなめた。氏は友達と議論して遣り込められたと言つては家に歸つて泣き泣きしたものである。

▲氏は或人から肺病の靈藥と云ふものを聞いたが、其れが埼玉の藥種屋に賣つてないので、朝早く六里の道を東京に出て其れを求め、夜遲く歸り歸りした。嚴寒の頃で、隨分難儀であつたと云ふ。

▲氏は辛つと一家の生活を支ふるやうになつた兄に、先立たるゝ母の悲歎を想ふ時に、自分の命が兄に代はり得れば可いと念じた。併しながら定命は如何ともする由なく、兄君は廿三歲を一期として、永えに逝つて了つたのである。易斷が的中したのも不思議。

▲其れから氏は神戸に歸り、其處で裁判所の書記になつて月給十七圓を貰ふた。其の頃英人某が英語の夜學校を開いたので、氏も入學したが、其の英人は『君は如何程英語の下地があるか』と氏に尋ねた。

▲氏はギボンの羅馬史(?)を讀んだと答へると、然らば寧ろ此校の教師になつて呉れと言つて、月給十五圓出した。それで月收合計三十二圓であるが、其の內から母君が丹精して、三年許り勤めて居る內に、四百圓許りの貯金が出來た。

▲そこで氏は其れを學資にして大學に入らうと云ふ目的を立て、母君に別れて上京したが、恰度其の時、判檢事登用試驗があると聞いて、力試しに受驗して見ると、わけもなく一番の成績で及第した。其れが明治

廿年。氏が廿四歳の夏であつた。

▲斯んな事なら强ち大學に入らなくとも立身の道はある。其れに今後更に三四年、母に苦勞をかけるのも痛ましいと考へ、其のまゝ東京地方裁判所の検事になつたが、久しからずして頭角を現はし、仲小路検事の名を轟かした以後の事は、大概世人の知る所であらう。

▲氏は曾つて語つて言つた。『靑年は引込み思案と他人を賴る事が一番惡るい。眞に賴るべきものは自分自身の腕より外にない。充分に腕を磨いて、思ふ事はドシ〳〵言ふ。充實せる實力、率直なる言語、正直なる行爲是れ即ち立身の鍵である。斯うして一つ腕を見せてやれば、次に面倒な事件が起つた時には、是れは彼にやらせて見やうと云ふ事になる。そこで全力を傾倒して其れを仕遂げると、又々困難な仕事は此方に持ち込んで來る。吾輩が検事在職中、世間の注目を引く大事件と云ふ大事件は悉く吾輩の主任の下に置かれた。其れが吾輩をして今日あらしめたのである』と。

二

▲明治三十一年、曾禰荒助子が第三次伊藤内閣の司法大臣になつた時、氏は轉じて司法省參事官となつた。是れ氏が行政官としての振り出しである。此の頃から氏は漸く長閥のレールに乘つた。其れでも山縣系統を距る事は尙ほ遠かつたのである。

▲明治三十二年山縣内閣が出來て、淸浦奎吾子が司法大臣になつた時、遣外法官と言つて、九名(?)の法官を歐米見學に遣つた事がある。是れは條約が改正せられて治外法權を撤回したからには、日本の司法官も歐米の裁判振りを知つて居なければ不都合であると云ふのであつて、此の遣外法官は當時選り拔きの秀才揃ひ、出世の端緒として司法部内の羨望する所となつたが、仲小路氏は若年ながら其の一人に加へられた。

▲氏は主として英國を研究した。遣外法官が豫定の一年の見學を終つて巴里に落合つた時、氏は一同に向つて『見學の結果として自分が第一に感じた事は、司法官の資質をモット良くしなければ、法律ばかり整つて居ても駄目と云ふ事である。司法官の資質を良くするには其の待遇を進めなければならぬ。故にせめては初敍の俸給だけでも行政官と同等にしたい』と云ふ意見を述べた所が、一同大賛成で、歸朝したなら劈頭第一此の問題を解決しやうと云ふ事を協議した。

▲所が氏は日本を出發する時に、母堂と令閨とに『折角行つた以上は官命の外に一年許り留學して歸りたいから、貯金をして置いて吳れ』と命じて置いたので、母堂と令閨は生活費を節約して、官命の期限が切れた時には既に千圓の金が氏の手に送られてあつた。

▲そこで氏は更に獨逸に遊び、長森藤吉郎氏などが、歸朝匆々法官優遇問題を持ち出す事になつて居たのであるが、氏は一年後に歸朝して見ると、内閣は交迭して第四次伊藤内閣即ち第一次政友會内閣が組織せられ、長森氏などは政變に面喰つたものか、手を拱して何事もやつて居らぬ。

▲仲小路氏は此の態を見て、公等碌々言ひ甲斐なしと許りに、直ちに時の法相金子子に問題を提出し、金子子も初敍だけなら僅か八萬圓で足る事であるから大事あるまいと言つて、豫算に計上したが、當時政府の方針は財政緊縮の一點張りで、新事業一切見合はせと云ふ事に決し、一日政友會の院内總務星亨氏が議長官舍で内閣員と會し、豫算査定を行つた。

▲星氏は總理大臣と云ふ顏で傲然と長座に坐り込んで片つ端から豫算を讀み上げながら『是れは削りますよ、異議はありませんか』と言ふかと思へばモウ既に朱線を引く。司法省所管に移つて『司法官增俸、是れは新事業だから當然削ります』と金子法相の方を一寸見る。金子法相は内

章てゝ起ち上り『其れは何うも……』と何か言ひ出さうとすると、伊藤首相が『馬鹿ッ！ 何を言つてるのだ』と一喝する聲も終らぬ間に、星氏はスッと朱線を引く。海軍省所管に入つて『此造兵廠擴張費、是れは何うです』と言ふと、山本權兵衛海相が『夫れを削られては困ります』と起ち上る。星氏は微笑して『是れは生かして置きませう』と一瀉千里の勢ひ、殆んど仰ぎ見る者さへ無いと云ふ有様。

▲遙か席末から此の有様を見て居た仲小路氏は胸中煮へ返るやうに憤慨した。同じく新事業でありながら司法省の要求は聽かれずして、海軍省の要求は容易に通過するとは何事ぞ。ヨシ斷らなつては今は早や是れまでだ。目に物見せてやらんと決心した。

▲夫れから直ちに檄を全國の司法官に飛ばし、例の有名な司法官ストライキをやつたのである。所が政府は早く辭表が到着した東京の分を數人だけ逸早く許可して置いて、巧みに懷柔の手を擴げたので、コロリ〳〵と軟化して了つた。

▲氏は此の腑甲斐なき有様を見て、斷然官界に袂を斷ち、學者として身を立つべく決心して辭職したが、偶々伊藤内閣倒れて三十四年六月桂内閣の成立するに及び、曾禰子の勸めに依りて遞信省官房長に任じ、初めて勅任官となつた。時の遞信大臣は芳川伯であつた。

▲夫れから三十七年芳川伯が内務大臣となるに及び、氏も内務省に轉じて土木局長となり、次で警保局長に任じ、三十九年西園寺内閣の時、山縣伊三郎氏の下に遞信次官となり、第二次桂内閣の遞相後藤新平男の時代まで留任した。

三

▲氏は長閥の人であるが、曾禰子に依りて司法省參事官となるまでは何等先輩の庇護を蒙らず、全く獨力を以て其の運命を開拓した。而して其の以後と雖も閥族關係は頗る薄く、現に山縣公直屬の人ではない。

▲氏が初めて行政方面に頭を出した時代の第三次伊藤内閣は、藩閥内閣と稱すべきものではなかつた。日清戰爭前の内閣は薩長藩閥の權衡を主眼として組織せられたものであるが、日清戰爭後は政黨の勢力が增大して、單に藩閥の權衡折合など許りを考へて居られぬ時勢となり、伊藤公が超然主義を放棄して自由黨と提携するに及んで、伊藤公と山縣公との間が漸く不和となり、伊藤公は長閥内に孤立する姿となつた。

▲然れば伊藤公が第三次内閣を組織するに際しては、薩長の元老悉く入閣を拒絶し、公は單身其の乾兒を率ゐて出馬するの止むなきに至つたのである。即ち第三次伊藤内閣は藩閥と云ふ意味を含まず、伊藤公門閥の官僚を以て組織せられた内閣であつた。

▲曾禰、伊東、末松、金子、外山など云ふ新顏が現はれたのは此の時で、井上侯は伊藤公との個人關係上、拒むに拒まれぬ義理があつて入閣したのであつた。仲小路氏は曾禰子に依りて政治方面に出たが、當時政界の事情は右に述べた通りの次第であるから、長閥と云つても、氏は山縣系統とは緣がないのである。夫れは前に述べた通り、德山出身と云ふ事情にも因るであらう。

▲氏が初めて大臣となつた時に『吾輩は官僚の析骸れである』と新聞記者に話したと云ふ事であるが、如何さま唯だの官僚とは頗る毛色が異なつて居る。少くとも山縣系の御家風には一寸向きが惡るい方である。

▲氏は直情徑行の熱血男兒で、馬車馬の如く其の信ずる所に猛進する人である。氏は廻りくどい言語、陰險なる行爲が嫌いである。分別顏して左顧右眄する人間、即ち孟子の所謂郷原的人物は、氏の最も排斥する所である。

▲商業會議所會頭問題の如き、氏の性格を丸出しにしたものと云つて可

からう。あの事に就ては氏の同僚友人などの中には、氏の爲めに危んで毛を吹いて傷を求むるやうな事になりはせぬか、モ少し附近の事情を酌量して、手柔かにやる方が可からうと忠告した者もあつたらしいが、氏は自己の信ずる所を行つて、夫れで自分が世間から憎まれ、自分の地位を動かされる事になつたとしても、毫も遺憾とする所は無いと云つた。

▲氏は自ら官僚の桁脱れと稱するけれども、殆んど徹底的の官僚であらう。氏は獨逸の官僚政治に傾倒し、堅く所謂善政主義なるものを信じて居る。氏をして充分に腕を振はせたならば、獨逸に於ける社會政策のやうな事をドレ／＼實行するに違ひない。氏が辯説に長じて居る故を以て彼は官僚よりも政黨員に適すると貴族院の人達の中には評して居る者もあるけれども、其れは眞の官僚は如何なるべきものであるかと云ふ事も、氏の性格思想をも知らぬ人達の評である。此の人達の考へて居る官僚に比べると、氏は寔に官僚の桁脱れである。

▲氏は政黨に對して充分な理解を有して居る。併しながら自ら政黨員となる事を好まぬ。氏が桂公の同志會に入つたのは、決して政黨員になる目的のためでは無かつたのである。氏は桂公から入黨を勸誘された時に自分は貴族院で國家に盡す積りであるから政黨に入ることは御許しを願ひたいと云つて拒絶したが、桂公が今日の場合、君ですら入黨しないとあつては、誰れを勸めて入黨せしむる事が出來やうぞと云つて、強いて入黨を勸めたので『然らば自分は同志會に入黨するのではなくして、單に閣下に隨ふて進退を共にすると云ふ意味で御說に從ひませう』と云つて入黨したのである。故に桂公の死と共に氏の同志會を脫黨したのは自然の成り行きで、後藤男の脫黨とは理由が異つて居るのである。

▲氏は唯今でも充實せる實力、率直なる言語、正直なる行爲で押し進まうとする外に雜念は無いやうである。氏は今年五十四歳、まだ修養時代と思つて居るらしい。或時氏は語つた『今後十年一個大臣として腕を磨き、政治家としての修養は其の以後だ』と。

▲氏の政治家修業は頗る遠大の計畫である。氏の大臣振りは一事務官のやうな觀が無いでもない。氏自身も亦た一省の事務長官として、最善を盡しさへすれば、其の他は顧みるには及ばぬと考へて居るであらう。

▲藝人を見るに、一流の師匠に就て修業した者は、數年數十年タダラヌ事から一歩一歩と習ひ固めて遂に大成するからチヤンと品位が備はつて居るが、二流三流の師匠に就た者は早く大物が出來る代りに、上手と云つても其れは俗に云ふ惡達者と云ふ者になる。

▲原敬氏や加藤高明氏よりも惡達者な政治家は幾人もあらう。現內閣では田遞相などは惡達者の方である。政治家としての策略や駈引の手腕は到底仲小路氏などの及ぶ所でない。併し仲小路氏は修養を重ぬれば第一流所に達する望みが無いとは云はれぬけれど、田遞相はあれだけの人であらう。

▲仲小路氏の感心な點は、絕えず讀書修養して怠らぬ事である。氏は思想問題でさへも一通り研究して居る。カントやニーチエやオイケン、ベルグソンと云つたやうな哲學も一通り理解して居る。要するに氏は有望なる未成品である。(仲小路氏の經歷に就ては、吾輩曾て某雜誌に書いた事がある。一言斷はつて置く)

▽仲小路廉氏

松井柏軒

（上）

農商務大臣としての仲小路氏を批評するに就て、僕は主として二ッの點を擧げて之を非難して見る、素より其の全部でないとは、特に斷つて置く。

僕は仲小路氏が桂公の同志會に馳せ參じて、イヤ、其の幹部として相當に骨折りながら　公が死んで、未だ其の墓の土の乾かぬ中に、颯々として同志會を飛び出したとに對して、其處に氏に對する信用上、言ふに言はれぬ程の影響があると信じて居る、凡そ政黨を組織する者にも、其の黨員として幹部に列する所の者にも、一ッの覺悟がなくてはならぬ、之を覺悟といふよりも、其の人物からいへば一種の特質と稱する方が適當であらう、其れは聊か不倫な比喩であるけれど、男女の關係でいへば一旦相許した以上、情死までするといふ氣組である、此の特質は、彼の薩南の私學校黨のために一身を拋出した、西郷南洲の其れである、此の特質は政黨首領には勿論、其の幹部員にもなくてならぬものであるが、伊藤公は之を持たれなかつた、大隈侯も板垣伯も其れが稀薄であつた、彼の山縣公には却つて其れがある樣で、星亨や、大浦兼武翁にも大にある、原敬氏にもある、僕は桂公にも大に有つたと信ずる、而して我が仲小路氏には其れがない、素より氏の同志會を飛出したるは、相當の理窟はあらう、殊に檢事出身で、彼の司法官ストライキまで遣つた仲小路氏には最も其の理窟が多かろう、併し桂公死後、忽ち飛去つた其のとは、彼の特質を缺いたもので、詰めていへば賴母し氣がない、利害の打算を超越した意氣といふものがない、彼の特質を持つものは、勿論勁烈な敵を向ふに持て居る、併し自分のためなら水火何ほ避けずといふ賴母しい味方がある、彼の特質のないものは、敵にしても畏くないと共に、味方としてもまた多く賴みにならぬ者だ。

仲小路氏が唯だ一寸同志會に入り、又忽ち飛び出した一事のために斯樣に折紙を付けられたとは、氏の將來に於て何と視られる。或る黨人は氏を敵黨攻擊の武器に利用することはあろう、併し腹心を披いて賴母しい味方とは決してせぬであらう、今の閣僚、殊に仲小路氏と同一徑路を執つた後藤男や仲小路氏が主となつて、現內閣のため與黨を作るなどゝいふ評判はあるけれど、僕は其の到底成功せぬとを豫言しても宜いと思て居る、尤も寺內伯丈けは彼の特質を持て居るやうであるから、伯が先頭に立たらば格別、後藤男や仲小路氏の政黨組織とあつては、所謂雞鳴狗盜以外多く馳せ參ずるものがあるまいと思はれる。

且つ此のために、衆議院方面は勿論、貴族院内にも少からぬ反感があるやうだ、仲小路氏でも、世間で若し同志會出入問題を輕視するならば、其れは太だしい誤解であらうと僕は思ふ。僕は素より同志會員（今の憲政會員）でもない、又政黨好きでもないが、仲小路氏と同志會の關係に就ては、右樣の見解から、氏の將來を問題として居る。

（下）

仲小路氏の農商務大臣としての施設で、例の物價調節令と稱せらるゝ暴利を食はる爲めの買締賣惜を取締る事、及び輸出制限などは、尙ほ盛んに評論の種子と爲て居るが、僕は其れよりも、彼の東京商業會頭問題を評したい、此の問題に於て、仲小路農相は確かに勝利の榮冠を得た、併し其れは正しい勝利ではなくて、却つて氏や、內閣の弱點を暴露した所の勝利である。

仲小路が商業會議所議員等の依頼によりて中野翁の推擧した添田博士を拒否した公然の口實は、博士が新聞社長の閑職に在るからといふのである、併しながら仲小路氏が認許した藤山某は如何である、彼れは砂糖會社の社長を始め、多くの會社重役として、博士以上の劇務に當て居るではないか、新聞社長たるが惡いといふなら、砂糖會社長たるものも亦惡い道理でないか。

或は添田博士を指定したのは大隈侯の指金だからといふ噂さや、或は報知新聞の不敬事件が如何のといふ說や、博士が憲政會派だからだなどゝいふ評判もある、此等の傳說を總て事實としても、また虛說としても一として會頭非認の理由にはならぬ。

理義の上からいへば、何の謂れもなく、仲小路氏は唯だ權柄突くで會議所の推薦を刎付けたのである、若し會議所が其の自治團體たる意氣と理義から斷じて、再三博士を推擧して枉げなかつたら結果は如何であつたろう、政府は實に由々しい失態を見ねばならなかつたであらう、然るに內閣會議に於てさへ、仲小路氏の意見を容れて、博士排斥と腑を固めて居たのは如何したものだ、蓋し會議所中には、中野翁に會頭指名を囑托し其の義理合から博士を投票したものゝ、腹の中では密かに自分で會頭を覗つたり、また官權にオベッカして、背後で中野翁を惡口して、之に裏切たものもあるんて、遺憾なく素町人の陋態を表はしたものだ、殊に其の事實をば、時を移さず密かに仲小路氏に密報するものがあつたので、氏も思ひ切て博士排斥を押通し得たのであるが、併し名分からいへば實に正しからぬことである。殊に薄氷を渡るやうな危險な藝當を遣つたものと謂て宜いのである。

僕の論點は玆に在る、名分や理義に於て牢乎不拔なものがあるでなく、僅かに素町人風情の裏切り如きを恃んで、而して無理押しに薄氷を渡るやうな危險な藝當をするが如きは、苟くも堂々たる政界に於て爲すべきことではない、特に誠心誠意の一點張りで、萬事手丈夫に、此のフーケ切た人心を緊縮することを任務とする現內閣に在ては、殊に避くべき手段である、然るに拘らず仲小路氏が之を敢てしたのは、氏が大なる政治家の資質を欠く一例といはれても辯解は出來まい、現內閣も亦世上の期待以外なことをするものと評せられても仕方があるまいと僕は思ふ、是れも世間では小問題のやうに看做して居るけれど、僕はそうは見ることが出來ぬ。

隨つて東京商業會議所も、此の一事で大に信用を墜したといつて宜い、議員の多數は依然として素町人の陋態から超越し得ぬものであるが、同時に添田博士を推薦して、而して仲小路氏の無理押付けに刎飛ばされた中野翁などは、若し少しでも武士道といふことを御存知ならば、頭を剃つて世外に遁るゝが當然であるまいか、然るに近頃は彼の紛擾を極めた早稲田大學の渦中にまで飛込んで、何か重要な役目を引受けたとかいふことだ、頼むものも頼むものだが、頼まれたものも頼まれた者である、是では仲小路氏が平氣で、イヤ却つて揚々得色あるのも當然か知れぬ、去とては困つた世の成行ではあるまいか。

鼻ッ張りの强いことや、辯才に長けたことや、一種の剛情ッ張りで、弱いものを威嚇するに拔目のないのも、或は現代政治家の一資格であるかは知らぬが、活きた人間を相手に、殊に多數民衆を治むる政事家としては利害を超越した心靈上の特質が殊に必要であらう、而して其のするとも假令石橋を叩いて渡る程でなくとも、負けて勝つといふ度量や、堂々として押しも押されもせぬ堅實な理義を土臺とする眞の勇氣がなくてはならぬと思ふ、是から觀て、我が仲小路氏は何と評論さるべきであるか、尙は春秋に富む氏は大に反省すべきであるまいか。

▽走卒の雄

一舊友

⊙仲小路といふ人の社會の耳目に大きくあらはれるのは、何時でも弱い人低い人に對する場合のみである。一寸とした新聞記者を相手に話す時、書生の會合で演說をする時、又は衆議院や貴族院で論戰をする時。斯んな場合に於て、仲小路といふ人は如何にもエラサウに見ゆる。けれども自分よりもエライ人、高い人、智慮德望のより多くある人、こんな仲間に入つては彼は如何なる態度を執るかといへば、無論世間一般の耳目には觸れないのであらうけれども、予の見る所によれば柔順猫の如く、弱いものを相手に大言壯語した仲小路とは丸で別人の觀がある。自分よりも弱いもの愚かなものに對して如何に自分をエラク見せ樣かといふやうな事を餘程よく修養した人と見へる。

⊙弱いもの低いものと對する時、彼は、大聲を張り上げて元氣よく議論する。內容には餘り聞くべきものはない。盛んに歐米の新智識を振り廻すけれども之とても斷片的の智識に過ぎない。いふ事でも又物のいひ方でも、又は態度でも、威勢のいゝ事、大きな事、突進的な事、總てかういふ男性的の事が好きなやうだ、彼の偉大なる體格、赫黑な面ざし、炯々たる眼光、弱いものを相手にテーブルを叩いて座談する有樣、彼自身一個の充實したる男性的人格の如く見へる、彼れが最近公刊した「強者の天地」とか云ふ本の中にも盛んに男性的道德を鼓吹してゐる。そんなら彼れは本來男性的の人間かといふに私は斷じてさうは思はない。彼れの本性は寧ろ徹底的女性的人物たる所にある。何故なれば彼れは政界の仕事師であるけれども必ず人にたよつて仕事をする人で、彼のたよりとする背後の人物を取れば彼れは決して一本立の出來る人間ではないからである。女は何時でも夫によつて其大をなすものである。

⊙彼れ自身に一本立の出來る力がないといふのではない。彼は大言壯語する割りに臆病であるけれども、尚一個非凡の手腕を持つて居る。彼の新智識も頗る怪しいものであるけれども、現代の凡俗政治家の中に於ては、兎も角も最も事務に通曉せる一人であらう。彼の手腕と學識は何處に離しても、一個の仲小路廉として立派に通用する丈けのものはある。けれども彼はそれ丈けの才識を自分一人で發揮することは出來ない。又自分一人で發揮しようとも思つて居ない。尤も誰かの力を藉りるといふ事は、自分の十の力を十二、十三に通用せしむる所以ではあらう。けれども山縣の力を藉りたり、寺內伊東の力を藉りたりしなければ、自分の才能は發揮し得ないと極めて居るやうに見えるのは何故であらうか。何れにしても彼は折角の才能を持つて居りながら、獨立に之れを發揮する勇氣が無い、或は意思が無いやうに見える。故に彼を伊東、寺內の乾兒として見れば有力なものであるけれども、一個の仲小路として見れば案外に無力らしい。今のやうな心掛では、彼は所謂走卒の雄なるものにして、斷じて大將の器ではない。大將の素質を全く缺くにあらずして、自ら走卒を以て甘んずるは彼の爲めに甚だ惜むべしとする。昔から小糠三合あれば婿にはならぬ。あれ丈けの才能があるなら、金持の婿になる事ばかり考へなくともいゝではないか。

⊙然し何れにしても彼は働きのある政治家である。一個の模範的能吏といへよう。唯惜むらくは彼に折衝が無い。從つて政界の技師たる事は出來ても、大勢を指導する政治的先覺者たるの資格は無い。彼を以て我國政界に於ける一個珍重すべき異材と見るは多くの人の首肯する所であらう。併しながら彼が如き人材を尊重せざるべからざるは、決して我日本

政界の誇りではない。

▽仲小路農相の人物

石川半山

現任農商務大臣仲小路廉君の人物に付て、我輩の所見を尋ねられても、實は我輩は能く知らない、敢て一面識も無いとは言はないが、親しく交際した事が無い、公會の席に於て面會して、談話を交換した位では、兎ても其の眞人物が分かる者では無い、然かしながら仲小路君も決して新に飛び出した人物では無い、兎に角三十年も社會に顏を出して居る男で有る、我輩が殆んど三十年新聞記者として、日本の社會を研究して居る間、絕えず彼れの名を耳にして居る以上、彼れの人物を全く知らないと言ふことは出來ない、さればそれ位の薄い關係の我輩の仲小路觀なら、敢て語り得ない事も無い、最も何か深い關係の有る人には、却て種々の情實が有て、眞の人物を知て居ても、それを赤裸々に言ふことも出來ないかも知れぬから、我輩の如き餘り親しくない者の批評の方が、案外に公平で有るかも知れない

不人望な人

先づ我輩が仲小路廉君の名を聞くと、第一に頭腦に浮んで來るのは、「頗る不人望な人」と云ふ觀念で有る、或る人は彼れを陰險なりと言ひ、或る人は彼れを狡獪なりと評し、又或る人は彼れを俗物だと稱して居る、或は煮ても燒いても喰へない男と云ひ、或は人に取り入る事の巧みな男と云ひ、或は官權を濫用して、不法を働く男と云ひ、用々くだれと惡るく言ふ聲が高い、決して德望家と云ふことは出來ない

然かしながら世に所謂德望家と云ふ者の中には、意外に腹の黑い男が有る、世間の人氣を博する事のみに注意して世を欺かんと務める結果、一時大人氣を博する男も有る、之と反對に世上の毀譽褒貶を意とせず、自家の所信を斷行する爲めに、不人望を買うて居るけれど、親しく其の人格に接すると、意外に良い男も有る、星亨君なども大惡黨の張本として、我輩共も攻擊の矢を向けたが、其の人物は決して惡黨ではなかつた、品川彌次郎先生の如きも、選擧干渉の當時から、大惡人の如くに言はれたけれど、人物は是れ位立派な人は無かつた、されば不人望なる人、必ずしも惡漢では無い、仲小路君なども決して德望家ではないが、其の人物に接して見ると、世間で評判する程の惡るい男では無い樣に思はれる、彼れは決して馬鹿では無い、悧巧な人で有る。然かしながら馬鹿で無い人が、直ちに狡猾とは言はれない、悧巧な人が直ちに陰險とは言はれない、我輩は能く知らないけれど、仲小路君を見て別に惡人と感ずべき何等の印象を受けたことが無い、寧ろ其の心は良い男で、其の職務に忠實にして、之れが良いと信じたことは、毀譽褒貶を顧みずに斷行する勇氣の有る人ではないかと感じて居る

セルフ、メード、メン

彼れの經歷を見ると、決して正式の學問をした樣に思はれない、漢學を學び、それから法律を研究して、試驗を受けて司法官になつたのだから、大學などを卒業した人ではない、全く學問に教育を持たぬ人で有る、或は苦學生の出身かと思はれる、兎に角自分の手腕を以て、今日の地位に昇進し得た者で、矢張りセルフ、メード、メンの一人で有

裁判官となつて居る間に頭角を現はし、朴泳孝暗殺未遂事件、東京市鐵管事件、相馬事件等を取扱うて、其の名聲を博したが、中にも其の相馬事件に於て、今の後藤新平男を被告として取扱うた事は、不思議の因縁と謂はざるを得ない

後藤男が遞信大臣となつた時に、仲小路君は其の下に次官として留任したが、當時或る新聞紙上に『昔と今』と題するポンチを掲げて居たのを見た、其の昔の分は、仲小路君が傲然として『被告後藤は嘘をついてイカん』と叱り附けて居る所、其の今のには『大臣閣下は御賢明で入らせられる』と諛辭を呈して居る圖で有つた、我輩は此の圖を見た時に、後藤男も面白い男だが、仲小路君も決して凡鱗でないと考へた、後藤男が被告となりて、彼れの裁判振りを見た時に、一點でも不快の念が有つたなら、如何に大雅量を示さんとしても、之を次官に用ふることは出來なかつたで有らうが、被告が如何に巧辯を弄しても、突込む所は突込み、叱り附ける所は叱り附けて、後藤男の舌頭に誤魔化されなかつた骨頭は、恐らくは後藤男に認められて居たに違ひない、若し然らずんば之を大臣に迎へてから、愈々醜態を表した所で追ひ附く話ではない、後藤男と仲小路君との今日の交情は、日清戰爭以前の法廷に於て、判事と被告として相對したる時に既に一點靈犀の相通ずる者が有つたに違ひない

星亨事件の關係

東京市に大疑獄を生ぜしめたる發頭人は、かく申す我輩で有る、我輩が筆を執て、此の事件に放火した爲めに、利光鶴松、中島又五郎、横山富次郎を初め、多くの名士を負傷せしめ、終に星亨の横死と云ふ大事件迄持ち上がつた、考へて見ると誠に恐ろしい罪を作つた者で有る、然るに此の事件が此の如き大火に及んだに付ては、實は仲小路君も大關係が有るのだ、『星亨を殺した者は伊庭想太郎に非ずして島田三郎で有る』と、それを多くの人は言つた、それから少しく事情の眞相を解したる者は、之を我輩の罪に歸したが、更らに内情を穿たんとする或る者は、之を仲小路君に歸した者も有つた、或る元勳は我輩に向つて『星を殺した者は、君でも島田でも無い、仲小路と長森で有る、而して其の背後には山縣が居たので有る』と漏らされたことが有る

抑も我輩が此の大疑獄に點火した動機は、最初は唯一個の新聞の材料として、之を取扱ふたに過ぎなかつた、それから東京市政の腐敗に對して、之を矯正するは市民の責任たりとの觀念から、盛に攻擊の鋒を向けたので有る、然るに我輩の此の奮鬪に對して、三個の潮流から共鳴が來た、第一は舊改進黨系の人で有る、彼等は沼間守一君以來、久しい間東京市政を其の掌中に收めて居たのに、星亨君が自由黨出身を以て、其の黨與と共に市に乗り込み、改進黨系の人を排斥したので、甚しく之を憤慨して居た者だから、我輩が星一派の非行を攻擊するに當て、多くの材料は此等の方面から提供せられた、第二は政友會中の非星派で有る、星君が政友會の中堅となり、遞信大臣となりて伊藤内閣の柱石となつて居る事を面白く思はない人々が、政友會の中に在て、之れが我輩の攻擊に盛なる聲援を與へた、それから第三は或る元勳の漏らされた如く、仲小路君等の活動で有つた

當時仲小路君は遞信省參事官で有つた、而して長森藤吉郎君が東京地方裁判所檢事正で有つた、此の兩君が星遞信に對して、熱心に活動した事は、我輩共の豫想外に感じた程で有つた

我輩は正確に事實を列擧して之を語ることを好まない者で有る、又それまで正確なる證據をも持つて居る者ではない、然しながら仲小路君の背後には芳川顯正伯が居り、長森君の背後に曾禰荒助子の居た事は、疑ひ

もない事で有る、此の芳川、曾禰兩君の背後に山縣公の存する事は、言ふ迄もない事で有る、而して山形、芳川、曾禰の三君共に、曾て司法大臣となつた事が有て、司法部內には勢力の有る人々だ、自分が政事上の武器として司法權を用ふるに付て、十分の便宜を有する人々である

山縣公は伊藤公と政黨觀を異にして居た、伊藤公が政友會を組織するに付ては、甚た不快の感を抱いて居た、政友會の發會式には、我輩も招かれて列席し親しく其の光景を目擊した。此の時山縣公は內閣總理大臣として出席し、一場の祝辭を述べられたが、之れは單に形式に過ぎないので、其の腹の中では伊藤公の行動に贊成されなかつた、蔭では隨分伊藤公の政友會組織を冷評されたことも聞いた、伊藤公自らも「山縣は政黨嫌ひで、我輩の政友會組織にも反對し、大分惡口を言て居るさうだ」と言はれたことが有る、然かし既に政友會が伊藤公に依て成立した以上、山縣公は最早や其の位に居ることは出來ないので、官を辭して內閣總理の地位を伊藤公に讓つたが、心中には伊藤內閣を嬉れしく思ふて居られなかつたのだ、そこへ我輩の星攻擊の火の手を見たから、之を材料として伊藤內閣を倒す可し、少くも內閣の中堅なる星を傷けて、此の內閣に動搖を加ふ可しとの機略が、山縣公の胸中に閃めいたのでは有るまい乎 •

山形公の胸中に此の機略が閃めくと、其の左右に侍したる芳川、曾禰の兩番頭が、其の命令を奉して、芳川伯は仲小路司法省參事官を呼び、曾禰子は長森檢事正を招いて、懇々と其の方針を授けたに違ひない、忽ち星を捕縛すべき網は用意せられたので有る、先づ星の子分は悉く收監され、其の罪責は容赦なく糺明された、驚いたのは星ばかりではない、司法大臣金子堅太郎子は非常に苦しい破目に陷つた、伊藤總理大臣の癇癪玉は然に破裂したが、如何とも仕方が無かつた、恰かも近來政友會の手が司法權の上に延びて、松田正久男の操縱が司法大臣官舍の一隅に立つ樣になつた爲めに、大隈內閣を倒さんと欲して大浦事件を惹起し、尾崎法相が板挾みになつて苦しみ、流石の大隈侯も大閉口した樣な者だ、仲小路、長森兩君が星退治に參加しなかつたなら、我輩の威力が如何に强大でも、アレだけの大騷動にはならなかつたので有る

伊藤內閣は星の失脚後、間もなく渡邊藏相對五大臣の確執に依て倒れたが、其の後に現はれたる桂內閣には、伊藤內閣を倒す運動の恩賞として、芳川伯は遞相、曾禰子は藏相の地位を占め、而して仲小路君は遞信官房長に任せられ、長森君は大藏省の官房長にぜせられた、若し星を攻擊し伊藤內閣を倒す運動の功を賞するに官職を以てすることが正當で有つたとするならは、我輩は少くも國務大臣に任せらるべき者で有つたが、伊藤內閣沒落後我輩共は依然として閥族攻擊に從事し、桂內閣に對しても絕えず攻擊の矢を向けて居たが、仲小路君が星事件に關係を有する事は此の如き者で有る、而して彼れは此の事件に依て初めて立身の道が開けたのだ、若し此の事件が無かつたならば彼れは容易に司法省から脫出することは出來ず、今頃は控訴院か大審院に隱居の身となつて居たかも知れない、遞信省官房長に乘り出した爲めに、遞信省次官にもなり貴族院議員にもなり、遂に農商務大臣ともなつたので有る、我輩は一方に於て星君を初め、多數の名士を殺して、大なる罪を作つたけれど、之と同時に他方に於て、原敬君や仲小路君の出世の道を開いた、原君が初めて大臣になつたのは、星君の後任として遞信大臣に就任したので、原君の出世も全く星君失脚の結果と言て宜しい、神樣は果して此の德に依て此の罪を償ひ得ると裁判して下さるや否や

閥族系の有力者

仲小路君は芳川伯と同郷で有て、其の推輓を受けた者で有る、山縣公の一番番頭たる芳川伯の大番頭で有るから、其の系統は明かに山縣公に屬する者だ、日比谷の燒討事件に依て、芳川伯が國民の前に出でる事が出來なくなつては、之に代て仲小路君が出でるのは順序で有る、

後藤男は兒玉伯に依て、山縣系の有力者となり、仲小路君は芳川伯に依て、山縣系の人となつたのだ、第三次桂内閣に農商務大臣の地位を占め得たのも、全く芳川伯を此の内閣に代表して居た者と見るべく、既に桂内閣に一員となつた以上、桂公の政黨組織に參加したのも亦當然の事で、桂公の死後、加藤子と後藤男が衝突して分離した時に、大浦子若槻君が加藤子と進退を共にしたるにも拘らす、仲小路君が後藤男と共に去つたのは、去るべき筈で有る、既に後藤男と進退を共にした以上、大隈内閣に反對し、遂に之を倒して寺内内閣の一員となつたのも、彼れとしては當然の事で有る、彼れは常識から考へて、是れ迄は往くべき道に往つた樣で、奇抜なる權道を取つた樣にも思はれなが、然かしながら兎に角閥族擁護黨に於ける一方の有力者でなつた者だから、國民の間には餘まり人望が無いので有る

惡人とは思はれず

人望は無くても人物はそんなに惡るい人とは思はれない、親にも孝行な人で有る、家庭も治まつて居るさうだ、餘り上手ではないが詩も作り、花卉も作つて居る、讀書家で新知識を求め、事務家でテキパキと埒の明く方で有る

東京商業會議所會頭問題では大分攻擊を受けた、我輩共も怪しからぬ事と考へて居たが、之れには種々の内情が有て、閣議で決定して彼れをして之を決行せしめたので有る、必ずしも彼れ一人の罪でもない樣だ

物價調節令の發布に付ては、彼れが此の權力を揮つて如何なる妄斷をやらぬとも限らないと恐るゝ者も有るけれど、我輩はそれほどにも思はない、彼れは頗る悧巧な男で有るから、アンな權力を與へられても、之を濫用して失態を惹起す樣な馬鹿なことはしないで有らう

要するに彼れも亦官僚の間の一人物で有て、世間で種々の惡評を立てる程、そんなに惡るい男ではなく、隨分手腕の有る悧巧な人々有ると考へる、後藤、田、仲小路、有松の四君は、寺内伯の四天王と見るべく、何れも役に立つ人々で有る

▽機を見るに敏・仕事には熱心

早川鐵治

▽我輩が在官中には仲小路君は司法官として居られたので、お互に經歷や出身が同じでなかつた上に、仕事の上に於ても異つてゐたから、從て公、私兩つながら餘りお近附でなかつた。然し我輩の恩師松本莊一郎氏が死んだ時に、其の生前の功績を調べるについて時の官房長をしてゐられた仲小路君に御相談申したら、同君は非常に好意を表はしていろ〳〵便宜を與へて與れた事があつた。若いに似合はず、熱心な能い働き手であると其時我輩は感服した。

▽第三次桂内閣が組織された時、仲小路君は農商務大臣として入閣した。我輩も五六年農商務省で飯を食つてゐた事があるので、同省には大分知り合があつたが、其知合達は皆仲小路君が鋭意熱心に仕事をやつて、是迄の大臣と異つて、着々種々の方面に調査の手を伸して、何事で

も眞面目に研究する事に熱心してゐた。尤も中には勉强しすぎる大臣で、下僚の身になると少し困ると云ふやうな苦情を並べた男もあつた。其我輩はそれ等の噂を聞いて定めて成績が擧がるだらうと思つてゐた。其後我輩も政友會から除名を受けて、桂公の傘下に馳せ加はり、次いで桂公の勸誘で同志會に籍を措く事になつたが、仲小路君も幹部として同會に居られた。それで同君と御懇意になつた譯である。御懇意にはなつたが、我輩の性分として同君の門に赴いて、親しく意見を聞かうなどと云ふ事が出來ないから、當時同君が如何なる政見、如何なる抱負を懷いてゐたか判らなかつた。

▽桂公が死ぬと仲小路君は同志會を見棄てゝ脱會した。會の中では同君の節操を疑つて其行動を非難したものがあつた。然し我輩は寧ろ同君の機を見るに敏なるに感心した位である。公亡き後の同志會は野武士の寄り集まりであつた。仲小路君は野武士と共に仕事をする人でもないし、それをする丈け修養がない人である。同君は野武士と共にあつては天下は取れない、自分の手で天下を取るには官僚の方が捷徑と思つたから、何の狐疑する處もなく同志會を退いたのである。其上仲小路君は桂公の爲めに充分節操を立てた。「士は己れを知るものゝ爲めに死す」で、既に桂公が死んだ後では、他の何人にも義務を盡くす必要はない。落伍者の集團と一緒に居て一生を埋木にして終ふには、仲小路君は餘り機を見るに敏な人であつたのである。

△仲小路君が機を見るに敏な事の例ば遞信省の官房長をやめて一時實業界に入つた時にも窺はれる。實業界は云ふに云はれぬ厭な處があつて、役人や廉潔な人には面白くない事が多い。仲小路は折角入つた實業界の空氣が厭で、迚も其中で志を伸べる事は不可能だと見極めをつけると、二等の官等を三等に下げてまで内務省に入つた。之れなども機を見るに敏で、且つ自分を知る明のある事を立證するものであつて、同君は到底實業界で成金になれる人でもないし、又成金のやうな人格の低い人間と雷同するを屑としない人である。

▽今度の調節令などももつと早く出たら、もつと効果が擧つたらうと思はれる。時機が稍後かつた憾はあるが、然し好い事だと思ふ。又北海道の開拓なども、根が職務に勵精で自ら手を下して研究を許まない人だけに、大いに成績を上げ得るだらうと思ふ。唯今迄官僚系に育つた丈けに理窟一點張りで押通して來た。然し殖産工業などと云ふ事業は、さう理窟一點張りでは行はれるものではない。機を見るに敏で、而かも研究心が盛んで、職務に精通する仲小路君にして、今後益と其手腕を振つて好成績を上げるには、何よりも先づ此理窟一點張りの癖を矯めてもつと融通の利くやうになつて貰ひたいと、我輩は思ふ。

▽仲小路廉

大蘇鐵人

一、

仲小路は現代的成功者の一人である。彼は、存外、年は若くして、自分にも新人物のつもりで任じて居る。然し、彼の風采、殊に、其の鼻下の鬚を見ると、彼の頭は新らしいかも知れぬが、少くとも彼の髭は舊式である。カイゼル髭でも無く、全く、官僚髭といふ可く、十年前ぐらゐに流行した當時の新式である。今頃、彼のような長く撥ね上つた伊勢髭

君の髭のようなのを蓄へて居る人は東京には珍らしい。巡査か判任官か、或は、田舍の中學先生などに往々發見する位のものである。

吾輩は、彼の髭に對して、左まで深い興味を有つて居るわけでは無い。然し彼の官僚髭は則ち彼の官僚思想を象徵して居るのであると思ふ故に、彼を評論するに當つて、先づ彼の髭を云爲せざるを得ないのである。彼の官僚髭はカイゼル髭よりも薄くて長い、カイゼル髭ほどには、强く、逞しいといふ印象を與へない。然し人格の表象たる事は、カイゼル髭も官僚髭も變りは無い。官僚髭は、其の嚴かめしい、莊大なる形式を特徵とするのである。形式といふ一語が此の髭の性命である。而して今の仲小路の政治思想は此の髭に表現されて居る。

探偵小說の筋書の中には、僅に目か鼻か、何か一の特徵だけを以て、不可解の人物を物色するような事が見えて居るが、仲小路に對しては、第一流の名探偵でなくても、彼の肖像を、顏を隱くして、其の髭だけを見せれば、容易に彼たる事を斷言するを得るであろう。其れほど、彼の官僚髭は、今日は、既に名物になつて居る。凡て何に限らず、名物となつてゐるものを取り除くは惜しむ可き事ではあるが、彼の官僚髭は、思ひ切つて取去つた方が善いかも知れぬ。尤も彼は、能く人と衝突をする。寧ろ鬪將として知られて居る。鬪將といふのが彼の天分であるらしい。鬪將としては、其の嚴かめしい髭が極めて適はしいように思はれる。則ち彼の官僚髭は、又た彼の爲に、一種の小さい戰鬪旗であるとも言ひ得る。

二、

兎に角、彼の髭は彼の看板である。彼の兄分たる後藤男の髭も著しき特色を有つて居るのであるが、彼は愼面無く、其の理想的人物を公言して居る。からいふ意味から見れば、後藤の方が仲小路よりも多く稚氣を帶び、寧ろ淡泊て、又た聊か豪傑氣取りの容子も見える。仲小路には豪傑らしい容子は無いが、然し、其の氣取方といふ點に於ては決して後藤に讓るものでは無い。彼は其の嚴かめしい官僚髭を顫動させて、役者のような身振り聲色で氣取つて演說をしたりなどする。其の時には又た妙に、彼の髭が能く〳〵似合ふのである。確に、彼は一廉の雄辯家を以て自任して居るのは爭はれない事實である。而して彼は昔の或雄辯家の如くに、自ら其の姿勢、容貌を明鏡に映つして、演說を練習して見た事があるか、如何かは能く分らぬが、彼は其の官僚髭が演壇に於ける彼の容貌、姿勢に調和するのを自信して居るのである。次には、其の莊大なる官僚髭が、彼の威儀を飾るを足るとも思つて居るのであろう。果して然らば彼の髭は、彼の爲に有効なる裝飾品であらねばならぬ。然れども彼の態度には、つねに鬪將を以て自任し、政敵に對して挑戰的態度に出る事を好んで居るらしいが、彼の政敵が彼の顏を見て、直ちに反感を挑發する刹那に、眞先に政敵の心を動かすものは、彼の官僚髭である。

彼が官僚髭を保つて居る間は、彼の官僚思想は微動だもせざるであろう。彼の兄分後藤は、ローズヴエルトを理想的だといふ。彼は、其の理想的を明言せぬが、其の髭に依つて想像する時は、或はナポレオン三世であるかも知れぬ。

近來、ハイカラ仲間では、鼻下髭を短くする事と、髭の幅を目立ちて狹くする事が流行する。則ち最新式の髭は米國の活動のフヰルムのチヤプリンが理想的になつて居る。鼻の下に、チヨツトほくちを置れたようなのである。髭の幅は鼻の幅よりも狹い。何時でも、電車に乘つて見ると必ず幾人かの和製チヤプリンを發見するのである。和製チヤプリンの髭は、其の幅に於て仲小路官僚髭の十分一にも及はない。後藤も仲小

路も眼鏡を掛けて居るが、後藤に鬚よりも眼鏡が目立つ。仲小路の官僚鬚は其の一方の端を引張ると、必らず優に耳にまで届くであらう。若し彼が此の長たらしい官僚鬚を短かく刈る時が來たら、其は彼の風采の爲に一大變革であるのみならず、彼の精神上にも一大革命であらねばならぬ。彼が政治上、超然主義を擲つて政黨主義に移る時があるとすれば、其の時は、彼は其の官僚鬚を刈るであろう。又た刈らねばならぬ。

三、

・彼は私學出身者としては、其の年に不似合な榮進をした。而して彼の心中には、つねに私學といふ事が蟠つて居はせぬかと疑はれる。官學とか、私學とか、赤門とか、茗溪とか、乃至早大とか三田とかいふような差別は、何等の價値の無いものである。人と人とは意氣を以て交はる可きもので、學歴を以て結合するといふような事は餘りに小さい事である。仲小路も、あれほどに出世をし、一世の闘將といはれる位であるから、學問などの、吝(ケチ)な思想を持つて居ようとは思はれぬが、又た思ひたくも無いのであるが、不幸にして嫌疑は往々、彼の身上に掛けられてある。彼ば、其の周圍に居る同僚、或は略ば匹敵する位地の人々が、概ね大學出身であるのに對して、俺は私學であるといふ反撥心、善く言へは氣慨を有つて居ると説く人もある。反撥心といふは、敵から受ける壓迫を自覺するに由つて起る。故に、若し、敵手の壓迫を自覺せざる時は、反撥心の起らざるは自明の道理である、隨つて濫りに反撥心を起す者は人物も小さいといふ事になるのである。仲小路の心中に、「俺は私學」といふ觀念が跋扈して居るとすれば、「俺は官學」と言つて自負する連中と少しも優劣は無いといふ事になる。

　仲小路は所謂長州人である。然れども彼は、其の初、長州人の肩書を以て出世したものでは無い。彼は世間の所謂長閥の寵兒に非る事は確なる事實である。彼が始めて勅任官に拔擢されたのも、確か大隈内閣の時であつた乎と記憶する。彼は、世上に頭角を拔いてから後に、長州の先輩に認められたのである。彼が元老に取入つて居るのは、自分が長州人であるからでは無い。對手が元老であるからであると、吾輩は見て居る。吾輩、彼の爲に辯明するのでは無い。吾輩は未だ彼を識つて居らぬ。彼と話した事は無い。公會の席上で二三度逢つて、演説を聽いたくらゐのものである。然れども吾輩の見聞するところを以てすれば、彼は、腕一本で叩き上げた男である。

　彼は事務家である。精悍な男である。原書を讀んで、今でも勉強して居るといふのは彼の自慢の一である。彼は事務家としては後藤以上である。彼が遞信省次官として後藤大臣の下に居た時、彼の精悍なる事務の才は廣く認識された。彼が兎角の批難あるに係らず、續いて重用されて行くのは、其の事務の才が捨てられないのである。

四、

　彼は長州人としては、毛色が變はつて居る。其の才を見せ、策を見せ、縱横に健闘する點だけは、田中參謀次長と匹敵して居るが、性格ば全く違ふ。

　彼は、型は小さい。小さく思はれる。然れども田舍人などに應接する事には妙諦を得て居る。田舍人は、彼に面會すると、概ね感心して仕舞う。流石は仲小路で、度胸は太いと思ふらしい。彼の官僚鬚を有する風采と、芝居氣の磅礴する態度とが田舍人を魅するのである。然し、魅するといふ事に罪は無い。魅するといふのは畢竟、彼の才である。

　彼の政治的態度は、内閣のバロメーターともいひ得る。彼は目先の早

鋭い男である。內閣の壽命が短いと見込が付けば、決して手を出さぬが、其の代りに內閣の基礎が確つかりして居ると、安心が着けば、思ひ切つて活躍する。先般、商業會議所會頭問題で、彼が、到頭、實業家の頭目を抑へ込んだのも其の一例である。米價調節令も其である。此の調子で進んで行くと、彼は更に何事か續々、遣つて見るであらう。彼は盛んに其の健腕を揮り廻はすであらう。商業會議所の會頭問題は、實業家の腰も弱かつた。然し。仲小路が、あれほど喧嘩腰に構へたのは、內閣の基礎が出來たからであつた。世間では唯だ仲小路の挑戰振りに目が眩かれて居て、內閣の地盤が固まつて行く事には、案外、氣が着かなかつた。若し反對に、現內閣の地盤が傾いて來るとすれば、其の兆は先づ、仲小路の旗色に現はれる筈である。

五、

彼の出世が異常に早い事は世人の熟知する事實である。吾輩は、彼が出世の早い理由を說明するに足る可き興味のある事實を一つ紹介し度い。

・先年、彼が歐洲を巡遊して、電氣事業を視察して歸朝した當座の事であつた。彼は、或處で歐洲視察談を演說した。吾輩は、此の時、始めて彼の演說を聽いた。席上には元老も列席して居た。彼は莊重なる態度を以て演壇に登り、重々しい調子を以て演說した。彼が、觀察の結果として、特に、重い調子で、聽衆の注意を要求したのは、「勤勉努力する國民及び勤勉努力する國民を有する國家は榮え、勤勉努力せざる國民及び勤勉努力せざる國民を有する國家は衰へる」といふ語で、是丈けの話を、特に力を入れ、殊に節(フシ)を著けて、恰も歐洲に行つて、これ迄の洋行者が未だ倘其發見する能はざりし一大眞理を、彼が初めて發見したかの如き口調、態度を以て演べたのは、聊か吾輩を驚かした。若い人は、概ね手持無沙汰の顏をして居た。

仲小路の說は、堂々たるもので、何人も異議ある可き筈は無い。是程の事は歐洲を見て來なくとも、分り切つて居る。恰も三角形の二邊の和け他の一邊より長いといふ事を、節(フシ)を著けて、音樂的に話したと同じである。然し是くらゐに間違の無い、極めて堅實なところを重々しく主張するのが、老先輩には能く諒解されるであらうし、又た辯士の人格を堅實らしく思はせ、信用も加はるかも知れぬ。果然、彼の後に、元老は起つて演說した。仲小路君の言つた通り、勤勉努力する國民はと言つて、仲小路の三角形演說に裏書をした。或は仲小路の眞意は、初から元老に聽いて貰ふ積りであつたかも知れぬ。

彼は春秋に富んで、元氣旺盛である。閣將として長く議會を賑はすであろう。

(九月廿三、夜雨)

家庭醫學叢書

全部五十冊完成　定價各冊十五錢　郵税各冊二錢

- 吾妻醫學博士述●お産の話
- 唐澤醫學博士述●小兒病の話
- 千葉醫學博士述●耳鼻咽喉病の話
- 山田醫學博士述●神經衰弱の話
- 額田醫學博士述●肺結核の話
- 岡村醫學博士述●皮膚病の話
- 佐藤醫學博士述●婦人病の話
- 廣川醫學博士述●淋病の話
- 佐藤病院長述●黴毒の話
- 森肛門病院長述●肛門病の話
- 杉江醫學博士述●ヒステリーの話
- 南醫學博士述●胃病の話
- 中原醫學博士述●外科療法の話
- 森醫學士述●呼吸器病の話
- 竹中ドクトル述●性慾教育の話
- 森醫學士述●病人看護の話
- 中村醫學士述●精神病の話
- 菊地醫學士述●脚氣とリウマチスの話
- 齋藤ドクトル述●寄生蟲の話
- 豐福醫學博士述●小兒傳染病の話 上巻
- 豐福醫學博士述●小兒傳染病の話 下巻
- 竹中ドクトル述●感冒と肋膜炎の話
- 岡崎醫院長述●有益危險食物の話
- 阿久津醫學士述●男子生殖器病の話
- 森醫學士述●良藥と毒藥の話
- 高橋醫學士述●妊娠と避姙の話
- 杉本醫學博士述●便祕と下痢の話
- 森醫學士述●注射の話
- 井上醫學士述●眼病の話
- 落合ドクトル述●科學的美容法の話
- 額田醫學博士述●糖尿病と腎臓病の話
- 土田醫學博士述●腦病の話（上巻）
- 同●腦病の話（中巻）
- 同●腦病の話（下巻）
- 岡崎醫院長述●有效漢藥療法の話
- 竹中ドクトル述●肺病有效療法の話
- 衞生新報社編纂●物理的健康增進法話
- 同●化學的健康增進法話
- 同●精神的健康增進法話
- 同●滋養食物と滋養劑話
- 同●兒童健康增進法の話
- 同●婦人健康增進法の話
- 同●黴菌と消毒の話
- 同●生殖衞生の話
- 同●營養療法の話
- 同●癌の話
- 横手醫學博士述●理想的飲食物の話
- 小川醫學博士述●心臟病の話
- 宮原ドクトル述●理學的療法の話
- 森醫學士述●九種傳染病の話

訂正縮刷 みゝずのたはこと

蘆花 徳富健次郎先生の著にして版を重ぬる事實に七十版 其内容には村落生活の即興寫生あり短篇小説あり、日記の斷片あり、長短の手紙あり、紀行あり、著者居村の風物を撮影したる印畫數葉を挿みて頭を切く。（定價壹圓、郵税八錢）

著者自費出版の引受

印刷、製本、出版、廣告、販賣等總て書籍出版に必要なる手數一切を引受く、御依頼御希望の方は原稿御送附あれ、見積書提出す

組合セ本箱

東久邇宮家、梨本宮家、朝香宮家を初め奉り德川公爵家、大隈候爵家、伊藤公爵家等の諸名家より御注文の榮を辱ふせる最善最良の本箱……△種類　價格並に構造を示せる目錄……郵税二錢封入御申越の方へ進呈す

書籍雜誌小賣販賣

新刊月報（九月號）雜誌目錄、圖書分類目錄、新橋堂出版目錄郵券十錢封入御申越の方へ即時發送す

衞生新報改題 保健 特別號

人体主要機關之健康法

■菊判三百五十頁　■定價金五十錢　郵税二錢五厘

▲腦の明快强健法（佐野博士）▲毛髮の官能と養生法（竹田學士）▲皮膚の官能と健康法（岡村博士）▲眼の官能と其健康法（井上學士）▲耳の官能と其健康法（千葉博士）▲鼻の官能と其健康法（千葉博士）▲咽頭並に喉頭の健康法（千葉博士）▲口腔（歯）の健康法（松井ドクトル）▲胃の健康法（深瀬ドクトル）▲腸の官能と其健康法（深瀬ドクトル）▲肝臟の機能に就て（木村博士）▲腎臟の官能（額田博士）▲呼吸生理と肺の健康法（竹中ドクトル）▲心臟の官能と健康法（小川學士）▲骨及關節の攝養（中原博士）▲筋肉の官能と健康法（伊藤主幹）

●發賣元　東京市銀座通新橋際　振替東京二〇〇番　電話新橋一九九一　新橋堂

婦人公論　家庭悲劇號　秋季特別號

結婚改良意見

▼民族衛生より觀たる結婚改良……永井醫博士

▼無打算の結婚を排す……北早大教授

▼公立媒介所を設けよ……山田わか

▼戀愛の選擇を自由にせよ……本間久雄

▼簡單なる披露にて可なり……境　枯川

惡血の家に嫁いて

癩病の家とも知らずに嫁入つた妻の哀れな話……松崎天民

▽家庭悲劇論……三宅文博士

▽愛の目覺めと家庭悲劇……吉田絃二郎

▽婦人問題より觀たる家庭悲劇の原因及其救濟……高野重三

▽近代劇に描かれたる家庭悲劇……本間久雄

▽醫學上より觀たる家庭悲劇……杉江醫學士

淺草情話　**梅園心中**……村松梢風

創作四篇（家庭悲劇を取扱つた）

[redacted]山　枯梗……田山花袋

[redacted]暗　點……小野美智

[redacted]臺所の三十分……坪内士行

[redacted]新壺坂寺……上司小劍

懸賞當選發表

「わが家の悲劇」（十一篇）

▽悲劇は今日の女學校に存す……向軍治

▽秘密無き家庭に悲劇無し……安部磯雄

▽姑の心理……高島平三郎

▽お母さん！中澤ムいさん……久保田富江

▽夫婦と獨身者の對話……生方敏郎

毎號連載　長篇小說

[redacted]秘めたる戀……徳田秋聲

[redacted]女人神聖……谷崎潤一郎

[redacted]春宵記……小山內薫

特價　郵稅　卅二錢　五錢

本郷西片町十　中央公論社

評論

日本出兵論

法學博士　古川學人

協商國が我日本に向つて出兵の要求をしたといふ事は、遠く開戰の當初から屢々噂された。佛蘭西に於ては啻に新聞紙上に此要求が繰り返さるゝのみならず、公開の席上に於て責任ある政治家の口より主張せられたるも少くない。北清事件當時駐支公使として親しく日本軍の活動を見たピション氏の如きは、其最も熱心なる主張者である。然し所謂出兵の要求が單に新聞紙上の唱道に止まるか、或は事實斯かる公式の交渉があつたかは、少くとも民間に於ては一個の疑問として取扱はれて居る。然るに今年の五月末突如として我艦隊の一部が歐洲方面に出動して居るといふ公表あつて以來、又出兵論が新聞紙上の問題となるやうになつた。海軍の出動は公表せられたものゝ外、もつとあるとかいふ說は云ふまでもなく。現に出て居るものゝ外にもつと應援艦隊を出せといふ要求やら、更に進んでは陸兵を歐洲戰場に送れといふ要求が來て居るといふやうな說も見ゑるのである。歐洲戰爭の最近の形勢から推測して見れば、强ち無かりさうな事でもない。況んや隣邦の支那に於ては參戰決行の結果として、已に歐洲出兵の議が熟しつゝあるに於ておや。

歐洲出兵論が具體的の政治問題として何れ丈けの意味を有つて居るかは、今之を詳案するの手段はないが、只之が兎に角世上の問題となつた以上、之に關する二三肝要の點を論及するは强ち無用の業ではない。

此問題に關聯して、第一に起る問題は歐洲出兵は可能なりや否やの點である。此點は軍事專門家の詳密なる研究を俟つて論定すべき技術的問題であるから、我々門外漢の容易に斷定し得ざるところである。けれど

も、姑く常識を以て論ずるを許すならば、少くとも陸軍の歐洲派遣は殆んど不可能であると言はなければならない。軍隊は、殊に陸軍は、其本國を離るれば離るゝ程、其能率を減ずると聞いて居る。日本は滿洲まては陸軍を送つた經驗があるけれどもそれ以上の遠方へ派兵する事について、今日どれ丈けの研究を積んで居るだらうか。殊に露國方面へ兵を派遣する事については、今日の國情に鑑み、軍隊の活動に必要なる便宜を遺憾なく受くるの希望に乏しい。のみならず後方の聯絡も決して安全なりといふ事は出來ない。して見れば少くとも露國方面に派兵する事は、事實不可能と言ふべきではあるまいか。此點については西部佛國方面に向ける派兵は、幾分其事情を異にする。何となれば此方面に於て軍隊の活動に必要なる幾多の便宜を略ぼ遺憾なく受くるの見込に富むからである。併しながら海上に於ける幾多の危險を冒して大兵を此方面に送るといふ事は、又事實不可能である。送り得るとしても、其數は決して大いに聯合軍の面目を改めしめる程に多數なるを得ない。而してそれ程の多數でないとすれば、日本軍丈けが獨立の部隊として活動する譯に行くまい。從つて又そこにいろ〳〵の不便があるではなからうか。斯く考へて見れば、野戰砲兵とか騎兵とかいつたやうな特殊部隊ならば、相當に活動し得んも、多數の歩兵を送つて聯合軍の氣勢に大いに加ふるところあらしめんとするは、容易に望み得ないと思ふ。

斯く論ずるも、人或は支那の出兵を以て之に抗辯するかも知れない。然し支那の出兵は稱して兵とは云ふけれども。近世の戰術に役立つやうな兵員の派遣ではない。支那の今日の軍隊は其最も訓練を積めるものと雖も、到底歐洲諸國の軍隊の比較にはならない。故に支那の派遣する兵隊は、戰線に立つ爲めのものでなくして、後方に於ける勞役を分擔するものに相違ない。名は兵といふも畢竟勞力の供給に外ならない。此意味の出兵ならば、我國に於ても或意味に於ては苦もなく出來る。併しながら斯の如きものを多數送る事は、決して我々の誇でもなければ又希望するところでもない。

要するに、陸兵派遣の能不能は軍事上の專門的知識に屬する問題であるけれども、予輩は大體に於て之を不可能と信ずる。假りに一歩を讓り、之を可能なりとしても、歐洲の舞台に於ける日本軍隊は東洋に於て我々が日本軍隊として自負する丈けの能率を發揮する事も出來ず、又相當有力なる働をなす程の大部隊をも送

り得ざるものと考ふるが故に、少くとも出兵といふ事は日本の歐洲の戰爭に對して貢献せんとする所以の最良の手段ではないと信ずるものである。我國にしてもつと此戰爭に益すところあらんとすれば、他にもつと適切なる方法があらう。出兵を以て援助の最良法なりとし、又之を以て誠意を彼に示すの最好の手段とするが如きは、畢竟幻影に過ぎないと思はるゝ。

陸軍に於て不可能なる歐洲出兵も、海軍に於ては無論可能と言へる。遠く本國を離るゝ事の不便は言ふまでもないが、海軍は元來艦隊其物が獨立して行動するを職能とするものであるからである。尤も可能であるからとて全力を擧げて援けるがよいか惡いかは自ら別問題である。いろ〳〵の事情を綜合してどれ丈け應援の爲めに出せるかは、自ら一定の制限はあらう。其制限の範圍内に於て出來る丈け戰爭の遂行に協同するは、進んで我國のなすべきところなりと云つてよからう。

歐洲出兵論に關聯して我國の論壇に幾多の俗論の横行する事も此際見逃してはならない。俗論の最も甚だしきは、輕卒なる歐洲出兵不必要論である。尤も此種類の説にも貴重なる帝國の兵力を歐洲まで持ち出して危險に曝らすのは以ての外の僻事だといふ絶對的不必要論もあれば、わざ〳〵出て行く以上は何か重大な報償を得なければならない。之といふ交換物のアテもなく、輕卒に出兵するものは不可なりといふ相對的の不必要論もある。何れにしても根柢の思想は我々に利害關係のない他人の喧嘩に輕々しく飛出すのは馬鹿げてると言ふにある。之れ畢竟今次の戰爭に對する我國の地位又は戰爭の遂行に關する協同の目的を諒解せず、從つて戰爭の遂行に伴ふ我國の道德的責任を忘却せるの議論である。斯の如き謬見は民間の論壇に於て屡々之を見るのみならず、政府當局者に於ても往々此邊に關する正確なる理解を缺くではないかと思はるゝ節もある。例へば民間に於て政府に對し日獨開戰の理由を問ふものありとせんか、政府は須らく今度の戰爭を共にする所以の高尙なる協同の目的を以て答へて可なりである。然るにずつと低い日英同盟の條約に基く義務として止むを得ず遣つたなどゝいふ苦しい說明をするのは、詰り高尙なる目的の意識を缺くが故である。日英同盟などを引合に出すから、そんなら歐洲に出て行くの必要はない。遠くも印度洋を以て限とすべしといふやうに押しつめられるのである。之を米國大統領ウイルソンの堂々の陣を張つてあらゆる戰時政策の說明

を爲すに比較すると、我國政治家の眼光の狹少なる實に驚くの外はない。

此種の低級なる俗論は出兵賛成論の方にもある。即ち實質的利益を豫期して出兵を主張する說の如きは之れである。出兵を否認すると賛成するとの區別はあるも、歐洲戰爭を他人の喧嘩と見るの見地を取るの點は同一である。畢竟するに、我國の論壇は世界の出來事を我自身の事とするの遠大なる見識がない。尤も今度の戰爭の動機についてはいろ〳〵のものがあらうが、其いろ〳〵の不純なる動機を包むに正義公道の皮を以てして居ると見るも亦一說であるかも知れない。然しながら我々と協同して眞面目に戰爭を遂行しつゝある國の最も健全なる分子の間には、此戰爭の結果によつて世界全體の進歩の上に重大なる貢獻をなさうと云ふ赤誠の流れてをる事は一點の疑がない。此赤誠が實に英佛米露の人民全體をして斯くまで協同の目的に堅く一致せしめて居る所以である。獨り我國が折角此戰爭に參加しながら、此遠大なる世界的見識を缺くは如何にも殘念なる次第ではないか。啻に此世界的見識を缺くのみならず、全然利益の打算のみに躊躇して、獨逸に反對したのが間違であるの、戰後に於ける日本の立場は事によると獨逸と提携して英米に當らねばならぬ事になるだらうなどゝいふやうな議論の識者より出づるを聞くのは寔に痛嘆の至りである。

苟も戰爭に參加せざれば止む、一旦參加せる以上は協同の運動に加ふる最も有力なる階級の最も高尙なる見識を理解し、之と同じ標準に立つて協同の目的に盡力するの覺悟がなければならない。已に此覺悟ある以上は、今度の戰爭は卽ち我々自身の戰爭である。唯夫れ日本は自ら歐洲の諸國とは其境遇を異にする。從つて其爲し得る盡力の程度にも自ら一定の制限を許さなければならない。暫く海軍について之れを云はんか。日本は元來海國なるが故に海軍の全體を遠く遠洋に派出する事は出來ない境遇にある。且つ其工業の十分に發達せざる點からいつても、又原料の產出なき點から云つても、造船能力は頗る低きが故に、他國よりも更に船艦の喪失を惜まねばならぬ位置にある。殊に昨今に至つては同盟諸國は益々自衞の必要上鐵材の輸出を禁止せんとして居る。之れ正に我國をして船艦の喪失を難んぜしめる所以である。直接外敵と接して生死の爭をなして居るにあらざる以上、或一定の程度を限つて出し惜しみをするも又已むを得ないといはなければ

ならない。此等の點は外交的手段によつて適當なる說明を與ふれば、彼に於て必ずや之を諒とするに相違ない。唯此等の點に關する解釋を與ふるについて、我々は何處までも協同目的の遂行に出來るだけ盡力を辭せないと云ふ誠意を示す事が大切である。然るに我國は官民共に彼に適當なる諒解を求むる爲めの骨折もしなければ、又最も大事な赤誠を見せると云ふ點に於て怠つた。一二の例を擧ぐれば、政府は久しく民間の船舶業者が中立國を通じて敵國の爲めに船舶を提供して居るのを知つて、之れを禁ずるの手段を怠つたではないか。又民間に於ては日本の戰爭參加を論ずるに、常に利害の打算を標準として全然道德的意味を無視して、常に各國の疑惑を招いで居つたではないか。從つて我々は相當に力を注いで居りながら、之れが相當に認められない。而かも却て歐米諸國には尙一層の助援を求むるの聲が高い。之れ眞に我の一層の助力を求めんとするの意に出づるものもあらうが、他の一面に於ては確かに戰爭に對する日本の貢獻に向つて發せらるゝ不信任の聲と見るべき點もある。斯くの如くにして進まんか、我々は見えざる大勢に動かされて、知らず識らず相當の盡力をなしながら其骨折の甲斐もなく、徒らに各國より疎外せられ、斯くして精神的に全然孤立するの悲境に陷らざるを得ないであらう。

故に歐洲出兵論の唱へらるゝに對して我々國民の執るべき態度は、第一には我日本は此戰爭の成行に決して冷淡なるものではないと云ふ事を事實に於て示す事である。第二には出來る丈けの力を提供して戰爭の目的を到達するに熱心なるの意嚮を事實に於て示す事である。第三には我國特殊の地位境遇を說いて、日本の爲し得べき盡力には自ら一定の程度ある事を明かにする事である。而して最後に我々國民は同盟國の識者と共に今度の戰爭によつて遂せんとするところの高尚遠大なる協同目的を十分に理解して居るはことを、彼等に納得せしむることとである。而して此等の點を同盟國民をして十分納得せしむることとの前提條件として、我々自身先づ大いに覺醒し、大いに啓發するところあるを要するは固より言ふを俟たない。

十一月一日に發行せらるべき本誌の次號は第三百五十號に當るを以て

第三百五十號（記念號）

と題し、平常號より百二十頁を增加し、一倍半號（定價四十五錢郵税三錢）を發行すべし。

而して創作欄は全部有島兄弟、谷崎兄弟小說集とし、即ち**有島武郎、有島生馬、里見弴、谷崎潤一郎、谷崎精二五氏の創作**を滿載すべし。

最も進物せる現代式實用字典として本書の需要は永久無限也

東大文科大學教授 文學博士 服部宇之吉
學習院教授 小柳司氣太 先生著

四十七版

詳解漢和大字典

四六判最上製二千餘頁

包容漢字、熟語七萬最新語は苟も洩さず、一切現代の要求を本位に選擇解釋す。新式索引附錄の草字便覽と共に便利無比なり

定價二圓五拾錢

特製（背革インデクション附）金三圓

郵税 內地十六錢臺樺卅五錢鮮支四十五錢

內容見本進呈 往復葉書申込

現代の文明は實に字書を中心として回轉しつゝあり。進步せる字書を巧に利用する人にして、始めて激甚なる競爭社會の優勝者たるを得べし。本書が此の趨勢に適へる文明的字書の覇王たることは世の定論たり。卽ち實業家は本書を得て始めて字書の實用利便を悟れりといひ、敎育家は學生唯一の模範字典なりと驚嘆し、新聞雜誌は一齊に最も完備せる現代式實用的字典として本書を推薦し、學者は空前の進步字典と激稱す。要するに輿論は公明なる審判者也。かくて本書の發賣部茲に一擧十萬に達し、白熱的歡迎場裡、特價を撤回したるが、爾後需要益々强盛にして、今や四十七版を出せり。進步的人士は速かに一本を備へ、本書の萬能力を利用せられよ。

發行所 東京神田 富山房 振替一〇五 賣捌 全國書店

（中付三の二）

(中付三の四)

陸奥伯爵閣下序

文明の末路

イ・ドネリィ氏原著

諷刺小說

百年後の社會狀態を豫言せる世界未曾有の一大奇書出づ

陸奥伯英國の邊都に本書を發見し珍藏愛讀手を放たず、見來る世界文化の大勢が、政治に經濟に軍事に着々本書の豫言を實現するに驚歎し、普く本書を世に推奬せらる。今次の世界大亂に於て獨逸軍が毒瓦斯を使用せるは世間周知の事實にして是れ本書の既に豫言せる所也。本書もと空想の產物なりと雖、基礎を學問上に置けるを以て其奇想警說と諷刺教訓とは讀者に深甚なる感興を與ふると共に世道人心を稗益すること著大也。

定價壹圓 送料八錢 中判總布

東京南紺屋町二十番地 實業之日本社出版部 振替口座東京三二六番

(中付三の五)

立雲頭山滿翁題字

前陸相楠瀨幸彦閣下題字

南洋製糖會社創立委員長 平岡定太郎閣下題字

支那 伍廷芳閣下題字

佛國法學博士 神藤才一氏序文

南洋 前篇

林金五郎編述

前篇 正價金貳圓 送料内地拾貳錢

四六判洋裝函入

南洋明細地圖添附

南洋地方重要寫眞十數枚挿入

（紙數約四百頁）

◇本著の權威◇

著者は新進の實業家にして數年來屢々南洋に往來し熱心に南洋研究に從事し來りし人、現に本著の爲に社員數名を南洋に特派し實地踏査せしめつ、ありし

◇本著の内容◇

(1)香港、馬來半島及南洋諸島の歷史、地理、風土人種、(2)香港に於ける一般經濟狀態、馬來半島に於ける鑛業、南洋諸島に於ける諸產業、(3)南洋諸島に於ける一般林業及農業、(4)南洋諸島に於ける一般鑛業、(5)同上商業、交通、(6)香港、馬來半島及蘭領東印度に於ける軍備及財政、外交、(7)香港、馬來半島及全南洋に於ける本邦人の生活及び營業狀態

發行所 東京市日本橋區坂本町十八番地 桐生屋出版部 電話浪花園二四五一番 五〇四八番

發賣所 東京市神田區表神保町 東京堂書店 東京市日本橋區數寄屋町 六合館林平

（中付三の六）

最新刊

諸大家實際家監修賛助　清水書店編輯部編纂

清水の日本六法全書

六法全書中の最高權威は本書なり

現今流布せる六法全書五十餘種中の最高權威は恐らく本書なりこれ決して自然に非ず法曹諸大家の公許期せずして相一致する所宜なる哉滿天下の公評嘖々として初版以來其數實に五十萬部を賣盡今や更に訂正第廿七版を重刊するに至れり斯くて本書の內容外形共益々理想的に完備して容易に他の企及を不許而も低廉類を絶つは深く本書の名譽とする所なり苟も法治國民にして權利義務を口にし而して未だ本書を有せざる人士あらばそは一大恥辱なり敢て薦む速に座右一本を備へよ

印	製本	正價	郵送料
イ印	天金總皮特製瓜掛	正價金貳圓參拾錢	郵送料金八錢
ロ特製印	天金總皮特製本	正價金貳圓拾錢	郵税料金八錢
ロ上製印	天金背皮上製本	正價金壹圓七拾錢	郵送料金八錢
ハ印	總クロース製瓜掛	正價金壹圓四拾錢	郵送料金八錢
ニ印	總クロース上製本	正價金壹圓貳拾錢	郵送料金八錢
ホ特製印	薄手本總皮特製本	正價金壹圓貳拾錢	郵送料金八錢
ホ上製印	薄手本天金背皮上製	正價金九拾錢	郵送料金八錢
ホ並製印	薄手總クロース製	正價金八拾錢	郵送料金八錢

發行所　東京市神田區今川小路二丁目四番地
電話本局 九六四、九六五　振替東京 七四四七
清水書店

(中付三の七)

眞摯の研究と興味ある記事に滿てる 十月號

早稻田文學

- 小説 **五慾煩惱**……近松秋江
- 小説 **生命の綱**……小川未明
- 戯曲 **斯くて終るか**……坪内士行
- 小説 **島の秋**……吉田絃二郎
- 小説 **めぐりあひ**……中村星湖

文藝に志す若き人々に與ふる書！

美術院 展覧會合評 古川修 森口多里

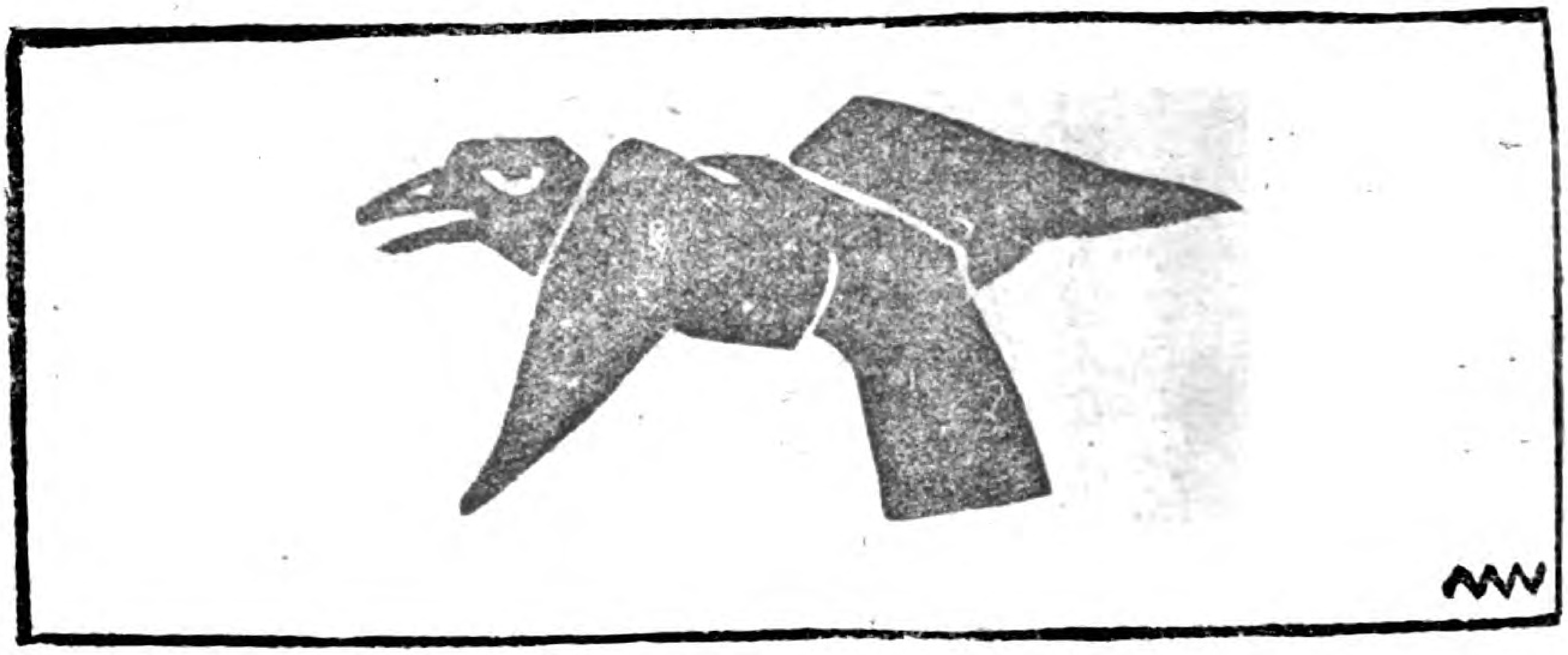
- 舞臺監督として……小山内薫
- 小説創作の心理……中村星湖
- 新時代の要求する音樂家……山田耕作
- 繪畫の製作と鑑賞……齋藤與里
- 文藝批評家の任務……本間久雄
- 新らしき世界のため新らしき藝術……大杉榮
- カンデンスキイの畫論……森口多里
- 源氏物語の研究……楠山正雄
- 僕のページ（感想）……島村抱月

牢獄の窓から ―ペッハ・オーラ― 秋田雨雀譯

草の葉 ―ホイツトマン― 富田碎花譯

最近思潮 歐米及び我國の文藝思潮の紹介と批評十數項を網羅す。新知識を得んと欲する士の見逃すべからざるものなり。

十月倍號 定價五拾六錢 郵税三錢 ■ 東京神田表神保町 振替東京二七〇番 東京堂



無法者

正宗白鳥

一

十年あまりも他郷を流浪して、最近には居所をさへ知らさなかつた岩藏が、洋服を着て靴を穿いて、柳行李一つ持つて、埠頭場に姿を現はした時には、滿潮が藻屑を洗つてゐるばかりで、埠頭場のあたりには誰れもゐなかつた。

魚を攫んでゐる大きな鳶が、彼れの頭とすれ〳〵になるくらゐに低く舞下つたが、この鳥ほど故郷といふ感じを彼れの心に起させるものはなかつた。目を上げると、山で圍まれた狹い陸地と入江との空を、幾つもの鳶がわが物顏に泳いでゐた。壞れ笛のやうな音を立てゝゐた。その音を雨を呼ぶ聲としてゐた幼い時分のことを彼れはふと思出した。薄汚い雲が山から山へ低く流れてゐて、二百十日間近い不穩な色を見せてゐた。

彼れは自分の家の方を見やつてから、可成り重い行李を肩に引掛けて足早

に歩きだした。泥溝のやうな小川に添つて上つたが、一歩々々惡臭が鼻を衝いた。路傍の小さい家には半裸體の男女が、さも惡臭の源であるやうな身裝をしてごろ〳〵してゐた。鐵漿色をした水溜りの中に家鴨が羽を浸しながら喉を鳴らしてゐた。

擦違つた村の者で、異人種を見付けたやうに目を留めるものはあつたが、彼れを認めて聲を掛けるものはなかつた。川から少し外れて小高い所へ上つて、入口に高い松の聳えてゐる軒の低い藁葺の家の閾を跨いだ。土間では膝までしかない白つぽい汚れ目の立つた浴衣を着た老婆と若い娘とが、眠さうな唄を唄ひながら挽舂を挽いてゐた。

二人の女は洋服姿の侵入者を不思議さうに顧みたが、「岩か。……丈夫でよう戻つて來た」と、老婆は騷立つ胸を押えて穩かに云つた。甥の出拔けの歸郷を是か非かと判じかねながら、洋服と靴とに氣臆れがして、直ぐには親しみを現はされなかつた。持前の荒つぽい口をも利けなかつた。

「不意だから吃驚したらうな。長いこと無沙汰して濟まなんだが、お前も達者で結構ぢや。伯父さんも銀次も皆んな達者で働いとるんかい」

岩藏は行李を上り框に卸して、帽子を脫いで額の汗を拭つた。額に殘つてゐる傷の痕に老婆は目を留めながら、挽舂からは手を離さないで、家族や緣者の噂をしだしたが、貧乏の吹聽に過ぎないやうな不景氣な話振りであつた。岩藏は此家に生れて此家で育つて、二十過ぎまで住馴れてゐたのだが、今は無斷で疊の上へ上つて行けない氣がして、上り框に腰を掛けたまゝ、麥粉の挽かれ終るのを待つてゐた。旅の空でをり〳〵思出に浮んでゐた家に比べると、間取りや床の間や、「天照皇大神」の掛物などは同じか

つたが、壁も天井も燻ぶつたく汚れてゐて、何の臭ひとも云へない不快な臭氣が土間から座から床の下から、あるひは老婆や娘の衣服から耳目口鼻から溢れ出て、家中に漂つてゐた。古い新しいごちやまぜの竹でつくつた櫺子窓の外を見やると、簀の子の上に小魚が一杯に干してあつて、蠅が群をなして動いてゐた。家族が昔ながらに半農半漁の生活をしてゐることは、問はずとも一目見れば明らかに察せられた。

「このは老爺を呼んで來て呉れ、岩藏か戻つたといふて」と、老婆は挽春を挽終ると、相手の娘に云つて、自分は澁紙の上に麥粉を掻集めて疊の上へ持つて上つた。

「明後日がお盆の十三日ぢやから、銀次も今夜か明日の朝は戻つて來ようぞ、久振りでお前に會ふたら、あれも喜ぶこつちやらう。」

「此村は今でも盆や正月を舊でして居るのかね。それは丁度よかつた。わしはお位牌に線香一本上げたことがなかつたのだから、今年は十年分の供養を一どきにして置かうか。お住寺を呼んでお經を讀んで貰はふぢやないか。」

岩藏は意外に盂蘭盆の節に會つたのを、佛の導きであるやうに喜んで殊勝な考へを起して、佛壇のあるところを顧みたが、そこには膳や茶碗などの食器が置かれて、二三の位牌が隅の方へ押込められてあつたので、折角の思ひつきも興を醒まさゝれた。自分の父親や母親の位牌が不斷疎末にされて、忌日命日の茶湯をも怠られてゐることが想像されて、信心氣のない彼れでも厭な氣持がした。　父母が虎列剌に罹つて一ときに亡くなつてから、兄弟のない一人ぼつちの彼れは、最初に誰れが言出したともな

伯父の家族と同居することになつたのだが、それまで借家住ひをしてゐた伯父の方から移つて來たので、たとへぼろ／＼した小さい家であつても、此家は亡父が貧しい間にも人手に渡さないで持ちこたへた大切な家だ。鋤鍬でも挽春でも床の間の掛物でも、たとへ金目の物はないにしても、一通りの家具は備はつてゐる筈だ。……「おれが打遣らかしといて、何年他所へ出てゐやうとも、おれに代つて位牌やお墓を大切にして、をり／＼は花や水くらゐは供へて呉れてい丶譯だ。第一親爺に申譯がないだらうに。……よし、おれ一人で思切り盛んな法事をして見せよう」と、彼れは土産物を配けてやつて、生きてゐる人達を喜ばせたいと思つてゐた途中の考へを移して、今まで心になかつた死人のことに思ひ及んだ。すると、臨終の父母の面影がまざ／＼と目の前に浮んで戀しさに涙ぐまれた。

行李から出した浴衣に着替えて、潮風の吹入る櫺子窓の側へ寄つて、老婆をば相手にしないで、默つて煙草を吸ひながら、周圍から湧出て來る十幾年の昔の追憶に心をまかせて、しよんぼりとしてゐると、そこへ茄子の入つた脊負籠を肩にした老爺が丘の方から下りて來た。腰はやゝ曲つてゐたが、面影は昔とさう異はなかつた。肩のあたりが死んだ父親によく似てゐた。

「岩が今日戻つて來ようとは夢のやうな話ぢや。わしは生きとる間に丶われに會はれやすまいと思うて居つた。」

さう云つてニコ／＼して上つて來た老爺に向つて、岩藏は改まつた挨拶をした。

「われはこれからこの村で暮すつもりなんか。上の方でえらい月給取になつてどつさり錢を儲けとるといふことぢやが、榮耀な生活をして居るんぢやらう。」

「何處へ行つたつて、さういゝことばかりはないぞな。田地を持つて内へ居付いで暮らしとるほど確かなことは、何處へ行つたつてありやせん」

岩藏は親の殘した僅かな財産を握つて、故鄕を飛出してからの身の上の出來事をとぎれ〳〵に話したが、聽者があつけらかんとしてゐて手應へがないので、自分で自分の記憶を喚起してゐるのに過ぎないやうであつた。鞆の津の知合ひの鍛冶屋で遊び半分仕事を覺えたのを手はじめに、神戶の造船所の職工にもなつたし、北海道の室蘭へも行つたし、東京の月島でも數年を暮した。再び元の神戶へ舞戾つて、先日詰らないことから職工長と喧嘩をして、割のいゝ給金を棒に振つて、次ぎの稼ぎ口を見付けるに迷つた果てに、ふと故鄕を思出して怱々に歸途についたまでの變化のあつた生涯には、話せば話の種は多かつた。

「伯母さん、酒を買うて來てお呉れ。魚があつたら持つて來させて下さい」と云つて、紙入から札を一枚抛り出した。そして、瓦煎餅や粟おこしなどの土產物をも、それと一緒に出したが、行李の底にある反物は一先づそのまゝにして置いた。

二

老爺を相手に酒を飲んで、いゝ加減醉ふと肱枕で午睡をした。老爺も畝いぢりを休んで橫になつた。

二人が寢てゐる間に、岩藏の歸鄕の噂は八方へ傳はつて、さま〴〵な憶測をされたが、彼れの名を聞いて不安な思ひを起した者が、村の中に二人あつた。その一人は老爺の末つ子で今はその一粒種の銀次の女房になるとに極まつてゐるおさよといふ女で、他の一人は昔岩藏と深い仲になつてゐたおみさといふ

女であつた。おみきは岩誠が村を出てから幾年も手紙一つ寄越さないのに愛想を盡かせて、外の男に嫁いで五つにもなる子供を一人持つてゐるのであるが、昔人目を忍んで會つてゐた思出の多い男が不意に出世して洋服を着込んで歸つて來たと聞くと、何となく心が動いた。

その夜二三の昔馴染みに訪ねられたのを喜こんで、岩誠は酒肴を奢つて、快く待遇して、その後の村の出來事や知人の變遷を聞いた。「當分は喰ふに困らんだけの用意はして來とるから、都合によつたらこの村でゆつくり遊んで居つてもいゝんだ。わしも長年働き過ぎし些つと身體の加減が惡いから、此方に樂な仕事がありや、氣晴し半分にやつてもいゝと思ふとる。君達にも何か考へがあるだらうから追々に相談に乘つて呉れたまへ」と、一杯機嫌で、少々の資本なら今直ぐにでも調へられさうな口吻を見せた。顏付にも村の漁夫どもよりは威光があつて、他郷の音に化してゐる言葉も齒切れがよかつたので、昔馴染は皆彼れを見上げて、その云ふことに疑ひは插まなかつた。傍で聽いてゐる老人夫婦は、甥の持つて來た行李の中には、金貨や銀貨がざく／＼入つてゐるやうに思つたりしてゐた。

「われ、大切な物が入つとるんなら、行李はお佛壇の下の戸棚に仕舞つて置けいよ」と、老爺は客が歸つた後で注意した。

「荷物は皆んな神戸の知つた家へ預けて置いたから、此處には着替えが入つてるくらゐなものだ。若しもこの村に落着けるやうなら、後から船便で送らせるやうに頼んで居るんだ」

「此處に落着いても、漁夫や百姓になる氣はあるまいし、金貸しでもするか、網元になるかする外には、われがしていゝやうな氣樂な仕事はありやすまいぞ」

「何をするともさう急ぐにや及ばん。女房も子もないわしは、三度々々白い飯に魚を添へて食べたつて、何ぼ錢がかゝるものぢやない。喰ひ料はちやんとお前に拂ふて上げるから心配しなさんな」

「喰ひ料を貰はふと思ひやせんが、おいらの食べとる物は、他所で奢り癖のついとるわれの口にや合ふまいからの。……それに疊は汚いし蒲團は汚いし、辛抱して居られやうか。これでもわれの居らん間に、屋根を皆んな葺替えたし、疊替えもしたし、床板も腐つとつたのを、大工を入れて取替えさせたのぢや。あれやこれやを寄せると、新らしう家一軒建てるくらゐな物入りぢやつた。明日でもよう氣をつけて見て呉れい。元の家とは些とはようなつて居らふがの」

「……どんな家だつて十年も立てば手入れをせにやなるまい」

岩藏は元の家より見劣りこそすれ、何處に手入れの跡の見えない古ぼけた家の中を見廻した。

寢床は疊の破れ目の稍々少い佛壇の前の部屋に延べられた。襖で區切りはされてゐたが、襖も障子も建てられてゐないので、老人夫婦の穢るしい寢姿は、櫺子窓から差込む月の光で蚊帳越しによく見られた。蚊遣りの煙が絶えると、蚊が唸りだしたが、煙の匂ひで暫く忘られてゐた臭氣も再び鼻を襲つた。岩藏は疲勞と醉ひとでぐつすり寢入つたが、明け方の肌の寒さにふと目を醒ますと、旅の假宅の寢醒めにも曾て感じなかつた寂しさが身に染みた。壁の破れ目からか床の下からか、蟲の音が耳元近く聞えた。

起上つて雨戸を開けて後の丘へ登つて、一村を見下したが、脚元に群つて來る蚊は、彼れを落着かせてゐなかつた。島を隔てゝ向ひの山の麓に今樣の工場が出來て煙突が高く聳えてゐるのが異樣に思はれた。草籠を脊負つた見覺えのない女が擦違ひに叮嚀に挨拶したのも不思議であつた。里へ下りて、お

だ眠つてゐる近所の家々を見て歩いたが、十年前と同じ所に同じ標札の懸つてゐるのが、極つた家もなしに若い盛りを過した彼れの目には羨ましく映つた。取つた金は右から左へと費つてゐたのが今になつては惜しくなつて、それとゝもに、流浪の間念頭にも留めなかつた親譲りのぼろ家をも冷淡に打棄てゝは置けなくなつた。松の木を目じるしの家の入口へ、「香川岩藏」といふ自分の名を書込んだ標札を打付けるのが心丈夫な樂みなことになりだした。住んでゐた土地々々で馴染を重ねた女は三人や五人ないではなかつたが、さういふ女と世帶を持つて小金を溜めるなんていふ吝つたれた考へを起したことはなかつた彼れも、朋輩の安穩らしい生活を見ながら歩いてゐると、當てもなしに働いてゐたのが今更詰らなくなりだした。汚い村貧しい村と蔑視みながらも、自分が此處に根を据えてゐなかつたのが、非常な損であつたやうに思はれた。

朝餐の煙は、少し荒模樣だが淸爽な初秋の凉氣を含んだ朝風に靡いた。岩藏は雨にならぬ前に村の重立つた家へ顏出しゝたり墓參りをしたりしやうと思つて家へ歸つたが、意外にも、家には昨夕の客が他の二三人を誘つて、酒德利を持つて押掛けてゐた。

「わしの家へ來て貰はふと思ふたんぢやけいど、餘計の者にやつて來られちや邪魔になるから、お前が氣兼ねをしないやうな連中だけ誘つて來たんぢや。此處なら銀次が戻つて來るまでは誰れもやつて來る氣遣ひはあるまいぜ」

喜作といふその中での兄分が云つた。鱧だの鱒だの、舟の底へ生かしてゐた賣殘りの魚を盆の精進日前に喰つてしまふつもりで大きな魚籠に入れて、土間の隅へ持込んであつた。研澄ました庖丁や俎や、

鐵串までも揃へて、直ぐにも酒宴をはじめるやうに、料理番や燗番が極められてゐた。此夕の今盆で、岩藏は飲食に倦んでゐたが、斷る譯にも行かないし、昔馴染に親しくされるのは流石に惡い氣持がしないので、皆んなに調子を合せて仕度にかゝつた。老婆は折角麥粉を挽いてあるのに團子をつくる暇がなくつて、ぶつ〳〵云ひながらも、追立てられて使歩きをした。老爺も酒の座に加はつた。

血氣の若者どもが羽目を外して、兩肌脱ぎになつて飲んで唄つて騷出すと、岩藏は次第に氣壓されて口を利くのも懶くなつて、寢そべつて目を瞑つた。馬鹿騷ぎを夢のやうに聞きながら何時となくとろとろとしてゐたが、暫くして薄目を開けると、幅廣な縮緬の兵子帶を締めた新たな若い男が端の方に座つてゐた。他の客に劣らぬやうな逞ましい面付をしてゐた。誰れか知らんと夢現に見ながら、再びとろとろしてゐると、やがて、手荒に搖起された。

「さあ、わしの家へ行つて飲直さうぢやないか。銀次が今戻つて來たから、皆んなして嬲つたら腹を立てゝ出て行つた」と、喜作が云つたが、座は何となく白けてゐた。

「銀次だつたのか、一人異つた男がゐたと思つた。それなら早く起して與れゝばよかつたのに」

「あれにや何時でも會へらあな。これで酒を終つちや氣殘りがするから、皆んなしてわしの家へ行つて根の切れるまでやつゝけやふ。生殺しは惡いぜ。毆殺すなり切殺すなり思切りやつて與れいと頼んますがな」

喜作は岩藏の手を攫んで立上つた。盆か祭りに久振りに陸へ上つて飲出したら、日一日、夜一夜飲暮し飲明して、惡くすると刄物三昧、輕くつて仲間内の取組合ひでもやらかさねば結末がつかないのが

例になつてゐることは、岩藏もよく知つてゐた。彼自身の額の傷跟もかういふ場合の昔の紀念であつた。傷をつけた奴は疾つくに病死したのださうだが、今ではどの朋輩よりも一番其奴に會つて見たい氣がした。

歸村早々、自分への御馳走といふ口實のもとに催ほされた酒盛りに、危ない喧嘩がはじまつてはいけないし、銀次のことも氣に掛つてゐたので、此處いらで切上げやうと言張つたが、醉ひどれ相手では手强い拒絶が既に喧嘩の元となりさうなので、不承々々曳かれるまゝに隨いて出た。

「伯母さん、わやくちやにして濟まなんだな。後をよう片付けといて遣いな」と、喰滓飲餘しの散らかつてゐる部屋を尻目にかけて、皆んなどや〳〵と出て行つた。道々相續いて放尿をしながら歩いた。風は募つて雨をも誘つてゐたが、醉後の顏には却つていゝ氣持だつた。

「君等は銀次を冷かしたと云つて、どんなことを云つたのだ」と訊くと、

「いゝ嚊あを貰ふからぢやがの。彼奴も悅しいと見えて艶裝して戻つて來やがつた。」

おちよといふ相手の女のことが皆んなの口の端に上つたが、岩藏には何の興もないので、たゞにやにや笑つてゐた。

喜作の家は十年前には空地であつた濱辺に建てられた瓦葺きの二階家だつた。風雨が吹きつけてゐたので、雨戸は鎖されて家の中は薄暗かつたが、お迎への用意の出來てゐる佛壇には、線香の煙りが漂つてゐた。琴平とか住吉とか航海の守り神は崇めてゐても佛に向つては信心氣のない漁夫どもゝ、盆の十二日に佛壇の前で魚肉を貪るのは流石に氣が咎めたので、二階を酒宴の席に當てた。階下には兎に角疊

が敷詰めてあつたが、二階には薄縁や荒莚が敷かれて、壁も上塗りがしてなかつた、雨戸もところ〳〵開けて、將棋盤を持出して小錢を賭けて勝負をはじめるものもあれば、坐り角力を取るものもあつた。岩藏は海の見渡せるところに胡座を掻いて、皆んなの戯れを見たり、白い波がしらを覗いたりしてゐたが、昔のやうに朋輩と一緒に現を拔かして遊ぶ氣にはなれなかつた。他國者が一人交つてゐるやうで、何かしら打解けがたいところがあつた。

舟蟲がいくつも壁を傳つて莚の上を匍ひだした。雨は次第に勢ひを増して時々は瀧のやうな音を立てた。

「お前もあんな古い家に居らりやすまいから、銀次にやつてしまうて、新しい家を建てちやどうぢや。わしが請負うて安う建てられるやうにして上げらあ」と、喜作は岩藏に囁いて、自宅の新築を標準にして、建築費の高を細かに説明かせたが、岩藏は自分がそんな資本を持つて歸つてゐるやうに思はれてゐるのが擽つたかつた。「おれが面白半分に吹いたことを眞に受けてやがつて、田舍の奴は正直だ」と思ひながら、金持氣取りで相手の話に跋を合はせてゐた。

荒れを豫知してゐた漁夫どもは、夜明け前にめい〳〵の船を川尻の避難所へ廻してゐるので、何の心配もなしに飮んだり食つたりで一日を暮らした。今年は近海の魚の捕れ高が多かつた上に、値もよかつたので、一般に村の漁夫どもの景氣はよかつたのだが、それでも、漁夫の習ひとして、貯蓄などの有らう筈はなく、大抵は盆を過ぎての出船には借金の工面をしなければならなかつた。二三人の子分を抱へて親分氣取りでゐる喜作は、ことにその必要に迫られてゐたが、何時もの金主から利息の高い金を借り

て、子分に前貸しをしたり、飯米を買込んだりしなければならぬのは頭痛の種であつた。で、醉つて馬鹿騒ぎをしてゐる間にも、そのことに思ひ及んで、岩藏に謎を掛けてゐた。盆と正月と半期々々に持船を抵當にして資本をつくつて、土佐沖や紀州やあるひは朝鮮までも稼ぎに行く者が多いのだから、さういふ奴に低利で貸付けよ。「東屋でも濱村でも半期ごとの貸付で、懐手してぼろい儲けをしてゐやがる。お前は少し利を安うしてやれ。人助けになるし、自分でも遊んどつて儲かるんだから、こがいなえゝことはない」と勸めた

岩藏はどちらつかずの返事をしてゐた。

三

暴風雨を幸ひに、早くから戸を鎖してランプを點けて、階子段は取外して、車座で賭博がはじまりかけたので、岩藏は體よく其處を脱出した。家へ歸るのも張合ひがないから、しみ／＼昔話の出來るところへでも寄りたかつたが、さういふ家は些つと思出せなかつたし、風もひどかつたので、一散に自分の茅屋（あばらや）へ戻つた。そこは土地が小高いために、風當りが烈しかつた。盥や手桶で、天井の彼方此方からぽた／＼落ちてゐる雫を除けながら、親子三人薄暗い家の中に影のやうにまご／＼してゐた。

「夜になるともつと荒れるさうだ」と云つて、岩藏は上り框に足を掛けるや否やずぶ濡れの衣服を脱いで、行李から着替えを出して身に纏つた。三人とも暫くは何も云はなかつた。

「銀次は大きうなつたなあ」

岩藏は次第にはつきりと目に映りだした三人の顔を見入つて云つた。そして、やゝ改つた口調で銀次

に向つて挨拶した。銀次は苦笑した。

「お前が立派な男になつたから、父ちやんもこれからは安心だらう。今度は御運がよかつたのか」

「うゝん」と曖昧な返事をしながら、銀次はなほ苦笑してゐた。

「お前も酒は飲むんだらう」と云つて、岩藏は老婆を顧みて、「酒が殘つとつたら燗をして呉んなさいな」

もう飲み疲れてゐたのだけれど、銀次と打解けたいために、さう云つたのだつたが、

「わしは今日は飲みたうない」と、銀次は無愛想に云つた。そして、老母が仕度に掛るのを突慳貪に留めた。

腕一杯稼いで嫁取りの費用を溜めて、樂しんで戻つて來たのに、意外な男が主人顔してこの家に入り込んでゐたので、彼れは一圖に厭な氣持がしてゐた。可成りの身代をつくつて生れ故郷が戀しうなつて歸つて來たのだから、厄介者扱ひしないで親身にして當分此家へ置いてやれ。さうすればつまりはおれ達の爲めにもなるだらうからと、老爺は宥めてゐたのだつたが、銀次は今の場合そんな慾得は考へてゐなかつた。「わしはあんな大風な男の御機嫌を取つて一錢でも貰はふとは思ひやせんぞ。わしに斷りなしに大勢呼寄せて勝手な眞似をしやがつて。誰れがあんな男と懇意にするもんか。若し彼奴がこんなり家に居るやうなら、わしはこゝを出て行くがの」と、邪魔者を入れていゝ氣になつてゐるらしい兩親に先つき突掛つてゐたのであつた。

釣ランプの下に揃つて晩餐の膳に向つて、老婆の拵らへたお迎へ團子など食べてゐる間にも、銀次がむつゝりして碌に口を利かないので、岩藏もさう媚びるのは忌々しくつて、最早銀次相手には一言の話もしなかつた。老爺の芋畝や田の面の出來榮えの問はず語りによつて、やうやく座は白けないで濟んだ。早稻の花盛りの今、から吹かれちやかなはんと、老爺は屢々疾風の音に耳を傾けては眉を蹙めた。何處かの隙間から洩れて來る風に、佛壇の燈火は屢々消えがてになつた。

「ここがまた雨が洩りだした。何か持つて來いよ」と、老爺は雨垂れに脊筋を濡らして後退りした。

「もつと風が荒れてこんなぼろ家はひしやげてしまふとえゝになあ」と、銀次はふと憎くさげに云つた。

「縁喜でもないこと云ふない。屋根屋や大工に賴まいでも、畝に暇が出來たら、わしがぼつ〳〵手入れをして、結構に住めるやうにしてやる。古うてもこの頃の新建てとは違うて、柱も根太も丈夫に出來とるから、これくらゐな風に打叩かれても微塵搖ぎもすることつちやない。」

「わしは親が居らにや、こがいな雨ざらしの家になんぞ居りやせん。船の中に寢とる方がまだしも氣樂なくらゐぢや」

銀次は惡對を吐きながらも、不思議にこの家に執着を覺えた。婚禮間際に他人の家に同居してゐるやうに見られるが殊の外つらかつた。で、いつそ船へでも寢て來かうかと自棄に思つて、「わしは眠たうないから、もつと遊んで來るぞな」と云つて立上つた。そして、朋輩に誘はれて、去年のやうに惡遊びの仲間に加はつて、折角蓄へて來た小金を取られるのを案じて老爺が引留めるのをも聞かずに、雨の中へ飛出したが、今朝戻つて來たばかりで、一晩も疊の上に眠らないで、舟板を寢床にするのは情けなくな

つた。

三月も四月も海に揺られてゐると、いくら馴れてゐるとはいへ、陸ほど戀しいものはなかつた。わが家の疊の上ほど懐しいものはなかつた。まづい物ばかり食べてゐながら利得の少い百姓をさへ時として羨ましがるのは、彼等が屋根の下に手足を伸して寢られるからであつた。

銀次は大切な貯へは胴卷にくるんで持つてゐるし、今時分何處の二階と何處の物置と、何處の倉の中とで、賭博がはずんでゐると手に取るやうに分つてゐたが、そんなところへ立寄つて仲間入りする氣に今夜はなれなかつた。知らず〳〵足の向いたおさよの家の軒下に立つて、他家の者が遊びに來てゐなかつたら、入つて行くつもりで節穴から内部の様子を覗いたが、意外にも此處でも勝負事がはじまつてゐた。碁石の白と黒とを用ひて、仲間は三人の女であつた。おさよと妹のおこのの外に、よく見ると、もう一人はおみきであつた。母親は木枕をして横になつてゐたが、男ぎれは一人もなかつた。

「丁度えいところぢや」銀次は今までのむしやくしや腹をけろりと忘れて、勇んで内へ飛込んだ。嵐に紛れて女達には知れなかつたが、後に立つて勝負を覗いてゐる銀次の影がふと目につくと、三人一しよに、「ワッ」と驚きの聲を上げた。

「わしが巡査であつたら今夜は忙しいぞ。何處でも性の惡い道樂をやつとるから」と、銀次は面白さうに笑つた。

「お前達のやうなほんまの賭博ぢやないから誰れに見られうとかまふものか」と、年上のおみきが眞顏で云つて石を片付けた。

「わしはデコ松のやうな巡査の手先ぢやないから安心せい。その代りわしも仲間に入れて呉れんか。資本はしこたま此處へ持つて來とるぞ」と、銀次はぽんと懐を叩いた。

「ぢや、奢りんさい。籤引で使に行くことにしようぢやないか」

「今日は奢りつゞけで鱈腹喰ふて居るから、御免蒙らふかい」

銀次は碁石を弄んでさら／＼と音をさせてゐたが、女達は最早勝負をつゞける氣はなくなつてゐた。

おさよは番茶を入れて、茶受けに茄子の新漬を切つて來た。

おみきは盆節季の用事に忙しい思ひをしながらも、岩藏の歸村が絶えず心にまつはつてゐたので、お迎への仕度を濟ませて、夕餐後亭主が遊びに出た後で、子供は姑に頼んで置いて、おさよを訪ねて來たのであつた。そしておさよが銀次から聞いてゐる岩藏の様子を又聞きしたのだつたが、かねて耳にしてゐる噂同様に痒いところに手が屆かなかつた。

「岩さんは大層儲けて戻つて來たのぢやさうなが、この村にじつとして居るつもりなのぢやらうか」と、何喰はぬ顔で銀次に訊ねた。

「彼奴のことはわしは知らん」と、銀次は吐出すやうに云つた。

「千圓持つとるとか二千圓も持つて戻つとるとか、今朝から村中で大變な評判ぢやがな。お前には仰山祝はうて呉れたであらうがの。えゝ時に岩さんが戻つて來て、お前も仕合はせぢやらうがの。目出度ことのある時には、貧乏な身内でもあつた方が賑かでえゝのに、金持の身内が一人思ひがけなう流れて來たのぢやもの。今年は銀さんが村一番の運よしぢや。」

「さう聞んなさんな」銀次は煽てられて笑顔をした。そして「岩の奴誰れにやるつもりか、奇麗な絹の反物を持つて居るさうぢや」と、目敏く行李の底を見つけた老母からひそかに聞込んだことを、何氣なく話した。

「そりやお前のお祝ひに買うて來たんぢやらうがな」

「出抜けに戻つて來たものがわしのことを知つとる譯はないぢやないか」

成程さうかと思ふと、おみきはその反物の貰ひ手に疑ひが起つた。若しかすると自分への土産にわざ〳〵買つて來て呉れたのぢやあるまいかと考へられて胸がどき〳〵した。神戸か大阪の呉服屋で大金を出して買つたに違ひないその反物はどんな奇麗な柄であらうかと、盆前に村を廻つてゐた呉服商人に見せつけられた上方流行の浴衣地單衣地から推していろ〳〵想像を逞うした。

岩藏の顏形や服裝ふりをも根堀り葉堀り銀次に訊ねて、昔の思出を新たにしてゐたが、先方で自分を忘れてゐないのなら、今夜でも明日でも、人目を避けたところで會つて見たくて溜らなかつた。そして、今の亭主に對する思惑などは、殆んど彼女の心を苦しめなかつた。

假寢から醒めた母親は、銀次を次の室へ呼んで、婚禮の式についてひそ〳〵打合せをしだしたが、結婚前にしげ〳〵やつて來られるのを氣にして、遲くならん間に大人しく家へ歸るやうに注意した。銀次はこの母親の言葉には一も二もなく遵つて、おみきと連立つて暇を告げた。

おみきは頭は手拭で包んで、端折つた浴衣の上には蓙を被つて、水溜りの中を草履でざぶ〳〵歩いた。

「私に會ふたことは岩さんには秘密にしといて遣いな」と云ふと、

「わしが彼處へ行つとつたことも秘密ぢやぞ」と、銀次も云つて笑つた。彼れは一時氣が晴々した。頭上を唸つてゐる嵐の音を面白さうに聞いて、浪花節を聲高に唄ひながら家へ歸つた。

兩親は起きて待つてゐたが、岩藏は廣い部屋の方の蚊帳へ入つてゐた。銀次自身の寢床もその蚊帳の中に枕を並べて敷かれてあつた。

「われを待つとつた」と、老爺は銀次を側へ呼んで、今朝からの混雜でしみ〴〵話の出來なかつた婚禮の打合せをはじめた。いくら手輕でも、漁夫仲間の慣例であるので、銀次の半期の所得を皆んな前に並べさせて、差當つての費用の勘定を取つた。やう〳〵押付かないことはなかつたが、兩親の心の中の不安の種になつてゐることが一つ二つはあつた。……それは、岩藏は覺えてゐないらしいが、彼れの兩親が流行病で急に死んだどさくさまぎれに、この丘の上の二三反の畝は、知らず〳〵老爺の者になつてしまつたのであつた。亡者の兄に當る老爺は肉身の情誼で、僅かな小作料を入れたり入れなかつたり、殆んど作り取り同樣にして貸りてゐたのだつたが、今は名義まで銀次の所有になつてゐた。岩藏は生きてゐるか死んでゐるか分らぬものとして、數年前に岩藏の實印を濫用して多少の田畝を賣拂つた上に、家に蓄へられてゐた道具をも人手に渡したことがあつた。

亡父の遺言を聞く間もなかつたし、不斷沖稼ぎばかりしてゐたのだから、多分知つてはゐまいと思ひながら、老爺はともすると、腹の中でビク〳〵してゐた。何も知らない銀次がいきり立つのを宥めて、成べく岩藏の機嫌を取つて置かせやうと努めるのも一苦勞であつた。

「今夜は岩と一緒に寢い」と、それを厭がつてゐる銀次を宥めて蚊帳へ入らせた。

老婆は寢際に佛壇に向つて回向をしながら、瓦煎餅などを供へてある岩藏の兩親の位牌や棚に仕舞つてある岩藏の行李を見上げ見下してゐた。その線香の煙に誘はれて、位牌の主の魂魄がそこに來てゐるかと思ふと、自分達の心を見られてゐるやうで恐ろしかつた。行李の中に紙幣や銀貨が隱されてゐると思ふと、それが銀次のであつたらと羨ましかつた。雨の洩らない新しい瓦葺が建てられるし、難船の氣遣ひのない頑丈な漁船が新造せられるのにと思はれた。

その夜老婆は眠づらくつて、とろ〳〵とすると氣味の惡い夢を見、目が醒めると、位牌や行李が闇の中でもはつきりと見えた。細い煙は亡者の息のやうに思はれたりした。

「南無阿彌陀佛々々々々々」と老婆は妄念を掻消すやうに呟いた。

「お前は何を云ふて居る」と、老爺は寢返り打つた。

「お前も目が醒めとつたのかの」

「今夜はわしも眠づらうてどもならん。妙なことが考へられてな。大風の所爲かも知れん。……から吹いちや方々の家は損じがあるぢやらうが、床の中でかうして術ない思ひをしてる間にや、近所だけでも一寸檢分して來ようかい」

さう云つて、老爺はヤッコラサと起上つて、カンテラを點けた。次の室の蚊帳の中を覗くと、若い二人は夜具を跳ねのけて正體なく眠つてゐるやうであつた。

頰被りして蓑を着て、棒杖を持つて、正面に打突かつて來る風を冒して戸口を出た。月のある頃なの

で、戸外は物の形も色もぼんやり浮んでゐた。老爺は自分の家の周圍を一巡りして、何の損害もないのに安心して、石段を下りた。松の折枝や瓦などがところ〴〵に落ちてゐたり、莚圍ひの共同便所が倒れてゐたりした。

ふと、醫者の黑板塀の角で、同じ裝ひをした男に出會つた。互ひに聲を掛けながら顏を見合つたが、相手は笹六といふおみきの匹偶であつた。

「お前の家はどうもないか」と、訊ね合つてから、左と右とへ別れかけたが、笹六はふと二三歩後戻りして、

「岩藏によろしう云ふて下んせ。わしの家でも一度呼んで御馳走をしたいと思ふとるんぢやから」と言傳をした。

金を持つてゐると思つて、彼方でも此方でも岩藏々々とちやほやしやあがると、老爺は獨笑ひを浮べたが、自分の家で寢起きを一緒にしてゐる岩藏の所持の寶を他人に狙らはれてゐるのは氣持が惡かつた。老爺は甥の歸村によつて不安な思ひを起さゝれてゐながら、甥が他人の口車に乘せられて、行李を擔いで家を出て行きはすまいかといふことも氣遣はれた。この村の他人に智慧をつけられて、甥が他人を後見か手下にして商賣なり何なりはじめる先に、自分達の差金で甥を動かさせて見たかつた。

老爺は降りかゝる冷たい雨に嚔をしながらこんなことを考へてゐた。一まわりして家へ歸つてもまだ夜は深くつて、一番鷄さへ鳴かなかつた。蚊帳の中で煙草を吸つて、老婆に向つて、今見て來た外の模樣を話して聞かせたが、笹六の女房のおみきが十年の昔まだ小娘であつた時分に、岩藏と曰はくのあつ

たことを老婆は薄々感づいてゐたのであつた。
「わし等が仲人になつて、誰れぞ可愛いゝ女子を岩藏の嫁に世話してやるとえゝがの」と、老婆が云ふと、老爺はそれをいゝ思付きとして、二人して村中の澁皮の剝けた娘達の名前を數へ立てた。

（四）

岩藏は雨が止んでから、汚い臭ひの稍々洗流された道を通つて埠頭場の方へ出た。避難所へ廻はされてゐた漁船は元の岸邊へ漕戻されてゐた。雲間を洩れる朝日は海をも陸をも鮮かに照らして、そこら一杯に出てゐる村の者のじめ〳〵した衣服や身體へも照りつけた。汐の臭ひと雨の臭ひと汗の臭ひとが日に蒸されて漂つてゐた。

岩藏はあたりの人々の目を惹いて、耳語の種になつた。何故ともなく一段立勝つた人間として仰見られてゐるやうな氣がしたので、一寸得意になつて、濱邊を村はづれまで歩いてから引返した。

喜作からの呼出しの使が留守の間に來てゐた。

「酒はもう飮みたうない」と、彼れは獨言のやうに云つて櫺子の側にごろりとしてゐた。

「喜作が親分顏してお前に何を勸め居るか知れんけいど、迂濶に彼奴の云ふことを眞に受けるな」と、老爺は傍へ來て云つた。そして、自分の計劃をぼつ〳〵話しかけようとしてゐると、

「明後日銀次の婚禮があるのに、わしが此處に居つちや邪魔になるだらうから、明日立つて鞆の方へ行つて、二三日遊んで來ることにしよう」と、岩藏は滯郷二日で物足らない思ひに驅られて云つた。いつそ以前通ひ馴染んだ鞆の津の遊廓の對仙へでも行つたなら、たとへ買ひ馴染んだ女はゐないにしても、

思ふ存分の氣保養が出來るかも知れないと思ひついたが、さうすると、明日とも云はず、一刻も早く出掛けたくなつた。

「この家のことについて伯父さんに話さうと思つてることもあるけれど、それは鞆から歸つてからにしよう。銀次の婚禮が濟んだらお前の方でもよう考へといて與んなさい」

「考へるも何もあつたもんぢやない。われが是非ともこの家で暮したいと云ふんなら、わし等親子は宿無しになつても、此家を出て行かにやなるまい」老爺は相手の憐れみを呼ぶやうに云つて、「ぢやがの、われも獨りでこの家に居ることも出來まいから、わし等が他の家へ移る前に、われの嫁を世話をして置きたいと婆さんとも相談しとつたのぢや。さうしたら佛もあの世で安心するであらうし、わしも伯父の役目が立つ譯ぢやからの。……われの氣に入るやうな女子が有るか無いか知らんけれど、若しも氣に入つたら嫁に貰ふてもえゝといふ量見があつたら、今夜盆踊りを見に行つて、踊り女の顏をよう見て來い。名が分らにやわしがわれに隨いて行てもえゝぞ」

「此方では今も盆には踊りをやつとるんだな。嫁の話は別にして、踊りなら久振りに見に行つてもいゝや」岩藏は昔自分もその仲間に加つてゐた村の盆踊りを思出して、「わしも一つ踊つて見ようか」と輿に乘つたが、嫁撰びには些とも望みを掛けてゐなかつた。二三日通りすがりに見てゐる村の若い女どもに、些とでも心に留つたものはなかつた。

昨夕詣る筈だつたのを、嵐のために一日おくらせて、今日老爺と一緒に燈籠を持つて箒や閼伽桶をも持つて、先祖代々の墓所へ出掛けた。兩親のは寄集めた石ころの中に、長い年月の雨風に朽ちた木の、

墓標が立つてゐるだけであつた。「親爺の石碑は立つて居らなんだのか」と、十年の間一度も思浮べなかつたことに今はじめて氣付いた。そして、自分の不孝を感じるとゝもに、それよりも一層強く亡父の家にわが物顔に住んでゐる老爺老婆の不都合を憤つた。歸村以來の物淋しい思を、佛壇や墓所の不仕末にかぶせかけた。無理にもさうして、あの世の兩親に加勢させて、鬱憤を含んだ目を老人の上に向けると、滅入つた彼れの心も引立つた。

老爺は三回忌や七回忌に塔婆を立てたことなど話しながら、墓掃除をした。石ころの中へさぶ〳〵水を流込んでは「南無阿彌陀佛」を口ずさんだ。

「われはお父やお母の石塔を建てる氣にやならんか」と、何氣なく云ふと、

「わしも石碑くらゐちやんと立つとると思つてたから、そんな費用は持つて來とらん」

「石塔に何ぼかゝるものか。」

「何ぼもかんぼも持つとらんものは持つとらん」

「わしに隱さいでもえゝ。われが大儲けして戻つたんぢやと村中で評判ぢやないか」

「阿房なこと云ひなさんな。わしには自分の家があるから息休めに戻つて來たゞけだ。……買ひ手がありやあの家を叩賣つて路用にしようと思ふとる。銀次が買ひたけりや安く賣つてやつてもいゝんだ」

岩藏の無慈悲な言葉に老爺は手向ふ力もなくたゞ怖ぢ萎れてゐた。で、手入れの費用などを愚痴つぱく話しながら、家の方へ向つた。飲食ひしても昔友達にちやほやされても、豫期してゐたやうな歸郷の樂みの些とも得られない岩藏は、十年前に村を蹴飛ばして出た時のやうな狂暴な氣持になつて、肉身の情

愛を與へて呉れないこの老人の一家を苦めることによつて、多少の腹癒せが出來るやうであつた。

家へ歸つても、先つきまでのやうに皆んなの機嫌を取つて努めて打解けやうとしてゐた岩藏ではなくなつた。默つてゐても額の向う傷は今までよりも恐ろしく老人夫婦の目についた。

「われは本當に明日の朝鞆へ遊びに行くんか」と、老爺が訊くと、

「そりや明日になつて、夜が明けて見にや分らんのだ」

「わしも歳は取つとるし、今まで無理な野良稼ぎをして來たんぢやから、これから甥のわれに力になつて貰はふと思ふとる。われも外に身内はないんぢやから、わしや銀次を親類の端と思ふて仲よう暮すやうにしてくれ。われの親爺もそこで見て御座らつしやるがな」

「身内といふものも詰らんものだ」

「それはわれの心柄ぢや。昨夕も老婆と話しとつたんぢやが、何年振りかで身内に會ふたといふものはどがいに悅しいゝのか知れやせんがの」

「さうかなあ」岩藏はふと考直したが、老爺老婆に對して何の親しみも湧いて來なかつた。幼少の頃を思起させる竈や土間や門口の松の木に懷しみを覺えるほどにも感ぜられなかつた。そして、どうせ得られない親しみを求めて悄げてゐるよりも、自分の力で此奴等をへし潰した方が、自分の腹の力か腕の力かを自から感ずるだけでも快いやうに思はれた。

午餐時に戻つて來た銀次を見ても、「小癪な小僧め」と、見下して、昨日の不埒な言草や擧動を今になつて忌々しく思浮べた。午餐は皆んな氣まづい思ひをして食べた。

長く顔を突合せてゐたら、どんな言葉のはずみで、若い二人の間に爭ひが起らうかも知れなくつて、老爺は案じてゐたが、幸はひ、喜作からの再度の迎へが來たので、岩藏は直ぐに出掛けた。途中で目についた酒屋で一升徳利に上酒を詰めさせて、それを振り〳〵歩いた。

「今お前のことで妙な話がはじまつたのぢや」

喜作は譯ありげに笑つてゐた。涼しい汐風の流込んでゐる二階に三四人が駄菓子など嚙つてゐた。

「何とでも云へ」

岩藏はどんな噂にも動じないつもりで胡座を搔いた。

「お前は今從六の嬶になつとるおみきを昔色女にしとつたといふぢやないか。本眞か〳〵。わしは些とも知らなんだ」

「妙な話といふてそのことかい。そんなこともあつたかなあ」岩藏は空呆けて、「だけど、そんな阿房くさい話は止めにして吳れ。わしだけはまだ獨り者だが、何處へ行つたつて女に不自由すりやしないよ」

こんな田舍の端の小汚い女子なんかゞ何でおれ樣の目に留つて居らうかといはねばかりの面付して、賑やかな土地々々の遊女の風などを微見かすと、皆んな素直に耳を傾けて、まぜッかへし一つ云ふものもなかつた。

持參の酒を溫めさせて、長い年月流浪してゐた間の荒つぽい所行を誇張して話すると、それにさそはれて、皆んなも毆り合ひや果し合ひの荒業を眞實空言の差別もなく喋舌りだした。

「××の魚賣ひか、船へ來てわしの魚に難癖をつけやがつたから櫂の先で頭の皿を一つどやしつけて、

足を浚つて海の中へどん陥めてやつた」と、一番年下の五體の孱細い奴までもさう云つた。

夜になると、子供染みた踊りの仲間には加はらないこの連中は、お極りの賭博をはじめるので、岩藏だけは座を外した。そして踊りの手拍子のしてゐる方へ足を向けた。まだ宵の口なので、お宮の庭には子供や守づ子がうぢや〳〵してゐた。彼方此方で小さい輪ヶ描いて、手つき腰つきの間の抜けた踊りを踊つてゐるのに過ぎなかつた。若い漁夫の悪戯で踊りの列は直ぐに崩された。臙脂白粉で艶裝した若い娘どもは、生地の時よりも却つて厭らしかつた。

十三夜の月は松の葉越しに踊り子を照して、鳥居前の岸を洗ふ波の音は音頭取りの眠いやうな唄に調子を合はせてゐた。岩藏は宮を一まわりしたゞけで鳥居を出て、當てもなく磯邊をぶらつきながら、以前鞆で見た盆の踊りを夢のやうに思出してゐた。そこでは廓中の藝者が揃ひの浴衣で三味線や鏑で囃立てて町を練歩くと、その後から町内の老若男女が團扇を持つて、唄に合せて踊廻つた。岩藏自身も人眞似して、夜つぴて町から町を踊廻つた。ふとその時のことを思出してゐると、我武者な彼れの心も稍々穏かになつて、老人など虐めないで、あんなぼろ家は銀次に快くやつてしまつて、自分は鞆の方へ出掛けやうかと考へた。鞆の昔馴染の家を訪ねて、それから再び神戸へでも大阪へでも渡つて、腕に覺えのある仕事を命限りやり徹して見るか。……三日でも四日でも鞆ではいゝ氣持に日が過されさうに思はれた。行李に仕舞つてある反物を土産にやりたい懐かしい人間もゐさうに思はれた。

歸り途には今まで通らなかつた人家のまばらな所を通つた。以前建つてゐた古い家は取拂はれて、土塀の端や根太石のまだ殘つてゐる屋敷跡には草が蓬々と生へて、虫がじい〳〵鳴いてゐた。

「岩さんぢやないかの」
ふと女の聲がしたので振返ると、村の女にしては汐黒くない顏した大柄な女が月の光でよく見えた。
「先つきから、さうらしいと思ふたから、後をつけて來たんぢやがの、お前はわしを忘れたのかな」
女は邪氣なく笑つてゐた。
「おみきさんか」岩藏は不思議さうに女の顏を見詰めて「御亭主と仲よく暮して居るんか。久振りでお前に會ふたんだから、話したいこともあるにはあるが、亭主持に立話も出來んからな」
「私に手紙一本も呉れんのぢやもの、私はお前の行先きは知らんし、どうしやうもないぢやないかな。今度戻つて來たつて私には知らせても呉れんぢやないか」
怨み言を云はうとしてゐるのだと、岩藏は退屈醒ましに取合はふかとも思つたが、昔に比べると、おみきの母親かと間違ひさうに婆あ染みてゐる。側へ寄られると、皺垂れた浴衣からか、身體からか、ぷんと異樣な臭ひのする彼女の色めいた口說を聞かうとする興も起らなかつた。
「わしはまだ獨り身で、何處の女子にも懸り合つたことはないんだから、お前に文句をつけられる譯はないぞ。村に永逗留するやうなら、一升提げてお前の家へ遊びに行つて、御亭主の雙六にも會つて旅の話でもしやうと思つてるから、さうしたらお前に酒の酌でもして貰ひたいね。お前がかまはにや、御亭主の前で、二人の間の昔のことをさらけ出して話してもいゝね」
女が呆れて何とも云ひかねてゐる間に、岩藏は草叢の中の小徑を横切つた。ちらと見たばかりで、昔の色女が昔の朋輩に嫁いでゐることについて今まで持つてゐた毛筋ほどの口惜しさも跡方なく消えてしま

つた。

「おれは何のために戻つて來たのだらう」

彼れは差當つての相手のない腹立しさを覺えた。若しも女が昔にもまして惚々するやうだつたら、無理にも女を誘つて、海を渡つて夜逃げでもする氣になつたかも知れなかつたがと、……彼れはこの一日二日の物足らない思ひから湧上つた狂暴な力の用ひどころ〻ないのにいら〱した。

爪先上りの小徑を上ると、月光に包まれた小村の景色は、風流氣のない彼れの目にも、一歩々々約のやうに展開した。踊りの手拍子は先つきよりも調子よく響いて來た。が、彼れは十年目の歸郷に、何の滿足をも心に與へて呉れないその村に向つて、カッと唾液を吐きかけた。

「銀次、われは踊りがあるのに家にゐたのか」と、閾を跨ぐと云つた。

「本眞の踊りはお月様が眞上に御座らしやつてからぢやがな」と、老婆が云つた。

「銀次、われはいゝ嚊おが出來て仕合せぢやなあ」

「銀次よりもわし等が仕合せぢやから、われも親身になつて首尾よう婚禮が濟むやうにして呉れ。わしが賴む」と、老爺は目をしよぼ〱させて云つた。

氣負けがしたのか、銀次までも默つて目を垂れてゐた。岩藏はあばれるにも虐げるにも手蔓がなかつた。そして、蚊いぶしの側に踏反返つて古天井ににじんだ雨垂れの跟を見詰めてゐた。

「これが親爺どのゝ殘して呉れたおれの家なのだな」と、やがて呟いた。（完）

神經病時代

廣津和郎

一

若い新聞記者の鈴本定吉は近頃憂鬱に苦められ初めた。その憂鬱が彼にはいろ〳〵の方面から一時に押し寄せて來るやうに思はれた。彼には周圍の何も彼もがつまらなくて、淋しくて、味氣なくて、苦しかつた。第一には彼の家庭である。彼は今から半年ほど前に一人の若い女と同棲した。同棲前に彼と彼女との間には既に一人の男の子が生れてゐた。二人の生活はうまく行かなかつた。……けれども、これはもつと後で說く事にしよう。

今は何よりも先に彼が新聞社でしてゐる仕事を例に取つて見よう。彼はS——新聞社の社會部の編輯見習で、月給三十圓を貰つてゐる。彼は朝九時に出社しなければならない。S——新聞は東京中の新聞といふ新聞の中で、最も忙がしい新聞だと云はれてゐる。一體は夕刊新聞なのであるが、近頃は正午版ま

でゝ出し初めたゞだから九時に出社して、十時半にはもう直ぐに正午版の締切と云ふ事になる。いろいろの通信が電話で來る。外交記者や通信社が原稿を書いて寄越してゐては時間が間に合はなくなるからである。

定吉は此の電話を聞かなければならないのが、第一に厭であつた。大概の人間は一ヶ月も經つと直ぐに耳が馴れるさうだけれども、定吉はもう入社してから三ヶ月にもなるのに、未だにそれに馴れなかつた。締切時間の間際になつて、氣が急きながら卓上の受話器に耳を當てると、彼の聽神經は妙に昂奮して、耳の中がガアンと鳴つてゐる。

「淺草區一一町二番地△吉長男□吉（六つ）は本日午前七時三十分頃同家前の往來にて遊戯中通りかゝりたる同區××町四番地〇〇商會の自働車に轢殺さる、運轉手夏野三造を象潟署に拘引目下取調中」「麻布區廣尾町△△番地鳶職……」

電線を傳はつて來るか細い聲が、定吉の耳の中のガアンといふ響きと入れ雜つて、鳶職と云ふ音が、どうしてもはつきりは聞き取れなかつた。

「何ですつて？……モシ〱、廣尾町△△番地……それから何職ですつて？」

「トビ職ですよ」

「タビ職？……あゝ、モシ〱、電話が大變遠いやうです」定吉は自分の張り上げた聲が、何だか泣聲のやうに甲高く調子が外れて來るのを感じた。

「これでも解らないかな……鳶職ですと云ふのに……鳥や鳶のあのトビですよ」

『鈴木君、その電話の事件は何だね？何か大事件ですか？』と社會部長の齋藤が彼に聲をかけた。
『子供が自働車に轢かれたのが一つと、それから今一つあるのですが……』定吉は齋藤の方へから答へて置いて、再び受話器に向つた。『モシ〳〵、解りました、その鳶職が……なるほど、鳶職内川市スケ……スケは介ですか助ですか……な、なるほど……その母のりつ……なるほど……年齢六十八歳……なる……』そして彼の右の手に握られた鉛筆は、机の上の原稿用紙の上をやけくそに早く走つた。
その通信はその内山市介なる鳶職の母親の六十八歳になる老婆が、浮世を悲觀して、半月ほど前から二度縊死を企てたが、その都度家人に發見されて成功しなかつたのを、本日午前四時頃家人の寢すましたる隙を窺ひ、同家臺所の梁に細引を吊して三度目の縊死を企て、終に自殺を遂げたといふことであつた。原因は不明だが、同家は別段貧困と云ふ程ではないから、生活難のためではないといふのであつた。
定吉はその通信を別の原稿用紙に淸書してゐるうちに、その老婆のみぢめな死様が眼の前に浮ぶやうな心持がして來た。彼は子供の時分に近所の老婆が縊死したのを、女中の背中におぶはれながら見に行つた事があつた。その時の光景をそつくりそのまゝ彼は思ひ出したのである。白髮をふり亂して、からだ全體がだらりと力なくぶら下つて、鼻から黑い汁を垂らして……
『生活難でないとすれば、如何なる原因だらう？』と定吉は筆を動かしながら考へた。『市介の女房が腹黑い女でゞもあつて、老婆を虐待したのだらうか？』彼はふとメチェニコフの『人生論』の中に、生に對する本能は老年になるに從つて益々募つて來る。だから若い靑年は血氣にはやつて厭世や悲觀のために自殺するが、老人にはさういふ事は殆んどない、若し老人が自殺する事があれば、その場合には殆んど

全部が生活難のためである、その他の原因で自殺する事は稀であると云つて差支へないと云ふ意味の事が書いてあつたのを記憶に思ひ浮べた。「して見ると、若し此の老婆が生活難で自殺したのではないとすれば、これには何か非常に悲慘な原因がその底に横たはつてゐるに違ひない」

定吉は胸を締めつけられるやうな苦しさを感じて來た。彼にはこれが此の上ない大事件のやうに思はれて來た。議會の論戰の報告よりも、U――首相が議會でとつちめられて、顏を眞赤にしながらも返答が出來なかつたといふ報告よりも。そこで彼は淸書した原稿を社會部長の机の上にさし出した。

「何か大事件ですか？」「社會部長の齋藤はざつとその原稿に眼を通しながら「自働車の轢殺と老婆縊死か」と念晡さうに云つた。

「老婆の縊死の原因は生活難ではないさうです」定吉は「生活難ではない」に力を籠めて云つた。それが社會部長の心に或る感動を與へるに違ひないと確信してゐるものゝやうに。

ところが、社會部長の顏色は少しも動かなかつた。彼は、

「手島君」と彼の次席に座つてゐる金緣眼鏡をかけた色の生白い男の方へ向いて、「君の書き取つた通信の中にも、自働車の事故があつたやうでしたね。あれとこれとを一纏めにして、「人殺車の横暴」と云ふみだしを二號で附けといて吳れ給へ。全部で十二三行ぐらゐに。――かう自働車の事故が每日々々出來しては、實際一個の立派な社會問題となるからね」さう云つて今度は定吉の方に向ひ、「此の老婆の縊死は二行にして吳れ給へ。「市井の塵」の中に入れるから」

定吉は呆見に取られて、ぼんやりしたやうな、悲しいやうな氣がした。彼は八行ばかりに書いた老婆

の記事を二行に縮めやうとして苦心したが、なか〳〵出來なかつた。何だか棺に詰める必要のやうな氣がした。で、何だか死人を棺につめる時、棺の外にはみ出る手足をぼき〳〵折つてしまふ、あの葬儀屋の男と同じやうな殘虐を自分が働いてゐるやうな氣がした。

「どうしても五行より縮まりませんが。」

「どれ〳〵、貸して見給へ」社會部長は半分笑ひながら、半分たしなめるやうな顏をしながら、定吉の原稿の文字をまるで器械仕掛のやうに素早く赤インキで消して行つた。「それ見給へ。こんなに縮まるぢやないか。」

定吉は自分の前に投げ返された原稿を、一生懸命に眼に力を入れて熟視した。その記事は次のやうになつてゐた――

「麻布廣尾町内山りつ(六八)は今朝四時自宅臺所にて縊死す。」

時計が十時半を報つ。「締切!」と社會部長が叫ぶと、給仕がそれを鸚鵡返しに「締切!」と叫びながら、柱のベルのボタンを捺す。それが階上の植字工場の方へ行つて、チリンチリンと鳴つてゐるのが、定吉の耳にも傳はつて來る。

「あゝ、半日濟んだ!」と定吉は腹の中で溜息した。

牛島が大組をやりに階上の工場に上つて行く。定吉はそれを見習ふためにその後から蹤いて行かなければならない。それが濟んだ。そして十一時三十分には最下層の印刷工場から輪轉機がグワラ〳〵と大きな聲で唸り初める。給仕が刷り立ての新聞紙を持つてとん〳〵梯子を駈け上つて來て、編輯局の片隅か

らそれを配つて歩く。定吉は自働車の記事が三面の中段に二號活字で麗々しく出てゐるのを見た。そして隅つこの方の「市井の塵」の中に、老婆の縊死が萬引と詐欺との間に挾まつて小さく出てゐるのを悲しさうな顏をして見た。

正午頃の編輯局は雜閙の頂上に在つた。外交記者達がぞろ／＼歸つて來る。煙草の煙がもや／＼と天井に棚引く。埃が舞ひ上る。その中でみんなが辨當を食べながらガヤ／＼雜談する。その雜談は先づ食物から初まつて、次に女の話に移り、それから金や貧乏の事になつて行くのであつた。この順序には每日々々少しの變化もなかつた。女の話は金縁眼鏡をかけた牛島の獨占であつた。

「さうですよ、女と云ふ奴は物にするのはわけはないが、六ヶ敷いのはその別れ際ですよ。上手に別れるやうになれば、もう一人前ですからな。」

貧乏の話はまた主として外交部長の吉田の口から語られた。彼は某私立大學の政治科を十年も前に出たのに、未だに新聞記者としての好い位置を贏ち得られない自分の不遇や、子供の五人ある事や、もう長男はやがて中學にやらなければならなくなるだらうと云ふやうな事を、くよ／＼語つては、自分より五つも年の若い社會部長の齋藤に向つて、「あなたは實際羨しい」かう云ふのが常であつた。(外交部長は社會部長の部下なのであつた。)

そして吉田はまた始終此の正午の短い休みの間を利用しては、外交記者達に叱言を云つてゐた。定吉は總ての事がみんな自分には適さない、憂鬱を誘ふ種でないものはないと感じてゐたが、中でも一番此の吉田の外交記者達に叱言を云ふ時の聲を聞くのが厭であつた。――吉田は色の黑い、髭のチヨボ／＼

と生へた、出つ齒の、額の狹い、下等な顏をした男であつた。
「幾ら云つても君には解らないのか。君は文章さへも碌すつぽ書けないぢやないか。」から若い外交記者に向つて、編輯局中に聞えるやうな大聲で怒鳴つてゐる吉田の樣子を見ると、定吉はいつでも心の畏縮するのを覺えた。

食後は夕刊の原稿が來る。外交記者が出て行く。定吉は電話を聞く。それは又午前と同じ繰返しである。二時になると「締切！」と齋藤が叫ぶ。けたゝましくベルが鳴る。大組に行く牛島の後から定吉は見習ひについて行く。

時計が三時を報つ。すると、もうみんなが退社する時間なのである。けれども定吉には未だ仕事があつた。それは社會部長が白つぽい鼠色のサンマアコオトを引つかけながら、から命令して行くからである。
「鈴木君、甚だお氣の毒だが、明日のおひこみを三段ばかり工場に廻しといて呉れ給へ。」

そこで定吉はひとり後に殘つて、豫備の原稿を抽斗から出して、片つ端から讀み初める。

時計が四時を報つ。すると、それは給仕達が退社する時間なのである。彼等は急いで机や椅子を片付け初める。亂暴に床を掃くものだから、埃が天井までも舞ひ上る。定吉は眉をひそめながら、袂からハンケチを出して口と鼻とに當てる。彼は自分の母が肺結核で死んだのを思ひ出して、出來るだけ埃を吸ふまいとするのである。けれども彼れは「もう一寸靜かに掃け」とか、そんなに「ガタ〳〵騷がしい音を立てるな」とか、給仕に命令する事は出來ない。物を命令すると云ふやうな力は、生來彼に缺けてゐるものゝ如く見える。……

かうして定吉がおひでみを工場にまはして社を出て行く時は、いつも四時半を過ぎてゐた。

二

秋の初めの或る夜であつた。定吉は右の手にステツキを持ち、左の手はふところに入れながら、銀座通りを歩いてゐた。彼は子供の時分に始終女中の背中にをぶはれつけたので、それがためかなり足が内側に彎曲してゐた。それがセルの袴と羽織との上からさへも少し注意して見ると、直き眼についた。若しそれさへなければ彼は日本人にして隨分身長が高い方なので、スラリとして立派なのであつた。彼は眼鼻立もよく整つてゐた。眼には優しみと愛嬌とがあつた。けれども眉と眉との間が少し距離があり過ぎたり、口が少さくて唇が薄かつたりする邊りに、何處か或る力の――意思の力の缺けてゐる事を表はしてゐるやうな處があつた。

尾張町の停留場に來て彼は佇んだ。そのまゝ電車に乗つて家に歸る氣にはなれなかつた。と云つて、彼は別段何處にも行くめあてはなかつた。彼はカッフェ・ライオンの壁に凭れながら、幾臺も〳〵の電車をやり過した。彼の眼は前方を見つめてゐた。が、別段何も見てゐるのではなかつた。たゞ都會のいろいろの灯が混り合つて、ぼうつと一つの塊になりながら、彼の眼に映つてゐるに過ぎなかつた。――彼はぼんやり社の事だの家庭の事だのを考へてゐた。が、さういふものがみんな自分には親しみのない、適さないものゝやうに思はれて來た。

『さうだ、俺見たやうな人間はこんな風な生活をしてゐる事は間違つてゐるんだ。』と彼はいつもよく考へる事を考へ初めた。が、彼はその考へが彼の心の深いものに觸れる事は避けてゐた。で、途中から

その方向を轉じさせて、かう腹の中で呟いた。「あゝ、田舍に行きたいな。何處か靜かな田舍に、そして本を讀まう。トルストイを讀まう。自分はやつぱり一番トルストイから教へられる……」そして彼はトルストイの『主人と下男』のニキタの美しい心などを思ひ出した。彼は都會の此の刺戟の多い生活が、堪らなく厭になつて來た。

彼は東京で生れて東京に育つた。實際のところ、彼は田舍には三日か四日しか行つた事はなかつた。だから、彼の云ふ田舍がどこに行つたらあるのか見當はつかなかつた。けれども、彼の想像した田舍は美しかつた……そこは小川が流れてゐた。彼はそこで釣糸を垂れる事が出來た。そこには森があつた。彼はそこで小鳥を擊つ事が出來た。そこには廣い畑があつた。彼はそこを散歩することが出來た。そして人情が醇朴で、みんなが彼を尊敬した。さうだ、彼はいつの間にかそこで小學校の教師になつてゐるのであつた。彼は子供たちにトルストイのお伽話をはなして聞かせるのである。すると子供たちは、みんな嬉々として彼になづく。子供達の祖父や祖母である爺さん婆さんが、大根だの胡瓜だのを、彼の家の緣側に持つて來ては載せて行つて吳れる。……定吉は夢のやうな氣持になつて來た……が、彼は急にそんな事を話したら、妻がどんなに怒るだらう、と云ふ事を思つた。

「あんな女とは別れてしまふのだ。……が、どうして別れる、子供をどうする?。」

彼は、もう考へるのが厭になつて來て、さういふ思想を打拂ふために、頭を左右に振つた。

「おい」といきなり定吉の肩を叩いたものがあつた。「ぼんやりしてゐるおやないか。」

見ると相川が立つてゐた。定吉はこゝで友達に會つたのが嬉しかつた。

「やあ」と彼も云つた。

「社の歸りか？それにしては隨分遲いね」と相川は云つて、「どうだい、その邊を少し散歩しないか？」

「あゝ、してもいゝ。」

そこで二人は歩き出した。

「珈琲でも飮みに行かないか？」と相川が云つた。「僕は今小説を書き出したんだがね。どうしてもうまく行かなくて困つてしまつたんだ。もう一昨日から一つの峠にかゝつて、筆が少しも進まないんだよ。――その峠さへ越してしまへば、もう後はわけはないんだが。」

「長いものか？」と定吉は訊いた。

「いや、短篇なんだ」と相川が云つた時、二人はとある横丁のカッフェの前に來てゐた。二人はそこに這入つて行つた。

「うまく行くか行かないか解らないが、一つの新しい試みをやらうと思つて書き初めたんだがね……」

と相川が言葉を續けようとした時、左手の隅の方から、突然「よう！」と云ふ聲が聞えた。そこには一つの卓子に向つて二人の青年が腰をかけてゐた。遠山と河野とであつた。

「やあ、此處に來い！」と云つた遠山の聲はもう醉つ拂つてゐた。「いゝ處で連中が集まつたものだね。俺は今日は非常に愉快で堪らないんだ。まあ、聞けよ。俺も今日から愈々社會人になつたんだよ。おい、社會人に。君たちは俺が社會などに出ると、一とたまりもなくつぶれてしまふと豫期してゐたらう。ところが、それは大違ひ。働からうと思へば俺は何でも出來る男なんだ。俺が今まで働かなかつたのは、俺

のたましひが大切だつたからだ。だが、俺は今は働くぞ。俺は一人の女房と二人の子供とのために今日からうんと働くぞ。うんと働くぞ。そして彼等に安心させてやるぞ。さうだ、うんと働く。」遠山はかう叫びながら、「さあ一杯」と定吉に盃をさした。

「僕は飲めないよ」と定吉は云つた。彼は酒が少しも飲めなかつた。けれどもかう云ふ場合でも彼は盃を押し返す事は出來なかつた。彼はそれを受けた。そしてそつと唇に當てたが、酒の香にむか〳〵とした。

「そして何處に出て働くことになつたんだ？」と相川が靜かに訊いた。

「××雜誌の訪問記者になつたんだ。月給十九圓、十九圓とは素敵な勘定ぢやないか。一體なら二十圓さし上げるべきところ、目下社が不振だからと云ふので、一圓けづるんだつてさ。一圓、たつた一圓……」遠山はをどけた手附をして叫んだ。彼の指は兩手の十本ともその尖端に行つて妙に丸くぷくりと膨れてゐた。彼に云はせるとそれは子供の時分に畑に出て働いた勞働の印だと云ふことであつたが、彼が醉つ拂つてその指をうんと擴げながら、をどけた調子で手を振る時には、何だかそれ等の指先のふくらみが、雨蛙の吸盤を思はせた。

「ボオイ君、僕にウヰスキイを一杯」相川はさう注文した。「君は何にする？」と定吉の方を向いて、「珈琲か？よし……ボオイ君、それから珈琲を一杯」そして遠山の方へ云ひかけた。「だが、十九圓ぢや食へなからう。」

「併し、今までの一文なしよりは食へるさ」と遠山は答へた。「俺の故郷の家もたうとう破産してしまつたさうだ。何しろ三年つゞいて林檎に蟲がついた上に、今年も亦あの邊は大嵐があつて、とても望みがな

いんださうだからな。併し總てが仕方がないんだっから云ふやうになるやうに出來てゐたんだ。先日親父から來た手紙に、もう愈々これから無心を云つて來ても一文も送る事が出來ないから、そのつもりでゐて呉れと書いてあつた。親父は山の中に小さな二室か三室の家を建てゝその方に移つて、今までの屋敷も地面もみんな人手に渡してしまつたんださうだ。俺はそれを讀んだ時涙がこぼれたよ。ほんとに俺の親父はいゝ親父なんだぜ。親父は俺の十九の時から去年まで丁度十一ヶ年間毎月々々俺に金を送つて呉れてゐたのだ。俺がいつか出世するだらうとそれを待つてゐるのだ。ところが、俺は酒ばかり飲んでゐた。俺は學校さへも卒業しなかつた。俺はなまけ者だつた。そして俺はもう女房に二人も子供を生ませてしまつた。俺はよく考へて見ると、ワイフや子供に未だ自分の手からは著物一枚買つてやつた事もない。いや、それどころか、俺は女房の著物をみんな質に叩き込んで、酒を飲んでしまつた。俺は女房の鏡臺までも飲んでしまつた……。」

「ボオイ君、ウヰスキイを僕にもう一杯」と相川が云つた。「おい〱、君はそんな事を云つて一體喜んでゐるのか悲しんでゐるのか？君のさういふ行爲を君は是認してゐるのか？。」

「是認？いや、是認しやしないさ。無論喜んでなどゐやしないさ。俺は悲しんでゐるんだ……俺は……。」

「それにしちや、餘り調子が喜ばしさうだぜ」と相川は冷かに云つた。

「だが、俺は眞實心の底から妻や子供を愛してゐるのだ。妻も俺を愛してゐる。子供だつて僕になづいてゐる。それは君には到底解らない程の高い程度でだ。俺がかうして酒を飲む。そして醉っ拂ふ。さうすると、妻や子供の事が思はれて來る。俺は彼等を可愛いと思ふ。俺はよく信じてゐる。俺と妻との愛

は著物や金が間に挾まつた愛ぢやないんだ。眞つ裸かの愛なのだ。皮膚と皮膚との間に何もつも介在しない愛なのだ。著物や金が全部なくなつて、二人が眞つ裸かになつた時、尚一層俺たちの愛は純粹になるのだ！ほんとだ、俺の藝術もやつぱりそこに在る。俺は十二年の間何も書いた事がない。だが、俺の藝術は次第に形成されつゝあるのだ。俺はすべてのものをみんな捨てゝ行く、そして最後に俺の藝術がひかへてゐるのだ……。」

「一寸待つて呉れ」と相川が微笑を浮べながら云つた。「どうも理論が變挺になつて來たぞ。まあ、君の藝術はどうでもいゝとして、君の細君がそんなにまでなつても未だ君に愛を捧げてゐるのに對しては、僕は敬意を拂ふよ。併しそれだからと云つて、君がさういふ論法を用ひる事は、僕にはどうも合點が行かない。」

　定吉と河野とは默つてゐた。定吉はかういふ場合いつでも議論に加はつた事がない。彼はほんとに物に對して意見と云ふものを持つてゐないのである。彼はたゞ個々に雜然と物事をその弱いハアトに感じはする。併し彼はそれを統一したり綜合したり、それを一個の纒まつた彼自身の意見とする力には全く缺けてゐる。そこで彼はアルコオル中毒のために雨蛙の吸盤のやうな指端をぶる／＼震かしながら昂奮して大聲を上げてゐる遠山の顏と、唇に微笑を浮べながら對手の急所を衝くやうなキパリ／＼した物の云ひ方をする相川の顏とを見較べてゐた。彼の頭には遠山の細君の事が浮んで來た。彼女は實際柔順な女であつた。まるで裏長屋のやうなところに這入つて、三人の子供を抱へて、極端に窮迫した生活をしながらも、嘗て不平らしい表情を顏に浮べてゐたのを、定吉は見た事がなかつた。いつでも夫に對して

素直にかしづいてゐた。その子供をやさしく育てゝゐた。その立居振舞に、いつでも禮儀作法を忘れなかつた。『あれや全くクヰインのやうに寛闊な心を持つてゐる』とよく遠山が彼女の事を評する言葉を思ひ出した。

『何故遠山はあの柔順な細君にあんなみじめな生活をさせて置くのだらう？もつと何とかなりさうなものだ』と定吉は考へた。が、彼には解らなかつた。――彼は遠山がそんな苦しい生活をしながらも、平然として毎日々々酒を飲んでゐる有様を考へた。彼には遠山のその極端な生活態度を見ると、何となくそこに自分には解らない或る物があるのではないかといふ氣がした。乾度何處かに自分などゝは違つた、人生に對して悄えない或る力が、或る强さがあるやうな氣がした。――定吉には何でも極端な事の出來る人間はみんな强く見えたのだ。――そして彼は遠山が出鱈目な生活をしてゐながら、フランクな、正直な男である事に好意を持つてゐた。

定吉は眼を上げた。と、その途端に河野の若々しい顏が眼についた。河野は友人仲間で一番年が若かつた。彼は未だ學校に通つてゐた。彼の顏は彫刻的に整つてゐて、色が白くて、眼鼻立が女のやうに美しかつた。彼が二人の議論には耳を傾けずに、卷煙草をくはへながら、ぢつと憧れるやうな眼付で空間に眺め入つてゐるのを見ると、定吉は河野が或る一人の少女に戀をしてゐるのを思ひ出した。定吉は河野が未だ童貞であるのを思つた。――無茶な生活をやり得る遠山を見て、或る力の自分に不足してゐる事を意識する定吉は、河野の純潔を見ても、やはり或る物の自分に缺如してゐるのを意識した。それは殆んど一つの反射運動と云ふべきものであつた。彼は總ての事に對して對手の優勢を直ぐ感じた。そし

て小さな反省が始終彼を惱ました。

『俺も三年前には……』から定吉はぼんやり考へ初めた。『だが、何だつてあんな女に俺はラヴをしたんだらう？あんな女の何處に價値があつたのだらう？』定吉は三年前には自分の妻が未だ娘々してゐて、快活であつた事を思ひ出した。けれども……さうだ、さう云へばあの時分からあの女の眼には何處かに瞼があつた。あの瞼がいけなかつたのだ。——定吉は最初他の少女に戀してゐたのであつた。だが、彼は相手にそれを打明ける勇氣がなくて躊躇し、悶々としてゐた。そこに彼の妻が現はれて來た。彼の妻は彼女の方から彼に誘ひかけて來た。彼が躊躇してゐる間に、彼女はどん／＼事をはこんで行つた。すべてが定吉は受身であつた。定吉はいろ／＼の事を思ひ出した。彼女が如何に大膽であつたか、自分が如何に男らしくなくびく／＼したか、そして自分が如何に自分自身の意思によつて行動しなかつたかと。……それを思ふと、いつでも定吉は顏の火照るのを覺えた。彼はその時まで持つてゐたものを彼女によつて初めて失ひ汚してしまつた時、取返しのつかない事をしたといふ憂苦に襲はれたのを思ひ出した。彼は勝誇つたやうに嬉々としてゐる彼女に向つて、爆發の力を持たない弱い憂鬱な憎しみを覺えた事を思ひ出した。

『あゝ。』と定吉は思つた。『自分は意氣地がない。俺はあの時何故拒絶しなかつたらう。斷然と、さうだ、斷然とだ！』彼は悲しくなつて來た。が、もうそれ以上考へるのは彼には堪らなく恐しかつた。彼はいつもするやうに頭を左右に振つた、そしてその考への方向轉換を試みた。

遠山の大きな昻奮した聲が定吉を我に歸らせた。

「いや、君には解らないんだ」遠山は椅子から立上つて、手を振りながら叫んでゐた。「俺は生活を恐れてはゐない。俺は生活なんていふものを輕蔑してゐる。俺は唯ひとつの物をしか求めてはゐない。この生活上のいろいろなものはみんな消えてしまつたつて、俺には恐ろしくも何ともないんだ。「我等が求るものは唯一つのみ」――その通りだ、俺たちにほんとに必要なものは唯ひとつのみだ。」

「そしてそれが君には酒なんだ！」と相川が叫んだ。

「何だと？貴様は俺を輕蔑してゐるな。貴様に一體何が解る？いゝか。貴様には人間の表面しか解らない。俺が少し酒を飲む。と直ぐ人類の秩序が亂れると稱し居る。貴様のやうな小僧つ子の案出した秩序によつて此の人生を一つの型の中に極めつけられて堪るものか。が、待てよ、さうだ、ドストイェフスキイだ。ドストイェフスキイはもつと人生を見てゐるぞ。「罪と罰」の中に出て來る老官吏……あゝ、何とかいふ名だつけな？……畜生、俺は頭がどうかしてゐるぞ、何と云つたつけかな、あの老官吏の名は？。」

「君の云ふのはマルメラドフだらう」と相川が云つた。

「あゝ、さうだ、マルメラスキイだ。ドストイェフスキイがそのマルメラスキイを描寫した……。」

「マルメラスキイぢやない、マルメラドフだよ。」

「何方だつて同じだ。露西亞人の名は大概似たやうなものだ。……ドストイェフスキイがマルメラスキイを描寫した態度を考へて見ろ。ほんとにドストイェフスキイはよくあの男の心を理解してゐるぞ。あの老官吏が女房のものでも何でもみんな酒にして飲んでしまつて、而も心から妻子を愛してゐる氣持をドストイェフスキイはよく理解してゐるぞ。そこが彼の偉大な所以なんだ。」

「馬鹿を云へ。マルメラドフはドストイェフスキイぢやない。彼奴はドストイェフスキイによつて取扱はれた一個の性格破產者だ。若しドストイェフスキイがマルメラドフなら、僕はドストイェフスキイを輕蔑するよ。」

「默れ、小僧つ子の癖に貴樣に何が解る？」

「いや、默らん、僕は斷じて默らん…」

そして二人は交互に卓子を叩き合つた。そして遠山は熱して昂奮して、相川は冷かな態度で人を小馬鹿にしたやうな微笑を浮べて、論じ合つた。コップや皿が卓子の上でガチャ〳〵躍つた。

「こいつは面白くなつて來たぞ」と相川が叫ぶやうに云つた。「それならば聞き給へ。人生には秩序が……いゝか、君がそんなに解らないなら、僕がよく合點の行くやうに說明してやる……ボオイ君、僕にウヰスキイをもう一杯。」

だがその途端に、向うの隅の卓子に向つてゐる洋服を着た男が此方を見て笑つてゐるのに氣がついたので、相川は急に立上つた。

「出ようぢやないか。ボオイ君、今のウヰスキイは中止だ。そして勘定。」

その時定吉は自分の口から、

「勘定は僕が拂はう」と云ふ言葉が突然出たので、自分ながら吃驚した。何のつもりでそんな事を云つたらう？——彼は咄嗟の間に、ぴく〳〵しながら、懷中の中を腹のうちで計算して見なければならなかつた。——が、何か知らが彼れを驅つて、ボオイが勘定書を持つて來て相川に渡さうとした時、素早く

横からそれを引奪らした。――彼は微笑をさへ作りながら。

往來に出ると、河野が定吉の側に寄つて來て。

「僕はねえ、君」と優しい聲で云ひ初めた。彼はその容貌と同じやうに、その聲までが女のやうに優しかつた。「僕はいつかつから君に賴みたいと思つてゐたんだよ。もう僕ひとりでは何とも仕方がなくなつて來た。僕は何とか解決をつけなければ、もう苦しくて堪らないんだ。」

「それぢや、未だあのまゝなのかい？」と定吉は訊いた。

「あゝ、あのまゝさ。始終會ふんだよ。今日も學校の行きに電車の中で向ひ合つて腰を掛けちまつたので、全く困つたよ。苦しくなつて來たので途中で飛び下りようと思つたが、さういふわけにも行かずね……それでね、君」と河野は躊躇しながら、「僕お願ひだから、君からあの女に僕の事を打明けて呉れないか。お願ひだ、僕はもう苦しくて堪らないんだ、」

「そんな事は僕には出來ないよ」と定吉はどぎまぎしながら答へた。

「あゝ、困つたな。お願ひだ、君が云つて呉れなけれや僕はどうする事も出來ない。僕は苦しくつて堪らないんだよ。ほんとに。……それぢや、ねえ、君」河野は泣きさうな聲を出した。「僕と一緒に來て呉れ給へな。僕の應援にさ。さうしたら、僕思ひ切つてあの女に話をするから。僕ひとりでは到底駄目なんだ。それだけは是非承知して呉れ給へ。」

定吉は默つてうつむいて歩いてゐた。彼はそんな事は到底自分の任ではない事を考へてゐた。が、河野が昂奮して、悲しさうな聲を出して、幾度も〳〵哀願するのを聞いてゐると、彼は河野が非常に氣の

帶になつて來た。で、彼はたうとう、「それでは、行かう」と答へないわけには行かなくなつて來た。

「あゝ、承知して呉れたね。有難う」河野は感激した聲を出して、定吉の手を握り締めた。「それぢやね、失敬だけれど、水曜日の朝七時頃、氷川神社の横手の原ね、あすこに來て呉れ給へな。水曜日には七時半にあの女はあの原を通つて澁谷の終點に行くんだよ。いゝかい、水曜日の午前七時までに。」

そして優しい喜びに充ちた聲を出して、更にかう附加へた。

「僕はあの女と擦れ違ふ時、何とも云はれない電氣のやうなものを感ずるんだよ。僕はその氣持をあの女も僕と同じやうに感じてゐるに違ひないと信じてゐるよ。メエテルリンクが云つたよ、或る一人の男に取つて、それの配偶者となるべき女は生れながらにしてちやんと決つてゐるつて。運命がさう決めて置くんだつて。そして僕に取つてはあの女こそ、乾度僕のために定められた女なんだよ……」

定吉は「運命の決めて置いた女……」と腹の中で呟いて、憂鬱な溜息をした。

三

定吉は朝早く眼をさました。彼は夜つぴて不健康な夢に襲はれてゐたので、眼がさめても眠つた後のやうな氣はしなかつた。頭が重かつた。彼は煙草を喫まうと思つて、煙管を取らうと身體を擡げかけると、自分の着物が疊まれもしないで、皺くちやになつて、夜具の裾に丸まつてゐるのを見た。「あゝ、これだ、着物を疊んでも呉れない」と彼は吐き出すやうに呟いた。と、急に彼の頭に一時に不快が押し寄せて來た。

……昨夜も亦例のやうに、彼の妻の不機嫌が初まつたのであつた。

それはいつでも何といふはつきりした原因があるのではなかつた。後で考へて見ると、何であつたか思ひ出せない程些細な事からいつも初まるのであつた。よし子は先づ最初に何といふ事もなくその不機嫌の氣分に襲はれて來るのである。するとその眼の嶮が一層はげしくなつて、頬の邊りに筋肉が硬ばつたやうな不愛相な表情が浮んで來る。眉と眉との間がピクリ〳〵と痙攣する。唇が少し尖がつて來る。そして眼だけ何處か部屋の一方をぢつと瞬きもせず見つめながら、その癖顔は、眞正面から彼の顔に向けられる。それが彼にはまるで何か威壓して來る板のやうに感ぜられるのである……。

此の兆候が現はれ初めると、定吉の心はいつでも脅えて來るのであつた。彼は嵐の爆發を未然に防ぐ方法をいろ〳〵思案した。彼は机に向つて書物のペエジをはぐり初めた。此の方法は實は一番まづいのであつた。それを彼は知つてゐた。だか彼にはかうするより仕方がなかつた。

「あなた」よし子はかう呼びかけた。定吉の心はぞつと震へた。彼は返事をしていゝか、して惡いか解らないのである。

「あなた」と妻は再び繰返して、「あなたはあたしが呼んでも返事もなさらないのね」

「いゝや、今返事しようと思つてゐたんだよ」と定吉は云つた。「お前のやうに、そんなに……。」

「あたしがどうしましたつて？」

「いや、お前のやうにそんな性急に云はないでもと云つたんだよ。僕は今讀書しようと思つてゐるのだからさ。」

「だから？……だからどうしたんです？」

「あゝ、困るな、何と云つたらいゝだらう？僕は……」

定吉は情なくなつて來た。「あゝ、淺猿しい、これが生活か？」と彼は腹の中で呟きながら、ぢつと眼を閉ぢた。

「あなた位何を云つても張合のない人はありませんね。あなたのお顏を御覧なさい、まあ意氣地のない顏をして、年百年中、ちつとも表情に變化がなくて、たゞ弱々しくニタニタ笑つてゐて……」よし子の聲には次第に怒氣が募つて來た。「一體あなたはあたしや坊をどう思つてらつしやるの？」

「あゝ、何故そんな事を訊くんだね？無論、それや可愛いと思つてゐるよ」

「僞有仰い。可愛いと思つてらつしやるなら、もう少しはきはきした處か、はつきりした處があなたに見えなければなりませんわ。あなたは坊をあやした事がありますか？あなたはあたしを見ると直ぐ横をお向きになるぢやありませんか……」

「もう止めて呉れ、お願ひだ」と定吉は哀願の眼付をした。「あゝ、一體どうすればいゝんだらう？……これが僕の性質なんだから、ね、どうか、これが僕の性質なんだから、許して呉れ。……俺は靜かな事が好きなのだ…ね、どうか靜かにしてゐて呉れ！」

よし子は何か怒鳴る口實を目つけようとするためだらう、暫く彼の顏を見つめてゐた。だか、それが目つからなかつたと見えて、唇を痙攣的に震はしたゞけで、何も云はなかつた。定吉は彼女の視線が自分の顏を眞面に凝視してゐるのを意識した。彼には二人の間の沈默が苦しかつた。そして何か云はうとした。が、言葉が口に出て來なかつた。で、彼は伏眼のまゝ、彼女の方をチラリチラリと見ようとした。

……さうだ、彼はかうした彼女の發作がいつでも何によつて鬼がつくかをよく知つてゐるのである。それを思ふと、彼は淺猿しかつた。が、かうした場面が早く終らんがために、彼自身も早く淺猿しくともその鬼のつく事を望み初める……

彼は顔を眞赤にした。そして恥しさうに眼をチラと上げて、彼女の眼を讀まうとした。彼女の眼は怒氣を含んで昂奮して光つてゐた。が、彼はその怒氣の底に、もう或る longing が萠しかけ來てゐるを認めた。その萠しは素早い勢ひで彼女の眼の表情全體に擴がつて來た。彼の女の顔も急に眞赤になつて來た。

「あなた」と彼女は呼いた。彼女の聲は急にやさしくなつて、かすかな震へを帶びてゐた。と、突然眼前の物全體が自分の上に崩れ落ちて來たやうな心持が定吉にした。定吉の頭は渦を卷いた。

定吉はぼんやりして天井を見つめて、寢床の中に橫たはりながら、その光景を思ひ出した。彼は吐きつぽいやうな嫌惡を感じた。そして不快な考へが浮んだ時にいつでもする例の癖をした、卽ち頭を左右に振つて、その考へを振り落さうとした。が出來なかつた。枕の中のモミガラが後腦の下でザグリと云ふ鈍いギゴチない音を立てゝ崩れた。

「あゝ、これが生活か！」と定吉は心の中で呟いた。彼の頭に「クロイツエル・ソナタ」が浮んで來た。「さうだ、あの女はトルストイの云ふヒステリイ患者なんだ。過度の病的な不節制から來るヒステリイ患者なんだ！」

「だが、此の自分は？」と彼はまた考へた。「彼女がヒステリイで、そして俺は？この俺は何だ？」——

定吉は何が何だかまるで解らない氣がした。頭が混亂して、たゞ淺猿しくて、たゞ不愉快だつた。彼は續け樣に頭を振つた。と、今度はかういふ考へがチラと浮んで來た。「クロイツエル・ソナタ」を書いたトルストイだつて、乾度その夫人から自分と同じやうな不快を經驗したに違ひない。……だが、それは尙一層變挺な淺猿しい憂鬱に彼を導いた。彼は急いでその考を打消さうと試みた。「トルストイは俺ぢやない、俺のやうな弱蟲ぢやない！」と腹の中で云つて見たが、もう間に合はなかつた。彼れは狽狼した。そして何ものをか跛足で追つかけでもするやうに、「トルストイは偉大なんだ。偉大な宗教家なんだ」！と、たうとう自分の耳にきこえるやうに、聲に出して云つた。……

が、疊の上をとん／＼と輕く小刻みに步く足音が、此轉換の出來ない苦しい氣持から定吉を救つた。生れて一年と七ヶ月になる彼の男の子が彼の枕許にやつて來たのである。

「父ちやん、うんうん」と子供は呟いて、小さな兩手で下から煽るやうな手附をした。それは「お起きなさい」と云ふ意味の手附なのであつた。

「よし／＼、今起きるよ」と定吉は答へた。

「父ちやん、まんま」

「よし／＼、今行くよ」

定吉が起き上りかけると、子供は夜具の裾の方に行つて、丸まつてゐる彼の著物の端を掴んで、うん／＼云ひながら力一ぱいに引つぱつた。著物は端の方が少し動いたが、引つぱられては來なかつた。

「ありがたう、よし／＼」定吉は起き上つて、その著物を引つかけた。

「父ちやん、たあた」子供は今度は唐紙のそばに投げ出されてあつた足袋を持つて來た。「父ちやん、……「父ちやん、……」子供はよろ〳〵した歩きつきで、父のために帶だの楊子だの、その他いろ〳〵のものを持つて來た。その度に定吉は「ありがたう、よし〳〵」と呟いた。

彼がすつかり着物を着終ると、子供は彼の手を取つて、先に立つて、隣りの茶の間に連れて行つた。「まあ、坊やはお父ちやんをお迎へに行つて來たの、さう、好い子ねえ」よし子は鏡臺に向つて白粉をつけてゐた。そして鏡の中に映つた子供の顏に向つて、「ばあ！」と云つた。

それは彼女の機嫌のいゝ朝なのであつた。昨夜のやうな發作のあつた翌朝は、彼女は機嫌がよくて、にこ〳〵してゐた。さう云ふ時に限つて、彼女は朝から化粧をした。彼女は白粉をこつてり塗つた。彼女は黛を引いた。

「一寸、あなた、あたしにこれ似合つて？」彼女は首を斜めにして、今結つたばかりの眞中から二つに分けた女優髷を鏡にうつして見ながら云つた。

「あゝ、似合ふよ」と定吉は答へた。

「一寸、あなた、此處に來て見て頂戴よ」

定吉は彼女の後に突つ立つた。

「一寸、あなた、此處が變ぢやなくつて？……あたしの毛は癖があつてね、どうもいつも此處がふくれていけないのよ」

「變ぢやないよ」と定吉は答へた。

「お隣りの奥さんのお髪はそれやいゝのよ。あたしもあんなだといゝんですけれど、それにあの方は、好い櫛をさしてゐらしやつたわ。あなた今月月給を貰つたら、買つて來て頂戴な、銀座の何處とかにあるんですつて」

「あゝ買つて來よう」

「淺猿しい！」と定吉は頭の中が縮まるやうな氣がした。「これが生活か！」

「あなた、早く顔を洗つてらつしやい」彼女はいそ〳〵と立上つて、膳の仕度を初めた。

顔を洗ふ間も、朝飯を食べる間も、定吉の頭は重かつた。それに引更へて、彼の妻は嬉々としてゐた。

「ねえ、あなた、家の坊やはほんとに物覺えのいゝ子ですね。こんな小さな癖に、もういろ〳〵な事を覺えてるんですよ。昨日もお隣りの奥さんとお湯に一緒に行きましたら、着物をよく知つてゐてね。「をばちやん、をばちやん」て云つて、いろんなものを取つて上げるのよ。それであたしが、「坊や、阿母さんにお呉れ」と云ふと、いけない〳〵をするんですの。何が誰のものだと云ふ事をそれやよく知つてゐてよ」

「ねえ、あなた」と彼女はまた云つた。「あたしが昨日叱言を云つたら、ぷつとふくれてあなたのお部屋に行つてしまつて、何て云つてももう歸つて來ないんですよ。だから、「勝手におし」つてさう云つて、此方に來てしまふと、どうでせう、暫くしてから、「母ちやん、母ちやん」て出て來るのよ。そしてあたしの前に立つてあたしの顔色を窺つてゐますの。あたしが未だ怒つてやしないか見るんですわね。それで、餘りをかしいものだからあたしがつい笑ひ出すと、急に坊やもニコ〳〵して、いきなりあたしの

胸に來て、「母ちやん、おつぱい」だつて！その樣子つたら、ねえあなた、こんな子でもどうして妥協しようかと考へるんですわね。あなた、ほんとに可笑しいぢやありませんか」

「をかしいね」と定吉は答へた。彼は妻に對して笑つてやらなければならないと思つて努力した。が、皮膚がひきつるやうな氣がした。で、彼はこんな事を考へた。「此の子は未だ生れて一年と七ヶ月だ、それだのにもうこんなにいろ〳〵の事を覺えてゐる。さうだ、俺はその一年と七ヶ月の間一體何をしてゐたらう？」

定吉の頭には此の子供が生れた時分の事が浮んで來た。彼がそれがために如何に苦められたか、その時、いやその前から、よし子の妊娠を知つた時から、彼は彼女から如何に逃げようと思案したか‥‥彼は未だ學校生活を終つたばかりの時であつた。彼は恥しい思ひをして里子の口を捜して歩いた。彼は赤坂の或る桂庵の暖簾を潜つた時の事を覺えてゐる。强慾さうな、肥つた、だがペラ〳〵とお世辭をいふ其家の女房が、「いえ、もうどう致しまして、さういふ事は世間にもよくございます事で。一層他家にお與りになつたら如何でございます？丁度好い口がございますが」と顏を赤くして俯向いてゐる定吉を眺めながら早口にまくし立てた。‥‥定吉はその氣になつて歸つて來た。が、それを聞いたよし子が如何に立腹したか、それを定吉は覺えてゐる。けれども定吉はよし子と同棲する事を好まなかつた。彼は一年以上もいろ〳〵口實を求めてそれを避けた。彼は到底彼女と一緒に幸福な家庭を形作る事の出來ないのを豫覺してゐたのであつた。

だが、たうとう彼は彼女を捨てる事は出來なかつた。——定吉はその時の事を思ひ出した。彼は彼女と

同棲しなければならなくなつた時、「これがほんとの責任なのだ！」と自分で自分に云ひ聞かせたのであつた。そしてその次の瞬間には、「責任、責任！」と云ふ言葉が彼の頭の隅から隅まで鳴り渡つた。そして更にその次の瞬間には、「俺は責任を知つてゐる男なのだ！」といふ事を得意になつた。彼は女を捨てる男が世の中に澤山あるのに對して、憤慨と一種の自己の優秀感とを感じた。彼は男んだ。何でも引き受けてやるぞ、と云つたやうな氣持になつた。そしてそれから……

此處まで考へた定吉は恥しくなつて來た。「あゝ、一體何が責任だ？」と彼は妻の女優髷と顔の白粉とを見ながら考へた。「俺れには一體何の目的があるのだらう？俺たちの家庭生活には何の理想があるのだらう？そして子供だ！」定吉はさういふ間に子供が成長して行くといふ事實が恐ろしくなつて來た。彼は何か譯の解らない空洞を眼の前に見たやうな氣がした。……

時計が六時半になると彼は立上つた。それは水曜日の朝であつた。氷川神社の横手の原で河野と待ち合はせる約束の朝であつた。

「父ちやん、ぼうち……」彼の先に立つて子供は玄關によち〳〵歩いて行つて、壁にかゝつてゐる彼の帽子を指さした。「父ちやん、はいちやい」

四

曇るのか霽れるのか解らないやうな霧が原の上に垂れてゐた。定吉が原に行つた時、河野は學校の制服姿で、その霧の中を彼の方へ駈け寄つて來た。

「よく來て呉れたね。君、あすこの林の中に行つてゐようよ。こんな處に突つ立つてるわけには行かな

いから」

その林は原の中に突き出てゐる或る寺の境内の末端になつてゐた。そこはその寺の墓場なのだが、原との境の竹垣根はところ〴〵にその名殘を僅かに止めてゐるに過ぎないほど破損してしまつてゐて、外から自由に出入する事が出來た。何人の墓とも解らない小さな古びた墓石がごろ〴〵と幾つも並んでゐて、中には横倒しになつてゐるのもあれば、半分ほど缺けてゐるのもあつた。そしてその上には一様に苔が蒸し、その周圍には雜草が生ひ茂つてゐた。河野と定吉とが横倒しになつた二つの墓石の上に腰を下した時、濕つぽい土の香ひが鼻を打つた。河野は異常に昂奮してゐて、その顏色が蒼白かつた。胸がどきん〳〵と烈しく皷動してゐる樣子であつた。

「僕はさう信じてゐるよ、乾度對手でも僕の事を感じてゐるに違ひない、と」彼は自信を得るために、自分の心に說きでもするやうに幾度も〳〵さう云つては、定吉の確かめを要求した。

定吉は妙な位置に置かれた自分を考へた。自分と云ふものの生活、あの家庭、昨夜の不快、今朝のあの方向も當もない悔恨……而も、さうした總てにも拘らず、彼は友が若い娘に戀を打明けようとするのを助けるために、朝早くからからうしてこんな林の中に坐つてゐるのだ。

「何のために、何のために？」彼の心の何處かでかう呟くものがあつた。が、彼はそれには答へようとしなかつた。彼の眼には原の上に漂つてゐる霧がうつつた。彼の足には雜草に宿つてゐる露が冷たく觸れた。彼の肌には靜かな秋の朝の空氣がひや〳〵泌みた。彼の耳には氷川神社の森で啼く百舌鳥の鋭い啼聲がきこえた。そして彼の鼻には新鮮な濕つぽい土の香が鋭くにほつた。――それ等は寧ろ彼の心を

輕快に導く事に役立つた。

で、彼の頭には空想が、無氣力な心の狀態になつてゐる人が現在を忘れて、と云ふよりも寧ろ現在を考へる力のないためにぼんやり思ひ耽るやうになるあの弱々しい空想が浮んで來た。彼は子供の時分山の手で育つた。そして十一二の時分、秋から冬になると、よく父に連れられて、未だ夜の明けない中から、目黑の雜木林に小鳥を捕りに行つた事を思ひ出した。その時ヒルテン網を低い林と林との間に張つて、彼と父とは十間か二十間ばかり隔つた薄の蔭に隱れながら、渡り鳥の渡り初めるのを待つのであつた。彼は渡り鳥がチヽと啼きながら、夜明けの空に群をなして飛んで來る有様や、それが囮の高音を聞くと、まるで鞠でも落ちて來るやうに、すつと林に向つて下りて來る光景や、そして獲物が網にかゝる度に、網の兩端の細い竿がぶるぶると震へる樣子などを思ひ出した。

「丁度こんな風に腰を下して待つてゐたのだ！」と定吉は頭の上に覆ひかぶさつてゐる木の枝を仰いで見ながら考へた。

「君、來たよ」と河野が低聲で呼いた。定吉は急に心が緊張して來るのを覺えた。

原の中央を南北に通ずる一本路の南の端れに、彼女の姿が現はれて來た。定吉は眼を瞠つた。彼女は袴を穿いて、スケッチ箱を肩にして、手にパラソルを持つてゐた。彼女はJ——美術學校の生徒であつた。定吉は河野の戀の對手として、しとやかな、ほつそりとした、ハイカラな虎の門風のお孃さんを想像してゐた。ところが、彼女は遠方から見ても身長が低くて、どことなくゴツ〳〵した女であつた。まるで小學校の女敎師のやうになりふり構はずに、ぱつぱつと大股に、快活に歩いてゐた。

「君、あの原の眞ん中の一木本ね」と河野が震へる聲で云つた。「あすこまで來たら、いゝかい、僕が此處から出て行くから、君も後から直ぐ蹤いて來て呉れ給へな」

彼女は間もなくその一本木のところまで來た。

「さあ」と河野は立上つた。が、定吉は立たなかつた。

「僕は此處で待つてゐよう。その方がいゝだらう、二人一緒に出て行くよりは」と彼は呟いた。

「いや、君、是非君も一緒に出て呉れ給へ。僕は困るよ。僕はひとりぢや到底どうすることも出來ないよ」

それでも定吉は立たなかつた。

「君、早くさ、あゝ、もうあんなに來てしまつた。今だよ、君、今出て行かなければ駄目だよ」さう云つて、河野は定吉の手を引つぱつたが、それでも尙定吉は立たなかつた。彼は河野に對して氣の毒で、自分の意氣地なさが恥しかつた。が、二人連れ立つて突然林の中からどうして飛び出せよう。そして女の前にどうして突つ立ち得よう。「あゝ、來なければよかつた。何だつてこんな馬鹿げた役割を承知したらう」彼は何處かに逃げ出したいと思つた。

「あゝ、君」河野の聲には歎願と涙とが響いた。「あゝ、もうあんな處まで……」けれども定吉が動かないものだから、決然とした態度で定吉の手を放して、林から出て行つた。「あつ！」と定吉は思つた。彼の心はきゆと萎縮した。彼の眼には女の無骨な活潑な姿と、河野の華奢な優しい姿とが同時に映つた。今こんな場合に、あんな昂奮のしかたをして河野が出て行つても、到底失敗に終るにきまつてゐる

やうに定吉には思はれた。彼は河野を呼び止めて、今日は思ひ止まらせようかと思つたが、もう聲をかける機會を失つてしまつた。そこで、彼は一層身體を縮めて木の蔭に隱れながら、眼を蔽ひたいやうな氣持で、眼前の成行きを見てゐた。

が、それは頗る變挺な光景であつた。河野が隱れ場所から出た時には、女はもうその丁度隱れ場所の眞ん前の路を通つてゐた。彼女はチラリと河野の方に眼を呉れたが、そのまゝ又正面を向いて、どんどん活潑に、大跨に歩いて行つた。河野が草の上を横切つて路に出た時には、その位置が丁度女の後から蹤いて行かなければならないやうな事になつた。それは河野に取つて頗る勝手が惡かつたに違ひない。何故なら、女の後から聲をかけて呼び止めるのには、非常な大膽さが必要だからである。……河野と彼女との間の距離は七八間ぐらゐあるやうに定吉には見えた。河野はうつむいて、一心に地面を見つめてゐると云つたやうな恰好で、歩いてゐた。足を早めて女に追ひつかうとする樣子もなければ、聲をかけようとする樣子もなかつた。唯一度頭を上げて、呼びかけでもするやうに足を早めかけた時には、「あゝ！いけない／＼」と定吉は林の中ではら／＼しながら呟いた。けれども河野が再び足をゆるめて、頭を垂れたので、そこで定吉はやつと胸を撫で下した。「事勿れ／＼！」彼の心はひたすらそればかりを祈つてゐた。

けれども、女が原を出て、氷川神社の鳥居前の方へ下るだら／＼坂を下つて行つてしまつたのを見た時、そして河野が原の端れに佇んで女の後姿をぢつと見つめてゐるのを見た時、定吉は急に羞恥の念が心に、と云ふよりも全身の隅から隅まで漲つて來るのを感じた。彼は恥しさに手の先までが震へた。頭

を下げてしよんぼり歸つて來る河野の姿を、彼は正面に見てはゐられなかつた。——だが、彼は河野の事が恥しいのか、自分の事が恥しいのか、はつきりと意識はしなかつた。恐らくは河野の事も自分の事も共に恥しかつたに違ひない。彼は雜草の上に仰向けに寢ころんで、手で顏を蔽うた。彼の胸には悲しい頼りない淺猿しさが、ふく／＼と込み上げて來た。

「あゝ、君、駄目だ、どうしても駄目だ！」と河野が定吉の側に靜かに歩み寄つて悲しさうに云つた。「あゝ、何て意氣地がないんだらう。僕はまるで足がすくんでしまふやうな氣がしたよ。折角の此の好機會をまた逃がしてしまつた。ねえ、君、何ていふぶざま加減だらう」

そして彼はその邊を暫くぶら／＼歩きまはりながら、暫く無言でゐたが、また云つた。

「君にも失敬したね、鈴本君。併し僕は此の次には屹度云ふよ。屹度云ふよ。今日は僕の出て行くのが遲かつたのだ。後からついて行くやうになつては、とても聲がかけられるものぢやないよ。今度は僕は前から歩いて行つて、擦れ違ふ時に聲をかけよう。さうすれば屹度云へる……」さう云つて、更にかう附加へた。「僕はたしかに信じてゐるんだ、あの女も僕の氣持を感じてゐて呉れるに違ひない、と。僕がこんなに思つてゐるのに、それが對手に通じてゐない法があるものか。ねえ、君、さうぢやないか。僕には人間の靈魂がそんな無力なものだとは考へられないよ」

けれどもやがて二人が歩き出した時には、河野はもう何も云ふ勇氣がなくなつてしまつたと見えて、默つてうなだれてゐた。二人は澁谷の電車の終點まで行く間に、一言も言葉を交はさなかつた。ばかりでなく、羞恥と互ひに氣の毒に思ひ合ふ心とのために、顏を見合はす事さへも避けてゐた。

五

十一月が來た。けれども定吉の生活には何の變化もなかつた。社の仕事は益々忙がしくなつて行くばかりであつた。△△大臣の秘密が曝露したのをきつかけとして、上下兩院では內閣に對する攻擊が猛烈を極めた。各新聞ではそれを書き立てた。S——紙も最初の間は攻擊の仲間に加はつてゐた。社會部も政治部も力を協せて、その紙面の大部分を內閣攻擊のために割いた。定吉は相變らず電話を聞いたが、政治家や代議士の名をまるで知らなかつたので、R——黨の代議士をM——黨の代議士と書き誤つたり、N——會の代議士をT——會の代議士と書き誤つたりした。そしてそれを社會部長から注意される度に憂鬱の度が益々募つて行つた。

ところが或る日、社の幹部の者たちが朝から一室に集まつて、何やら協議してゐる樣子であつたが、午後になると、內閣に對するS——紙の態度を一變すると云ふ事を、社會部長及び政治部長から各々その部下の記者たちに報告し且つ命令した。

「買收されたな。ふん、十萬圓も貰つたんだらう、あの强慾張の社長奴が……」と金緣眼鏡の牛島が、肩をすくめて呟いた。「ひとりで巧くやつてやがるな。我々の方にも少し位分けて吳れたつて好さゝうなものだ!」

「十萬圓ぢやきゝますまいよ」と外交部長の吉田はかう云ふ消息はみんな自分が知つてゐると云つたやうな顏をして、口を挾れた。「尠くとも十五萬圓は確かでせう。M——社でも十二萬圓貰つたさうですからな。今日K——社の記者に會つたら、あの社も買收されさうになつたんですつて。ところが、あすこ

では百萬圓以下の金なら、貰つたつて貰はなくつたつて大した相違はないと云つて、一言の下に拒ねつけてしまつたさうですよ。流石はK――新聞だ。百萬以下の金なら……とは素晴しいものぢやありませんか」

定吉は雜閙を極めた編輯局の一隅に腰を下して、總ての光景をぼんやり見てゐた。總てが彼には意外であつた。彼は吃驚した。……彼の頭には社長の相撲取のやうに肥えた身體が浮んだ。社長はいろ〳〵の好からぬ噂を持つた男であつた。脅嚇のために訴へられた事も一度や二度ではなく、女事務員に少し綺麗なのが來ると、片つ端からそれを手馴づけた。社の經費を出來るだけ縮少して、社員の月給を減らしたり、外交記者の手當を廢したりしながら、自分は株でしこたま腹を肥して、贅澤三昧に送つてゐた。三度代議士の候補に立つて三度失敗した。その他定吉の耳に傳はつてゐるだけでも、此の社長の不義不德は數限りがなかつた。――これは不義不德の例にはならないが、社長は二十圓とかする薩摩下駄を穿いてゐた。それがために別仕立の桐の下駄箱が社に用意してあつて、腰の曲つた頭の禿げた爺さんが、その下駄をその下駄箱に出し入れする時、まるで何か寶物でも取扱ふやうな、粗末にしてはならないと云つたやうな敬虔な表情をして、恭々しく兩手でそれを捧げるのを、定吉はよく見た。

「さて諸君」とそこに社會部長の齋藤が會議室から忙がしげに出て來て、「此の度社の方針を一變するについては、國民の反感を買はない用意として、漸次に目立たぬやうに記事の調子を變へて行くのが最良の策だと思ふ。明日は攻撃の記事と辯護の記事とを半々に載せ、明後日は更に辯護の記事を增して行くと云つたやうに……吉田君、君もその方針で外交記者を指揮して呉れ給へ」

「承知しました」外交部長の吉田は丁寧に頭を下げた。
「それから鈴本君」と社會部長は定吉の方を向いて、「君に一つ受持つて貰ひたいものがあるが、今度現内閣辯護の位置に立つについては、反對のR――黨に對する攻撃を毎日紙上に載せて行きたいと思ふ。で、それに就いての記事は一切君の取捨撰擇に任せたいと思ふから、一生懸命にやつて呉れ給へ」
「承知しました」と定吉は低聲で答へた。
「R――黨は多數黨でその機關新聞も多いから、それに負けないやうに確り頼むよ」
「承知しました」
　定吉の机の上には毎日R――黨攻撃の原稿が山のやうに積まれた。彼はそれを一々讀んで行かなければならなかつた。R――黨が如何なる陰謀を企てたとか、R――黨の首領のH――は百五十萬以上の身代を持つてゐるが、彼が無一物から如何なる方法を以てその大財産を贏ち得たかを思へば、その裏面には暗い秘密の横たはつてゐるのを推測し得られようとか、兵庫縣選出のR――黨の代議士某は有名な色魔で、彼が旅をすると、到るところその毒牙の犧牲となる無垢の婦女子が數知れないとか、さう云つたやうな事ばかりが最も野卑な、最も下等な、嘔吐を催すやうな文章で書き立てゝあつた。定吉はそれを讀んで行くと、頭が痛くなつて、胸が淺猿しさに一ぱいになつて、云ひやうのない憂鬱と苦しさとを覺えた。彼は自分とは何の關係もない代議士達を、何故自分が攻撃しなければならないかを考へた。
「何のために、何のために？」時々ペンを投げ出して、溜息しながら腹の中でかう呟いたが、その答へは問ふまでもなく彼の心に明瞭であつた。が、彼はそれを直視する事を避けて、此の現代の世の中に生

きて行かなければならない弱い人間の口實として叫ばれるあの『生活のため』を、彼も自分の口實にする事を自分の心に說き聞かせるより外仕方がなかつた。が、それは勿論成功しなかつた。そこで彼は時間によつての痲痺を待つた。が。痲痺はいつまで經つても來なかつた……

午後四時半になると彼は社を出たが、眞直ぐに自分の家には歸らなかつた。いつものやうにステッキを右の手に持ち、左の手はふところに入れて、不快な考を一掃するために、時々頭を左右に振りながら、銀座通りを當もなくぶら／＼歩くのであつた。尾張町から京橋までの右手の人道に並んでゐる夜店を一軒／＼見ながら、成るたけのろ／＼歩く事に努力するが、直きに京橋まで來てしまふ。そこで今度は京橋から尾張町までのショウウヰンドウを一軒々々覗きながら、又同じ人道を引つ返して行く。ショウウヰンドウの中は毎日大した變化がなかつた。けれども彼に取つてはそれを一々覗いて歩くといふ事が、一日中での最も氣の樂な時であつた。靴屋の前に來ると彼は贅澤な旅行を空想した。自分が少壯紳士と云つた恰好で、赤帽に鰐革の鞄を渡しながら、東京驛の一等の改札口を輕快に、ハッピイに通つて行く光景を思ひ浮べた。帽子屋の前では彼は好きな帽子を腹の中で撰擇した。それから時計屋、それから感じのいゝ電氣燭臺の並んでゐる電氣屋。たゞ、洋服屋の前だけには立止らなかつた。足の內側に彎曲してゐる彼は、學生時分から洋服が自分に似合はない事をよく自覺してゐたからであつた。

そして再び尾張町の角に立たなければならない。カッフェ・ライオンの壁に凭れて佇むと、都會のいろ／＼な灯がぼうつとした一塊となつて、彼の眼に映る。そしてそれがいつもの通りの空想を、田舍に引つ込んでトルストイを讀むといふあのファミリアアな空想を、彼の頭の中に描かせる……

それが毎日々々同じであつた。
時によると彼は相川や遠山や河野に出會ふ事があつた。
「僕は今小說を書きかけてゐるんだが、どうも峠が越せないで弱つてゐるんだ」と相川は云つた。
「長いものか？」と定吉は訊いた。
「いや、短かいもんだ……さうさう、いつだつけか君に話した事があつたね。それが未だ出來上らないんだよ。」
それから相川は現代が如何に混沌としてゐるかと云ふ事や、此の混沌とした狀態を整つた、秩序ある狀態にする責任は、我々青年の肩にかゝつてゐるといふ事を、きばり〳〵した自信のある口調で語り初める。定吉はそれを聞いてゐると、又いつものあの對手の優勢を感ずる神經的な反射運動に驅られて、自分にない或る力を相川が持つてゐるやうな氣がして來るのであつた。そして相川が今書きかけてゐる小說が出來上つたら、それは今までの日本に未だない或る確固とした思想を傳へてゐるに違ひないと思ふのであつた。

近頃遠山は形の古い、柄の惡い、古洋服を著てゐた。彼は撫で肩で、膝が延びなかつた。で、兩手を振つて、腹を少し前に突き出すやうにして步いて行く樣子は、亞米利加の活動寫眞の喜劇役者の何とかいふのに似てゐた。酒を飮まない時の彼は善良で快活であつた。
「俺は洋服が似合ふだらう。これで訪問記事を取りに行けば、奴等に對して敢て失禮には當るまい」彼はこんな事を云つた。「昨日〇――伯を訪問したんだよ。あの爺さんは實に元氣でよく物を知つてゐるな

あ。俺は感心してしまつた。一室に訪問客が二十人ばかりずらりと並んでゐるんだよ。そこに爺さんが出て來て片つ端から訪問の要件を訊いては即座にそれに答へて行くんだ。伊勢の眞珠商人とかいふのが來てゐて、眞珠の事を喋つてゐたが、あの爺さんの方が餘程つ世界の眞珠の相場に精通してゐるものだから、流石の商賣人も舌を卷いてゐたつけ。」

かと思ふと又こんな事を云つた。

「だが、どうもかういふ職業は俺には適かないやうだ。門前拂ひを喰ふと、俺は喰はせた方に同情してしまつて、喰はせられるのが當然だと云ふ氣になつて來るんだからね。……さあ、精々一ケ月も勤まるかな」

けれども、河野に會ふと、定吉は何となく恥しさと氣の毒さとを同時に感じて、涙ぐましいやうな氣がした。

「今日も會つたよ」と河野は細い優しい聲で云ひ初めるのであつた。「電車の中で僕の方をじろじろ見てゐたよ。僕は顏を上げる事も出來なかつた。併し僕は、對手でも僕を思つてゐるといふ確證を十分に得たよ。ねえ、君、思つてゐるからこそあんなに見るに極つてゐるぢやないか。君、さうだらう？」

「あゝ、さうだ」と定吉は答へた。が、自分の聲が滅入るやうに頼りなく聞えた。

「今度こそ僕は屹度云つてやるんだ。僕の直覺は決して間違ひはない。對手も僕から云ひかけるのを屹度待つてゐるに違ひない。」

定吉が自分の家に歸つて行くのは九時か十時頃であつた。家庭に於いても彼の生活は相變らず何の變

化[illegible]なかつた。子供の智識は驚くばかり毎日進んで行つた。二日か三日に一度、或は毎日、彼の妻はあの肉慾的ヒステリイの發作を起した。そして定吉は「淺猿しい、淺猿しい！」と心の中で叫びながら、そのヒステリイの鬼をつける事に身をまかせた。そして翌朝になると、あの方向も目的もないいたづらな悔恨……

さうしてゐる中に、定吉に取つて恐ろしい事が引續いて起り初めた。

六

その一番最初はかうであつた。

定吉は友人達と一ヶ月に一度づゝ神田の或る小さなカッフヱに寄り合ふ事になつてゐた。此の會合はその最初の目的はよく今の青年にあるやうに、互ひに思想を語り合つたり、藝術の話をしたり、研究を發表し合つたりするに在つたのであるが、今ではもう各自勝手に酒や珈琲を飲んで、唯わけもなく笑つたり騷いだりするだけのものとなつてしまつた。――それでも定吉は此の會合が好きであつた。彼は毎月此の會合の日を指折り數へて待つてゐた。それもその筈である、彼は毎晩々々を、いや、刻々の「時」をさへも、如何にして過すべきかと云ふ術を知らない程、所在なさに苦められてゐたのだから。

此の會合でもやはり遠山と相川とがいつても話の中心であつた。殊に此處に述べようとするその晩には、此の遠山と相川と定吉との三人しか出席しないのであつた。

遠山は例の訪問記者の職業はもう止めてしまつてゐた。彼の生活は再び切迫し初めてゐた。けれども、彼にはそんな事はてんで問題にも苦痛にもならないらしかつた。

「君が何も……いや、いかん、いや、よく聞け」から彼は例のアルコオル中毒症の顫へる手と、泥醉した舌の縺れとを以て、大聲に、といふよりもまるで喚き立てるやうに、相川に突つかゝつて行つた。「俺が俺の弟に屡々金を無心すると云つたところで、それが君のその小つぽけな「秩序」と何の關係があるんだ？さうだ、俺はまた職業を捨てゝしまつた。そこで生活に窮した。だから俺は弟に……」

「それで、君はそんな風な事をいつまで續けてゐようといふのだ？」相川は熱すれば熱する程增して來る例の意地の惡い程の冷靜を以て反駁した。「君の弟君は實際忠實な人だよ。僕は君の弟君に敬意を拂ふよ。實際君のファアザアと云ひ、君の細君と云ひ、君の弟君と云ひ、君の一家の人々はみんな忠實な人達だ。だが、當然責任のある長男の君に代つて、田舍で破產した一家を整理してゐられる忠實な君の弟君に向つて、君が何もいろ〳〵な心配を持ちかけるといふ事は、何と云つても贊成出來ない。非常に宜しくない事だ。」

「例へばキリストだ」と遠山が叫んだ。「キリストは唯ひとつのものを求めてゐた。「我等が求むるものは唯ひとつのみ」――キリストはほんとに偉い。若し俺達がキリストと同じ覺悟を以て立てば、此の物質的社會の下らない規約などは、すつかり輕蔑してしまつてもいゝのだ。俺達は物乞ひして歩いて食つたつても些つとも恥ではないのだ。たとひ三十回や五十回の金を弟から無心したところで、それが俺の一生の價値をどれだけ低下するものぞ！」

「キリストはキリストで君ではない。キリストは天だ。君は地面だ。地面が天のつもりになつて物を云ふから、此の世の中が混沌となるのだ。君が持ち出すキリストやドストイェフスキイは、君の出鱈目の飲

んだれ〳〵の辯護のダシに過ぎない……おい、ボオイ君、僕にウヰスキイを一杯。」

かうして遠山は日本酒を飲み、相川はウヰスキイを飲んで、何時間も〳〵論じ合つて行くのであつた。定吉は此の無際限の議論を初めは興味を於て聞いてゐたが、終ひには退屈を感じた。けれども、それでも彼は此の場にゐるのが愉快なのであつた。此の場を立ち去れば勢ひあの自分の家庭に歸つて行かなければならない。彼はそれを思ふと、如何に自分に語るべき意見がなくとも、如何に二人の議論が始終繰返される同じ事であつても、それでも彼は家に歸るよりはそれを聞いてゐる方がましなのであつた。

三人はやがてそこを出た。彼等は此の會合の歸りに極つてするやうに、電車線路に沿うて二停留場か三停留場ぐらゐ散歩するのであつた。遠山が大きな聲で歌を歌ひながら、よろ〳〵した歩きつきで先に立つて行くと、相川と定吉とはその後から蹤いて行くのであつた。が、相川は遠山の大聲で歌を歌ふ樣子が厭だと云つて、突然そこに通りかゝつた電車に飛び乗つてしまつた。そこで定吉は唯一人遠山の後から蹤いて行つた。彼は家に歸る時刻の近づいて來るのが何よりも厭で、又憂鬱に襲はれ初めた。いつまでも〳〵かうして歩いて行きたかつた。

すると、いきなり遠山が後を振向いた。

「おや、相川はどうした？逃げやがつたな、あの小僧つ子は。だが、彼奴はいゝ奴だ。彼奴は小つぽけだがほんとの事を考へてゐる。唯少々近視眼だ。……併し待てよ。おい、鈴木、貴樣は金を持つてるか？」

定吉は遠山の眼に一種何とも云はれない氣味の惡さを見た。遠山はにや〳〵笑つてゐた。が、定吉に

はその笑ひが何となく恐ろしかつた。

「少し位ならあるが、澤山はない」

「一圓五十錢あるか？」

「あゝ、その位はあるよ。併し、どうしたんだい、急に？」定吉は遠山がそれを貸して呉れとでも云ふのかと思つてさう答へた。遠山は愉快さうに笑つた。

「うん、よし〳〵、そいつは素敵だ。俺も一圓五十錢持つてゐる。それではこれから出かけようぢやないか、lowest paradiseに！」――（ロウエスト、パラダイスと云ふのは遠山のよく使ふ言葉で、それは最下等の遊廓を意味するのだつた。

定吉は吃驚した。彼は未だ遊廓に行つた事が一度もなかつたのであつた。……彼は彼女、彼の妻のよし子の外には女を知らない男なのであつた……

「厭か？」と遠山は定吉の吃驚した樣子を見て云つた。「貴樣は一體何だ？あの腐つたやうな女にいつも虐げられてゐやがつて。意氣地のない奴だな。さあ、行かう、おい、行かう！」

「僕は止さう」と定吉はおど〳〵しながら答へた。

「なに、貴樣は何が恐ろしくて始終此の人生に脅かされてゐやがるんだ？貴樣はそれで善人のつもりでゐやがるんだらう？貴え切らないで愚圖々々してゐる人間は神樣だつてお喜びにならないぞ。我等の親玉のキリストもちやんとその事を云つてゐる。……やい、貴樣は元來意思と云ふものを持たない。貴樣は自分の考によつて動く事の出來ない男だ。貴樣のやうな人間こそ救はれる時はないのだ。貴樣は一番

不道徳な男だ！」

「僕は止さう」と定吉はたじ〳〵と後に退りながら答へた。

「よし、俺が貴樣のやうな人間は懲らしめてやる！」と叫んだかと思ふと、遠山は急に定吉の持つてゐたステッキを引つ奪つて、それを振り上げた。

それは餘りに唐突で餘りに意外であつた。定吉は「あれ！」と心の中で叫んだ。彼は遠山の眼を見た。と、彼の心臟がぎゆつと急激に萎縮した。遠山の眼に何か惡魔的な恐ろしいものがギロリと光つてゐるやうに思はれたのである。嘗て感じた事のない突然の恐怖が定吉の全身を捉へた。

定吉の頭は何が何だか解らない程混亂した。彼はその混亂の中で、「あつ、人通りが多いから見つともないな！」と云ふ考がチラツと浮んだのを一瞬間意識した。彼が氣がついた時には、彼の足が四五間も地面の上を飛ぶやうに駈け出してから後であつた。彼は一目散に（それでも咄嗟の間に、下駄を脱いで、それを手に下げるだけの事を忘れなかつた。）逃げ出した。「おや、自分は逃げ出したな」と彼は思つた。と逃げる自分の足の進みにつれて、不思議な變挺な恐怖は加速度を以て增して來た。彼は遠山が後から追つかけて來るやうな氣がして、後をも振り向かずに逃げ出したのである。

何故逃げ出したか？それは彼にはよく解らなかつた。彼は逃げ出す必要のない事を駈けながら半意識的に意識した。が、彼はこんなに恐ろしい事は初めて遭遇したと思はれた程恐ろしかつたのである。それは唯この事ばかりから來た恐怖ではないやうに思はれた。いろ〳〵のものが、恐らくは此の半年ほど前から、彼が妻と同棲してから、彼がＳ——社に入社してから、ずつと此の方接したいろ〳〵なもの

が、この恐怖を潜在的に彼の心に準備させて置いたやうには思れた。妻も、社長も、締切のベルの音も、電話も……そこに偶然にもあの遠山が、その積り積つた憂鬱な定吉の心に一つの刺戟を與へたのに違ひない。――小さな刺戟をひとつでも受ければ、直ぐにそれが胸中一ぱいに擴がつて高鳴りするやうに……

　定吉は九段坂を夢中で駈け上つた。彼は息苦しさを覺えた。が、彼は坂上の交番の前を通る時には、巡査に怪しまれまいとするために、足をゆるめて、平靜を裝ふとする心を忘れなかつた。彼は大村銅像の側まで行つて、そこに横たへてある戰利品の砲身の腰掛の上に腰を下した。彼は幾度も〳〵振り返つては、遠山の姿が後から見えはしないかと氣配つた。

　やがて、彼は九段坂上の停留場まで引つ返して行つて、暫くそこに又立止つた。彼は電車に乘る事が出來なかつた。彼の理性はそんな事が決してあり得ないと云ふ事を承知してゐるのに、ひよつこり乘ると、その中に遠山が乘つてゐさうな氣がしたのである。……尠くとも彼は十台位はさうして電車を待つてゐたゞらう。と、そこに僅かに四五人しか乘客のない一台が來たので、彼は要愼深く一度車内を窺き込んでから、やつと胸を撫で下してそれに乘り込んだ。

　それから……それだけでは未だ盡きなかつた……彼はいつも降りる停留場では降りなかつた。彼はその一つ先の停留場で降りた。それも、遠山が彼の降りる處を待伏せしてゐるやうな氣がしたからである。そして更にまた、彼は自分の家の方へ曲る路次の角に來て、長い間躊躇しなければならなかつた。その路次には一本の大きな銀杏の木（それは十年ほど以前の落雷のために、頂邊から幹が眞つ二つに裂けて

ゐた）が黒い夜の空に怪物のやうに突つ立つてゐた。彼はその銀杏の木の側を通る時には、息を殺して、爪先立つて歩いた。‥‥その幹の蔭から『わつ』と云つて遠山が躍り出して來はすまいかと、彼は實際にさう思つて、それが恐ろしかつたのである‥‥

七

「一體どうしたと云ふのだらう？」定吉は寢床の中に這入つてからも、不安な氣持を捨てる事が出來なかつた。彼は遠山に對して氣を惡くはしなかつた。彼はそれが遠山の泥醉の結果の一時の發作に過ぎない事をよく知つてゐたからである。「遠山は二三日中に屹度にこ〳〵して、何事もなかつたやうな顏をしてやつて來るに違ひない」から彼は腹の中で思つた。

けれども、遠山の事はたゞそれだけであつても、遠山のその小さな行爲が、定吉の神經に與へた打擊の結果は恐ろしかつた。彼の神經にはまるで一つの方向が與へられたかのやうに、一寸した刺戟を受けると、直ぐにもその方向に向つて、彼の理性はそれを否定するのに、それだのにどうしてもさうならずにゐられない苦しい方向に向つて、進み初めるのであつた、定吉はその翌晩ひとりの醉漢が亂暴を働いて、或る交番の前で二人の巡査のために地面に組伏せられてゐるのを見た。彼は群衆が大勢立つてゐるので、何の氣なしにひよつと覗いたのであつた。足掻いたり喚いたりしてゐる醉漢の額は、小砂利で擦り剝いた傷口から眞赤な血を噴き出してゐた。彼はその血が地面にポタ〳〵黒く落ちてゐるのを見ると、「あつ！」と思つた。たゞ「あつ！」と。彼の心臟はきゆつと痛んだ。そして急激に萎縮したので、胸がドキ〳〵と烈しく波打つた。それはほんとに或る不思議な、一種の肋間神經痛に似た痙攣的な痛み

であつた。それは醉漢を氣の毒と思つたり、或は人間と云ふものがかうした醜い有様——その醉漢をも、二人の巡査をも、笑ひながら立つて見物してゐる群衆をも含めて——を演ずると云ふ事に對する羞恥を感じたりするやうな、さうした明確な意識から來る感情では決してない事が明瞭であつた。それは一つの發作……さうだ、一種の反射的の神經の痙攣であつた……何と云つたらいゝか、今の醫學上では何とこれを命名してゐるか？　が、それは統一された一つの人格から來る「愛」でもなければ「同情」でもない。寧ろ人格の破綻から來る一つの神經の顫動であつた。「あつ！」と思ふ。胸がきゆつと萎縮して痛む。が、次の瞬間に彼は自分のなすべき事をまるで知らない。彼は急いでその光景の見えないところまでその場を逃り抜けて、そしてその神經性の苦痛を振り捨てようと努力して、頭を左右に打ち振るより外何も知らない……

定吉はその醉漢と巡査との格鬪を見た刹那、まるで何ものにか狩り立てられでもするやうに、たうとう驅け出さずにゐられなかつた。——何處に、そして何のために？

定吉はかうした方向を彼の神經の上に與へられてからといふものは、彼に取つて此の人生がひとつの絕間ない地獄の苛責となつた。彼のハアトは日毎に何度痛むか知れなかつた。よちよち歩いてゐる彼の子供がひよつと柱に頭を打つけさうにする。と、彼は『あつ！』と思ふ。そして心臟がつぶれさうになる。妻が、氣紛れな彼の妻が、自分の機嫌の好い時には子供にやさしくし、少し氣分の惡い時には生れて來たやつと一年半餘にしかならない小さな存在に向つて手荒な事をする妻が、子供を泣かせる。すると彼は『あつ！』と思ふ。そしてハアトが潰れさうに痛む。——その他いろいろなものに接する度に、

言葉よりも、觀察よりも、或は心配よりも、何よりも眞先に、先づ此の潰れさうなハアトの苦みが定吉を襲つて來るのであつた。

遠山のステッキの下から彼が逃げ出した晩の翌々日であつた。

その日は社會部長の齋藤も次席の牛島も共に社を休んだので、社會部の編輯を定吉ひとりでしなければならなかつた。

午前中は大變暇であつた。何も大事件がないために、新聞の方から見ると、紙面を飾る事の出來ない困つた日であつた。第一紙面を埋めるだけの原稿が集まるかどうか、それさへも心配な位であつた。定吉は外交部長の吉田に向つて、外交記者達が何か持つて來るかどうかを再三訊ねた。

「さあ、警視廳に行つてるT――から、一段位の埋草は知らして寄越すでせうがね」と吉田は、新米の定吉が狼狽してゐる顔を、かなり皮肉な微笑を浮べて見ながら云つた。

「何か大事件が勃發するといゝんですがね」

「五人殺しといふやうなものでもあるといゝがな」と吉田は笑ひながら云つた。

此の紙面を埋めなければならないと云ふ心配が定吉を驅つて、いつの間にか、吉田の云つたその言葉をそつくりそのまゝ心ひそかに期待するやうにさせた。「さうだ、五人殺しでもあるといゝ」と定吉はひよつとさう獨語ちた。さう獨語ちて、そして彼は自分の獨語の意味に氣がつくと、狼狽て顔を赧らめた。――「人殺しを喜ぶやうになるとは、何といふ恐ろしい心理作用だらう！」――

けれどもその時通信部長のMから、急に定吉の机の上に一束の電報が投げられた。彼は急いでそれを

取上げると、それはB——岬の特派員から來た電報であつた。

「超努艦C——は去る—日—時—分頃△△任務のためB——岬沖を航行中、淺瀨に坐礁す、A——港より巡洋艦五隻直ちに出動して乘組員全部を救助し、C——艦も亦滿潮を待つて離洲したるが、損害意外に大なる見込なり……」

定吉はそれを讀むと夢中になつて昂奮し初めた。彼はその日の各朝刊新聞を調べて見たが、その記事は載つてゐなかつた。そこで直ちに正午版の冐頭に初號活字三段拔きの大きな標題をつけて掲載した。彼は自分が何か大きな手柄でもしたと云つたやうな、得意の感をさへ以て、正午版の刷り上るのを待つてゐた。やがて正午版は出來た。彼はそれを見ると、紙面が生々として、活字が立つて動いてゐるやうな氣がした。そして自分のつけた標題が案外上手だつたのを喜んでゐた。

そこに給仕が突然やつて來て、

「鈴木さん、社長さんがお呼びです」と云つた。定吉は急いで社長室に這入つて行つた。

「今日の三面の編輯は君がしたのか?」彼を見ると社長は、怒氣を含んだ眼をして身體を震はしながら、「實にこんな無考へな事をして呉れては困るぢやないか。君は何ていふ馬鹿なのだ。君は今どんな具合に國民が騒いでるか知つてるだらう。今の政府が、殊に海軍省がどんな事で國民から攻撃されてゐるかを知つてゐるだらう。C——艦は今の政府になつてから造つた軍艦で、而も此の軍艦を造つた時にその裏面に秘密があつたと云つて國民は騒いでゐるのだ。その矢先に持つて行つて、C——艦が坐礁したなどゝ云へば、どんな騒ぎになるかも知れんぢやないか……」

社長は肥つた割合に聲の細い男であつた。彼の體格からかうした女のやうな細い聲が出ようなどゝは、誰だつた豫期しないであらう。定吉は此の體格と此の聲との不調和からだけでも、此の社長に對して心からの嫌惡を感じてゐた。――けれども彼は、社長がその細い聲をはり上げていろ〳〵の事を怒鳴つてゐる間に、顏を眞赤にしながら、幾度となくペコ〳〵叩頭をしてゐた。

「もう四ケ月も新聞記者をしてゐて、この位の事が氣がつかないか」……「一體齋藤が怪しからん、新米の記者に任せて社を休むからこんな不始末を仕出かすのだ！」……さう云ふ言葉を、社長は投げつけるやうに暫く立て續けに叫び立てゝゐたが、やがて、

「俺はそれがためにこれから海軍省に行つて來なけれやならん。――いゝか、解つたか、夕刊にはあの記事を載せてはならんぞ」かう云つて立上つた。定吉は又もやペコンと叩頭をして、社長の後から入口まで送つて行つた。

桐の下駄箱から頭の禿げた小使の爺さんが大切さうに取出した下駄を、社長がそゝくさと突つかけて出て行つた後から定吉は再び叩頭をした。

定吉が憂鬱に心を閉されて、頭を左右に振りながら編輯室に歸つて來ると、吉田までがこんな事を云つた。

「鈴木君、日本には超努級の軍艦は未だないんですぜ。Ｏ――艦は努級艦ですよ。少し氣をつけ給へ。こんな間違ひをすると、方々の社から此の社が馬鹿にされますぜ！」

此の出來事のために、定吉の頭の中がどんなに渦を卷いたか、定吉のハアトがどんなに痛んだか……

彼は辨當を食べる氣にもなれなかつた。彼は默つて下を向いたまゝ、暫くは身動きもしなかつた。

「C――艦が坐礁した。その記事を載せた。何故載せてならない法がある?」と定吉は腹の中で呟いたが、いつだつけかの牛島の言葉を思ひ出した。「それがみんなあの肥つた社長の懐中を暖めるためなのだ!――俺に何の關係がある?」

定吉の心にはいつになく怒りが萠して來た。彼は住心地の惡い此の社會のいろ〳〵な事を思ひ出した。鐵面皮と僞と詐欺とで出來上つてゐるいろ〳〵な事を思ひ出した。彼は机を間に挾んで坐つてゐる吉田の顏に、腹のどん底からの嫌惡の視線を投げかけた。

併し彼はその心持を一生懸命に抑へて、午後の編輯に取りかゝつた。

午後は非常に多忙であつた。或る博士の娘が江戸川の縁に死體となつて流れついたのと、赤坂の某待合の女中が赤坂見附上で情夫のために短刀で突き殺され、男もその場で直ちに自殺を遂げたのと、此の二つの事件が同時に勃發したのである。――これは今の新聞社會では大喜びの事件であつた。各社はかうした事件にぶつかると、まるで旱魃に雨を得た百姓のやうな喜びを以て勇んで活動し初めるのである。博士の娘が投身する前に、男に會つたらうとか、會はなかつたらうとか、どんな著物を著てゐたとか、家庭に何か不平があつたのではないかとか、さういふ事を唯の一行でも他の社より詳しく書かうと云ふだけの理由から、まるで狂氣のやうに驅けまはるのである。

博士夫人を訪ねて歸つて來た若い外交記者が、かういふ報告をもたらした。

「ほんとに氣の毒でした。博士は先日から精神に異常を呈して入院してゐるのださうですが、若し今

度の娘の事件が知れたら尚一層病氣が重るかも知れないと云つて、博士夫人が僕の袂を掴んで、どうか新聞に載せて呉れるなと涙を流して頼むんですよ。あゝ、僕はあんなに困つた事はありません」

「そいつは面白い！」と吉田が手を拍つた。「それをそつくりそのまゝ書くといゝ材料だがな。「不幸なる博士夫人の涙」つて云つた風なものに。そして博士の入院してゐるのは何處の病院なんだね？」

「それは聞きませんでした」

「何故聞かなかつたんだ？それが非常に重要な點ぢやないか」

「でも、僕は餘り氣の毒でそんな事を訊く氣になれなかつたのです！」と若い外交記者は悲しさうに答へた。

すると吉田はその外交記者を捉まへて、いつもの說教を編輯局の隅から隅まで聞えるやうな大聲で開始した。「苟くも新聞記者ともあらうものが」とか「君は頭がない」とか「君は職務に不忠實だ」とか……

その時定吉はまた例のハアトの痛みに襲はれてゐた。「あつ！」と思ふと彼の心臓はきゆつと萎縮した。彼はその記事を全部捨てゝ掲載を見合せようかと思つた。博士夫人の歎きがそつくりそのまゝ彼の心臓に波打つて來るやうな感じがした。が、「若し此の新聞が掲載を中止しても、他の新聞が載せるだらう。そして博士夫人の歎願が何の効果も奏さないだらう」定吉はさう思ふと、自分の立場が、自分の職業が、呪はしくなつて來た。

彼は自分の前に置かれた原稿の、博士の娘の不身持を記した何行かを、赤インキでさつと消した。「それも亦自分が消しても他の新聞が書き立てるだらう」と彼は考へた。けれども彼はせめて娘の不身持と云

ふ點を消す事によつて、博士夫人に、また自分自身の良心に辯解をしようと思つたのであつた。

かうした事のある間にも、定吉は一瞬間も筆を置く暇がなかつた。彼は朱を加れた原稿を「給仕！給士！」と呼んでは、片つ端から工場の方へ廻させた。彼は大聲に命令的に「給仕」と呼んだのは此の日が初めてゞあつた。

「給仕！　給仕！」と呼ぶ自分の聲が、熱し切つた彼の耳には、調子が外れて行つて、襟元に惡感を感じさせるやうな金切聲となつて響いた。

締切時間が近づくに從つて彼の頭は益々混亂して來た。丁度その時であつた。彼が「給仕！」と呼んだのに返事がなかつた。「給仕！」と再び呼びながら給仕席の方を振向くと、その途端に、中で一番年上の十七になる生意氣盛りの給仕が、彼に向つて唇を尖らかして揶揄ふやうに眼を剝き出してゐたのが、急に彼の振向いたのを見たので、狼狽て首を縮めて、取繕つた澄した顏を裝はうとした。それを見た定吉はいきなり立上つた。今まで堪へてゐた憤怒が急に爆發したのである。「給仕までが人を馬鹿にしてゐやがる！」彼は腹の中でかう叫んだ。そしてづか〳〵その給仕の側に進み寄つて、「呼んだのが貴樣には聞えないのか！」と怒鳴つた。それは自分ながら吃驚するほど大きな聲であつた。そして震へてゐた。彼が、自分は今までにこんな大きな聲を出し事があるだらうか、と云ふ考を一瞬間チラリと頭の中に浮べたと思ふと、同時に、彼の右の手がむづ〳〵動き出したのを意識した。そして、彼はそんな事は少しも望みもしなければ豫期しもしなかつたのに、はつと氣のついた時には、彼の掌がその給仕の橫面を力委せに一つ撲つてゐた。

「あつ！給仕を撲つた！」定吉は心の中で叫んだ。と、彼の憤怒は瞬く間に羞恥と自己哀憐との感情に變つて行つた。彼は自分自身が頭から何ものにかどやしつけられたやうな情なさと意氣銷沈とを覺えた。頭を垂れずにはゐられない氣がして來た。彼はその給仕が頰を膨まして、何か云ひたいのに何も云へないと云つたやうな表情をして、恨めしさと驚愕とを同時に浮べたやうな眼で彼を見上げて、そして直ぐ下を向いたのを覺えてゐた。が、自分がどうして自分の席に歸つたか、どうして筆を取上げたかは覺えてゐなかつた。

「給仕を撲つた、給仕を！」かう云ふ言葉が單に頭の中で叫ばれてゐるばかりでなく、定吉の手でも足でも身體全體が、そして又彼の身體以外の周圍が、それを叫んでゐるやうな氣がした。「給仕を撲つた、給仕を！　あゝ、俺は何といふ人間だらう。恥しい、恥しい！」

　定吉は机に向ひながらも、心はゐても立つてもゐられない氣がしてゐた。――自分は今までに人を撲つた事があつたらうか。彼は物心地のついて以來喧嘩といふものをした覺えはなかつた。心が命じもしないのに自分の手がどうして給仕の横顔に飛んで行つたか、そして飛んで行く事を知つてゐたか？――定吉は思案した。が、解らなかつた。それは殆んど人間に生れながらに備はつてゐる本能なのかも知れない、動物が怒つて嚙みつくやうに、人間が怒ると對手を撲る事は、撲るために手が動く事は、敎はつてから知るのではない一種の本能なのかも知れない――定吉は今まで自分の身内にこんな狂暴力がひそんでゐようとは夢にも思はなかつた。彼は人がさうした事をしても怯える男であつた。さうだ、彼は遠山にステッキを振り上げられてあの通り逃げ出したのだ。それだのに……自分が人を撲らうとは。而も給

仕を撲らうとは。

「何故給仕を撲つた？」と云ふ言葉がおちついた反省となつて彼の心に囁かれたのは、暫く後であつた。「何故給仕を撲つた？　給仕がたとひ自分にからかふやうな態度を取つたとしても、その心の底は無邪氣なのだ。あの年頃にはよくあんな事をしたがるものなのだ。併し、あの社長、あの吉田……どうせ撲るなら何故あゝした人間に向はなかつたか？」

定吉は探るやうに机の向うの吉田を見た。吉田は笑つてゐた。その眼は何か面白いものでも見たと云つたやうに、「君もなか／＼元氣があるね。たまにはやり給へ。あの給仕は近頃ほんとに生意氣なのだから」こんな事を云つてゐた。

「何故給仕を撲つた？」と今一度考へた時、定吉にはもう自分の氣持の胡魔化しがつかなくなつて來た。丁度時計が二時を報つたので、彼は「締切」のベルを自分で鳴らして、（もう「給仕」と呼ぶ元氣がなかつたのである）部屋の隅に小さくなつて俯向いてゐるその給仕の側に再び行つて、「一寸此方にお出で」と誰もゐない應接室に連れて行つた。彼はその給仕を慰めようと思つたのであつた。

「お前は一番働ける好い給仕なのだ！」何と云つたらいゝかと暫く思案した末に、定吉はかう口を切つた。「それだのにそのお前からそんなに怠けては困るぢやないか」

すると、その給仕の顔の眉と眼との間が一瞬間ずつと延び初めた。と、思ふとまた縮んで、そしてしく／＼と泣き初めた。定吉は益々どうしたらいゝか解らなくなつた。「僕は少しも怒つてはしない」かう云つたが、そんな事では駄目であつた。「撲つたのは僕が惡かつた。ね、堪忍して吳れ」と重ねて云つ

たが、それでも駄目であつた。
そこで定吉はかう考へた、さうだ、此の給仕に小遣をやらう、と。彼は蟇口を取り出してその中から二十錢銀貨を摑み出した。
「もう機嫌を直して吳れ。これでもつて歸りに珈琲でも飮んで行つてお吳れ。さあ、もう仲直りをしよう」
だが、その時まで默つてしくり〳〵泣いてゐた給仕は、『要りません！』と云つて定吉の手を拂ひ退けた。定吉は金を無理に給仕の袂に入れようとすると給仕は再び『要りません！』と叫んで、急に應接室から逃げ出した。定吉が二三步追ひかけた時には、もうその姿がドアアの彼方に消えてゐた。定吉は自分の手に殘つた金を見た。と、急に非常な屈辱を受けたやうなもう取返しのつかない事をしてしまつたと云つたやうな感情が頭に込み上げて來た。彼は前よりも一層胡魔化しのつかない、頭からどやしつけられたやうな羞恥と胸苦しさとを覺えた。
彼は編輯局を通るのが恥しかつたので別のドアアからこそ〳〵と、忍ぶやうに、大組をしに工場に上つて行つた。

八

定吉が大組を濟まして、二階から降りて來た時、遠山が應接室で彼を待つてゐた。遠山は定吉の豫想通りに訪ねて來た。而も何事もなかつたと云ふやうにニコ〳〵して。
「先夜は失敬したね」と遠山は氣輕に快活に云つた。彼は酒氣を帶びてはゐなかつた。「僕はどうも酒

を飲むと結果が惡くつていけないよ。何だか君に向つて亂暴な事を云つたらしかつたな。併しまあ堪忍して呉れ給へ」

「いや、僕は何とも思つてゐやしないよ」と定吉は答へた。

「時に、僕は今日は君にお願ひがあつて來たんだがね。君のところに十圓ばかり餘分な金がないかね？」

「さあ」

「實はねえ君、又非常に切迫して來たもんだからね、ワイフを實家に相談にやらうと思つてゐるんだ。その旅費が欲しいんだよ。もう十一月も大分押しつまつたし、來月はもう十二月だからな」

「さあ」と定吉は同じ答を繰返した。彼は十圓の金を持つてはゐなかつた。けれども、かう云ふ場合に、その事をきつぱりと云つて拒絶する事が出來ないで、いつまでも躊躇してゐるのが彼には例であつた。遠山は定吉が默つて考へ込んでゐる間に、まるで他人事でも話すやうに、をどけた調子で、こんな事を話してゐた。

「何しろ毎日食ふ米がない始末なんだからね。實は弟のところから二ヶ月前に二俵汽車便で送つて貰つたんだが、先日古道具屋に賣つてしまつたんだよ……さうさ、何か知ら賣る道具があるつもりで古道具屋を呼んで來たところが、家中探しても何もないんだらう。折角呼んでたゞ歸すのも氣の毒だと思つたから、米を買はないかつて云つたら、喜んで買つて行つたよ。ワイフに聞くと今の一般の相場と大した違ひがない値段ださうだ。面白い爺だつたよ」

又こんな事も話した。

「家主が今月中に金を拂はないと立退いて貰はなければならんと云ふんだよ。立退かなかつたら疊を上げて持つてつてしまふさうだ。……併し先日は滑稽だつた。電車の歸りに雨に濡れて困つてゐると、汚い洋服を著た男が傘に一緒に這入つて行けと云ふんだよ。その男がいきなり「あなたの處では家賃が幾ら溜つてゐますか？」つて訊くから、「六ヶ月溜つてゐる」つて答へたら、「私の處ぢや五ヶ月溜つてゐるんですよ」つて云ふのさ。世の中には同じやうな人間が澤山ゐると思つて感心してゐると、それが僕の家の隣家の男だつたのさ。……俺も迂闊だね。格子戸が竝んでゐる同じ長屋の人間の顔をその時まで知らなかつたんだからな。――その男は何でも保險會社の外交員の口を探してゐるんだが、なかなかないんださうだ」

が、世の中にはかうした事を平然として大つぴらに喋つてゐながら、決して人に下等な感じや反感や憎惡を覺えさせない人間がある。遠山も亦さういふ種類の男であつた。

「僕はないが、併し」定吉はかう云はずにゐられなかつた。「誰かゞ持つてゐないだらうか。相川はどうだらう？」

「うむ、だがあの男は貸すまい。あの男は俺に對して始終警戒してゐるからな」

かう云ふ場合に定吉は、「それなら僕から賴んで見よう」と云はずにゐられない性向を持つてゐた。彼はそれが決して好い性質でない事を知つてゐた。そこで、ついさう答へさせようとするやうに彼を強ひる心の誘惑と暫くの間戰つた。が、結局それに打克てなかつた。

「それぢや、僕から頼んで見よう」から云つてしまつた時、定吉は自分の力にない事を云ひ出した自分を直ぐに責めた。若し相川が拒絶すれば、定吉は乾度それがために自分で苦まなければならない、どんな事でもして無理にも自分でそれを都合しようとするに違ひない、彼はさうなる事を心の底でよく知つてゐたのであつた。

定吉は社の歸りに相川を訪ねた。相川は机に向つてペンを握つてゐた。彼の短篇小說は未だ完成されてゐなかつた。けれども、例のやうにはき〳〵した、自信に充ちた言葉で、相川は自分の計劃を繰返し〳〵語つた。

定吉はそれを聞いてゐる間も、始終如何に切り出したものかと考へてゐた。そして相川の言葉が途切れた時、

「君、失敬だが、僕に十圓ばかり貸して吳れないか？」と躊躇しい〳〵云つた。

「あゝ、その位の金はあるだらう」相川は机の抽斗を開きかけたが、定吉の顏付を見ると不審さうな眼をして、「君が要るのかい？」と訊いた。

けれども此の位の小さな事でも、定吉には終に嘘が吐けなかつた。彼はたじ〳〵としながら「あゝ僕が要るんだと答へたが、直ぐその後から、顏を眞赤にして、「實は遠山が……」とその顚末をすつかり白狀してしまはなければならなかつた。――そして續いて彼は反射的の反省作用に苦められ初めた。自分が要るのだと何故云ひ切れないのだらう。ほんとの事を云つたら相川が拒絶する事が解り切つてゐるのに。……「お前は正直なのだ！」と心の何處かで彼を慰めようとするものがあつた。が、その慰める

ものに對して、彼は恥しさを以て反抗した。斷じて〳〵、さういふ感情を避けなければならない、こんな風に彼は自分に向つて云つた。が、又『何が斷じてだ？』とそれに對して更に反抗し返すものがあつた。そしてそれは『再び何故自分が要ると云はなかつたら』といふ第一の反省に歸つて行つた……彼の頭は渦を卷いて、胸が苦しくて痛かつた。

『遠山に貸すなら僕は御免だよ』と相川はきつぱり云ひ切つた。『僅かな金だけれども僕はあの男に貸す事は御免だ。彼奴はまるで責任といふ事を知らない。それが僕には第一に厭な點だ。彼奴はいつ如何なる方法によつて返さうかなどゝ云ふ事を考へた事はないのだ。さうさ、あの男にはたくらみはない。あの男は割合に正直者である。決して惡いたくらみに導かれて人に金を借りようなどゝはしない。それは僕も知つてゐるよ。だが、性來の怠惰のために、あの男はいつだつて次の瞬間の事を考へた事がないのだ。困るからワイフを實家に相談にやらうと思ふ。相談にやるには汽車賃が要るからそれを友達に借りようとする。併し結局それだけなのだ。それに就いて自分はどうしようかと云ふ點になると、もう彼の怠惰は彼の考へる力をごちやまかしてしまふのだ……』

『だが、僕はあの男は善人だと思ふよ。そして厭味がなくて、酒を飲むと亂暴ゝするが（から云つた時、定吉は先夜の事を思ひ出して、恥しさに顏が火照つて來た）、併し一體は淡白で無邪氣だと思ふよ』

『それや淡白で無邪氣さ』と相川は冷かに答へた。『併し淡白で無邪氣だからと云つて、物の秩序を亂す不聰明を許す事は事は出來ないよ。そこが現在の我々が考へなければならない一番重要な點なのだよ。無邪氣だけで終れば人間の生活は餘りに惰なさ過ぎる。第二に、彼奴に旅費を與へると、それがや

がて彼奴の弟の苦痛を増させる種になるのだ。あの忠實な弟は兄貴のワイフが實家に金の相談に行つたと聞いたら、どんなに苦むか知れないからね。だから、僕はそんな金を彼に貸す事は絶對に御免蒙る」

「併し、……」

「いや、絶對に御免蒙る。第一遠山が君にさういふ相談を持ちかけるといふのが、根本の誤りなのだ。さういふ相談を受けた君はその通り一生懸命に苦んでゐる。ところが、相談を持ちかけた遠山の方は平氣の平差で、苦痛も何も感じやしないんだ！」

「併し」と定吉は再び口では云つたが、心の中では相川の言葉を「なるほど、さうかも知れない」と思つた。もう彼はそれ以上相川に頼む事は出來なくなつてしまつた。と、又例の反省が、「何だつて自分はこんな安請合をしたのだらう」と彼の心を突つつき初めた。

定吉は相川の家から遠山の家に行く道々いろ／＼な事を考へた。彼の頭には今日の社の出來事が思ひ返されて來て、重苦しい憂欝が充滿した。――すると、突然彼の心は遠山に對して變化し初めた。と云ふのは、相川の言葉が思ひ出されて來たからである。

「實際その通りだ！」定吉は腹の中で呟いた。「遠山が平氣の平差なのに、俺はこんなに苦んでゐるのだ。いや、俺ばかりではない、遠山が平氣の平差なのに、彼の細君や子供や、故郷の親爺や弟達がみんな苦んでゐるのだ。さうだ、あの男ひとりのためにみんなが苦んでゐるのだ。……例へば、汽車賃を俺か相川が貸してやつたとする。若し彼がそれを返したとしても、實際はそれは彼が拂ふのではないのだ」定吉はかう推理して行つた。「それは彼の弟か、細君の實家で拂ふ事になるのだ。結局彼の打撃には

ならないのだ、さうだ、結局一文だつて彼は損をしないで、いつでも暢氣な顏をしてゐるのだ。彼奴を取圍む周圍のものがみんな彼奴のために損害を蒙つてゐるのだ……」

　定吉の胸には遠山に對する憤りがむく〳〵と湧き起つて來た。

「さうだ、あの男は無邪氣で正直ではある」彼は相川の言葉をそつくりそのまゝに自分の考として考へつゞけて行つた。「だが、無邪氣で、何のたくらみがないと云ふだけの事で、人間を是認する事は出來ない」

　そして遠山の家の格子先に立つた時、「俺はその事をきつぱり云つてやらう。それがほんたうなのだ。遠山に金を貸す事は彼奴の怠惰を增長させる事だ。それは一個の不德だ。俺は不德に加擔する事は出來ない！」から昂奮しながら實際に決心したのであつた。

　だが、その決心がどうなつたらう？……定吉は格子戶に手をかけた瞬間から、そして遠山の細君が手をついて彼を迎へた瞬間から、もうその決心が鈍りかけて來た。

「やあ、有難う。それでどうだつたね？」と遠山が云つた時、定吉の眼は遠山の眼に會つた。そしてそれと同時に細君の眼に會つた。遠山の眼は例によつてそれ程心配さうな表情もしてゐなかつたけれども、細君の眼は不安と期待とに光つてゐた。——この細君はいつでもキチンとした身だしなみをしてゐた。著物は粗末なものであつても、如何にも女らしい柔順な品が、その身體の全體、態度、動作に表はれてゐた。夫に對しても禮儀と尊敬とを示す事を忘れなかつた。

　その家は小さな家であつた。玄關の障子を開けた處が直ぐ六疊で、それが遠山の書齋であり、客間で

あり、茶の間であり、そして又寢室でもあつた。疊は縁が切れて焦茶色に變つてゐた。その六疊と勝手との間にもう一室二疊の部屋があつた。そしてその家全體に五燭の電燈が一つ――六疊の方についてゐる――しかないので、二疊の部屋は薄暗かつた。定吉はその薄暗い二疊に遠山の三人の子供が、丁度眼白のやうに肩と肩とを密著け合つて並んでゐるのを見た。一番上は男の子でもう小學校に通つてゐた。下の二人は女の子であつた。それがみんなキチンと膝を崩さずに、呼き合ひもしないで、溫和しく坐つて、此方を見てゐるのであつた。

その光景の全部を定吉は一瞬の間に、遠山に「どうだつたね？」と訊かれて、それに答へるまでの間に見て取つたのであつた。すると彼は一種の威嚇に似た感じ――それは彼の感情がその光景を見て急に變動し初めたゝめに生じた一種の壓迫感であつた――を受けた。彼は優しい柔順な細君と溫和しい子供達とに、夫とし父として尊敬されてゐる遠山の或る人間的な好いものを目の邊りに見た。彼は自分の妻や自分の家庭を思ひ出した。彼は遠山に對する憤りが瞬く間に消えてしまつたのを意識した。

「君、駄目だつたよ」と定吉はがつかりして云ひ難さうに云つた。が直ぐから附加へずにゐられなかつた。「併し、未だ失望し給ふな。何とか僕が考へて見るから」

けれども勿論何の當もあるわけではなかつた。――定吉はその晩方々を歩きまはつた末、たうとう或る質屋に這入つて行つた。

九

その翌朝は急に冬の來た事を思はせる寒い朝であつた。路次の中の銀杏の葉はすつかり落ちつくして

澄み切つた冷たい靑空に、その小枝が網の目を描いてゐた。そして霜に固まつた地面の上を、その黄ろい落葉がカサコソと淋しい音を立てながら、走りまはつては、そこゝに掃き寄せられたやうなかたまりを作つてゐた。

「あつ！　俺は何といふ事をしたらう！」定吉は自分の家から飛び出して來て、まるで逃げるやうに小走りに此の銀杏の木の下まで來た時、かう思つた。彼の手は未だわなわな顫へてゐた。彼の頭の中には憤りと憎惡と淺猿しさと自己哀憐とがごつちやになつて出來上つた重苦しい瓦斯のやうなものが、ふくふくと泡立つてゐた。――彼はその朝初めて妻のよし子を撲つたのであつた。

それはまた例によつて、何等大した原因があつたのでもなかつた。定吉は昨夜遠山のために時計を融通してやつた事を、びく／＼しながら妻に隱してゐた。それを今朝彼女に知られたゞけの事なのであつた。――が、一度定吉の神經に與へられた波動は、何處までも何處までも進んで行くより外、彼の力でどうする事も出來なかつた。彼の心はいつぞやの晩遠山によつて與へられた刺戟の上に、昨日の社の出來事――社長や吉田に對して抱いた憎しみ、そして更に給仕に對して自分がやつた暴行――によつて更に鋭く、更に感じ易く、まるで露出した齲齒の神經のやうに敏感になつてゐたのであつた。

「あなた、時計をどうなすつて？」定吉が社に出かけようとして著物を著更へてゐた時、よし子がかう訊いた。――それは確かに普通の訊き方であつた、何の變つたところもなかつた、定吉はそれをよく知つてゐた。

「うゝ」と定吉は返事をしようとして、急に言葉が唇に引つかゝつた。と、それが彼の頭をイラ／

させた。それは變挺な氣持であつた。「あつ！　たうとう目つかつた！此の女がまた何とか文句を云ひ出すのだらう！」と彼はチラリと心に思つた。すると、彼女の云つた言葉そのものに對してよりも、彼女が云ひ出すに違ひないと豫想された文句に對しての答を、定吉は口にしなければならない氣がし初めたのである。

そこで、かう云つた。

「併し、あの男は氣の毒なんだからね」

「あの男つて誰です？」

「遠山だ。遠山に貸してやつたんだ」

「まあ、あの方は相變らずなのね。で、いつ返して呉れるんです？」

「そんな事は知らないさ。僕たちの間では友達同志互ひに助け合ふ事になつてゐるんだからね。それが友人として當然なんだ！」と定吉は何だか挑戰でもするやうな調子で語尾に力を入れて云つた。

するとその時よし子は初めて彼の調子の變なのに氣がついて來たので、彼の顏をぢつと睨んだ。

「まあ、あなたはどうかしてゐらつしやるわね。まるで妾に喧嘩でも吹つかけるやうね」そこまで云ふとよし子の心にも或る變挺なものが崩して來た。「あたしがいつ當然でないと云つて？」

——成程、この女は當然でないなど〻云ひはしない。これや俺の方がヒステリイだぞ——定吉はかう思つた。が、もう遲かつた。變挺になつて行く氣持の進みをどうしても制する事は出來なかつた。

「お前は何と云ふと直ぐ俺にいろ〱な干渉をするがそれは好くない」

「干渉なんかしやしないぢやありませんか。何です、あなたはむやみに人に突つかゝつて來て」

「今日の事を云つてゐるんぢやないんだ。いつもの事を云つてるんだ！」と定吉は叫んだ。すると彼の頭に妻のヒステリイや、肉慾や、强情や、その他すべての不快の點が一時に潮のやうに押し寄せて來た。――彼はがむしやらに癪にさわつて來た。彼は遠山の細君を思ひ出した。そしてよし子に對する憎しみが込み上げて來た。

「あなたこそ」とよし子はよし子で云つた。「あなたこそ意氣地なしの癖にして。何です、人に向つて、人が何も云ひもしないのに、いきなり怒鳴りつけて……」

「馬鹿！」と定吉が怒鳴つた。

「馬鹿！」とよし子が云ひ返した。

二人は互ひに憎々しいと云ふ眼をして、茶の間の眞中に突つ立つて、睨み合つて、そして無茶苦茶な罵詈雜言を浴びせかけ合つた。――定吉は自分がどんな事を云つたか、彼女がどんな事を云つたかはよく覺えてゐなかつた。が、その一語々々に燃ゆるやうな憎惡が籠つてゐたゞけは覺えてゐた。――

「あゝ、坊やさへなきや、あなた見たやうな意氣地なしなんかにや、別れてしまふんだ！」と彼女が叫んだ時、定吉は急に右の腕がむづ／＼して來た。が、此の時は給仕を撲つた時のやうに無意識ではなく、「俺は今此の女を撲らうとしてゐるな」と云ふ事をはつきり意識してゐた。で、彼は撲りさうに腕が震へるのを一生懸命に抑へながら、

「よし、貴様は出て行け、俺は貴様なんかを愛した事は一度だつてないんだ！」と叫んだ。

「出て行くとも!」と妻は叫ぶなり、いきなり隣りの部屋に這入つて行つた。そこには子供が眠つてゐた。彼女は子供を抱き上げた。子供は泣き出した。子供が泣き出すと、定吉もその部屋に飛び込んで行つた。總てがぐる〳〵旋回した。定吉は彼女の手から子供を奪つた。彼女がそれを奪ひ返した。

「やい、子供は貴樣にやりやしないぞ!」と定吉は叫んだ自分の聲の大きさに、ぎよつとした。が、その時、彼は「よし、撲りつけてやる」かうはつきり思つて、そして彼女の顏を拳骨で、力一ぱいに撲りつけたのである。それはぐわつと云ふやうな音を立てた。彼女は抵抗しさうにした。が、力なくたじ〳〵とした。彼は或る痛快を感じた。「よし、もう一つ撲つてやらう」さう思つて更にまた力を入れて撲りつけた。彼女は泣きわめく子供を抱きながら、部屋の一隅にぺたりと坐つてしまつた。定吉は部屋の中を歩きまはつた。彼は膝がガク〳〵顫へるのを覺えた。そして幾度となく彼女の側に進み寄つては、その度に、子供をかざして顏を隱してゐる彼女の頭を、子供に當らないやうに注意しながら撲りつけた。

「もつと撲つてやるぞ、もつと撲つてやるぞ!」と彼は絶えず心の中で叫びつゞけてゐた。

隣室の細君が臺所から駈け上つて來た。急いでよし子の腕から子供を抱き上げて、「よし〳〵、好い兒だから泣くんぢやないのよ」さう云ひながら、彼と彼女との間に割つて這入つた。「どうなすつたので、一體……」と云ふやうな事を云つた。よし子がいきなり立上つて、「ヒイ」と狂氣のやうな泣聲を發して、隣りの細君の後から、彼に噛みつかうとした。「手向ふと命がないぞ」と彼は叫んで、又よし子の顏を撲りつけた。「まあ、あなたは、まあ、あなたは……」と眞中で隣りの細君はおろ〳〵した。「坊ちやんがまあ、坊ちやんがお可哀さうですから……」

その時定吉はチラリと我子の顏を見たのである。子供はわあ〳〵泣きながら、彼の顏を見てゐた。「あゝ、此の子にはもう解るかも知れない」と彼は思つた。すると、何か熱湯のやうな熱いものが胸の中に込み上げて來た。定吉は「情ない！」と腹の中で叫んだ。「何といふ樣だ！　何といふ樣だ！」そして彼は妻の方を見た。妻の右の頰が膨れ上つて、右の眼は赤味を帶びた紫色をしてゐた。――「あつ！」彼はギクリと心臟が止つたやうな痛みを覺えた……そしは彼はいきなり玄關に出て來て、帽子とステツキとを手にすると、どん〳〵外に驅け出したのであつた……

「あつ！　俺は何といふ事をしたらう？」定吉は頭を垂れながら歩き出した。銀杏の葉が彼の下駄にカサ〳〵鳴つた。「そして一體何のためにあゝ云ふ事をしたのだらう？」

定吉には幾ら考へてもその原因が解らなかつた。――遠山のために時計を融通した。それがために自分が妻を撲つた。――そんな馬鹿な事があるだらうか？

定吉は妻の頰の膨れてゐるのと、眼が紫色に變つてゐるのと思ひ出した時には、これから直ぐ引つ返して妻に謝罪しようかと思つた。そして彼は實際立止りさへもした。が、彼は今引つ返したら、隣室の細君と顏を合せなければならないのが恥しかつた。――それは某歩兵聯隊附の陸軍中尉の細君で、夫の留守の間は始終鏡に向つて、化粧ばかりして時間を送つてゐる女であつた。

定吉は電車通りの方へは出ずに、それとは反對の澁谷の方へ向つて歩き出した。何處も彼處も景色がすつかり霜枯を思はせた。西の空には雜木林の上に、富士や秩父の山々がくつきりとその輪廓を際立たせてゐた。

「もうすつかり冬になつた！」と彼は思つた。何とも云はれない淋しい頼りなさが彼の心を捉へた。そして昴奮の後の空漠とした静けさが彼の頭を充した。

古川端から氷川神社の前を通つて、神社の横手の原に來た時、彼はいつか河野と女を待合せた時隠れたあの林の中に行つて、墓の上に腰を下して休まうと思つた。そして彼は草の上を踏んで行つた。

と、彼の驚いた事には、その林の中に河野が學校の制服姿で、腰を下して、何かぢつと思案に耽つてゐるのを見出した。定吉の足音にも河野は顔を上げなかつた。

「河野君」定吉はその側に近づきながら静かに云つた。

河野はびつくりしたやうに顔を上げた。その顔は青ざめて、眼が悲しさうに光つてゐた。「あゝ、君か」さう低い聲で云つたかと思ふと、何か急に衝動を感じでもしたやうに、ぶるつと身體を震はして立上つた。

「ねえ、君」と彼は泣きさうな聲を出した。「僕はたうとう今朝あの女に打明けたんだよ。だけれどね、あゝ、何ていふ馬鹿げた事たらう、ねえ、君、聞いて呉れ給へ……僕はねえ、君、僕はあの女を罵倒しちやつたんだ。だつて君、あんまり解らない事を云ふんだもの。彼女は愚劣な女だ。取るに足らない女だ……」

「どうしたんだい、一體？」と定吉は驚いて訊いた。

「僕は思ひ切つて打明けたんだよ。七年前から僕が思つてゐたつて。ところが、君、あゝ實に忌々しい女だ……自分は藝術のために獨身を立て通す決心をしたから、さういふお申込は拒絶いたしますつて

拔しやがつた。何が藝術のためだ、スケッチ箱一つ肩にかけたゞけの癖をして？ 僕は藝術が解らない男ぢやないつもりだ、だから僕と結婚する事はあなたの藝術を高めるものでこそあれ、決してあなたの藝術の害にはならないと云つたんだよ。僕は一人の男に取つて、運命が定めた女は一人しかない、それがあなたなのだ、と云つたんだよ。……ところが、君、彼女は笑ひやがつたよ。そしてかういふんだ。さういふ事はお若い中はよく仰有る事だつて……何だ、彼女は自分の年は幾つだと思つてゐるんだ……」

河野は昂奮して、靴の先を自暴氣味に墓石に打つつけながら語つた。定吉はそれを聞いてゐると、云ひやうのない悲しさが込み上げて來た。

「それだけならまだしもいゝんだ」と河野は語りつゞけた。「あの女はかういふぢやないか、今までもいろ／＼な方からさういふお申込を受けましたが、藝術に一身を捧げたもんですからお斷りして來ましたつて。……それを聞くと僕はむら／＼と腹が立つて來たよ。だから僕は云つてやつた、他の男は他の男で僕は僕だ、他の男の事を僕に向つて今の場合吹聴するのは、あなたが虛榮家なんだつて。そしたら、あの女は、あたしを侮辱なさるつもりですかと拔しやがつた。何が侮辱だ。ねえ、君」河野は墓石の間を歩き初めた。「僕はそれから罵倒を初めたんだ。そんな虛榮家な女に藝術なんか解るものか。藝術の神に一生を捧げるために獨身を立て通すなんて云ふのは、時代遲れの夢で、藝術と結婚とは一致して初めて完成されるんだ。……僕はさう云つて罵倒してゐる中に胸が淸々して來たんだ。痛快になつて來たんだ。……だが、あの女が、あたし失禮しますと云つて去つてしまつたら、また急に淋しくなつて來たよ。あゝ、もう七年の戀もこれで終りかと思つたら僕は淋しく／＼つて堪らなくなつて來たんだ」

「河野君」と定吉は急に云はずにゐられない様な氣持を感じて來た。「僕は今朝ワイフを撲つたんだよ」

「えつ！」と河野は眼を瞠つた。

「僕はね、今朝ワイフを撲つたんだ。君、僕のワイフの頰つ邊は膨れてしまつて、眼が紫色になつたよ……そして子供が泣いたんだよ、わあわあつて……あゝ、みんな僕が惡いんだよ。僕の頭はどうかしてゐたんだ。が、併し……君、何が何だか僕には物事が一切譯が解らない……」

突然定吉は河野が自分の手をぎゆつと握り締めたのを感じた。

「僕等は不幸なんだね」と河野が云つた。「どうしてこんなに僕等は悲しいんだらう！……」

定吉の腹の中で突然ぎゆつと鳴つたものがあつた。それは子供の玩具の護謨人形――腹のボタンを捺すとぎゆつと鳴る――の出す音に似てゐた。それは直ぐに、殆んど電流のやうに河野の腹に傳はつて行つて、そこでも亦ぎゆつと鳴つたらしかつた。定吉は河野の手を强く握りながら、急にわつと泣き出した。と、河野もつゞいて泣き出した。

十

十二月が來た。世間の内閣攻擊は益々火の手を上げて行つた。その日は日比谷公園に國民大會が開催されるといふ日であつた。S――社の編輯局は恐慌と狼狽とを極めてゐた。編輯局の窓際に水道栓が二つ据ゑつけられた。それは國民大會の餘波が此の社を襲つて來た時の防禦のためである。

社長が記者全體を一室に招いた。

「さて」から彼は改まつて語り出した。「諸君も御承知の通り、今日は國民大會が開催されるのである

が、此の社は今や國民の無法な反感の的になつてゐるから、或は如何なる暴民達が此の社を襲つて來ないとも限らない。それについて、此處に社長は諸君に一つのお願ひがあるのです。諸君の中誰でも志あるものは今晩社に殘つてそして此の社を守つて貰ひたい。家に年老いた兩親のある人とか、重大な責任を身に脊負つてゐられる人とか、さう云ふ人には勿論お賴みはしない。なるたけ獨身の方は全部殘つて頂きたいと思ひます」

みんなは嚴肅な緊張した顏をして、中には腕を拱いてゐるものなどもあつて、社長の言葉を一句々々聞いてゐた。するといきなり立上つてから叫んだ者があつた。

「今や我社の危急の時に當つて、誰かそれを見捨てゝ顧みないものがありませうぞ！」

それは芝居がゝつた悲憤の色を帶びた光景であつた。定吉はさう叫んだ男が、「社長の奴十萬圓も貰やがつたんだらう！」といつぞや云つたあの牛島だつたので、吃驚して眼を瞠つた。

「同感々々」と吉田が叫んだ。これも亦一生懸命のやうな嚴肅な顏をしてゐた。それにつゞいて、「同感々々」の聲が方々で叫ばれた。そしてみんながまるで決死隊にでも行くやうな昂奮した色を浮べてゐた。

定吉はぢつと眼を眠つて考へた。「これは一體何事だらう？　何だつてみんなは此の社を守るのだらう？　而も平生あんなに此の社の惡口を云つてゐる記者達が……」が彼にはよく解らなかつた。「一體此の連中は政府に味方してゐるのだらうか、國民に味方してゐるのだらうか？」けれども定吉の眼には、さういふ事を明確に考へてゐるらしい記者はひとりも映らなかつた。彼等は唯夢中に、唯わけもなく昂奮してゐるに過ぎないとしか思はれなかつた。

「例へばあの水道栓だ！」と定吉はこれ等の記者の中誰かゞ、襲つて來た民衆に向つて水口を向ける光景を想像した。「誰かゞあれで以て群衆に水をぶつかける。その癖その男は群衆に對して恨も何もないのだ。それだのに不思議な敵愾心などを起して、自分が何か正義に味方し、正義のために戰つてゐる勇士のやうな昂奮に驅られるに違ひない」

定吉は相川の言葉を思ひ出した。「さうだ、秩序がないのだ。人間がみんな明確な意見を持つてゐないのだ」かう腹の中で呟いて、彼は憂鬱な溜息をした。

みんなが編輯局に歸つて來た時、社會部長の齋藤が定吉に聲をかけた。

「鈴本君、君は今晩は社に殘らないで、『日比谷の方に行つて群集の狀況を觀察して呉れ給へ。――その方がいゝよ」そして小聲になつて、「社に殘らうと云ふ有象無象は他に澤山ゐるから遠慮し給ふな」

午後五時頃、定吉は社を出ようとすると、梯子段の側の暗い隅に、外交記者達が四五人塊つてゐた。

「鈴本さん、お歸りですか？」その中の一人がかう聲をかけた。

「僕は群集の方の觀察を命じられたんです」

「それや結構ですな。あなたは若い奥さんもお子さんもお有りなんだから、命が大切でさあね」そしてみんながどつと笑つた。

「鈴本さん」と云つてその中から一人走り寄つて來た男があつた。それはいつぞや博士夫人の話を聞きに行つたあの若い外交記者であつた。定吉は此の外交記者が若くて正直なので、比較的親しくしてゐたのであつた。

「僕はもう今日きりであなたにお眼にかゝれませんから」外交記者は昂奮の色を眼に帶びながら云つた。「もう我慢がなりませんから、今夜の此のどさくさ紛れにあの吉田の奴を思ひ切り一つ撲りつけてやらうと思つてゐるんです。人を人とも思はないで始終失敬な事ばかり云ひやがるから。そして斯んな社は早速辭職です」

定吉の心臟はそれを聞くときゆつと萎縮した。そして烈しく痛いんだ。彼は若い外交記者の暴擧を押し止めたいと思つた。けれども口が利けなかつた。

「それでは御大切に。さやうなら」外交記者はかう云つて梯子を馳け上つて行つてしまつた。

「さやうならと」定吉は口の中で呟いた。

定吉の憂欝は日比谷公園に行くと、更に一層加はつて來た。そこでも彼はS——社に於けると同じ譯の解らない昂奮を見た。同じ譯の解らない悲憤慷慨を見た。同じ正義呼ばはりを見た。彼の眼前には人間共の頭が數限りなく並んでゐて、それがみんな口々に「ヒヤ〳〵」とか「イエス〳〵」とか喚き立てゝは、遠くの方の一段高い臺の上に立つてゐる長髯の羽織袴の男が手を振る度に拍手喝采した。それは何やら演説してゐるのであつたが、定吉の耳には聞えなかつた。

「何のために〳〵?」と定吉は腹の中で考へた。「みんながみんな意見を持つてゐないのだ。巡査も、あの馬で以て群衆の中を動きまはつてゐる騎馬巡査も、それからあの演臺に立つてゐる男も、(それは貴族院議員の位置を擲つて、首相を攻撃してゐる男であつた)何がほんとに正しくて、何が

正しくないかを實際は少しも知りはしないのだ」

定吉は自分の隣りにゐた書生體の男が、側を通つた巡査に罵倒を浴びせかけたので、巡査が又怒つてその男を捕まへようとすると、附近に見てゐた群集が書生に加擔し、又その附近にゐた巡査達がその巡査の應援に馳せつけて、そこに一場の格鬪が持上つた時、此の群集の渦巻の中から逃れたくなつて來た。彼は濠端に出た。濠の水は眞黑で、澄み切つた空の星を映してゐた。

すると定吉の頭に急に鋭い自己反省がキリ／＼と痛い程襲つて來た。『だが俺は、此の俺は……』と彼は考へた。『俺は一體何の意見を持つてゐるのだ？　俺は一體どんな生活をしてゐるのだ？』それは彼がいつも感じてゐる事ではあるけれども、此の時位鋭く感じた事はなかつた。彼は兩手で頭を押へた。頭が割れるやうに痛くて、眼がくら／＼した。――その反省は彼のハアトには餘りに强過ぎた。彼は何か支木が欲しかつた。彼は相川を思ひ出した。そして相川を訪ねて行つた。

「僕は君に打明けたいと思つて來たんだ」と定吉は弱々しい聲で云つた。『僕は大變不幸なんだよ、君」

「さうだ、君の狀態はかなり悲慘だ」相川は机の上にペンを置いて振向いた。『僕は隨分前からさう思つてゐたんだ」

「それでねえ、君」定吉は何も彼も云つてしまひたいと心があせりながらも、何から云ひ出してい丶か解らなかつた。『僕は今の生活を根柢から改革したいと思ふ。僕はもう窒息しさうなんだ。僕は田舍に引つ込みたいと思ふ。僕は靜かにして頭を恢復させたい。……ねえ、君、僕はワイフと別れたいんだ！」

「それや別れてもい丶だらう」と相川は暫く定吉の顏を見つめてゐた後で云つた。

「だが」と定吉はおど／＼した眼付をした。『僕はどうかして生活費だけを支給してやりたい。何とかして僕はその金を拵へたいと思つてゐる。これがやつぱりほんとの道だと思つてゐるんだが、今の僕には力が足りない」

「いや、そんな事を考へてゐて愚圖々々してゐる必要はないよ」と相川は云つた。『君は今のまゝでは

亡びるんだ。だから君は亡びる事を拒絶しなければならない。これがもう何よりも最大の理由だよ。君の細君も世間にざらにある人さ、惡い人間ぢやないさ。併し君と細君と一緒になつて目的のない生活をしてゐたら、いつまで經つても互ひに救はれる事はない。それだけでもう別れる理由は立派にある」

「けれども、さうしたら妻はどうなるだらう！」

「どうなるかは解らんさ……併し君と一緒にゐたところでどうなるだらう？こいつだつて第一解るまい。……今君は生活費云々と云つたが、そんな事はもつと強い人間のする事だよ。强い人間がすればそれは正當な行爲ともなるが、君のやうな人間には不正當だ。自分の沈みさうな人間が他人を脊負つて浮ばれる筈があるものか。……そんなセンチメンタリズムは君を滅ぼすばかりだよ」

「さうだ、今の處は一時心を固くして、何としても此の場だけは切り抜けてしまはなければならない」と定吉は相川の家を出てから途々考へた。「兎に角、今夜直ぐその話を持出してやらう。そして斷然別れてしまはう」

定吉の頭には別れた後の事が空想に描かれて來た。彼は何處か田舍に行かうと思つた。田舍、田舍、彼は又漠然と田舍を心に描き初めた。……そこには獵をする林がある。そこには釣糸を垂れる小川がある。そこには散歩の出來る野原がある。そして自分はトルストイを讀む。爺さんや婆さんが大根を持つて來て緣側に載せて行つて吳れる……

定吉の心は明るくなつて來た。彼は靜かな〳〵生活を思ふと、涙が出るほど懷しくなつた。

「けれども子供は？」子供と云ふ事がふと定吉の頭に浮んで來た。子供は彼女に與らうか？　自分の方に引取らうか？　定吉はこれまでこんなにまで自分が子供を愛してゐようとは思ひも及ばなかつた。子供の事を思ふと定吉の眼には止度もなく涙が溢れて來た。彼は暗い往來で、立止つて、兩手で顏を蔽はずにゐられなかつた。

「あゝ、可哀さうだ！」と彼は聲を出して叫んだ。

『だが、俺と彼女と何方が子供を愛してゐるだらう！　あの女は氣紛れで、子供にまでもよく癇癪を起してゐるが、併し愛してゐる事は確からしい。だが俺も愛してゐる』と定吉は考へた。『併し男と女と一體どつちが餘計に子供を愛するものだらう？』定吉は何かの本で讀んだ事を思ひ出した。『それや、やつぱり女の方が餘計に愛するに違ひない。さうすると、子供は彼女の方につけてやらなければなるまい』

『さうだ』と定吉は更に考へた。『彼女は未だ籍が入つてゐない。子供は彼女の遠緣の者の子供といふ事になつてゐる。彼女に取つては幸運なわけだ。だが、一つ彼女の籍を入れて、そして子供の籍も此方に貰つて、その上で彼女を離緣しようか。さうすれば子供はどうしても俺のものだ。……いや、併しこんなたくらみをしていゝものだらうか？』

『いけない〳〵』と定吉は頭を振つた。『それは卑怯だ。俺はやつぱり子供は彼女にやらう。俺は男だ。俺は我慢が出來る。だが女に取つては子供に別れる事は致命傷に違ひない……』

定吉はモウパッサンの「父」の主人公が、公園の中で、自分の振り捨てた女が、自分との間に出來た子供を遊ばせてゐるのを見て苦しむ光景を思ひ出した。『俺もあんな風になりはしないだらうか？』彼は再び頭を左右に振つた。『いや、併しそこが氣持の修養なのだ。俺はそこを修養しなければならない』

自分の家のある路次まで來ると、定吉は亂れた心を整へるために立止つた。彼はどんな風に妻に向つて、別れ話を持出さうかと思案した。そして下腹にうんと力を入れて、足を一歩々々踏み締めながら歩いた。

彼が格子戸を開けた時、いつになくよし子はいそ〳〵として玄關に駈けて來た。

「坊や、お父さまのお歸りだよ」と彼女は子供を抱きながら、子供の身體ごと一緒に頭を下げた。『とうちやん、とうちやん』と子供は云つた。

定吉は默つて、苦り切つた顏をして、自分の部屋に通つた。するとよし子は後からついて來て、

「ねえ、あなた、さつき遠山さんが光來しやいましたよ」と云ひ出した。「お可哀さうですね、あの方は。お子さんを二人連れていらしつたんですよ。何でもねえ、あなた、たうとうお家を立退かなければならなくなつたんですつて」

「えつ、立退いたつて？」と定吉はぎよつとした。

「えゝ、さうですつて。先日奥さんがお故郷にいらしつたまゝ未だ歸つてらつしやらないんですつて。多分、實家で歸して寄越さないんだらうつて云つてらつしやいましたよ。一番下のお子さんは奥さんが連れていらしつたけれども、後に殘つてゐる二人がほんとに可哀さうで堪らないつて、さう遠山さんは云つてらつしやいましたよ。遠山さんはあれでなか〱お子さんをお可愛がりになるんですね。妾にはそれが眼に見えてよ。こんな場合になつても、暢氣な調子で物を云つてらつしやいますが、お心の中ちや、ほんとに可愛いと思つてらつしやるやうよ」

「それで歸つて行つたのか？」と定吉は訊いた。

「えゝ」とよし子は更に膝を進めた。「兎に角急で弱つてゐるから、一晩だけ泊めて貰ひたいつて有仰るから、妾も承知したんですよ。ところがねえ、まあお可哀さうに、坊ちやんの方は默つてお父さんの云ふなりになつてらつしやるんですが、お孃さんがお聞きにならないんですよ。六つですつてね、あのお孃さんは。もう何か一寸々々お解りになるんでせうね。妾が「小母さんと一緒に寢ますから泊つてゐらつしやい」と云つても、厭だ〱つて頭をお振りになるのよ。そして遠山さんの手に縋つて、「お父さん歸りませう〱」と云つて、たうとう泣き出しておしまひになりましたの」さう云つてよし子は涙を浮べた。「あたし貰ひ泣きしましたよ、ほんとに。――するとね、遠山さんは悄然となすつて、子供がこんなに云ひますから、兎に角失禮しませうと有仰つて、妾が幾らお止めしても、たうとう歸つて行つておしまひになりましたよ。鈴本君にどうか宜しくつて」

「何處に行つたらう？」と定吉は云つた。

「何でも、何處か安い宿屋に行くと仰有つてらつしやいましたよ」

定吉の頭は又急激に變化し初めた。彼は途々考へた事をすつかり忘れてしまつた。そして遠山の事を考へた。――彼は何が何だか解らないものに再び突き當つた。――彼の心臟は又もやきゆつと痛んだ。彼はゐても立つてもゐられない氣がして、何處かに遠山を探しに行つて、自分の家に再び引つ張つて來ようと思つたが、てんでその見當がつかなかつた。――彼は眼を閉ぢた。そして腕を組んで考へた。

「ねえ、あなた、子供つて云ふものはどうしてから可愛いものなんでせうね、誰にでも」とよし子が抱いてゐる子供に頬ずりしながら云つた。

「うん」と定吉は云つた。定吉の心は何ものか優しい、弱い感じに一杯になつてゐた。

「ねえ、あなた」と妻は再び云つた。その聲は思はず定吉が彼女の方を振向いて見ずにはゐられない程の優しみと媚とに溢れてゐた。子供に頬ずりをしつゞけてゐる彼女の眼は伏目になつて、その頰には恥しさが漂つてゐた。『あたしね』と彼女は躊躇しながら云ひ初めた。『あたしね、何んですか又出來たやうなんですよ』

その言葉は定吉の頭には何ものかが落ちて來たやうにグワンと響いた。

「何つ？」と彼は眼を瞠つた。

「どうもさうらしいんですの。先月と今月と試して見たんですけれど。それに今日なんかは、何となく胸が惡かつたりする樣子が、どうしてもさうとしきや思はれないんですの」

「あつ！」と定吉は叫んで、頭を兩手で抱へながら、仰向けに疊の上に轉つた。彼の頭の中は恐ろしい程の速かさで旋回し初めた。……恐ろしい絶望があつた。何とも云はれない苦しさがあつた。が、それと同時に彼は、妻のために、女を雇つてやらなければならない事を考へた……

（六年九月二十二日脫稿）

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町　東京堂
仝　神田區裏神保町　上田屋
仝　京橋區銀座三丁目　東海堂
仝　京橋區元數寄屋町　北隆館
仝　京橋區西紺屋町　良明堂
仝　日本橋區本石町　至誠堂
大阪市北區梅田町　盛文館
仝　東區京町堀　太華堂
仝　北區東梅田町　宮內立盛堂
京都市七條停車場前　三共社
仝　間之町七條　大盛社

○定價　金參拾錢郵稅金貳錢（海外郵稅拾貳錢但支那を除く）

冊數／國別	內國	外國
六冊	金壹圓八拾錢	金貳圓四拾錢
十二冊	金參圓六拾錢	金四圓八拾錢
以上郵稅共		

▲但し新年號春秋二期附錄號臨時號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、卽ち一ケ年通計十七册分の割合なれば一ケ年分御註文の方は內國は金五圓拾錢外國は金六圓八拾錢の割となる

送金注意

一誌代郵稅　は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし
一郵便爲替　にて御送金の場合は指定を本鄕區西片町十番地中央公論社とし、拂渡局を東片町局と指定あれば途中盜取さるる虞なし
一振替貯金　口座は東京三十四番なり
一郵券代用　必ず一割增の事
一集金郵便　の便法を利用せらるゝ方は、坐ながらにして誌代の拂込をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし
　一金一圓迄　金六錢（集金委託料
　一金五圓迄　金七錢（及送料共）
一受領證請求　は必ず返信料を要す

大正六年九月廿九日印刷納本
大正六年十月一日發　行
（禁轉載）

發行兼編輯人　麻田駒之助
印　刷　人　高木西三

東京市本鄕區駒込西片町十番地
發行所　中央公論社
電話[長]小石川一四四四
振替東京三十四番
電信略號コウロン

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)
By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING CO., Published Monthly.
Terms of Subscription: annual subscription yen 6,80; Single copy 40 sen including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S A. as second-class mail matter.

